

俺ガイル～別れ、そして出会い～

慢次郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの八幡に美少女の幼なじみとイケメンの親友がいたらというお話です。

八幡と雅史と綾音は幼なじみである。幼稚園から中学までずっと一緒だった。

だが、綾音が修学旅行中に倒れ、そこから八幡達の運命の歯車は動き出した。

【途中までは共通ルートです。途中から分岐ルートになります】ヒロインは、雪柳綾香、吹寄制理、城廻めぐり、雪ノ下陽乃、山岸緑子、高梨七海、折本かおりの7人。

向こうのように殺人やら教師側に犯罪者はいません。盗撮犯人みたいなのはいますが。

目次

プロローグ編

プロローグー幼なじみ。	1
プロローグー2人の時間。	6
プロローグー最愛の恋人の死。	9
プロローグー寒い年の瀬。	15
プロローグー季節は流れ、八幡達は高校生になる。	19
第1章ー出会い編（共通ルート）	
第1章ー第1話ー高校2年生の始まり、これから運命は動き出す。	23
第1章ー第2話ー平塚先生に呼び出される。	27
第1章ー第3話ー緑子と委員長。	30
第1章ー第4話ー奉仕部。	34
第1章ー第5話ー雪ノ下雪乃。	41
第1章ー第6話ー友と後輩。	47
第1章ー第7話ー忌々しい事件とお姉さん。	50
第1章ー第8話ー雪ノ下雪乃と。	55
第1章ー第9話ーもう1人の幼なじみ。	62
第1章ー第10話ー由比ヶ浜結衣来訪。	66
第1章ー第11話ー乙女心とクツキー。	73
第1章ー第12話ー由比ヶ浜の腕前は？	78
第1章ー第13話ー八幡対結衣。①	82
第1章ー第14話ー八幡対結衣。② 勝負の行方。	86
第1章ー第15話ー綾香の居候。	89
第1章ー第16話ー葉山グループ。	94

第1章―第17話―綾香の決意と奉仕部に次なる依頼主。 | 99

第1章―第18話―材木座義輝。 | 102

第1章―第19話―酷評と悲しみ。 | 106

第1章―第20話―思い出。 | 111

第1章―第21話―彼女達の思い。 | 115

第1章―第22話―綾音の月命日と八幡の決意表明。 | 120

第1章―第23話―葉山グループの亀裂。 | 125

第1章―第24話―体育の後の話。 | 129

第1章―第25話―戸塚彩加。 | 132

第1章―第26話―総武高校の闇。 | 136

第1章―第27話―戸塚とテニスと練習と。 | 138

第1章―第28話―それぞれの依頼。 | 144

第1章―第29話―テニス勝負、八幡・綾香対葉山・三浦①

149

第1章―第30話―テニス勝負の裏側で。 | 157

第1章―第31話―テニス勝負の裏側。② | 163

第1章―第32話―テニス勝負。八幡・綾香対葉山・三浦。②

168

第1章―第33話―テニス勝負の後。 | 172

第1章―第34話―その後の奉仕部。 | 175

第2章―奉仕部への依頼編

第2章―35―第1話―平塚春雪。 | 179

第2章―36―第2話―雅史のおめでた。 | 184

第2章―37―第3話―比企谷家の団欒。 | 188

第2章―38―第4話―将来の事。 | 191

第2章―39―第5話―久方ぶりの奉仕部。――195

第2章―40―第6話―こうして由比ヶ浜結衣は、勉強することに
なつた。――199

第2章―41―第7話―八幡は、緑子と七海と勉強会を開くことに
なつた。――205

第2章―42―第8話―勉強会。緑子達と雪乃達の遭遇。――208

第2章―43―第9話―八幡達の勉強会と春雪の出逢い。――211

第2章―44―第10話―勉強会の後にて。――215

第2章―45―第11話―葉山隼人、奉仕部訪れる。――219

第2章―46―第12話―葉山の依頼とは。――224

第2章―47―第13話―3人の様子は……。――228

第2章―48―第14話―葉山グループの行方。①――233

第2章―49―第15話―葉山グループの行方。②――236

第2章―50―第16話―小町とのひととき。――240

第2章―51―第17話―夢と遅刻と川崎沙希。――243

第2章―52―第18話―川崎大志の依頼。――247

第2章―53―第19話―川崎沙希更正プロジェクト。――253

第2章―雪柳綾香（姉を超え隣に並び立つために）編

第2章―1―第1話―お気に入り入りの場所で八幡と一緒に。――255

第2章―2―第2話―親友達のひととき。――260

第2章―3―第3話―親友達と勉強と家族団欒。――262

第2章―4―第4話―様子。――267

第2章―5―第5話―葉山グループの男達。――272

第2章―6―第6話―八幡、葉山とグループを組む。――275

第2章―7―第7話―夜中の綾香との語らい。――279

第2章―8―第8話―朝のハプニング。	283
第2章―9―第9話―遭遇。	287
第2章―吹寄制理（栄冠は誰かのために）編	
第2章―1―第1話―将来の夢と吹寄の頼み。	295
第2章―2―第2話―吹寄との約束と奉仕部。	299
第2章―3―第3話―吹寄と綾香との練習。	305
第2章―4―第4話―吹寄と綾香と勉強会をすることになった。	313
第2章―5―第5話―吹寄と綾香との勉強会。	316
第2章―6―第6話―チェーンメール。	320
第2章―7―第7話―弟とチェーンメールと。	323
第2章―8―第8話―葉山の依頼。	328
第2章―9―第9話―葉山の依頼の受託と吹寄との下校。	332
第2章―10―第10話―政成の葛藤。	339
第2章―11―第11話―葉山グループの男達。	343
第2章―12―第12話―チェーンメール問題の解決。	349
第2章―13―第13話―雅史達の思い。	356
第2章―城廻めぐり（目指す背中先の先へ）編	
第2章―14―第14話―サッカーへの思い。	360
第2章―1―第1話―昼休みの生徒会室で。	364
第2章―山岸緑子（亡き友とアイツのために）編	
第2章―2―第2話―由比ヶ浜に任せてはみたが…。	369
第2章―1―第1話―緑子の危機。	372
第2章―2―第2話―災難の後で。	376

プロローグ編 プロローグ―幼なじみ。

―4・05・比企谷家―八幡の部屋。

春、新学期とえば、心を踊らせる人は多いだろう。中には出会いを求める人もいるだろう。

しかしこの人物は違う。春が来ようが夏が来ようが秋が来ようが、ずっと冬のみまで止まってしまっている。

そう2年前の12月30日からずっと。

比企谷八幡は、ずっと時が止まっている。

喪った悲しみをいつまでも引きずっている。

最愛の恋人、雪柳綾音を喪つてずっと…。

―2年前―12月30日―某〇火葬場

クリスマスが過ぎて、もうすぐ年が変わる前の年の瀬、1人の女の子がこの世を去った。享年15。若天性の癌で亡くなる。

比企谷八幡は、恋人である雪柳綾音の葬儀、火葬場へとやって来ている。もちろん、八幡だけではなく、彼と綾音の共通の幼なじみの雅史、3年3組のクラスメイト、綾音の親友達も多数来ていた。

火葬場の外は、悲しみを代弁するかのよう降っている。綾音の両親は、気丈にしているが、いつ泣き崩れるかわからない状態である。

今は、火葬する前の最期の場面に立ち会っている。

綾音の両親は、自分達が声をかけた後、八幡に声をかけるように言った。

八幡は、棺の中で眠る綾音を見ていた。彼女は、死に化粧で綺麗になっていた。綾音の髪の毛は抗ガン剤で抜け落ちている。そんな頭を撫でながら、すると涙が両目から零れ落ちる。綾音の表情は満足感で溢れているのだ。

今までの綾音と過ごした日々が走馬灯のように流れてくる。

初めて会ったのは、幼稚園入る前に、雪柳家が比企谷家の隣に引つ

越してきた。親同士がすぐに仲良くなつて、八幡と綾音は出会った。幼稚園に入園してしばらくして、高山家が比企谷家の前に引越してきた。そして八幡や綾音の通う幼稚園に転入してきた。

八幡、綾音、雅史は、この時からずっと一緒にいたのだ。小学も同じクラスになったのが、3回もあるような奇跡みたいな事もあった。そんな小学校も月日共に流れ中学になる。雅史は、イケメンになり綾音は美少女に成長したのだった。八幡は普通に成長した。

中学になると、雅史はサッカー部に入り、綾音はバスケットに入る。八幡も雅史に誘われる形でサッカー部に入った。

部活に励みながら、勉強に勤しんでいた。八幡も綾音、雅史以外のクラスメイトの友達もでき、綾音も緑子と七海と親友が出来ていた。雅史もたくさんの友達を作った。綾音の活躍により総武中のバスケット部は、ぐんぐんと成績を上げ、サッカー部も八幡、雅史コンビの活躍により弱小を返上し始めた。

中2になり綾音、雅史と同じクラスになった。3人とも小学何年ぶりかと喜んでいた。

だが病は綾音の身体を蝕み始めていた。

中2の修学旅行中に綾音は、倒れる。八幡と雅史、緑子、七海の同じ班であったため、病院へ連れて行った。担当の医者からは、ただの疲労が原因と言われた。綾音の事は、学年主任と担任の教師には八幡が説明をした。

そして八幡が付きつきりで綾音の看病をやったのだ。雅史、緑子、七海も観光をせず綾音の側にいたのだった。

綾音は、八幡達に観光していいと言ったが、八幡が「綾音、お前だけを置いてはいけない。俺達だけで楽しめるわけがないだろ」

八幡が言ったセリフを雅史が続けて

「八幡の言う通りさ。綾音のいない観光なんてつまらないね」

「雅史、お前…イケメン面でそれを言うなよ…」

「僕がイケメン？イケメンは八幡の方だろ？」

「はあ〜？雅史さん…目は大丈夫ですか？」

すると緑子や七海がクスクスと笑いだして、

「八幡君は自覚が無いの？女子の間でキヤーキヤー言われてるよ？」

「もちろん、雅史君のファンクラブはあるけど、八幡君のでもありますよ」

「俺に？それって雅史にキヤーキヤー言ってるだけじゃないのか？」

「八幡、何で君は自分を卑下するんだ？」

「雅史が前に出るのが良いんだよ」

「僕は万人じゃない、綾音の事も八幡が一番最初に気づいて適切な処置をしたじゃないか」

「それは、たまたま知っていた知識が役に立っただけだ」

「そうだよ、八幡君、カッコ良かったよ！」

緑子は、八幡にそう言い、七海も

「だよ！あの時の八幡君、カッコ良かったし頼りになるって思ったよ」
「茶化すなよ…俺は当然の事をしただけだ」

そんな感じで八幡達が楽しく話してる姿を見て、綾音は微笑んでいた。綾音は自分が八幡に好意を持つてる事を自覚した。

しかし夏のバスケ部の大会の予選のために練習中に再び綾音は倒れる。仲間達が先生を呼び、すぐに救急車で運ばれる。

八幡、雅史、緑子、七海は、部活を切り上げて急いで綾音が運ばれた総合病院へ向かう。

運ばれた綾音は、人工呼吸器をつけており意識もなく、とても話せる状態ではなかった。綾音の両親は、医者から何かを聞いているようだ。おそらくは、綾音の容態の事を説明受けてるのだろう。八幡はそう思った。

八幡達は、病院の消灯時間ギリギリまでいたが、綾音の両親に帰るように言われた。

八幡は、綾音の病状を聞いた。すると母親は、涙を流し始め、父親から病状の説明を受ける。

若年性の癌であることを宣告されたと。

余命は、半年だと宣告されたと。

それを聞いた八幡は、膝から崩れ落ちる。雅史は崩れ落ちた八幡を気遣う。緑子と七海は、互いに見合つて泣き出してしまう。

「…綾音があと半年しか生きられない……」

八幡は、自分の中の何かが変化し始めていた。

八幡、雅史、緑子、七海の4人は、綾音がいつでも戻つて来れるようにやり始めた。

綾音の意識が回復したのは、倒れたから3日後だった。

八幡は、それから綾音の世話をすることに。だからサッカー部を辞めた。

部長も副部長は、反対しなかった。八幡の真剣な表情でわかったのだ。

八幡は、綾音の世話をしに行くのだと。

綾音も八幡の力を借りて、学校に復帰するために治療とりハビリをしていた。

そして、季節が夏から秋の風景が目立つようになり、綾音は学校へ復帰した。

ちようど、文化祭の準備をしている最中に綾音は復帰したのだ。ただ以前よりも痩せていることは明白だった。

綾音はクラスでも文化祭の準備をやるうとするから、緑子や七海は簡単な仕事を任せることに。クラスメイトも気を使って綾音には無理をさせないようにしていた。

雅史の提案で、八幡と綾音は、2人の作業を任せることとした。雅史は、綾音が八幡を八幡が綾音を好きだということをしつかりいて、クラスメイトにも了承を得ていたのだ。

綾音は、そんな雅史や緑子、七海に感謝していたのだ。彼女は、この文化祭で自分の気持ちを八幡に告白するつもりなのだ。

綾音は自分の命があまりないことを悟っていた。そして八幡達が自分に気をつけていることが重りと感じていた。

そんな感じで文化祭当日になり、八幡と綾音は色んなところを回つ

た。

体育館では、生徒会主催告の歌って告白するイベントが行っていた。すでに5組のカップルが誕生した。

綾音は、ずっとその主催のイベントへ出る。

そして歌で八幡に告白する。八幡は綾音のサプライズの告白に驚く。八幡は全身から綾音の思いを感じ取った。どこかに八幡は、自分何かと卑下していたから。でも雅史や緑子や七海に背中を押してくれた。だから八幡は、彼女に恥をかかせる訳にはいかないと思い、綾音の元へ行く。

みんなから見られながら、八幡は綾音の告白をOKする。そしてみんなから祝福された。

見事、中2の文化祭で八幡は、綾音という美少女を彼女にすることになった。

プロローグー2人の時間。

それから時間が許す限り八幡は、綾音と一緒にいた。勉強も遊ぶときも共に。

八幡は、少しでも多くの思い出を作るため、出掛けたりした。ネズミランドに行ったり、近くの公園なんかでもデートを繰り返した。

余命半年と言われていたが、その半年を乗り越えていた。医者からの話だが、綾音が八幡への思いが生きる力を与えるのではないかと言われた。

正月の初詣は、振り袖を着た綾音と共に明治神宮に行ったのだ。雅史や緑子や七海を誘ったのだが、2人の邪魔はしたくはないと断れた。八幡も綾音もそんなに気を使わなくても言いと言った。

八幡はそのときの願いは、1日でも多く綾音と一緒にいたいと願っていた。

綾音も同じ事を願っていた。また来年、八幡と初詣が行けるようにと。

2月のバレンタインには、綾音からの手作りチョコをもらった。義理チョコを緑子や七海からももらった。綾音達以外の女子から結構な数をもらった。八幡自身、自分の人生で最多記録じゃね、と驚いていた。

雅史は、相変わらず沢山のチョコをもらっている。去年までの八幡なら羨ましがっていたが、今年は最高のチョコをもらっているからそれだけで嬉しいのだ。

3月はホワイトデーがあり、八幡は綾音に対して、小遣いを貯めて購入した髪飾りをプレゼントした。

「わあく私が欲しかった髪飾り！」

「前に2人で商店街を歩いていた時、綾音がその髪飾りを欲しそうにしてたから、ホワイトデーのプレゼントにしようと思ったんだ」

「八幡、ありがとう。とっても嬉しいわ」

綾音はその髪飾りを髪につけてくれた。綾音の黒髪と髪飾りがマッチしていた。

「綾音、よく似合ってるよ」

八幡は照れながらそう言って、横に視線をそらす。

「本当なら綾音の誕生日にプレゼントしたかったけどな」

「ふふっ、八幡、本当にありがとう。それじゃあ、私は、八幡の誕生日に欲しいものをプレゼントするわ」

「俺の欲しいもの？それは…綾音、お前さ…」

「え、ええっ！そういうのは、高校生になってからで…そ、その」

「ぶぶっ、冗談だよ、冗談。綾音、本当にとるんじゃねーよ」

「冗談？」

「冗談だよ。そういうのはちゃんと責任が取れるようになってからさ。それに綾音にももらえるプレゼントは何でも嬉しいから」

「八幡…うん、楽しみにしててね」

桜が満開に咲いている桜道を歩きながら、高校進学の話をしている。綾音も倒れた直後は進路の事は、考えれなかったが今ではちゃんと高校進学的事も考えている。

「私ね、海浜総合高校に行くことを決めたから」

「海浜総合高校か…綾音なら絶対に行けるさ。俺が保証する！」

海浜総合高校は、県内有数の進学校であり、もちろんトップクラスの学校である。

「八幡は高校はどこに行くのか決めたの？」

「当たり前だろ、綾音と同じ海浜総合高校だよ。俺はお前と共に歩むと決めたからな」

八幡は、綾音と共に勉強をしていたため、いつの間にか学年トップ争いを繰り広げるようになっていた。

「八幡…ふふっ、あの八幡がくさいセリフを平気で言えるようになったのね」

「う、うるさい。別に似合っていないのはわかってるから」

「ううん、似合ってるよ…八幡」

八幡は綾音を抱き締める。ふと抱き締めなくなったのだ。時々不安にかられることがある。目の前の綾音がいなくなる夢を見たりす

る。

「は、八幡!?!どうしたの?」

「綾音、俺は絶対に離さない。たとえば何があるうとも」

「八幡…」

2人で抱き合っていると、回りからクスクスと聞こえる。大胆とか、青春とか、若いなどと言われた。恥ずかしくなった2人は、そそくさと通りすぎた。

そして中3になり、同じクラスになった八幡達4人。おそらく先生達が配慮してくれたのだろう。

だが綾音が毎日登校出来たのは、4月、5月のゴールデンウィーク明けまでだった。中頃から休みがちになった。八幡は休みがちの綾音のため授業のノートを綺麗にとった。

6月のある日、綾音が階段から転落して、総合病院に運ばれた。

八幡はすぐに総合病院に駆けつける。八幡が駆けつけた時は、綾音も意識があり、両親も安堵している。

「綾音、ごめん」

「何で、八幡が謝るの?」

「俺は…必ず綾音を守るとか言ったのに…俺は…」

「八幡もそんな悲しい顔しないの。ただふらつとして階段から転げ落ちただけだから」

「…綾音、俺は…」

八幡は、綾音を抱き締める。

「は、八幡!?!ちよつと…」

「本当に心配したんだぞ。俺は、俺はお前に何かあったら…」

八幡は、涙を流していた。そんな姿を見た綾音は、八幡の頭を撫でた。

「うつつ……」

「よしよし」

そんな2人の姿を見た両親は、そつと部屋から出たのであった。

プロローグ―最愛の恋人の死。

しかし綾音の病状はどんどん悪くなっていく。確実に病魔が彼女の身体を蝕んでいく。

八幡は、今まで以上に綾音に付きつきりになった。季節は暑い真つ盛りだが、八幡にしたら、どうでも良かった。綾音が少しでも良くなるようにと必死に頑張っている。

勉強と綾音の看病の両立をやっているが、雅史達から見れば、無理をしているのは明白だった。そんな姿を見て痛々しかった。

だから雅史は、親友代表として八幡に

「八幡、お前は無理をしすぎてる！このままだとお前まで病気になって倒れるぞ！」

「…無理がなんだ！俺は…俺はこんなことしかできない。綾音が苦しんでいるのに、見守る事しかできない。彼氏なのに何もしてあげられない…」

八幡は崩れ落ちるように泣き出した。そんな姿を見て雅史は、そつと胸を貸した。八幡にとって素を見せられる数少ない男の幼なじみで親友である。雅史にそう言われ肩肘の力を少し抜いた。

世間が夏休みになって浮かれた時期になっても八幡は、病院にたった。

綾音が病気ではなく、健康体であったのなら、万々歳だっただろう。海や映画館などでデートをして、リア充満喫してらだろう。しかし現実には、病院の病室の中。ロマンもへったくりも無いが、八幡はそれでも満足なのだ。

綾音の話せて、彼女の笑顔を見るのが、何よりも嬉しいのだから。八幡の中3の夏は、ほとんど綾音の病室で過ごした。その間も綾音の身体は、どんどんと痩せていく。

そして、2学期に入り、体育祭が終わり、文化祭の準備も始まる。八幡はクラスの文化祭実行員になった。普段の彼ならやるはずが

ないのだが、綾音のためにクラスでやれないかと、立候補したのだ。クラスのみんなも八幡の真剣な言葉で納得し決まったのだ。ちなみに女子の文化祭実行員は、綾音の親友の緑子である。

八幡と緑子は、真剣に文化祭準備に取り組む。八幡の的確な指示により、クラス全体が一体感を生み出していた。

クラスの出し物は、執事メイド喫茶店である。

喫茶店は、色々こだわったかいもあり、売り上げが1位をとったのである。執事のエースの雅史、メイドのエースの緑子であった。八幡も執事として雅史に負けないぐらいにやっていたのだ。

ちなみに綾音のメイド服も作っており、八幡が病室で彼女に着てもらったのだった。綾音は、八幡の執事姿を見たいと言われ、恥ずかしながら着たのであった。

文化祭も終わり、季節も秋から冬に変わっていく。だが綾音の容態は、悪化の一途を辿る。

抗がん剤のおかげで、綾音の綺麗な黒髪は抜け落ち、頭には被り物を被っていた。身体も痩せており、バスケットをしていた頃の面影はない。

八幡は、それでも綾音を献身的に支えていた。彼女は一人で立つことも出来なくなり、病院内の中庭を車椅子で散歩デートをやっていた。

「綾音、寒いけど大丈夫か？」

「うん、大丈夫」

「なんだ？元気がないな？いつもなら、綾音が俺を励ましてくれたじゃないか？」

「そうだね」

冬の曇り空の下、中庭の木々から枯れ葉が1枚風に揺られて綾音の足下に落ちてきた。

「私の命もこの枯れ葉のように散っていくんだろうな」

「綾音…」

「八幡、私がいなくなったら…どうする?」

「俺は、綾音を失ったら…泣く…泣き崩れと思う…立ち直れないかも
しれない」

「八幡…」

綾音は、八幡がそう言った事に胸が苦しくなった。彼女は彼が不器用だから、自分が亡くなった後、塞ぎこんでしまうのではないかと。新しい彼女を作らずに、自分の事を思い続けるだろうと。

だから綾音はまだ元気な内に、雅史、緑子、七海にとある事を頼んでいた。(この事は、2年後のクリスマス会で明らかになる)

そして八幡達は高校受験のための勉強で忙しい中、八幡は綾音の眠る病室にいた。八幡にとっては受験勉強どころではなかった。綾音の命が今年もつかかわらないと両親から言われたからだ。

八幡は、商店街の駄菓子屋で、買ったおもちゃの指輪を2つ買っていた。それは綾音にあることを言うためだ。そう決意し

八幡の気配に気づいた綾音は目を覚ます。

「あ…れ…八幡…いたんだ…」

「綾音、結婚しよう!」

「え…?…結婚!?…八幡…何を言ってるの?」

八幡は、おもちゃの指輪を取り出し、綾音の薬指にはめた。

「八幡…この指輪は…駄菓子屋の…」

「おもちゃの指輪で悪い。本物の指輪なんて中学生じゃ買えないからな。本物の指輪は大人なってプレゼントする!」

「ううん…ありがとう、八幡…」

綾音は、こんな状態の自分に結婚しようと言って、指輪をくれた八幡に嬉しくて涙を流した。八幡はもう一度さっきの言葉を言う。

「綾音、結婚しよう!」

「は…」

その話を聞いた雅史、緑子、七海は、クラスを巻き込んだ、小さな結婚式を開こうと決めたのだ。担任、手芸部、バスケット部の仲間達、綾音の両親、綾音の妹の綾香、八幡の両親、八幡の妹の小町も巻き込ん

だものになった。

もちろん法律上、八幡と綾音は結婚は出来ない。だが、綾音の命が残り少ないのをわかった上で八幡が考え出したものであった。綾音と過ごした思い出を1つでも多く作るため、綾音のウェディング姿を彼女の両親に見せたかったからだ。

手芸部は、頼みを引き受けてくれた。主に2年と1年だったが。

12月24日、クリスマスイブにささやかな結婚式を開いた。もちろん病院の教会でだが。話を聞いた神父も協力してくれた。

何故か、綾音のウェディングドレス以外に、八幡のタキシードまで作っていた。

手芸部曰く、花嫁に恥をかかせないためにだと言うことらしい。何故か映研まで来ていて、式を録画している。

そして八幡と綾音の模擬結婚式が始まる。

本物の結婚式みたいな感じで始まり、最後の神父からの誓いの言葉を言われる。

「新郎、八幡、新婦、綾音を妻とし、一生涯愛する事を誓いますか？」

「はい、誓います」

「新婦、綾音、新郎、八幡を夫して生涯愛する事を誓いますか？」

「はい、誓います」

「それでは、指輪の交換を」

八幡は綾音の薬指に指輪をはめた。綾音は八幡の薬指に指をはめた。まあおもちゃの指輪だが。

「それでは、誓いのキスを」

八幡は、誓いのキスをするため、ボールをあげる。そして綾音の唇にキスをした。

八幡は目の前の綾音が愛しくてたまらなかった。なんで綾音が苦しまなくてはならないのか。綾音の病気を自分が変わってあげたいとも考えてたこともあった。だが今は愛しくてたまらない。1日でも長く綾音とそう遂げたかった。

そして模擬結婚式は、無事に終わった。綾音の両親、八幡の両親、小

町、雅史、緑子、七海、クラスメイト、協力してくださった方々は、祝福の拍手が鳴り響いたのだった。

弱々しくも元気な綾音を見るのは、これが最期だった。25日の夜に綾音は、容態が悪化、そのまま意識が無く、眠っている状態であった。

26日、27日と病院に泊まり込みで綾音の側にいた八幡。人工呼吸器の音だけが、ただ響いている。八幡は綾音の手を握ってひたすら堪えている。

雅史、緑子、七海も交代で、八幡を見ていた。見るに耐えられないからだ。緑子、七海も本当は泣きたい。だが自分達は必死に我慢している。もちろん雅史だって我慢している。

そして綾音の瞳がちよつと開いた。そして最後の力を振り絞りながら綾音は唇を動かした。

「……雅史……緑子……七海、今まであり……がと……う」

「……綾音、ありがとうって……悲しい事を言わないでくれ！」

「ありがとうって、私達はこれからも親友でしょ！」

「綾音、それじゃあ、最後の別れみたいじゃん、わたしは、綾音ともつと話したいよ！」

「ふふっ、3人……共……ありがとう。八幡を……頼むは……ね……。……彼は……不器用……だから……」

「……八幡のことは……」

「……私達が」

「……見るから安心して」

「……うん、……頼んだ……から……ね。お父さ……ん、お母さ……ん……先立つこと……を許して……下さい……親不幸の……娘……で……ごめん……なさい。綾香、ごめんね、こんなお姉ちゃんで……」

その言葉を聞いた綾音の両親と綾香は、嗚咽をならした。そして綾音が最期の力を振り絞り

「……ハア……ハア……は、八幡……」

「綾音、なんだ？」

「ハア…ハア…は、八幡…こん…な…私を…好きになって…くれて…ありがとう…」

「なに言ってるんだ。俺の方こそ、こんな俺を好きって言ってくれた…ことがどんだけ嬉しかったか…」

「…ハア…ハア…ハア…は、八幡…どこ？」

八幡は、綾音の手をぎゅっと握る。

「俺は綾音の側から離れない。ここに居るから、だから…」

八幡は今にも泣きそうになるが、ぐうつと堪えている。だが言葉が出てこない。

「…八幡…こんな私を好きに…なってくれて…愛してくれて…妻にしてくれ…てありがとう…」

人工呼吸器の心臓の鼓動が止まったことを意味をする音が鳴り響いた。

八幡は、人目を気にすることなく、大声で泣いた。雅史も、声を殺して泣き、緑子と七海は、互いに支え合って泣いた。両親も綾香も涙を流して泣いたのだった。余命半年と言われたのが、ここまで生きられたのだから。

雪柳綾音…12月28日・22:46分・ご臨終。享年15

12月29日―お通夜

12月30日―お葬式

八幡達には、暗くて寒い年の瀬になってしまったのである。

プロローグ―寒い年の瀬。

それから八幡は、一生分の涙を流したんじゃないかぐらい泣いた。綾音の両親は、お通夜、お葬式の準備のことで葬儀社と話し合いに入る。

部外者の八幡達は一旦帰路につく。

八幡は、雅史と緑子に支えられながら自宅に連れて帰らせた。

29日のお通夜は、夕方からあることが、昼間、雪柳家から比企谷家に連絡があった。

「八幡、綾音ちゃんのお母さんから今日の18:00からお通夜があるって連絡が来たわ」

「うん、わかった」

「八幡、大丈夫なの？」

「大丈夫だ。妻の綾音を最期まで見届けるのが夫としての役目だろ」

「八幡、貴方…」

八幡は母親の前で、気丈に振る舞っているようにしているが、母親はそれがわかっていているから、彼の頭を撫でた。

「やる気のなかった貴方が、ここまでやれたのは、綾音ちゃんのおかげかね」

「……」

「ほらっ、しゃっきとしなさい。綾音ちゃんが悲しむでしょ！夫なら元気に送るんでしようが」

母親にカツを入れられた八幡は、夕方のお通夜に行くために準備をすることに。

直ぐに雅史、緑子、七海と会い綾音のお通夜が開かれる斎場に向かう。

斎場に来た八幡は、雪柳家の取り決められた場所に行く。

そこには、綾音の写真がいっぱい飾られていた。八幡にとっての思い出の写真が沢山張られていた。

八幡は、目尻が熱くなるのをわかった。写真の中には、24日にみ

んなでやった模擬結婚式のもあった。

そこに写る綾音は、幸せそうな表情をしている。

八幡達は棺のまで来て、中で眠る綾音を見た。死に化粧で綺麗になった彼女を見て

「八幡、綾音、幸せいっぱいな表情だな」

「綾音、八幡に出逢えて幸せいっぱいだって言ってたからね」

「そうだね、正直羨ましかったよ」

「ああ、俺も綾音と出逢えて、良かったし…嬉しかった…」

八幡は、棺の中で眠る綾音に微笑んだ。

お通夜は、しめやかに行われた。ずっとすすり泣きする声や嗚咽を漏らす音も響いた。

そんなお通夜の間、小雪が舞っていた。

翌日のお葬式もお通夜以上に人々がやって来ている。綾音の部活の先輩、後輩、他クラスの友達がやって来ている。小学校の時の担任も来ていて、綾音の両親と話している。

雅史も小学校以来の友達と話している。七海もクラスメイト達と話している。

八幡は、式場の椅子に座り元気なくどこかを見ていた。すると背中をバシツと叩かれた。

「八幡、元気のない背中だよ！」

「緑子か…俺は元気なくて結構」

「八幡、目の下にクマができてるよ…」

「わかってるよ、小町や雅史に言われたからな」

八幡は、頬つぺたを指でかいた。

「緑子、お前はあいつらと話さなくても良いのか？」

「話したよ。一段落話したから、八幡と話してるんだよ」

「そうか。ただ俺なんかと話しても面白くないぞ」

緑子は、八幡の唇に人差し指を伸ばした。

「それ、八幡の悪いとこだよ！直ぐに自分を卑下するんだから」

「……」

緑子は、八幡の唇から人差し指を話すと

「あのね、八幡は…こんなときに聞くのは不謹慎だけど、八幡は…新しい彼女作ったりする？」

「彼女は、綾音だけだ。もう作るつもりもない。綾音だけを思っただれから先も生きていく」

「そ、そうなんだね…」

緑子は悲しそうな表情を浮かべたが、八幡はそれを気にできるほど余裕がない。緑子は、八幡の事が好きなのだ。

八幡は覚えてはいるが、緑子が不良男子達に絡まれていた時に、誰も助けられなかったけど、八幡は不器用なりに助けに入ったのだ。

それから八幡に好意を寄せたが、親友である綾音も彼を好きだと知って、思いを封じていた。綾音も八幡も互いに好き同士だと知ってからは、さらに封じ込めのだ。ただいつの間にか思い詰めた表情をしていたように

「どうした、緑子？体調でも悪いのか？」

「ううん、大丈夫だよ…」

「そうか？」

しばらく八幡と緑子は、しゃべっていた。

そしてお葬式が始まった。八幡はずっと俯いていた。顔をあげることはできないのだ。顔をあげると涙が零れそうになってるから。緑子と話してる時には、悲しさを紛らわせたが、綾音の写真や映像が流れてくるから、自然と涙が出る。八幡はハンカチを取り出して涙を拭う。

式場での言葉なんか覚えていない。ただひたすら綾音のことしか考えてなかったからだ。

式が終わり、火葬場への移動中も雅史に支えながら火葬場へ向かう。

火葬場で最期の言葉をかけてくださいと、関係者から言われた。綾音の両親が、声をかけている。2分3分と話しかけた後、両親が八幡

に声を掛けさせてもらった。

八幡は最期の言葉を綾音にかけた。

「綾音、こんな俺を好きになってくれて、本当にありがとう。俺は綾音を好きになれて嬉しかった…。いずれ俺もそっちへ行くから、待っててくれ…」

八幡は、まわりに聞こえないように小声で

「俺はもう誰も好きにならない。彼女は綾音だけだ、妻は綾音だけだ…」

八幡が話しかけ終わると、出棺の時が来る。

そして出棺されていく。それを見届ける八幡達。

そして火葬が終わり、綾音の遺骨を集めて骨壺に入れていく。八幡は両親の計らいで、一番綾音の遺骨を入れてもらった。彼は遠慮したが、彼らは八幡の事も息子のように思っているからだ。

綾音の指輪と髪飾りは棺に入れた。本物は入れられないから、玩具の指輪と髪飾りを入れた。（八幡が小学生の頃に綾音に祭りの屋台で買ってあげた指輪と髪飾り）

綾音は宝物だと言っていたから、入れてあげたのだ。

綾音の遺骨を拾い終えた八幡達は、学校関係者やクラスメイト達はここで解散となる。

八幡、雅史、緑子、七海は、綾音の両親と共に檀家であるお寺へ向かう。

この日はそれで終わりを迎えた。

プロローグ―季節は流れ、八幡達は高校生になる。

――

綾音のお葬式が終わり、大晦日、正月とイベントが来るが、八幡には関係がなかった。正月の初詣は、雅史と緑子と七海が誘いに来たから、八幡は渋々と出かけた。

綾音の家の前を通ると自然と涙が出てくる。今までなら、綾音が2階の窓から八幡を呼び止めていた。ふとその窓を見る。そこには、もう綾音の姿は無い。

綾音ももうこの世にいないのだ。

八幡も気持ちではわかつてはいる。しかし心が綾音を求めている。心にぽっかりと開いた穴……。八幡は虚無感に襲われていた。何かしようとしても、力が入らないのだ。

家族で正月のお祝いをしているのに全然嬉しくないのだ。親からお年玉をもらっても嬉しくないのだ。気持ちが向上しないのだ。

だから小町は、幼なじみの雅史に連絡したのだ。

【このままだとお兄ちゃんが壊れちゃうと】

そんな願いを聞いた雅史は、緑子と七海を呼び八幡を初詣に連れ出した。

八幡は、雅史や緑子、七海に感謝をしている。こんな自分の事を面倒見てくれてありがとう、と。すると雅史は

「親友だから当たり前だろ。八幡は俺の大事な最初の親友だ。その親友が悲しんでいるんだから、それが支えるのが親友ってものだろう？」

「雅史……な、泣かせるようなこというなよ」

「俺は当たり前前の事を言っただけだ」

「男同士の友情っていいなあ、ねえ七海？」

「そうだよねえ……」

こんな感じで、初詣のイベントをこなしていった。

冬休みが終わると八幡達は、高校受験のためだけに学校のために学校に来るだけだ。

雅史、緑子、七海は、3人共に海浜総合高校に受験をすることを決

めている。総武中学からは、大体が海浜総合高校へ進学する。

八幡も海浜総合高校を受験すると思われたが、担任の中村先生に呼ばれた。中村先生は、生徒にフレンドリーで気さくに相談にのってくれる。

「先生、俺は海浜総合高校には行きません」

「は、八幡、それは本当か!？」

「はい、綾音が亡くなってからずっと考えてました。綾音と共に海浜総合高校へ行く事を決めてましたが、彼女のいない海浜総合高校は：辛いです」

「八幡、：お前は、学年1位で海浜総合高校からもお前は来ると思われているんだぞ?」

「学年1位：それは学年1位だった綾音がいなくなって取った成績です。俺は万年2位の男ですよ」

「はあくなんでお前は、そうやって自分を卑下する?」

「俺は、そんなに凄いわけじゃないですよ。凄いののは雅史みたいなヤツを言うんです」

「自信を持って、八幡!お前は自分に対する自信が無い!ちゃんと胸を張れ!」

「自信って：俺には自信なんか：」

「お前は、学校一の美少女だった雪柳綾音の彼氏だったろ?その時誰か反対するヤツがいたか?」

「……………!!」

綾音からのサプライズ告白(歌に載せた告白)を受けて八幡が承諾した時、体育館にいた人間は、皆が拍手し祝福したのだ。総武中学での八幡の評価は高いものだったのだった。

「わかったか、八幡：」

「反対する人間はいませんでした」

「で、海浜総合高校に行かずにどこに行く?今からでは選ぶほど無いぞ?」

「総武高校で良いです」

「総武高校!?!お前の成績なら余裕があると思うが、本当に総武に行く

のか？」

「ええ、構いません」

中村先生は、まだ何か言いたそうだったが、最後には八幡の背中を押してくれたのだ。中村先生にもわかったのだ、八幡が必死に綾音の死を乗り越えようとしていることを。

それは、雅史達、八幡の両親にも伝わり、みんな承諾したのだった。

その後、雅史、緑子、七海は海浜総合高校へ合格し八幡は総武高校合格をもらった。

卒業式もつづかなく行われ、それぞれの旅立ちが始まろうとしている。

八幡は雅史達と写真を撮っている。八幡はクラスメイトに引つ張りだこになり、写真を撮っている。

それだけではなく、後輩女子達から告白を受けることに。最初は、雅史にするんだろうと、八幡は思っていたが、自分だと分かり驚いている。

だが告白は全て断った。八幡は、綾音以外に彼女にするつもりはない。そう誓っているから。

緑子は、八幡のそんな様子を見て、彼への思いをそつと心の隅にしまった。

雅史も告白されたが、断っている。理由は、八幡が彼女を作らないから、自分も作られないって言っているようだ。

そうして、総武中学を卒業した。

そして八幡は、春休みの間、綾音と歩いた道々を歩いていた。中3の春休みは、綾音と2人で桜並木道を歩いたことを思い出していた。

「…あれから1年も経つんだな。早いものだよ、なあ綾音？」

問いが返ってくる分けでもないが、八幡は独り言を言っていた。

「俺は海浜総合高校じゃなく、総武高校で何とか頑張っていくから…俺を見守ってくれよ…綾音…」

八幡は、桜並木道を歩くカップルを見て、自分みたいになるなよ、と思っただ。

散歩をしている時、黒髪の巨乳の女性とすれ違う。

「この辺りであんな巨乳女子…見なかったが、引越してきたのか？まあいいか…俺には関係ないしな」

そんな事を言いながら散歩したのだった。

春休み中、昼間は外を散歩し、夜に勉強をやって過ごしたのだった。後は、雅史、緑子、七海とは、グループチャットで会話をしていたぐらいか。

そして総武高校への入学式の日を迎え、八幡は綾音の家の方を見る。ポケットから綾音の遺骨が入ったビンを取り出す。

このビンに入った綾音の遺骨は、彼女の両親が八幡にあげたものだ。

これは、2月の法事の際に八幡は彼女の両親からもらった。もらった直後は、大切に閉まっていたのだが、今はポケットに入れている。「さて、俺は入学式に行くぞ。綾音、ちゃんと見守ってくれよな」

八幡がそう言うのと、鳥が鳴いた。八幡は綾音が返事したように聞こえた。

八幡は、いつもよりも早く、自転車で登校する。総武中学に行つてる時間よりも早く出た。

登校している最中に、犬を散歩させていた女の子から犬のリードが離れていた。そして運悪く向こうからリムジンが走って来る。

「ちつ、このままではまずい！あの犬はリムジンにひかれる！ならば！」

八幡は、自転車から降り、犬の方へ走る。何も考えずに己の身体が勝手に動いた。

そして八幡とリムジンがぶつかる。八幡の総武高校のデビューはお預けになった。

第1章―出会い編（共通ルート）

第1章―第1話―高校2年生の始まり、これから運命は動き出す。

――

八幡の意識が目覚めたのは、病院のベッドの上だった。しかもすでに夕方になっていた。八幡は、自分の目で確認し、右足を骨折していることがわかる。

「…俺は…確かあの犬を助けて…そのまま…病院に…あ…入学式…」

八幡は今まで経験をしたことがない事を経験をしてしまった。

入学式を出席しないという事を。例え今まであったとしても、雅史や綾音経由で情報を得ることが出来るが、今はそれが無い。何せ総武高校に来た総武中の人間はいないのだから。ふと自分に当てられた棚には、母親、雅史達がお見舞いに来ていたようだ。着替え等、果物が置かれている。

「入学式早々、みんなには心配させてしまったな…」

棚に携帯が置かれている。もちろん八幡のものだ。彼は、携帯を取り雅史達に連絡をするため、グループチャットに書き込む。

【雅史、緑子、七海、すまない。入学式早々事故った】

【八幡、大丈夫か？ 右足の骨折だけだと聞いたが、他に痛いところは無いか？】

【他にはねーよ】

【犬を守るために、身を呈したって聞いたよ、そういうところ八幡らしくて良いけど、無茶ばかりしないで】

【八幡、緑子、泣かせちゃダメだよ。八幡が事故にあって怪我したって聞いた時、シヨックのあまり、倒れそうになったんだからね】

【そうなのか、緑子？】

【う、うん…】

【緑子、心配かけてすまなかった】

【八幡、本当に総武で良かったのか？海浜なら、俺達でフォロー出来た

のに】

雅史がそんな事を言ってきた。右足の骨折だから、手を骨折するよりも入院も苦勞することも増える。その事を心配して言ってくれた言葉なんだろう。でも八幡は

【雅史、ありがとうよ。俺のことより自分達の高校生生活を楽しめばいい】

【俺達は、お前が笑っていられるような環境になれば、自分達も青春するさ】

【雅史、お前サッカー部に入るんだろ？頑張れよ！俺も陰ながら応援するから】

【サッカーは頑張るよ。八幡も総武で青春を謳歌しろよ、中学の分まで】

【雅史、わかったよ。緑子も七海も中学と同じ部活に入るのか？】

【そうよ、私は水泳部】

【私は、テニス部に入るよ】

【中学の時と同じか】

【そういう八幡は何か入るの？】

【まだわからない。俺…まだ学校すら行ってないから…】

【八幡は、まず骨折を治すこと。それからだな】

【雅史君の言うとおり、骨折を治してね】

【完治したら、また遊ぼうね、八幡！】

【ああ！】

そんな感じに入院初日は終わっていく。入学式早々に事故に合うなんて、普通は合わないだろう。

入院2日目には、1ーA組 担任の末広 温子がやってきた。短髪ボブヘアスタイルで格好は派手ではない服装である。八幡の人となりは、総武中の担任である中村から聞いたようだ。

そしてあることを言われたのだ。

【比企谷君、死に急ぐようなことはしてはダメです。自分を軽んじて、人助けとかおこがましいだけです。そんなことしても誰も嬉しくない、むしろ亡くなった恋人さんが悲しみます】

八幡の心に担任の末広の言葉は刺さった。中学の担任である中村からも言われてだが、末広の言葉はぐうって刺さる何かがあるのだ。

【わかってます…海浜に言った友人達もそう言われてますから】

【比企谷君、何かあればすぐに相談に乗るからね】

そう言って担任の末広は帰っていった。それから、担任の末広は学校の資料やクラスの事がかかれたプリントを持って来てくれた。

3週間の入院生活にピリオドを打ち、松葉づえで総武高校初登校した。しかし八幡のクラスの1ーAは、彼の方を一瞬見たが、すぐに自分達のグループの人間と話していた。

八幡はすぐに自分の机を探す。担任の末広から聞いていた席に座る。

クラスの視線は、八幡の方を見ている。

あんなヤツいたっけ?とか。

入学式早々に事故にあったマヌケとか。

女子にいたっては、キモイとか、目が腐ってるとか言われている。八幡は心の中で

【これでいい。俺は地味で目立たなく平和に暮らせるならそれでいいか。俺にキヤーキヤー言っていた総武中学がおかしかったんだ】

総武中学時代、八幡がモテていたなんて、このクラスの人間は思わないだろう。誰か知ってる人間がいたとしても、誰もが信じないだろう。

こんな感じで、八幡の高校1年はただ地味で目立たないボツチで過ごして行った。それでも、雅史達とは、グループチャットや直接会ったりしていたが。でも雅史達には、本当のことは言っていない。本当の事を言えば、雅史達が心配してしまうからだ。雅史達には、ちゃんと青春を謳歌してほしいと願っているから。

再び季節は春へととなり、八幡達は高校2年に進級し2ーF組とクラス替えになり、末広先生は、海浜総合高校へ転勤となった。末広先生は誰からも人気が高かったから。だから海浜総合高校から引き抜か

れたんだろう。

2年生になってもボツチ生活は変わらない。八幡に近づいてくる人間はいなかった。彼もそれを甘んじて受け入れたからだ。

心から許せる人間ならいいが、うわべだけの関係なんか煩わしいだけだろう。

そんな中、国語の教科担任の平塚静が高校生活を振り返ってという作文を書けと言って来たのだ。

八幡はまためんどくさい事を言う教科担任だと思った。

高校生活を振りかえる？

振り替えられるようなイベントなんか起こしていない。クラスの人間達は、グループに分かれて書き始めている。

何を書こうか迷っている時、クラスの女子に

「ちよつとどいて、邪魔」

八幡は自分の席で考えていただけなのにどけと言われた。邪魔にならないように、八幡は、クラスの窓際の端に机をづらした。

「はあく何を書けばいいんだよ…」

雅史達に話せば、手伝ってくれるだろう。それでは、雅史達に迷惑だし、なんせ彼らの青春の時代を潰させるわけにはいかない。

八幡は、自分の高校生活の始まりは、とある事故から始まった。そんなことを書きはじめてたのだった。

第1章―第2話―平塚先生に呼び出される。

――
八幡は、自分の高校デビューとはある事故から始まったと書き始めた。

入学式当日、前には言っていないが、実は総武高校の入学式に行く前に、綾音の墓参りをやってから行っている。

そしてあの事故に遭遇しているのだ。自分は無事ではなかったが、あの助けた犬は、無傷だったようだから、それだけは良かったと思っている。

しかし後が続かない。頭に何も思い付かない。退院後は、学校生活はボツチの生活を送りましたとか、書くのかと自問自答を繰り返して作文を書いた。中学時代のなら書けるのになと考えていた。

しかしその日の昼休み早々に平塚先生から呼び出しをくらう。

【2―F組 比企谷八幡、至急職員室へ来るように】

「呼び出しか、大方あの作文の事だよな」

八幡が席を立つと、クスクスと女子の笑い声と悪口が聞こえてくる。

「あいつ、なに呼び出されてるんだらうね」

「なんかしたんじゃないの?」

「犯罪とか?」

「キヤーそんなの嫌よね」

八幡はため息を吐きながら教室を出る。職員室へ歩きながら自身で。

【キモイとか、目障りとかならまだしも、犯罪者呼ばわりされる日が来るとはな】

女子のネットワークは、凄いものである。他のクラスだというのに八幡の事を白い目で見てくるし文句を言ってくる。

そそくさと職員室へ向かう。

八幡が、職員室の扉を開けると、平塚先生が手を振る。

「比企谷、こつちだ」

八幡は、平塚先生の机の真正面へやって来た。先生の机の上には、自分の書いた作文があった。

「比企谷、私が呼び出した理由はわかるな？」

「その作文に不備があったと？」

「私が授業で出した課題は何だったかな？」

「高校生活を振り返ってというテーマでしたが」

「そうだな、それなら何故君は、高校生活の初めの入学式の登校時しかないんだ？何故、それから白紙なんだ？」

「はあく、俺：そんな立派な高校生活を送ってないので、原稿用紙何枚も書けませんよ」

はあくと平塚先生はため息を吐きながら、八幡を紙束で頭を叩かれる。そして平塚先生が真面目な表情で八幡に聞く。

「1つ聞く。比企谷、お前はそんな感じであと2年も過ごすのか？」

「そうですね、地味で目立たなくしていれば、いいかなって」

「灰色の人生でも送るつもりなのか？」

「それで、構いませんよ」

八幡は、綾音が生きていて海浜総合高校だったら薔薇色の青春生活を夢見ただろう。でも綾音もいないし、海浜総合高校でもなんでもない総武高校である。平塚先生は、今度はこんなことも聞いてきた。

「はあく全く君と言うヤツは：で、友達とかいないのか？」

「友達はいませんね。入学式から3週間の入院生活がブランクとなり、今まで尾を引いてるんですけどね」

「ブランクね：それと部活はやってなかったよな？」

「友達もいないのに部活とかやるわけがないでしょう」

「そうか！友達はいないか！私の見立て通りだな。君の腐った目を見ればそれくらいすぐにわかったぞ！」

八幡は総武高校にはいないのであって、海浜総合高校には親友がいるんだよ、と思っっているが、言うつもりもない。

八幡はここに雅史や緑子や七海がいなくて良かったと思っっている。彼らは八幡の容姿に対して文句を言う人間を許さない。平塚先生は、

1人でうんうんと納得顔で八幡の顔を遠目で遠慮がちに見ている。去年の担任の末広先生とは真逆の位置にいる教師だと八幡は納得した。

「彼女とか、いるのか？」

「今は…もういませんよ」

八幡はポケットの中の綾音の遺骨の入った小びんを握る。

「そうか、いないか！」

平塚先生は、八幡に対して憐れんだ目で見ている。八幡はそんな目を見て、何だか気持ちが悪く感じた。

平塚先生は、ため息混じりに煙草を吸いながら

「よし、こうしよう、レポートは書き直せ」

「本当に？」

「当たり前だ」

結局八幡は、平塚先生により作文の書き直しを言い渡された。

八幡は今度は何を書こうか迷っているときに平塚先生がこういつてくる。

「君には奉仕活動を命ずる。君に拒否権はない」

「はあ〜!？」

八幡のこのはあ〜!？は、本当に心の中からの声だった。八幡も平塚先生に問う。

「奉仕活動? 一体なんの?」

平塚先生は、時計を見て

「放課後にもう一度私のところに来い。良いな、比企谷?」

八幡に鋭い視線で見ながら言った平塚先生。その目は逃げたらわかってるよな、的な感じで見ていたのだ。

「……わかりました、そんな目で見ないでください。放課後、絶対に来ます」

「ああ、必ずくるように」

話はこちらで一旦終わりを迎えた。平塚先生に礼をしてから、職員室を後にした。終わってから家へ直行が出来なくなってしまった。

第1章―第3話―緑子と委員長。

職員室からクラスへ戻る時にスマホのバイブがなったので、人気のないところに来てから確かめる。グループチャットからだ。

「うん？雅史からか。何だろ？」

「八幡、八幡が大好きだった、ラノベが発売されてたから買っておいだよ」

「お！忘れた。サンキュー雅史。って今日は昼間に帰れるのか？」

「ああ、海浜はね。総武は？」

「ちゃんと午後の授業もあるんだわ」

「そうか、購入したラノベは、おばさんに渡しとくよ」

「ああ、そうしてくれ。代金は後で渡すからな」

「ああ、それじゃあな、八幡」

「こつちこそ、ありがとな」

雅史とのやり取りを終了した八幡は、スマホをポケットにしまおうとしたら、緑子達から連絡がくる。

「やつほー、八幡…元気してた？」

「緑子、テンション高いな？」

「八幡、緑子がテンション高いのは、水泳部の副部長に就任したからだよね」

「緑子が！って言っても順当って気もするが」

緑子は中学時代は水泳部の部長も務めている。だから順当だと八幡も言ったのだ。

「水泳を頑張れるのも、八幡のおかげだから。八幡のあの言葉が、私を奮い立たせてくれたから。あの言葉がなかったら今の私はないと思う」

「バカ言え。それはお前の実力だ。俺のおかげではない」

「ううん、八幡のおかげだよ」

「まあ…緑子がそこまで言うなら…」

緑子に対しての言葉。まだ綾音と付き合う前に、不良から助けただ

けではなく、緑子のプライベートの問題を片付けたことがあるのだ。綾音からも頼まれたから、緑子の問題を解決するために走り回った経験がある。

その時に、そつと緑子の背中を押す言葉を使った。

【緑子、無理をする必要はないぞ。泣きたい時は泣いても良いんだ。お前、ずつと我慢してるだろ？胸なら貸すぜ。まあこんなこと、雅史みたいなヤツに言われたいだろうけど、ごめんな】

【ううん、ありがとう、八幡！】

緑子は、八幡の胸の中で大声で泣きじゃくった。八幡は緑子の頭を撫でたのだった。

【緑子、お前の側には俺がいる。だから前だけを向いて走れ】

緑子は、この言葉で己を奮い立たせている。

親友の綾音のために諦めた恋。

自分の心の中に封じた思い。

八幡と離れて気付かされる彼の大きさ。

まだ八幡の隣の並び立つ資格がないと臆病になっている自分。

そんなことを考えていたら八幡が

【緑子、さつきから黙りこんだままだが、大丈夫か？】

【大丈夫だよ！八幡、私頑張るから！】

【お、おう】

【それじゃあね、八幡。私も頑張るからね】

【おう…】

そう言つてグループチャットを終えた。八幡はスマホの時間を見る。

「昼飯食う時間…あるかね…」

八幡はそう言うのと教室へ戻ることにした。

クラスに戻ったらさつきと昼ごはんを食べることにした。クラスの間人達は、なんでアイツ今頃弁当食べてるんだ、みたいな視線を醸し出している。

八幡はそんな視線を無視しながら昼ごはんの弁当を食べた。

午後の授業も乗り越えた。後は帰るだけとはならないのが今日で

ある。

昼休みに平塚先生から放課後に来いと言われている以上は、行かないといけないだろう。八幡はため息を吐いた。

HRも終わり、重い腰を上げ再び職員室へ行くために教室出る。職員室へ歩き出した直後誰かかに空き教室へ連れ込まれた。

八幡はついに自分はボコられるのかと覚悟を決めた。しかしそんなことは無かった。そこにいたのは、同じクラスの学級委員長である吹寄制理である。黒髪ロングで巨乳で人望がある。今は胸の下で腕を組んでいる。総武高校の美少女の1人とされていてスクールカースト最上位である。そんな吹寄が八幡を空き教室に連れ込んだのは、理由がある。

「ふ、吹寄さん？何かご用ですか？…あ、平塚先生から俺が逃げないように命じられて？」

「平塚先生に、貴方を逃げないように命じられて？何、わけのわからぬ事を言ってるのかしら？」

吹寄は、キリツとした目で八幡を睨む。

「…ち、違うのか？じゃあ何故、俺をこんな空き教室に？」

「貴方に訊きたいことがあるからよ」

「訊きたいこと？そんなの教室で訊けばいいだろ？」

「教室では訊きにくいことだからよ」

吹寄はそう言っただけ息を吐く。そして八幡を見据えて

「貴方、総武中出身よね？」

「出身中学は総武中だが、それがどうかしたのか？」

「海浜に行った親友達や後輩達が、総武中の色男が総武高校にいるってね？比企谷、その人を知らない？」

「し、知らないな…俺、ボツチの1人だぞ。そんな色男なんか知らないな」

八幡は、総武高校で手に入れた平穩を失いたくない。吹寄は総武中だったのか？

いや違う。同級生や後輩と言っているから、本人ではないだろう。

同級生なら、雅史達の話からわかってくるかもしれない。

後輩達も八幡に告白した女子達がいる。その辺りから話がもれるのかも知れない。ここは逃げて平塚先生のところまで、行くしかない。と八幡は決める。

「俺、そんなリア充に知り合いはいない……。吹寄、平塚先生に呼ばれるし、行くな」

八幡はそそくさと空き教室から出ていく。

吹寄は八幡が去って行った後、スマホを取り出し画像を映し出す。そこには海浜総合高校の去年の文化祭の有志によるバンドに飛び入り参加して、緑子とデュエットして歌う八幡の姿があった。

「彼があの色男で間違いのないわね。しかし海浜総合高校と総武高校で、彼の評価が天と地の差……。総武高校では偽りの仮面を付けている？ それとも最愛の恋人を失ったから？」

吹寄はスマホをしまい、ため息を吐きながら

「まあ、同じクラスだし、そのうちわかっていくかもしれないわね」

吹寄はそんなことを言ってから空き教室から出ていく。

第1章―第4話―奉仕部。

――

吹寄から逃げるように出てきた八幡は、正直焦っていた。

「吹寄のヤツ、海浜に知り合いがいるのかよ…まさか去年の海浜の文化祭の画像を持ってるとはな…」

あのクラス委員長である吹寄が、クラス中に言いふらす可能性があるのだが、八幡はそれはないと思った。

あの吹寄をしばらく見ていて、人の嫌がることはしない。だが間違っていることには、ちゃんと指摘するタイプだ。そういう彼女だから八幡の事を言うとは考えにくいと思った。吹寄が八幡の容姿をどうのこうのとは、言っているところは聞いたことがない。彼女が見えないところで言っている可能性もあるのだが。

窓から見える空は、すでに夕日が西の方に沈み始めている。グラウンドからは、サッカー部の練習している掛声が聞こえてくる。

「サッカーか…。綾音がああなる前まで、雅史とやってたな」

八幡は、中2の夏にサッカー部を辞めている。サッカー部の部長も副部長も他のメンバー達も、八幡の人の良さを理解していて、彼女の元に行けと背中を押したのだ。

八幡も申し訳ないと思っていた。なんせ夏の大会の前だったからだ。

「……今さらサッカーなんかやってもな……」

サッカー部の練習風景を尻目に職員室へ急ぐ。

職員室に到着し、扉を開けて中に入る。するとすぐに平塚先生がやって来て

「ぼさつとするな、比企谷、私についてくるんだ」

「ついて行くって…どこに行くんですか?」

「ついてくればわかる」

一体、どこに連れて行くつもりなのか。全く見当がつかない八幡。どうやら特別棟の方に連れていかれているのは、周りの景色でわかる

ことだ。

この辺りにカップルがたむろしていることは、1年の時から把握済みである。

1年時に教室にいても退屈だったため、学校中の校舎を探検していたのだ。

そんなことを考えていると特別棟の空き教室のような場所に連れてこられた。

「ついたぞ」

「ついたって、ここ空き教室じゃないですか？何の冗談でしょうか？」

平塚先生は、八幡の問いには答えず教室の扉をあける。

その教室の端っこには、机と椅子が無造作に積み上げられている。倉庫としても使われているのだろう。他の教室と違うのは、そこまで何も特殊な内装は何もない。普通の教室とたいして変わらない教室。

だがそこが異様な感じに見えるのは、1人の女子生徒が、夕陽の光を浴びながら本を読んでいるからである。その姿が神秘的にも見えただ。

それが八幡の目には、錯覚を起こす。最愛の恋人、綾音の姿に見えたのだ。

「…綾音？」

小さな声で言った。平塚先生は何か言ったか、と言ったが八幡は答えなかった。

彼女の方が来訪者に気づいたのか、本に葉を挟み顔を上げた。

「平塚先生、入るときはノックを、とお願ひしていたはずですが」

端正な顔立ち。流れる黒髪。八幡のクラスのほとんどの女子が霞むぐらいの美少女である。

正気に戻った八幡は、綾音がいるわけがないと気を強く持った。正面にいる女子生徒は、綾音とは違うとすぐにわかった。雰囲気、オーラなどが全く違う。

それに綾音は、八幡に対していつも優しい眼差しで見ていたのだから

ら。

だが目の前の女子生徒が八幡に向ける眼差しは、氷のような瞳。優しきとは真逆である。彼女の名前は、雪ノ下雪乃。八幡と同じ2年生でクラスは、2-J組。学年トップ争い上位者、八幡と何度も定期、実力テストでやりあっている。初めて八幡は、雪ノ下雪乃を見る。あれがいつも自分と争うライバルなのかと。

「ノックしても君は返事をした試しがないじゃないか」

「返事する間もなく、先生が入って来るんですよ」

平塚先生の言葉に、雪乃は不満げな視線を送る。

「それで、その目の腐った人は何ですか？」

「入部希望者の比企谷八幡だ」

「2-F組、比企谷八幡です」

八幡は、軽く会釈をする。そして入部って何ってなる。平塚先生が八幡の疑問に答え始める。

「君にはペナルティとしてここでの部活動を命じる。異論反論抗議質問口応えは認めない。しばらく頭を冷やせ。反省をしろ」

平塚先生は、八幡に全ての反する行動を封じる。彼は無茶苦茶な教師だと思いながら、黙って聞く。

「というわけで、見ればわかると思うが、彼は中々根性が腐っている。そのせいでいつも孤独な憐れむべき奴だ」

八幡は、あんに根性が腐ってるとか、言われたくないと。孤独は好きで孤独になってるのだから口を出さないで欲しいと考えている。

「人との付き合い方を学ばせてやれば少しはまともになるだろう。こいつをおいてやってくれるか。彼のひねくれた孤独体質の更正が私の依頼だ」

平塚先生が雪乃に向き合って言うと、彼女が物騒な物言いです。

「それなら、平塚先生が殴るなり蹴るなりして躰ればいいと思います」

八幡は、ぎよつとする。雪乃は暴力容認派なのかと。平塚先生もため息を吐きながら

「私だつてできることならそうしたいが、最近は小うるさくてな。肉

体への暴力は許されていないんだ」

八幡は更に平塚先生の言葉にぎよつとして後ろに後ずさる感じになった。肉体の暴力はやらないが、精神への攻撃は許されてるみたいに言ってることに。

「お断りします。その男の下心に満ちた下卑た目を見てると身の危険を感じます」

雪乃は、別に乱れていない襟元を掻き合わせるようにして、八幡を睨み付ける。

八幡は、ため息を吐く。そして

「誰が、お前の胸なんか見るかよ。自意識過剰か？」

雪乃は、八幡にそう言われ更に睨み付ける。八幡も睨み返す。

なんせ、言われのない事を言われて正直に腹が立っているのもあるが。

「比企谷、君には異論反論抗議質問口応えは許さないと言ったが？」

「くっ…脅迫ですか？」

「脅迫ではない。君の事を思つての事だ。従つてくれ」

「…まあ、先生からの依頼であれば無碍にはできませんし…。承りました」

雪乃はほつとうに鬱陶しそうに嫌そうに言う和平塚先生は満足そうに微笑む。

「そうか。なら、後のことは頼む」

それだけ平塚先生は、言うそのまま帰って行く。ぽつんと残される八幡。

綾音が入院していた時に同じ状況になった事は多々ある。

彼女の寝顔を見るだけでも心は安らげた。そんな時間は、あつという間に過ぎて行った。

だが今の状況は、ただ重苦しいだけだ。時計の秒針の音だけが、教室に鳴り響く。ずっと立っていた八幡に対して

「そんなところに立ってないで座ったら？気持ち悪いのだけど」

「ああ、わかった」

八幡は、雪乃にそう言われ、空いている椅子に座る。雪乃の気持ち

悪いから座れ、にイラツとしたが、気にせず平然とする。

雪乃は、八幡に気にすることもなく黙々と本を読んでいる。何を讀んでるのかはわからないが、八幡には興味がない。

外の方へ向いて時間を潰そうとする。しかし時間がそう過ぎるものではなく、雪乃の方へ向いた。彼女は視線に感じなのか

「な、何か？」

「ああ、悪いな。どうしようかと思っただけだ」

「何が？」

「大した説明がないままここに連れて来られたものだからな」

八幡がそう言うと、雪乃は舌打ちみたいなこととして、勢いよく本を閉じる。そして虫ケラのように見て睨んだきた。

「…そうね、ではゲームをしましょう」

「ゲームだと？」

「そう、ここが何部か当てるゲーム。さてここは何部でしょう？」

八幡は、何部なのか当てるために教室中を見渡した。部活と言っても雪乃以外のメンバーがいない。

「部員って他にはいないのか？」

「いないわ」

雪乃以外にメンバーがいないとなると部として認められるわけがない。良くて同好会とまりだろう。八幡は、ヒントも無しで考えている。考えられるのは、1つしかない。

「文芸部か？」

「へえー。その心は？」

雪乃はいくらか興味深げに問い返してくる。

「特殊な環境、特別な機器を必要とせず、人数がいなくても廃部にはならない。つまり部費が必要ない部活。加えてあんたは本を讀んでいる。答えは1つしかない。答えは文芸部じゃないのか？」

「……ハズレ」

「違うのか？じゃあ何部だよ、ここは？」

「では、最大のヒント。私がここでこうしていることが活動内容よ」

雪乃から出されたヒント。だが、それは何一つ答えに結び付かな

い。文芸部じゃなければ、図書部？

図書部なら図書館か図書室だなど八幡は思っている。だからこれも違うということになる。

私以外部員がない部活。

幽霊部員が多く存在する部活。八幡は冗談気味に

「まさか、オカルト研究部とか？」

「ハズレ。……はっ、幽霊なんていない。馬鹿馬鹿しい」

八幡は頭の知識を総集めだが、全くわからない。文芸部、図書部でなければ、何の文科系の部活？

ふと平塚先生が何か言っただけだったか？

平塚先生が八幡の更正させるために雪乃に依頼を出した。依頼をこなす。

ここで、八幡は何か閃く。

「もしかして、何でも屋か？」

「違うわ。まあ惜しいところまではきたわね」

「じゃあ、何なんだ？」

「比企谷君、女子と話したのは、何年ぶり？」

「女子と？さつきも話したが？」

「平塚先生は、省いて」

八幡は、どうせ女子と話したことのない陰キャとでも思ってるんだろう、と思っっている。

「さつき、女子のクラス委員長と話したよ」

「業務連絡とかじゃくて、ちゃんと話したのは何時？」

雪乃もしつこく八幡に聞き続ける。緑子、七海とグループチャット以外で話したのは、春休みに綾音の墓参りの時に話した。それから数える

「…約1ヶ月ぶりかな」

八幡がそう言うと、雪乃がニコツツて笑い彼の前で高らかに宣言する。

「…そう。持つ者が持たざる者に慈悲の心を持ってこれを与える。人はそれをボランティアと呼ぶの。途上国にはODAを、ホームレスに

は炊き出しを、モテない男子には、女子との会話を。困っている人に救いの手を差しのべる。この部の活動よ」

いつの間にやら雪乃は立ちあがり、自然、視線は八幡を見下ろす形になっている。

「ようこそ、奉仕部へ。歓迎するわ」

とても歓迎されていないことを肌で感じる八幡であった。

第1章―第5話―雪ノ下雪乃。

八幡が、平塚先生に雪乃のところ連れて行かれた同時刻、吹寄の姿は水泳部にあった。

総武高校水泳部。千葉県内で海浜総合高校と総武高校と二大名門と言われるほどの強豪である。水泳部の練習設備は、他の部活動よりは優遇されている。

秋の新人戦では、海浜総合高校に接戦に持ち込んだが、海浜総合高校の水泳部副部長の緑子と吹寄との一騎打ちで少しの差で総武が負けた。

今は夏の大会に向けての練習をしている。吹寄も去年の3年生の引退により副部長に就任している。

吹寄の心は、打倒海浜総合高校！

打倒 山岸緑子！

と燃えていた。紺を基調にして、赤のラインが入った競泳水着姿の吹寄は、女子部員を集めた。山本部長は副部長の吹寄に女子水泳部の指揮を任せている。

「夏の大会は、海浜総合高校から優勝旗を取り返すわよ！」

「はい！」

「目指すのは優勝！だけど無茶な練習は駄目。準備運動もちゃんとする。怪我をしてしまったらそれまでだからね」

「はい！」

「以上、各自練習を始めて！」

女子部員達は、各自の練習を始める前に準備運動を始めた。すると吹寄に山本部長が話しかける。

「制理、張り切るの構わないけど、貴女が倒れたら意味が無いわよ」

「わかってます、部長」

「海浜の高橋に負けたのは、悔しいだろうけど、詰めすぎるのは良くないからね」

「はっ」

吹寄は、去年の雪辱を晴らしたい。そんな中に、海浜総合高校に行った中学時代の水泳部の仲間が送ってきた画像。

八幡と緑子が海浜総合高校の文化祭にてデュエットして歌っている画像。

そこに写る八幡と緑子の表情を見て、互いに信頼している感じに見えるのだ。八幡の表情も総武高校で見せているものとは、別人のようなオーラを感じる。

「ただならぬ関係？」

「うん？どうした、制理？」

「いえ、何でもありません」

そう言う吹寄は、準備運動をやってからプールへ向かった。彼女の心は、打倒海浜総合、打倒 山岸緑子であった。

――

一方奉仕部の方は、まだ八幡と雪乃の討論が行われていた。

宮沢賢治、よだかの星から2人はヒートアップしている。

「でも、『よだかの星』は貴方にとってもお似合いよね。よだかの容姿とか」

「お前、俺の顔面が不自由だと言ってるのか？」

「そんなこと言えないわ。真実は時に人を傷つけるから……」

「言えない？全然言ってるぞ、お前」

すると雪乃は、深刻な顔をして八幡の肩をポンと叩いた。

「真実から目を背けてはいけないわ。現実を、そして鏡を見て」

八幡は、今まで言われたことのない事をズバズバと言われる。キモい、腐り目とは総武高校に入った時から言われてるが、雪乃が言ってるのは初めてだ。

綾音、雅史、緑子、七海、中学の担任の中村先生、高校1年の担任だった末広先生は、「八幡はもつと自身を持って！」、「自分を卑下しないで！」

と言われて来たのだ。いや八幡の表情で救われたと言ってくれた綾音まで、馬鹿にされた感じがしたのだ。それは、八幡にとって超えてはならないラインなのだ。

「馬鹿にするなよ！人の欠点ばかりを言うヤツが、人を救う？笑わせ
るなよ」

「何？文句でもあるのかしら？貴方のように腐った魚のような目をし
ていけば必然、印象は悪くなるわ。目鼻立ちなどのパーツうんぬん
じゃなく、貴方は表情が醜い。心根が相当歪んでいる証拠ね。両親が
可哀想に」

「俺の事を侮辱するのは良い！だけど俺の両親を侮辱するのは許さな
いぞー！」

八幡は頭の中が怒りで満ちていくのが分かる。目の前の女に何を
言っても無駄だと彼は悟る。ただ雪乃を睨み付けたまま、時間が過ぎ
る。

「…さて、これで人との会話コミュニケーションは完了ね。私のような
女の子と会話ができたなら、たいていの人間とは会話ができるはず
よ」

「はあくお前に指南されなくても女子と会話は出来るんだよ！あえて
俺は話さないだけだ！」

「虚言は辞めた方が、良いわよ。虚しくなるだけだから」
「何だと！」

「…これでは先生の依頼を解決できていない。もつと根本的のところ
をどうにかしないと……。例えば貴方学校を辞めるとか？」

「はあく、俺に人生を詰めと言ってるのか？」
「そこまで言っていないわ」

「言ってるだろうが！」
「うぎ…」

八幡と雪乃と言い合いの中、ドアを荒々しく無遠慮な音が響いた。

「雪ノ下、邪魔するぞ」

「平塚先生、ノックをお願いします」

「悪い、悪い。まあ気にせず続けてくれ。様子を見に寄っただけなの
でな」

ため息交りの雪乃に鷹揚に微笑みかけると、平塚先生は教室の壁に
寄りかかった。そして八幡と雪乃を交互に見る。

「仲がよさそうで結構なことだ」

どこが仲が良いんだ？こんな状況を見てどこをどう思うのか、意味がわからないと八幡はそっぽを向く。

「比企谷もこの調子でひねくれた根性と腐った目の矯正に努めたまえ。では私は戻る。君達も下校時間までに帰りましたまえ」

「下校時刻までに帰りますよ。雪ノ下と一緒にいれば勘違いされかねないので」

「比企谷君、それはこちらの台詞よ」

「大体、俺は非行少年か？更正など矯正などと」

八幡がそう言うのと平塚先生は、ふむ、と言って顎に手をやってしばし考え始める。

「雪ノ下はちゃんと説明していなかったか。この部の目的は、端的に言ってしまうと、自己変革を促し、悩みを解決することだ。私が改革が必要だと判断した生徒をここへ導くことにしている。精神と時の部屋だと思ってもらえればいい。それとも少女革命……」

「……例えばアニメや漫画なんですか。別に嫌いじゃないですが……」

「何か失礼な事を言わなかったか？」

「は？何も言ってますんが？」

とんでもなく冷ややかな視線で射殺されかねない目で見られたので、一歩下がった。

「雪ノ下、どうやら比企谷の更正にはてこずっているようだな」

「本人が問題を自覚していないせいです」

平塚先生の苦い顔に雪乃は冷然と答えた。八幡は、何故自分がこんなことを言われ続けなければならないのか、アホらしくなっていた。

八幡はふと夕陽の方を見る。夕陽の見ながら、あのときの事を思い出していた。

綾音の告白を受け入れて、ちよつと経ったとある日の学校からの帰り道。綾音と一緒に帰っていた時、総武中じゃない他校の女子生徒の集団とすれ違った時、その集団に八幡は笑われたことがあったのだ。

八幡は、自分が侮辱されるのは許せるが、綾音までが馬鹿にされ

ただ。

悔しかった。

申し訳なかった。

自分なんか彼氏でごめんと。

だけど綾音は、そんなことを気にしていなかった。

【あんな連中の言うことなんか気にしない。八幡の良さを何も知らないくせに。人を見た目でしか判断出来ない可哀想な人達】

【綾音……】

【私の彼氏を馬鹿にするなって！】

【……】

【八幡は、私が辛く絶望的な感じになった時、ずっと私を励ましてくれて、胸を貸して泣かせてくれた。それに勇気や希望も持たせてくれたもの】

綾音が情緒不安定だった時に、八幡が何も言わずに抱き締めていた。何も言わずに綾音の愚痴も黙って聞いていた。

綾音も次第に八幡の偉大さに惹かれていったのだ。普段はやる気が無いようにしてるけど、いざと言うときにやってくれるからだ。それは綾音、緑子、七海だけではなく、雅史もわかっている。

そんなことを八幡が思っている、平塚先生が

「比企谷、人が話している時に寝てるんじゃない！」

「寝てませんが！ただ過去を思い出してただけですが？」

「ほお、灰色の過去をか？」

「灰色の過去って…馬鹿にしないでもらえますか」

「幻想を抱いてるなんて、可哀想な人。貴方は変わらないと、社会的にまずいレベルよ」

「はあ！何がまずいレベルだ？」

「傍から見れば、貴方の人間性は余人に比べて著しく劣っていると思うのだけど。自分を変えたいと思わないの？向上心が皆無なのかしら」

八幡に向上心や変わろうとする気持ちが無いわけではない。綾音を失ってから、心に大きく開いた穴が、向上心や前に進むうとする気

持ちを鈍らせているのだ。

八幡の心は、2年前の12月30日で止まっているのだから。

それに雪乃や平塚先生に言われなくても、八幡自身が一番わかっている。

いつまでも綾音のことを引きずってても仕方がない。

雅史や緑子、七海からは、新しい彼女を作れば、綾音を失った傷も忘れられるし、綾音自身もそれを望んでいると。

そんなことはわかっているのだ。いつまでも八幡がウジウジしてれば、綾音も安心して眠れないってことも。

怖いのだ。八幡は、新しい道を歩み出して、綾音を忘れていくのが怖いのだ。

綾音が生きた証を失いそうでそれも怖いのだ。

「お前の言うとおりに変わらなさいといけないのはわかっている！わかってはいるが、変わるのが怖いんだよ！」

「何？怖いって…」

「いや、何でもない」

それから押し問答が繰り返されたが、らちがあかないから、平塚先生が何かを言い出した。

「それではこうしよう。これから君達の下に悩める子羊を導く。彼らを君達なりに救ってみたまえ。そしてお互いの正しさを存分に証明するがいい！どちらが人に奉仕できるか！ガン…」

平塚先生がガンダムファイトと叫んだ。アニメの掛け声をしきりなしにしゃべっていると言うより叫んでいる。

「平塚先生、年がいにもなくはしゃぐのはやめてください。ひどくみっともないです」

雪乃が氷柱のように冷えきった鋭い言葉を投げる。すると平塚先生もクールダウンしたのか、一瞬羞恥に顔を染めてから取り繕うように咳払いをした。

「と、とにかくっ！自らの正義を証明するのは己の行動のみ！勝負しろと言ったら勝負しろ。君達に拒否権はない」

八幡と雪乃は呆れ返るしかなかった。

第1章―第6話―友と後輩。

――

平塚先生はそれだけを言うと、スタスタと帰って行った。残された八幡と雪乃。雪乃は、八幡に気にも掛けずに黙々と本を読んでいる。

八幡は、小さくため息を吐いて、時間を見る。

すると下校時刻の最終のチャイムがなり、雪乃はそそくさに帰り支度を済ませて、挨拶も無しに教室から去っていく。

「挨拶も無しかよ」

八幡は、大きなため息を吐いて、帰り支度をしてから教室から出た。完全下校時刻が近づいてきているから、校内に生徒はほとんど残っていない。

シーンと静まり返っている校内を歩いていく八幡。

「つたく…面倒な事に巻き込まれたぜ」

平塚先生の高校生活を振り返ってという作文から始まった、奉仕部事件。

平塚先生に呼び出され、文句を言われ、放課後にとある教室に連れていかれて、雪乃と出会う。

その雪乃は、綾音と容姿が似ていたから驚く八幡だったが、似ていたのは容姿だけで、性格は全く似てなかった。

八幡曰く、胸も綾音とは全然違う。綾音は、巨乳とは言わないが、同級生の中では大きかった、と。

雪乃は、罵詈雑言を八幡に浴びせていたが、八幡も応戦したが、膠着状態になり、再び平塚先生がやって来た。

何しにやって来たのかと八幡は思ったが、平塚先生の口から出た言葉は、

困ってる人を何人救えるかというものだった。それも雪乃と対決する勝負と来た。

平塚先生は、付け加えて逃げ出したら進級不可、留年にするとか言ってきた。

ため息ばかりを吐きながら自転車置き場までやって来た八幡は、自分の自転車にまたがると自宅へ帰ろうとすると、2人の男子生徒達に声掛けられる。1人はチャラチャラした茶髪で肩にヘッドフォンをつけていて、もう1人金髪で強面な感じな男子生徒である。

「オッス、八幡！今帰りか？」

「八幡センパイ！お久しぶりです！」

「陽介に完二か、久しぶりだな。完二は総武を受けてたのか…それに陽介、お前関東を離れるんじゃないのか？」

「一度は離れたさ。でもお前の事が心配で戻って来たんだよ」

「オレは、八幡センパイについていく事を決めてますので」

花村陽介、八幡の雅史以外の親友であり、親がとあるシヨツピングモールの副支店長であり色々あったが、八幡と出会い考え方を変えた。とある先輩に告白するが、フラれた。フラれた陽介が泣き出した時、八幡は自分の胸を貸している。陽介は借りだと思っており、八幡に借りを返そうとしている。高2の春、父親が総武支店長になるのをきっかけに、総武高校へ編入した。

異完二、高1年生。異染め物屋の息子。地元では不良だと言われているが、実は不良ではなく母親孝行な息子である。ただ見た目が不良っぽいからすぐに不良達やグレーな連中もやって来ていた。

とある時、完二はグレーな連中に呼び出され、1人ランチされていた時、八幡が救いに来てくれた。それから八幡を兄貴分と慕うようになった。

陽介、完二も八幡と綾音が恋人同士になった時も、祝福している。特に完二は自分の事のように、泣いて喜んだのだ。

あの八幡と綾音の模擬結婚式の際、完二は商店街、陽介はシヨツピングモールを説得、協力を取り付けた裏話がある。

「陽介、完二……」

「な、なんだ、八幡、泣くほど嬉しかったのか!？」

「八幡センパイ、オレの胸ならいくらでも貸しまっスよ！」

「泣いてないし…借りねーよ」

八幡は、内心泣きたかったかもしれない。雪乃の罵詈雑言、平塚先

生の無茶苦茶な要求：犯罪者でもないのに更正などと言われたこと。
だが泣きたかった気持ちをぐうつと堪えた。

ここで泣いたら、陽介達が雅史、緑子、七海に報告する可能性がある。そんなことになれば、雅史達海浜総合高校が総武高校に乗り込んで来かねない。

海浜総合高校には、八幡のファン、慕う人間達が集まっている。

それは八幡も知っているから、堪えたのだ。

「と、とにかく帰るぞ」

「そーだな」

「はいー!」

3人は、太陽が沈み暗くなった通学路を自転車で走行する。

「なあ、八幡?」

「なんだ、陽介?」

「総武ってお前に辛口だな」

「そうっスね。それはオレも気になってました」

「総武高校がちやんとした俺の評価だ」

「そうか?総武中ではあのイケメンの雅史よりもお前の方が女子に人気あっただろ?」

「総武中の女子の目が、俺をイケメンフィルターで見てたんだよ」

「センパイ!センパイは、漢の中の漢でス!あの時、オレの事を身体張って救ってくれたじゃないっスか!」

「だな。俺なんかあんなこと真似できねーよ。八幡、お前は男も惚れさせるヤツなんだからよ!もつと自身を持ってよ!」

「お前達…」

八幡は、陽介や完二が励ましてくれたおかげで、雪乃、平塚先生から言われた事を忘れることが出来た。

久しぶりに陽介、完二と帰れて八幡の気分はマイナスからプラスになっっていた。

夜、グループチャットにて、陽介は2ーC組、完二は1ーEとクラスがわかったのだった。

第1章―第7話―忌々しい事件とお姉さん。

――

奉仕部に入れられた翌日、八幡は寝坊し大幅に時間が遅れている。いつもは早い時間に家を出るのだが、昨日の奉仕部のせいで疲れていたようだ。それで寝坊してしまい、通勤通学で人が増える時間に行かなくてはならなくなった。

雪乃や平塚先生のせいで寝坊したようなものだと思いつながら、自転車で総武高校へ向かう。

とある交差点で信号機待ちをしていたら、海浜総合高校へ向かう女子生徒が3人、向こう側の歩道を歩いている。

すると、風が一瞬、強い風が吹き抜けた。海浜の女子生徒3人のスカートも捲れる。悲鳴みたいな声をあげて、慌ててスカートをおさえる。

八幡は、信号機が赤から青に変わったため、自転車を走らせる。

「青、黄色、赤……って信号機かったの」

海浜の女子生徒3人の下着の色を小声で呟きながら総武高校へ向かう。

総武高校へ向かいながらもさつきが出来事を考えていた。

「そう言えば、綾音達が3人でジャレあった時、凄いことになってたよな」

綾音がまだ元気だった頃、八幡の家で遊びに来てた時の話だ。綾音、緑子、七海の3人がふざけて遊んでいたとき、3人のスカートが捲り上がっていて、下着が丸見えになっていたのを八幡が見たのだ。

というか八幡は、明らかに自分自身に見せてると思ったからだ。雅史や他の男の親友(陽介、完二、その他)がいるときは、ちゃんとガードしてたり、パンツ系を履いたりしてるが、八幡だけの時は、ガードも緩いし、スカート系ばかりな感じだった。

「はあ、あれは俺に見せるための策略だったわけだが」

そんな考えながら自転車をこいで総武高校へ向かった。

2-F組の教室に入ると、いつものように何組のグループがたむろしている。八幡はすぐに席に座り、教科書類を鞆から机の方へ入れる。

特にすぐ近くのグループがともうるさいから、耳に栓をはめてから寝ることに。

八幡が遅刻ギリギリに登校してきたから、結局寝ることもできずに授業となった。

八幡は、授業中も奉仕部の事が気になっていた。平塚先生からの圧で無視することも出来ずに、昼休みの昼食も味がしなかった。

そして再び奉仕部へ連れてこられた。サボれば、雪乃との勝負は、八幡の不戦敗となり、進級が不可能になるとか言われているから拒否権すらないのだ。

奉仕部の教室の中に入ると、昨日と同じ格好で本を読んでいる。八幡は雪乃に挨拶をした。だが

「……………」

雪乃からシカトされ、ため息混じりで空いている椅子に座った。空いている椅子は、昨日のだった。

「雪ノ下さん、こんにちは」

八幡は普通に敬語を使って雪乃に挨拶をした。半分は嫌みに言っ
てやりたかったが、雪乃の笑顔返しにはちよつと驚いた。

「こんにちは。もう来ないと思ったわ」

「好きで来た訳じゃない。逃げたら俺が不戦敗とか進級不可能とか言われたから来ただけだ」

やはり笑顔の裏はそんなことだと、ため息を吐いた。雪乃はなんの悪びれもなく平然と本を読んでいる。全く八幡には興味はないという姿勢を貫いてるようだ。そして雪乃は、八幡の方を向くと

「あれだけこっぴどく言われたら普通は二度と来ないと思うのだけど
？まさかマゾヒスト？」

「誰がマゾヒストだ！」

「じゃあ、ストーカー？」

「はあ!?なんで俺がお前のストーカーにならなくてはならない?」
「違うの?」

雪乃がしれつと小首を捻ってきよとんとした表情を作った。

八幡は、そんな表情は正直してほしくはない。

綾音と容姿だけは似ている分、一瞬ドキツとして、心臓に悪いのだが、ストーカーの単語で、昔のことを思い出した。それも腸が煮えたぎる人物。

綾音をつけ回すストーカーの事を。

あれは中2の春先の頃。

あの犯罪者が、綾音に対して罪を犯した。

八幡にとって憎たらしい人物。

天之河光輝。いかにもキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人と言われていた。

サラサラの茶髪と優しげな瞳、180cm近い高身長に細身ながら引き締まった身体。誰にも優しく、正義感も強い。(思い込みが激しい) 総武中の西隣の中学である総武西中に通っていて、小学校の頃から全国的に有名な八重樫道場に通っていた。総武西中では、そのルツクスによりかなりの人気ものであり、美少女の幼なじみを2人連れているとも言われていた。

そんな美少女の幼なじみがいるにも構わず、綾音にちよつかいをかけてきた。綾音は、春先にスポーツ少女特集というニュースで取り上げられた。そのニュースを見て、天乃河光輝は近づいてきたのだ。

光輝はわけのわからない理由で、八幡に因縁をつけてきた。

八幡が綾音や緑子、七海を連れていた事に腹を立てたのだ。

八幡のような人間が、美少女を連れてるのはおかしいと。自分みたいなイケメンである自分こそ相応しいと言っただけのけた。

八幡は、雅史や陽介とは、正反対の自意識過剰のイケメン野郎だと思っただけ。

雅史や陽介、完二、他の男子達の協力のもと、綾音達を守ることに

成功していた。

だがあろうことか光輝は、夜に雪柳家に侵入し、綾音を襲った。綾音の悲鳴で、八幡は、彼女を救うために自分ちの塀から雪柳家の2階部分に移り、綾音の部屋へ飛び移った。

変質者の如く襲う光輝を八幡は殴り倒した。

騒ぎを聞き駆けつけた綾音の両親に警察に通報を頼んだ八幡。

光輝は、あの有名な八重樫道場の優秀な人間。まともに戦えば、八幡の敗北は必至。

怯える綾音を見た八幡は、彼女を絶対に守る意思を固める。

光輝は、八幡に殴りかかった。だが八幡には、光輝のパンチの軌道が見える。

それもそのはずだ。完二を守るため、不良やケンカ屋達と戦ってきたのだから。光輝のパンチなんて、不良達のパンチ以下だと、光輝に攻勢をかけた。

いくら試合や練習で強かろうと、実戦で戦った八幡の敵ではなかった。

光輝を倒した八幡は、怯える綾音を抱き締めた。この頃からだ、八幡が綾音を意識し始めの。光輝は、駆けつけた警察に連行された。

その後、天之河光輝（中3で15歳）はいろんな罪で警察に逮捕されるはずだった。天之河の親や協力者は、息子の罪を揉み消そうとした。天之河の父親は、市議会議員の重鎮で、経済界にもパイプがあり、雪柳家に被害届を取り下げろと言って来た。

逆に八幡を暴行罪で訴えるところまで来た。

八幡も綾音も困り果ててた時に、総武高校の制服を着たお姉さんに話しかけられた。

2人は、その総武高校の制服を着たお姉さんに洗いざらい話したのだ。するとお姉さんが

【私が、君達2人を救ってあげる】

【え？】

【お姉さん、俺達を救うって…どうやって？】

【お姉さんに任せなさい】

その後、天之河光輝は、逮捕される。父親の様々な疑惑が明るみに出た。

そして天之河家の築いてきたものが、一気に崩れ去ることになった。

第1章―第8話―雪ノ下雪乃と。

――

天之河光輝が実名で報道されることは無かった。未成年であるため、少年Aと報道された。だが、地元では実名報道が無くて噂話で広がっていった。

疑惑だらけの天之河父も逮捕される。天之河親子が逮捕されて、いもずる式にもみ消した犯罪が出てきたのである。

光輝は、綾音以外にも多数の女の子に手を出していたようだ。

天之河父は、所属政党から除名され、市議会で辞職勧告決議案が全会一致で採択され、議員を辞職する道しかなかった。雪ノ下議員と高梨議員（七海父）が共闘し天之河議員を追い詰めた。

逮捕された光輝は、取り調べでもおかしなことばかりを話すため、弁護士から精神鑑定を受けるように依頼される。

精神鑑定で精神に異常があると判断され、千葉の少年刑務所から、京都の医療少年院に移送される。

しかし、後に天之河は八幡達の前に現れる。八幡を殺すために。京都がポイントか。

天之河夫妻は離婚し、光輝の母と妹は、母親の実家（宮城県仙台市）に帰って行った。母親は、被害者遺族に慰謝料を払う事を申し出た。被害者遺族は、妻と光輝の妹からは、慰謝料は取らないと。そう決めていた。被害者遺族の弁護士団は団長は葉山父だった。

悪いのは、天之河父と光輝であると。彼らから慰謝料をもらうとした。被害者遺族は、あの妻と光輝の妹は、同じく被害者だと。

天之河父は、亭主関白で妻に暴力を奮っていたようだ。息子の光輝は、母親ではなく父親に味方していたようだ。

全てが終わった後、お姉さんに八幡と綾音はお礼を言った。

【お姉さん、ありがとうございます】

【良いよ、お礼なんて】

【お姉さん、貴女は俺達の命の恩人です。本当にありがとうございます】

した」

八幡と綾音は、頭を深く下げた。2人共にお姉さんに感謝しているのだ。

「まだ俺達、お姉さんにお礼出来るほどの立場にありません。いつか、将来、必ずお姉さんにお礼をいたします。必ず立派になつて必ず」

「ふふつ、キミ、言うね。お姉さん、生意気なこと言うヤツは嫌いだぞ」
「生意気で構いません。受けた恩は、必ず返すのが礼儀だと、母さんから教わりましたから」

「受けた恩は必ず返すか…ふふつ、いつかお姉さんが困つた時、2人に頼もうかな」

「はい！必ず受けた恩は返します！」

八幡と綾音は、同時にそう言った。するとお姉さんが

「ふふつ、本当に妬げちやうぐらい羨ましいなく流石、恋人同士つてことかな」

「こ、恋人同士じゃないですよ！」

「え、ええ、私達、幼なじみつてだけですよ」

「八幡君、綾音さんをほつといたら、他の男に取られるぞ！」

「なっ!？」

「綾音さん、八幡君みたいな男の子は他にいないよ。ここまで尽くしてくれる男の子は見たことないかな。八幡君がフリーだったら、お姉さんが取っちゃうぞ？」

「さ、させませんよ」

「なんてね、綾音さん、冗談よ。だつてお姉さんが入る隙なんて無いもの。おつと時間が来たわね。それじゃお姉さんは、帰るけど、2人共、お幸せに〜」

そう言つて去つていくお姉さんに八幡は最後に

「お姉さん、お名前は？」

「そう言えば、お姉さん名乗つて無かつたなく名前は、ユキノシタハルノ、ユキノシタハルノよ」

「ユキノシタハルノ」

八幡は、机でアゴを強打した。どうやら思い出しの途中で眠つてい

たようだ。しかしアゴをさすりながら雪乃を見ると、蔑んだ目で八幡を見ている。

「比企谷君、人が話してる時に寝るなんて、最低ね」

「わ、悪い」

「謝ってすんだら警察は入らないわ」

八幡は、過去の夢を見るなんて久しぶりだから、ちよつとは驚いたが何であの夢を見たのだろうと考えた。

八幡はあのお姉さんはどうしてるのだろうと考えた。

自分達が高校2年生になってるから、おそらく大学生かなと思っ
た。

お姉さんの名前は、彼女が言ったとおりになら

【ユキノシタハルノ】

【ユキノシタ、雪ノ下?】

【まさかな】

八幡は、心の中で呟きながら、目の前の雪乃を見る。あんな優しいハルノさんが、こんな冷血女の一族ではないと思っただけ。ただ苗字が一緒なだけだと考えた。

「何? 貴方に見つめられると、とても気持ち悪いのだけど? やめてもらえる?」

綾音とも違うし、ハルノとも違うとため息を吐く。

「私の事が好きなの? ちよつとごめんなさい、貴方とは付き合えないわ」

雪乃は別段意外そうな顔もせず、平素と変わらない冷たい表情で言う。

雪乃が綾音の容姿と似ているから、余計に腹が立つ。もし雪乃が綾音に似てなければ、腹は立たないだろう。

「雪ノ下、お前は異常だ。俺が何故、お前に告白しなきゃならないんだ?」

「違うのかしら? 貴方からは、私に対する欲望のオーラが見えるから」
「んなわけがあるか!」

「そうかしら?」

八幡と雪乃はしばらく押し問答を繰り返したが、2人共に落ち着きを取り戻し

「一応聞くけど、雪ノ下、お前友達いるのか?」

「そうね、まずどこからどこまでか友達なのか定義してもらって良いかしら?」

「友達の定義?そんなのは、苦楽を共に過ごし乗り越えた友達…本気でモノを言える友とか…」

「ふーん、貴方こそ友達はいるのかしら?」

「いるわ!最高の友がな」

八幡の脳裏に雅史、緑子、七海、陽介、完二の顔が浮かんだ。苦楽を共に乗り越えた友。そして最高の妻の綾音の顔が脳裏に浮かぶ。

「妄想や幻想のお友達かしら?だとしたら気持ち悪いわよ!」

「お前は、どうしてもぼっちにしたいようだな?」

「そうね、貴方みたいな人に、友達がいる方がおかししいし。」

「お前と一緒にするな」

八幡は雪乃にそう言った。すると雪乃がまた語りだした。

八幡に対して人に好かれたことが無いだろうと言ってきた。

「はあ?何で俺が人に好かれた事が無い?バカを言うなよ?中学時代は、モテモテだったぞ?」

八幡のこの発言は、雪乃の表情が一瞬、フリーズしそして笑いだした。

「クスクス…面白い冗談を言うわね、比企谷君」

「…お前、信じてないだろ?」

「信じられるはず無いでしょ。もしそれが本当だとしたら、奉仕部に連れて来られるはずがないでしょ?」

雪乃は、八幡に親友や女子に気に入られてるならば、この奉仕部に来ることはないと言ってきた。

八幡は、本気を出す事が出来ない。本気を出そうとしても、綾音を失って心に大きな穴が空いて、喪失感がずっと彼を支配しているのだ。

目の前の雪乃に、大切な人を喪った悲しみがわからないだろうと、言つてやりたい気持ちになつたが、八幡はやめた。言つても仕方がない。

一方の雪乃は、八幡の事を気にする事もなく自身の自慢話ばかりを続けた。

自分は、可愛かつたから、色んな男子に告白された。

それが原因で女子の敵を作りまくつた。

それでいじめられるようになった。

八幡は、当たり前前だなど思つた。何故なら綾音とは真逆の立ち位置なのだから。

雪乃が女子達に嫌われてるのに対し綾音は女子にも人気があつた。

綾音も男子にも人気があつたし告白もされていた。でも全部断つていた。

八幡は、雪乃の育つて環境を聞いて、自分達がいかに恵まれた環境にいたのを痛感する。だからと言つて、罵詈雑言を言つていいわけがないのだから。

雪乃も綾音達と出会つていたのなら、こんなものにならなかつたのかもしれない。

八幡自身も綾音もお節介な人間だから、必ず…

雪乃は自慢話が終わると、窓の外を見てたが、八幡の方を向く。

「でも、それも仕方がないと思うわ。人はみな完璧ではないわ。弱くて、心が醜くて、すぐに嫉妬し蹴落とそうする。不思議なことに優れた人間ほど生きづらいのよ、この世界は。そんなのおかしいじゃない。だから変えるのよ、人ごと、この世界を」

「……考えが斜め上に行き過ぎだろ！」

「そうかしら？」

八幡はふと綾音が言つていた事を思い出した。

【私は、恵まれてると思うんだ】

【恵まれてる？どうしてそう思うんだ？】

【私、ほら小学生の頃、美少女とか男子達に人気があつたでしょ？】

【あつたな】

「それで女子にいじめられてたでしょ？私が泣いていた時、八幡と雅史が怒ったでしょ」

「…そんなこともあったな」

「八幡のあの言葉、今でも覚えてる。綾音が美少女だからって、僻むなよ。悔しかつたら、お前達も美少女と呼ばれるように努力しろよ。あ、努力だけでは、なれないか。綾音は、内面も美少女だからな、って」

「は、恥ずかしいな。ガキの頃のセリフは」

「…私は、私みたいにいじめられてる人達を救いたい。八幡が私を救ってくれたように、だから間違ったこの世界を変えるために…そんな職業に就きたいかな」

「凄いな…綾音は。俺なんか将来のことなんてまだ」

綾音も世界を変えたいと言っていた。弱者を守るために…。

「俺は、どうしたいのか？平塚先生の言うとおりに灰色生活を続けるのか。それとも、綾音の意思を…志を継ぐべきなのか…。まだわからない…俺が何がしたいのか…」

八幡が悩んでいるときに、綾音の声が聞こえる。

「八幡、悩んで良いんだよ。焦る必要はないのだから。ゆっくり歩んで行けば必ず…」

「綾音…」

八幡が突然声を発したので、雪乃はビツクリしている。

「何？私がしゃべってるの？」

「いや、なんでもない」

「まあ、貴方にわかってもらう必要はないけれど」

「お前の考え方を賛同するわけじゃない。ただ…」

「だから、貴方に賛同されなくても構わないのだけど」

「お、おい！」

八幡は、ほんの少し前に出た。雪乃のあのセリフで進めたのは、癪だか。

綾音の意思を継ぐかどうかは、歩みを進めたから決めることにしたのだった。

第1章―第9話―もう1人の幼なじみ。

――

下校時刻のチャイムがなり、雪乃は読んでいた本を鞆にしまうと、八幡の方を見て

「それじゃあ、比企谷君」

それだけ言うと、教室から出ていく。八幡はため息を吐きながら、夕陽を見ながら

「はあく無視された初日よりもマシになったか」

八幡も帰る身支度をしてから、教室から出た。

相変わらず、特別棟の方は静まり返っている。

「さつさと帰るとするか」

自転車に乗ってそそくさに帰る。

自宅まで帰って来た八幡は、綾音の家の方を見る。するとそこには綾音の妹の綾香がいた。彼女は洗濯物を取り込んでる最中だった。実はこれまでも見かけた時は、彼女に声を掛けたが、無視されていた。彼女も綾音を喪って、八幡の事を嫌ってるのではないかとも思っていた。

彼女の名前は、雪柳綾香、綾音の1つ下の妹。小さい頃は、綾音と一緒に遊んでいたが、高学年になると、八幡の妹の小町と遊ぶ事が多くなった。それでも綾香は、姉である綾音が大好きで、八幡の事もお兄ちゃんと言って慕っていた。

綾音が倒れた後も八幡が来れない時は、必ず看病に来ていた。八幡と付き合うと知った時も心から喜んだ。

だけど、綾香の心の中で何かが生まれたのも同時だった。

そして綾音を喪って悲しむ八幡の姿を見て、自分が何とかしなくてはと思った。

自分が八幡を支えるんだと。

中学3年になってからは、八幡とほとんど会話せずに、勉強やスポーツに勤しんだ。自分にカツを入れるため、あえて八幡を無視して

いたのだ。

そして八幡がいる総武高校へと。八幡には内緒で。

八幡は、上から下へ綾香を見る。彼女は、今年で高校1年生である。綾香の容姿は、黒髪でセミロングで、身体も随分と成長している。当然胸だつて成長していて、もしかすると綾音よりも大きくなっている。八幡は、戸惑いながらも

「綾香、久しぶりだな、元気にしてたか？綾音の葬式以来、あまり見なかったからな。それにそれから綾香に無視されてたし」

「八幡お兄ちゃん、お久しぶりです。それと今までごめんなさい」

綾香は、八幡に対して深々と頭を下げた。

「綾香：そうか、もう嫌われたかと思った」

「ううん、八幡お兄ちゃんを嫌ったりしないよ。私、総武高校に入ったよ」

「そうか。今さらだけど、おめでとうな」

「ありがとう」

「でも、お前つて海浜総合高校に行つたんじゃ？」

「違うよ、私は八幡お兄ちゃんを追つて…」

小さな声でそんなことを言った。

「うん？なんだ、綾香？」

「な、なんでもない」

綾香は顔を赤くして、家の方へ入っていく。そんな彼女を見ていて

「綾香、元気になって良かった」

そう言つてから自分の家に入ったのだった。

八幡は、寝る前にチャットを確認する。すると雅史からのチャットだった。

「八幡、話があるんだが、今良いかな？」

「別に構わないが？」

「八幡、綾香ちゃんと話したんだな？」

「うん？何で知つてんだ？」

「まあ、綾香ちゃんから色々相談受けていたからな。八幡が綾香

ちゃんの事を嫌ってるかもって」

【嫌ってるわけない。むしろ俺が綾香から無視されてたし…】

【それには、色々と原因があるのだが、綾香ちゃん、まあ、ちゃんとお前と話せて良かった、俺も安心したよ】

【まさか、総武高校に来てるとは思わなかったけど。綾音が行きたかった海浜に行くとはばかりに】

【八幡…彼女は……。おっとこれ以上は綾香ちゃんに失礼か。緑子や七海、綾香ちゃんが可哀想だな】

【綾香はともかく、緑子や七海の気持ちは…わかってる……。だけどその思いには答えられない…俺は綾音しか…】

【八幡…今でも、綾音が好きで愛してるのはわかっている。でも…もう先に進んでも良いと思う。綾音だつて…】

【わかってる！わかってるけど…】

【八幡、怖がるな、側には俺や緑子、七海、陽介、完二や小町ちゃん、綾香ちゃん、他の人達がちゃんといっている】

【雅史、…ありがとう。励ましてくれて…】

【ああ、当たり前だろ親友なんだから】

八幡は、雅史に励まされた。雪乃のあのセリフと雅史の言葉に少し心が動かされたのだ。

雅史とのチャットを終えて、八幡は綾音の写真を見る。

その写真は、綾音だけが写っているものである。もちろん写真を撮ったのは、八幡である。綾音が優しい表情で写っているのだ。

「綾音、俺は……」

八幡は、とある歌を歌い出した。

今は、悲しい時、苦しい時に歌っているのだ。己を奮い立たせている。以前は、不安な綾音のために歌っていたのだ。ギターも陽介に習って覚えて、人に聴かせられるまで上手くなった。

全て綾音のために頑張つて来た八幡。

だから今度は、何のために頑張つていくのかわからない八幡。

今の八幡は、暗闇の中に1人にいるようなものだ。

綾音という一番星が消えて光を失い、大きな穴が空いた八幡の心。

そんな歌声を聴いて、小町や綾香は涙を流した。

そんな悲しみの時間も過ぎていく。

運命も少しづつ動いていく。それが幸せなのか、不幸に動いていくのかは、誰にもわからない。

それは、運命のサイコロさえもわからない。

第1章―第10話―由比ヶ浜結衣来訪。

――

綾香と話してから、毎回毎回と朝の登校時に家に突撃してくるようになった。何故なら八幡と一緒に学校に行くためだ。

母さんは、いいじゃないの、と言い

父さんは、雪柳さんから頼まれてるから、良いだろと言った。

小町にいたっては

【綾香がお兄ちゃんのお嫁さんになってくれたら嬉しいな〜】
と言ったのだ。

【そう簡単にはいかないだろ。綾香は綾音の妹だ。小町と同じでもう1人の妹みたいなものだ。恋愛感情なんか抱けるわけがない】

八幡はそう思ってるが、当の本人の綾香はそう思っではない。すでに恋愛感情が生まれてるのだから。

八幡もそんな綾香に気づいてないわけではない。だから時間をずらして登校したりしているが、綾香に見つかる感じである。

疲れて教室の自分の机に座っていたら、吹寄学級委員長が

「3限目、4限目の家庭科の時間は、調理実習ですので、家庭科室へ移動してください。ちゃんと班分けやっているとと思うから、班ごとに分かれ下さい」

吹寄から家庭科の事を聞くまで忘れていた八幡。

「な、なんだと…」

家庭科の調理実習の班決め、総武高校に来てから一番苦痛の時間になっている。ボッチは、人数が足りない班に強制加入させられる。

人数の足りない班がたとえ女子の班だとしても強制加入。しかし女子からは相手にされないの、苦痛の時間が伸びただけ。

家庭科の調理実習の時間が来るたびに、苦痛の時間という処刑がやって来る。

2年になってからの最初の調理実習だが、ボッチなのは、1年時と変わるわけではない。

中学時代は、雅史や陽介達と組んですぐに班は決まっていたが。またサボろうと考えた八幡だが、吹寄が近付いてきて

「サボったら許さないわよ?」

「な、なあ!」

「家庭科の鶴見先生から言われたの。比企谷君を逃がさないでつて」

「あの：1人で調理実習をしろと?」

「1人で調理実習をするわけないでしょ。班ごとに分かれてやるのよ」

「だから、どこの班にも所属していない俺は、1人で調理実習ってことになるだろ?」

八幡は、別に1人で調理実習をやっても良いのだ。確かに苦痛で退屈な時間だったかもしれない。それは何もしないで、時間の経過を過ぎるのを待っていたただけだ。

だが1人で調理実習をした方が他人を気にせずに来るのである。

八幡は料理は得意な方だ。母親と一緒に作っていたからである。

綾音と一緒に料理を作りたかったから、覚えたという方が本音かもしれない。

吹寄が困った表情をして

「貴方、男子のグループに誰も入れてもらえなかったの?」

「ああ、誰もボッチは入れてくれないのさ」

「あのね、胸を張って言う言葉じゃ無いでしょ?」

「別にいいだろ、そんななこと…」

吹寄は頭を抱えながらため息を吐く。そして

「仕方がない、比企谷君、貴方は私の班に入りなさい」

そして家庭科の時間になり、調理実習が始まろうとしていた。家庭科室は、ちゃんと綺麗に片付けられて、掃除がちゃんと行き届いている。

そんな八幡は、吹寄班にいた。彼は思う。他の女子の班の連中が笑っているのが聞こえる。

1つめは、葉山隼人の取り巻きの女子達。

2つめは、相模南のグループ。

3つめは、相原聖司のグループ（葉山達とは違うリア充グループ）その他諸々のグループがある。

吹寄班だって、吹寄以外の女子達だって何か言いたそうにしている。

「吹寄さん、やはり俺は場違いじゃ？」

「場違いだろうが、貴方をサボらせるわけには、いかないの」

「はあく、女子の視線が痛いですが？」

「我慢なさい」

そして八幡は、吹寄班で片隅で調理実習に加わる。作る物はカレーだった。

調理実習の定番料理であろう。ただ吹寄班の女子は、吹寄以外は料理をしたことがないのかって酷かった。だから八幡が、つつい手を貸してしまう。

料理が上手くなりたいたいと緑子や七海や小町、綾香にせがまれて、教えていたこともある。

吹寄班の女子も最初こそ、嫌々聞いてたり、従ってたが、しまいに吹寄班の女子達が自ら聞くようになった。

そして出来上がりは、吹寄班が一番良くできたのだった。

影の主役は、八幡だと吹寄班の女子はそう思うのだった。吹寄からは感謝されたのだった。

午後、現国の授業は油断ならない。平塚先生が八幡ばかりを当ててくる。

だが八幡が正解ばかり答えるから、平塚先生として面白くないのだ。

だから現国の授業が終わり、八幡に「放課後は、例の場所に行くように」

平塚先生は、八幡を睨んでいた。一瞬怯んだが

「わかりました、サボりませんし帰りませんよ」

八幡も綾香の事があるから、早くは帰れないと思っている。朝同様

に綾香が追っかけ来るからである。ただ帰るだけなら良いのだが、くつついてくるから変な噂になりかねないからだ。だから時間をずらして、綾香を先に帰らせているのだ。

嫌々ながらも奉仕部のある特別棟の教室までやって来た。

「こんにちは、雪ノ下」

「比企谷君、こんにちは」

相変わらずの雪乃は、本を読んでいる。八幡は、綾音からもらった本を読むことにした。

今までは、ページを進めることも怖かった。だが今は、少しずつだか読めるようになったのだ。

だが、奉仕部はずだが、文芸部のようになっている。

八幡は、人助けはどうなったのかとも思ったが、気にせずに本を読むことにした。

そんな中、奉仕部の教室の扉がノックされた。

「どうぞ、開いてますよ」

雪乃は、ページを繰る手を止めて几帳面に葉を挟み込むと、扉に向かって声をかけた。からりと戸が引かれて、ちよこつとだけ隙間が開いた。そこから身を滑り込ませようにして彼女は入ってきた。まるで誰かに見られるのを嫌うのかのような動きだ。

肩までのピンク髪に緩くウェーブを当てて、歩きたびにそれが揺れる。探るようにして動く視線は落ち着かず、八幡と目が合うと、ひつと小さく悲鳴を上げた。

「な、なんでヒツキーがここにいんのよ!?!」

「はあ?ここにいるもなにも、俺はこの部員だからな。つか、ヒツキーって俺の事か?」

八幡は、ヒツキーと言った女子生徒を見る。彼女は今時の女子高生って感じの方に値する。八幡が良く知ってる緑子達とは違うタイプの方だ。

スカートの丈が標準より短く、ボタンが3つほど開けられてれたブラウス、覗いた胸元に光るネックレス、ハートのチャイと学校の校則を無視した格好である。

八幡は記憶の中から、葉山グループにいるピンクの髪の子生徒だろうと思う。

つまりリア充のグループだと八幡は認識した。

「由比ヶ浜だっけ？ま、とにかく座って」

八幡は、さっと椅子を出して彼女に座るように促す。

「あ、ありがと」

結衣は戸惑いながらも、勧められるままに椅子にちょこんと座る。正面に座っている雪乃が目線彼女に合わせた。

「由比ヶ浜結衣さんね」

「ヒツキーはともかく、あ、あたしの事を知ってるんだ」

「お前、良く違うクラスの人間の名前がわかるんだな」

「そんなことはないわ、貴方の名前は、私とトップ争いしてなかったなら知らないままだったし」

「そうかよ」

つまり雪乃は、八幡が自分のライバルでなければ、興味もない存在だと言っているようなものだ。八幡も平塚先生に連れて来られなければ、雪乃に興味もなかっただろう。

「アハハ、なんか楽しそうな部活だね」

結衣がなんかキラキラした表情で雪乃を見ている。

「はあく別に愉快的な部活ではないのだけど。むしろその勘違いがひどく不愉快だわ」

雪乃も冷ややかな視線を送っている。それを受けて結衣は、アワアワ慌てながら両手をブンブンと振る。

「あ、いや何て言うか凄く自然だなんて思っただけだからっ！ほら、そのー、ヒツキーもクラスにいるときと全然違うし。ちゃんと喋るし…あ、今日の調理実習の時、委員長達と喋ってた…」

「まあ、吹寄達のグループに当てられたからな。喋らないわけにはいかないだろ」

「そう言えば、由比ヶ浜さんもF組だったわね」

「お前、いつも葉山達のグループにいるよな」

「まあ、そうだけど、ヒツキーに文句言われる筋合いはないし」

「そうだな。同じクラスで話すこともないしな」

「そんなんだから、ヒツキー、クラスに友達いないんじゃないの？なんか気持ち悪いし」

「気持ち悪くてごめんな。顔面はこんなだから悪かったな。お前らのグループからすれば、俺みたいなのは汚物なんだろうがな」

八幡は、言いたいことを言ってしまった。結衣はちよつと落ち込んだ感じで

「あ、あたしはそこまで言っていないし」

「お前達みたいな女子は、表で味方のふりして、影で笑って貶しているだろ？」

「な、なんでそんなこと…そんなことやってないし」

「嘘はつかない方がいい。さつきも俺の悪口を言ったじゃないか？なあビツチ？」

「嘘なんか言っていないし。あれは悪口じゃないし…それにビツチ何よ！あたしはそれに処…」

八幡は、はあくため息を吐いた。結衣が処女だろうが、非処女だろうか興味はないのだから。そこに雪乃も爆弾発言をする。

「別に恥ずかしいことではないでしょう。この歳でヴァージンなんて、おかしくないわよね、童谷君？」

「雪ノ下、人の名前を下ネタに被せるな！」

「あ、ごめんなさい、貴方から童貞臭がするもの」

「雪ノ下！下ネタはやめろ」

「ヒツキーがあたしにビツチって言ったし、人の事をビツチとか呼んで、ヒツキーってマジで気持ち悪いし童貞だし」

「気持ち悪いとか、ヒツキーとか、童貞とか、関係ないだろ…このビツチが！」

「あたしは、ど、童貞とか言っていないし！ビツチとか言うなし、マジでウザイしマジでキモい。本当に死ねば？」

八幡は、スタスタと歩き窓を開ける。そして身を乗り出す。

「お前、俺がここから飛び降りたらどうする？責任取れるのか？自分が言った言葉の責任が取れるのかと聞いてるんだ」

結衣は青ざめた表情で下を向いている。八幡はすぐに身を直してから元の位置に戻る。雪乃はため息を吐きながら

「……なんでこんな話になったのかしら……。由比ヶ浜さん、貴女何か依頼があるから来たのではないのかしら？」

「あ、そうだった。あのさ、平塚先生から聞いたんだけど、ここって、生徒のお願いを叶えてくれるんだよね？」

「まさか、由比ヶ浜の依頼が一番手になるとはな」

「由比ヶ浜さん、ちよつと違うかしら。あくまでも奉仕部は手助けをするだけ。願いが叶うかどうかは貴女次第」

雪乃の言葉は、冷たく突き放した感じだった。

「どう違うの？」

怪訝そうな表情で結衣が問う。八幡も雪乃の言ったことを理解した。あくまでもヒントを与えるだけ、あとは本人次第。八幡がやって来た事とは違う。どっちかと言えば、餌を与え、方法も教える方になるだろう。

「飢えた人に魚を与えるか、魚の取り方を教えるかの違いよ。ボランティアとは本来そうした方法論を与えるものであつて結果のみを与えるものではないわ。自立を促す、というのが一番近いのかもしれない」

雪乃の言ったことは、学校教育のお手本みたいなものである。

簡単に言つてしまえば、迷える子羊のための部活、迷つてる生徒がいれば、ヒントを与えて自立を助ける部活つてことになる。

「な、なんかすごいねっ！」

結衣はほえーと目から鱗で納得しましたという表情をしている。何の科学的根拠も無いが、結衣みたいな巨乳な女の子は、詐欺まがいなことに騙されるんじゃないかと、八幡は思つてしまった。

かたや塗り壁みたいな胸の持ち主で、知名明晰にして伶俐極まる雪乃。相変わらず冷たい微笑みを浮かべていた。

第1章―第11話―乙女心とクツキー。

――

結衣は、勇気を振り絞って言ってきた。

「あ、あのあの、あのね、クツキーを…」

言いかけて八幡の顔をちらつと見る。八幡もああそうかと思いい、廊下へ向かう。

「比企谷君、空気が読めるのね」

「あのな、俺はこの空気が読めないほどバカじゃねえよ。何か飲み物でも買ってくるわ」

「ごめんなさいね、私は【野菜生活100%いちごヨーグルトミックス】でいいわ」

「わかった」

八幡はそう言って廊下へ出る。廊下を歩きながら

「特別棟の1階には自動販売機はあつたはず」

廊下を歩きながら何かを思い出していた。

「そう言えば、綾音のために病院の自販機に何回往復したかね…」

八幡が好きな飲み物、MAXコーヒー、だがもう飲んでいない。綾音が亡くなつてから、一度も飲んでいない。いや飲んでいないのではない。飲めなくなったのだ。

MAXコーヒーは、八幡と綾音が共に好きだったのだ。

だが今の八幡は、飲めない。飲むと胸が苦しくなり、目から涙がこぼれてしまう。

だから、甘くないブラックコーヒーか、緑茶を飲んでいる。

1階の購買部の横にある自販機の前まで来た。この自販機には、おかしな紙カップに詰まった謎のジュースがある。

イチゴおでん

ヤシのみサイダー

学○都○の自販機のヤツかと、八幡はツツコミたくなる。

しばらく、自販機に売られている商品を品定めをしていると、突然視界が手の感触共に暗くなり

「だーれだ？」

「はあく、あのな綾香だろ？」

「正解、なんでわかったの？」

「この学校で俺に目隠ししてくる女子なんて、お前しかいないって」

八幡にそんなことをする女子なんか、総武高校内では、皆無だろう。

何故綾香がこんな人気の無い特別棟にいるのか疑問であった。

「何で、こんな人気の無い特別棟に？」

「八幡お兄ちゃんの姿が見えたから、来ただけです。それに元気の無さそうに見えたから」

「まあ、俺に元気の無い事が分かる女はお前だけかも」

「……それは嬉しいですけど、それでも……」

「それでも、何だ？」

「八幡お兄ちゃん、大丈夫？まだお姉ちゃんの事を？」

「まあな。綾音の事をどうしても思い出してしまう……。好きだったMAXコーヒーも飲めない……」

「MAXコーヒー、お姉ちゃんも好きだったな……。八幡お兄ちゃんと
の思い出の味って言ってましたし」

「そうか、アハハ、アイツらしいな。思い出の味か……」

「八幡お兄ちゃん、私はその悲しみを埋めてあげるよ」

「馬鹿！そんな生意気言うヤツに育てたつもりはないぞ」

「私は……」

八幡は、自販機に500円を入れて、野菜生活、カフェオレを購入し、自分の分のお茶、そして、綾香の分のカフェオレを購入して、渡す。

「ほらっ、綾香の好きなカフェオレだ」

「あ、ありがとう、八幡お兄ちゃん！って緑茶はお兄ちゃんの方で後の2本、野菜生活とカフェオレって誰の？」

「1つは、部活の部員に分、後は依頼者の分だな」

「女？」

「す、鋭いな。まあ、そうだな」

「危険……」

「はあ？危険？馬鹿、そんなことはない。アイツらは、俺の事を嫌っているからな」

「じい〜」

八幡は、綾香のそれを見ると、綾音に似ている。やはり姉妹だと思っただ。ジト目をする反応とか似ているなど。すると綾香を探している人物が現れる。

「雪柳さん、こんなところにいた！」

「ごめんなさい、ちよつと喉が渴いて」

「そうだったんだ。あ、比企谷君じゃないの。雪柳さんと話したんだ」
八幡と綾香に話しかけたのは、吹寄だった。

「まあな」

「2人ってどんな関係？」

「こいび…！」

綾香が何を言わんとしてたから、口を塞いで

「ただの幼なじみだよ」

「ふーん〜」

「疑われてる？」

「別に？」

「はちまんおにいちゃん、手をどけて！」

「すまん」

八幡は綾香の口から手を放す。一方、吹寄は綾香を水泳部に勧誘しているらしい。ただ綾香は、1年生の中で人気があるようで、どの部活も狙ってるらしい。

それと、1年生の間では、綾香は男女共に人気がある。だからこそその競争なんだろう。

「それではいきましよう、雪柳さん」

「じゃあ、また後でね、八幡お兄ちゃん！」

そう言うのと吹寄と綾香は、特別棟から出ていった。

「綾香のヤツ、昔は地味目だったけど、1年のアイドル的存在か…」

八幡は、立派に育ったと感心しつつ、1年のアイドル的存在には、不安感もある。つまりは、変な男がつかないか不安でもあるが、綾香自

身は八幡にしか興味がなからどうなることか。

「さてと、俺も戻るとするか」

八幡は、奉仕部のある教室へ戻る。

奉仕部の扉を開けると、雪乃が

「遅い、寄り道谷君は、どこを寄り道してたのかしら？」

雪乃はそう言っつて野菜生活をひったくつて、ストローを刺すと飲み始める。八幡は貶す事はできても、礼の1つも言えないのかと思つた。

残つた飲み物でカフェオレと緑茶で、カフェオレが誰のものなのか、結衣は気づいて

「はい」

結衣はそう言っつてポシエットみたいな小銭入れから1000円玉を取り出す。

「別に入らない。俺の奢りだ」

八幡は、結衣の1000円玉を受け取らず、カフェオレを両手に乗せる。

「あ、ありがとう」

結衣は小さな声でお礼を言っつて、嬉しそうにカフェオレを両手で持つてはにかんでいた。

八幡は本題に入るために雪乃に話しかける。

「ところで、雪ノ下、話は終わったのか？」

「ええ、貴方がいないおかけで、スムーズに話が進んだわ。ありがとう」

「それは良かったな。で、何をするんだ？」

「家庭科室へ行くわ」

「あ、そう家庭科室にね」

「もちろん、比企谷君も来るのよ」

「家庭科室？」

八幡は、本日2回目の家庭科室に行かされることに。

本日は家庭科室の確率が高いのか。

何故だろうか？

ただ誰も答えてくれるわけではない。

八幡は、家庭科室で何をするのか聞いてみる。

「家庭科室で何をするんだ？調理実習でもやるのか？」

「調理実習じゃないわ。クッキーを焼くのよ」

「クッキーか…。まあ妥当かな」

「由比ヶ浜さんは、手作りクッキーを食べてほしい人がいるのそうよ。でも、自信がないから手伝って欲しい、というのが彼女のお願いよ」「なるほどな」

「う……、そ、それはその……、あんまり知られたくないし、こういうこととしての知られたら多分馬鹿にされるし、こういうマジっぽい雰囲気、友達とは合わない、から」

由比ヶ浜は、視線を泳がしながら答えた。ふっ、と小さくため息をついてしまった。

八幡は、結衣がどこの男子にクッキーをプレゼントしたい。だが内輪の連中には知られたくはない。

「つまり、お前は、その相手の為にクッキーを作りたいんだな？」

「うん」

「まあ、男子つてもんは女子から貰うものは、嬉しいものさ」

「本当に？」

「ああ…」

結衣は、パツと笑顔になった。

「俺達は、由比ヶ浜を手伝うって形でいいんだよな？」

「ええ、そうよ。私達はあくまでも手助けをするだけだから」

「ああ」

八幡、雪乃、結衣の3人はクッキーを作るため家庭科室へ向かった。

第1章―第12話―由比ヶ浜の腕前は？

―奉仕部↓家庭科室

八幡達は、家庭科室へ到着するとすぐに室内へ入る。

八幡自身は苦笑いするしかなかった。

「本日2回目の家庭科室だ…」

八幡はそう言って家庭科室へ入る。雪乃と結衣も続けて入り、クツキーを作るために準備を開始する。

そしていつしかバニラエッセンスの甘い匂いに包まれた家庭科室。

だが結衣は、まともに料理をしたことがないことが露呈する。

まず、エプロンすら着れなかった。

雪乃は、八幡を舌打ちをした。おそらく八幡も料理をしたこともないと思っていたのだろう。綺麗にエプロンを着こなしていたわけだから、文句を言えなかった。

「まだ着れないの？あの男はさつきと着てるのに貴女は着れないのかしら？もう、私が結んであげるから、こっちに来なさい」

呆れた表情で雪乃は、ちよいちよいと結衣を手招きする。

「い、いいのかな？」

「いいから、やってもらえ」

「早くー！」

雪乃と結衣のそんな姿を見て、昔の事を思い出す。

八幡と綾音が、お菓子作りをしていた時に小町と綾香が自分達も手伝いたいと言い出したことがあった。

小町と綾香が、今の結衣のようなことをしていた。

小町のエプロンを綾音が、綾香のエプロンを八幡がちやんと着せていた。

そんな風景が八幡の脳裏に浮かんでいた。

「なんか、雪ノ下さん、お姉ちゃんみたいだね」

「私の妹がこんなに出来が悪いわけがないけれどね」

ため息を吐いて慥然とした表情の雪乃だが、案外と結衣の例えは間

違っではないだろう。これはこれでありだと八幡は思った。
すると結衣が八幡に話しかける。

「あ、あのさ、ヒツキー…」

「なんだ？」

「か、家庭的な女の子ってどう思う？」

「家庭的な女の子か。まあ男子にとっては、惹かれる魅力の1つだろうな」

「それは、ヒツキーも？」

「まあな。まあ俺の場合は、女の子だけにはさせないがな」

「…そっか……。だから委員長達は、ヒツキーの見方が変わったんだ…」

結衣は、後半の言葉は小さく聞こえないように言った。

「…」

「よし…やるぞー！」

結衣は気合いを入れて、ブラウスの袖をまくり、卵を割りって、かき混ぜる。小麦粉を入れ、さらに砂糖、バター、バニラエッセンスなどの材料を入れる。

だが八幡は、結衣のやって事は、はっきり言えば、食材達が泣いている。それだけ酷いのだ。気合いを入れたが、はっきり空回りしている。

まず溶き卵、殻が入っている。

続いて小麦粉、ダマになっている。

更にバター、固体のまま。

砂糖は塩にすり替わっている。

バニラエッセンスは、とぼとぼと入っている。

牛乳は、タプタプしている。

雪乃は、顔を真っ青にして額を押さえている。八幡も真っ青状態だ。

八幡の心の中で、小町、綾香以下の料理スキルだと刻まれた。

結衣はそれでも気も止めず、次はインスタントコーヒーを取り出した。

八幡と雪乃は、言葉を失いなんと声を掛ければ良いのかわからなかった。

結衣がやってるのは、すでにクッキーを作ってるのか、何かの科学実験をしているのかわからなくなっている。

八幡は、ここまで料理センスがない女子は初めて見た。今まで女子にも料理を教えてきたが、結衣ほどの独創的は女子は初めて見たのだ。

出来上がったクッキー？は、真つ黒なホットケーキみたいなのが あった。匂いからしてヤバイものなのは、八幡も雪乃も本能的に感じ取った。

「な、なんで？」

結衣が愕然とした表情で、物体Xを見つめている。

「はあく理解できないわ。どうやったらあれだけミスを重ねる事が出来るのかしら」

「……ああ、同じく同感だぜ」

八幡と雪乃は、結衣に聞こえないように言った。結衣は物体Xを皿に盛り付ける。

「み、見た目はアレだけど、食べてみないとわからないよね！」

「そうね、ちよつど味見してくれる人もいることだし」

「それって、俺の事か？」

「貴方、以外いないでしょ？」

八幡は、目の前の物体Xを見る。小町や綾香、緑子、七海の失敗したヤツを思い出す。

その時も小町や綾香、緑子、七海の失敗した物体を悲しませないように食べた事がある。

その後、腹を下して大変だった。

母親から言われた事を思い出す。

【女の子に恥をかかすな】

「……くっ……さて食べるとするか……」

震える手で、物体Xが乗ってる皿を引き寄せる。結衣を見ると、期待と不安が混じってる表情をしている。

「比企谷君、貴方だけに試食をお願いしたわけで、処理をお願いしたわけではないもの。それに、彼女のお願いを受けたのは私よ？責任くらいとるわ」

「いや、何だかんだで協力したわけだしな」

「何が問題なのか把握しなければ、正しい対処は出来ないのだし、知るためには、危険を冒すのも致し方がないのよ」

八幡と雪乃が見る物体Xは、鉄鉱石と言ってもおかしくないぐらい、黒々している。そして2人は、物体Xの一部をつまみ上げる。

「む、無理はしなくていいぞ、雪ノ下？」

「比企谷君こそ、無理をしなくても構わないわよ？」

「…別に無理をしてないぞ。雪ノ下こそ涙目じゃないか？」

そんな押し問答をしばらく続けて、八幡と雪乃は、物体Xを口に放り込んだ。

八幡と雪乃は、頭の上に星マークが出ることになった。

第1章―第13話―八幡対結衣。①

――

八幡と雪乃は、何とか食べることが出来た。

最後は、己の本能との戦いだっただろう。

いつそ、漫画のように倒れたいと思っただほどのものだったのだ。

「……………ケホケホ…苦いよ、不味いよ」

涙を流しながらボリボリと音を立てながら齧る結衣。雪乃がすぐさまティーカップを渡した。

「なるべく噛まずに流し込んでしまった方がいいわ。舌には触れないように気をつけて。劇薬みたいなものだから」

八幡は、もう少しオブラートに包めよ、と思いつつ、実際はそんなものだと思っていた。

こぼこぼとケトルからお湯を注ぎ、雪乃が紅茶を淹れてくれた。

それぞれのノルマは達成して、紅茶で口直しをやる。ようやくひと心地ついてため息が漏れた。

何か一戦交えてきたような疲れが、ずんつと出てきた。何とも言えない気持ちだけが、八幡と雪乃を支配している。その弛緩した空気を引き締めるように雪乃が口を開いた。

「さて、じゃあどうすればより良くなるか考えましょう」

「練習あるのみだと思うが？」

「まあ、それが一番だろうけれど」

「何でもそうだろう？練習して、練習して上手くなるものだろう？努力して上手くなるしか解決策は思い付かん」

「そうね、それしかないでしょうね。由比ヶ浜さん、貴女、さつき才能が無いって言ったわね？」

「え、あ、うん」

「その認識を改めなさい。最低限度の努力もしない人間には才能がある人を羨む資格は無いわ。成功できない人間は、成功者が積み上げた努力を想像できないから成功しないのよ」

由比ヶ浜は言葉に詰まる。ここまで直接的にぶつかれた経験は無

いだろう。その顔には戸惑いと恐怖がある。それをごまかすために結衣のへらつ笑顔を作った。

「で、でもさ、こういうの最近みんなやんないって言うし。やっぱりこういうの合ってないんだよ、きつと」

へへつと結衣のはにかみ笑いが消えそうになったとき、カタツとカップが置かれる音がした。

それはとても物静かで小さな音でしかないのに、透き通った氷のよな音色だった。有無を言わず音の主へと視線が引き寄せる。そこには冴え冴えとした伶俐な雰囲気放つ、雪乃。

「……その周囲に合わせようとするのやめてもらえるかしら？ ひどく不愉快だわ。自分の不器用さ、無様さ、愚かさの遠因を他人に求めるなんて恥ずかしくないの？」

雪乃は、鋭い口調で結衣に言った。ハッキリと嫌悪感が出ていて、八幡も軽くびびった。

「……………」

結衣は、雪乃の迫力に押されて黙り込む。俯いて表情は上手く読み取れないが、スカート下の裾をぎゅゅと握りしめる手が彼女の心を表していた。

結衣は、コミュニケーション能力が高い方だろう。クラスのカースト最上位のグループ、葉山グループに所属してる。

しかし逆を言ってしまうえば、人に迎合することがうまい。つまり孤独というリスクをさけるってことだろう。自己を貫く勇気はないと言うことにもなる。

一方で雪乃は、それこそ我が道を行くタイプ。その突破力は証明されている。1人であることを誇りに思っている。

雪乃と結衣は、全く違うタイプの女の子なのだから。

パワーバランスで言えば、雪乃が強い。当たり前だが。結衣の目が潤っていた。

「か、……………」

「かつこいいい……………」

「え……？」

「は？」

八幡と雪乃は、一瞬頭が点になった。一体何を言ってるのかわからなかった。

「建前とか全然言わないんだ……。何て言うのかかっこいい……」

「な、何を言ってるのかしら……？ 話聞いてた？ 私、これでも結構きついことを言っただつもりだったのだけけれど」

「ううん！ そんなことない。あ、いや確かに言葉は酷かったし、ぶつちやけ引いたけど……でも、本音で感じがするの。ヒツキーと話しているときも、酷いことばかり言い合ってるけど、ちゃんと話している。あたし、人に合わせてばっかだったから、こういうの初めてで……」

「なるほどな」

八幡は、そう言った。過去にそんなヤツがいたなと頭に浮かんだ。結衣は真剣な表情で

「ごめん、次はちゃんとやる」

謝ってから真つ直ぐに雪乃を見つめ返す。予想外の事態に雪乃は声を失った。

八幡もそんな経験がある。1年後輩の完二だ。彼とは色々あったが、その結果完二に好かれるようになった。

【八幡センパイから、頂いた恩は、一生忘れません】

【八幡センパイの背中はおれが守るっす】

そんな事を考えていたら、雪乃と結衣はもう一度作ることを決めた。

雪乃が手本を見せるために、クツキーを作り出す。

八幡は、雪乃がちゃんと教科書通りにやることがわかる。

彼も母親や教科書を見ながらクツキーの作り方を覚えてた口だ。

その後クツキーは出来上り、3人で雪乃の作ったクツキーを食べる。

結衣が作ったクツキーと比べるのもおかしいが、クツキーとはこういうものであると感じだろう。

結衣が、雪乃のように作れるのか、不安のようだが、彼女はマニュアルとおりにやれば、上手くできると言った。

そうして結衣は、リベンジをすることに。

だが、クツキーの出来は、先程よりかはマシにはなっている。

だが、雪乃も結衣も肩を落としている。

雪乃の教えは、できる側の人間の解釈。出来ない人間の事をわかってやるわけではない。

「なんで、上手くないのかな？言われたとおりにやっているのに」
結衣は最初から美味しいクツキーを作ろうとしている。そこが間違いないのだ。

やったこともない人間が、いきなり美味しいクツキーを作れるほど甘くはない。

「由比ヶ浜、お前はバカか？」

「バ、バカ!?ヒツキーに言われたくないし!」

「まあ、聞けよ。なんでお前は、いきなり美味しいクツキーを作ろうと思ってる?」

「不味いクツキーよりも、美味しいクツキーの方が貰う方が良いでしょう?」

八幡は、はあくため息を吐く。

「お前は、男心がわかってない」

「し、仕方がないでしょ!付き合ったことなんてないんだから!そ、そりゃ友達には、つ、付き合ってる子とか結構いるけど……そう友達に合わせていたらこうなってたし」

「別に由比ヶ浜さんの下半身事情はどうでもいいのだけど、結局、比企谷君は何が言いたいの?」

「今度は俺がやる。雪ノ下と由比ヶ浜に俺流のクツキーを食べさせてやる。10分時間をくれ」

「何ですって!!!。上等じゃない。楽しみにしてるわ!」

結衣は、自分のクツキーを否定された感じになったんだろう。彼女は、雪乃を連れて出ていく。

「さてと…始めるとするか…。八幡キッチンを…」

第1章―第14話―八幡対結衣。② 勝負の行方。

―家庭科室。

八幡は、結衣が作ったクッキーが載った皿を持って来る。

「由比ヶ浜、いきなり上手く作る必要はないんだ。男子つてのは、自分のために作ってくれる女子の手料理つてのは嬉しいんだよ。それが美味いだろうが、不味いだろうがな」

時間が無い八幡は、急いでクッキー作りを開始する。

10分が経過し雪乃と結衣が入ってくる。

「10分しかないから、急いで作ったから、不恰好なヤツもあるかもな」

雪乃と結衣は、とある皿にクッキーが載っている。八幡の作ったクッキーからは、美味しそうな匂いが漂ってくる。結衣が驚いて

「これって、本当にヒッキーが作ったの？」

「当たり前だ！他に誰かいたか？」

「比企谷君、嘘はいけないわ」

「…あのな、俺の他に誰がいるんだ？」

雪乃と結衣は、互いに見合ってから、クッキーをつまみ、口に入れる。

2人は言葉を失う。旨くて声が出ないのだ。どうことみたいな表情で食べている。

そして、皿をあつたクッキーを全て平らげてしまう。

「どうだ？旨かっただろ？」

「ええ、何故貴方にこんなクッキーを作れるのかわからないわね」

「素直に旨かったとしか言えない」

八幡は、クッキー10個のうち5個が結衣の作ったクッキーの改良版である。後の5個は八幡が作ったものである。その事を結衣に伝える。すると彼女は、間拔けた声を上げる。目も点になり口を大きく開いている。

「えっ…えっ？」

「結衣は、目をぱちくりさせながら、八幡と雪乃を交互に見つめる。何が起こったのかさっぱり把握できていないようだ。

「比企谷君、よくわからないのだけど。今の茶番になんの意味があったのかしら？」

雪乃が怪訝そうな表情で八幡を見ている。

「要するに愛情ってヤツだよ。愛情は、料理する上に必要なだけだな。それにお前達は、ハードルを上げすぎた。男つてのは馬鹿だからな。女の子が、自分のために手作りクッキーを作ってくれた、それだけでも、舞い上がるものだ。美味しい方が良いと思うが、不器用にカツコ悪いクッキーの方が男はときめくな」

「悪い方が良いの？」

「そうだな」

八幡は、中学時代のクラスメイト達のことを思い出していた。

誰と誰が付き合うとか、別れたとかの話をしていて、それを思い出していた。

八幡が綾音と付き合うことになった時、クラスの男子達が、祝杯を上げてくれた。

あの頃は、今のようにクラスの陰キャボツチではなく、クラスの中で心でもあった。

そう今の葉山のポジションであった。

八幡は、昔の記憶から導き出した答えは…。

「つまり、男心を揺らせれば良い。貴方のために一生懸命に作りましたって感があった方が好感度は上がる」

「ヒツキーも揺れるの？」

「……………俺は……………まあ、俺も頑張りには認めるし…揺れるのかもな……………」

綾音も最初は下手な料理を作ってきた。八幡は、悶絶しながらも食べ続けていた。でも八幡のアドバイスでめきめきと料理の腕を上げていったのだ。結衣は何やらニヤニヤしながら帰り支度をしている。

「うん？もう帰るのか？」

八幡の問いに結衣は、鞆を持って教室のドアの前に立つ。そんな彼

女に雪乃は、

「由比ヶ浜さん、依頼はどうするの?」

「あれは、もういいや!今度は自分のやり方でやってみる。ありがとうね、雪ノ下さん」

雪乃にそう言った結衣は笑っていた。

「また明日ね、ばいばい」

手を振って今度こそ帰って行った。

「……本当に良かったのかしら?」

雪乃がドアの方を見つめたまま呟きを漏らす。

「私は自分を高められるなら限界まで挑戦するべきだと思うの。それが最終的には、由比ヶ浜さんのためになるから」

「まあ、その通りだな」

八幡も綾音にふさわしい男になるため、努力をやって来た。己の限界を目指してやって来たのだ。

全ては綾音のためにと、一生懸命努力をしたのだから。

だが、努力が必ずしも報われる訳ではない。

報われるのは、ほんの一部の人間だけ。

八幡は、自分の努力が報われたのは、綾音のおかげだと思っている。

「世の中って不条理だよな……」

「そうね」

かくして、由比ヶ浜結衣の依頼の件は終わりを迎えた。

第1章―第15話―綾香の居候。

――

「比企谷君、戸締まりよろしく」

「ああ」

雪乃はそう言うのと、奉仕部の教室から出ていった。

「雪ノ下は、相変わらずだな…」

それでも少しずつ変わってきてると思う八幡。

ほんの少し。

ほんのちよつと。

それでも歩み出したことには変わらない。

八幡と雪乃の奉仕部の始まりでもあった。

――

八幡は、自転車で自宅に帰って来ると、玄関には、何故か制服にエプロンをつけた綾香がいた。それも昭和の奥さんが夫を出迎えた格好で

「八幡お兄ちゃん、お帰りなさい」

「ち、ちよ…俺…無意識に雪柳家に？」

八幡は、家の表札を改めて確かめる。

しかし

表札には【比企谷】と明記されている。

「俺の家だ…じゃなくてなんで綾香がうちにいるんだ？」

すると小町が玄関の方に首を出して

「お兄ちゃん、綾香、しばらく小町達と住むことになったよ」

「はあ？それはどういう意味だ？」

「綾香のお父さんのお仕事の関係で、関西に行かなくてはならなくなったから、お母さんもついていくって」

「おじさんとおばさんが、関西に…。綾香も行くんじゃない？」

「八幡、リビングまで来てね、みんな話すから」

「八幡お兄ちゃん、全てを話すから、まずは手を洗ってね」

八幡の母親と綾香は、リビングの方へ行く。1人取り残された八幡は

「…一体どういうこと?」

八幡は言われたとおりに手を洗ってからリビングに行く。するとそこには、父親、母親、小町、綾香の4人が既に座っている。

「オレから話す。八幡、綾香さんを家で預かることになった。雪柳さん夫妻は、仕事の関係で関西に転勤となったんだ。綾香さんは、ここから離れたくないと言ったみたいだ。雪柳さん達も綾香さんの気持ちも考えて、家で預かってもらえないかと頼まれたんだ」

「それで引き受けたと?」

「そうだ」

「綾香は両親と行きたくなかったのか?」

「もちろん行きたい気持ちもあったよ。でも八幡お兄ちゃん、小町から離れたくなかった…お姉ちゃんの思い出が沢山あるここから離れたくなかった」

綾香はポロポロと涙を流し始めた。そんな姿を見て、八幡も小町も涙が自然と出てくる。

「綾香…小町も離れたくないよ」

「小町…」

八幡は、小町と綾香の頭を撫でた。昔から2人が泣き出したりすると、八幡がよく頭を撫でていたのだ。

学校で奉仕部で、雪乃や結衣によって疲れ果てた身体だが、綾香や小町の事を考えれば、疲れなんか関係なかった。2人とも嬉しそうにしている。

「八幡、綾香さんを頼むぞ」

「八幡、綾香さんを頼むわね。私達にとっても娘みたいなものだからね」

八幡は、綾香の事を任せられた。綾音と綾香の両親は、八幡の事を実の息子のように接してくれていた。綾音が亡くなった後も普通に接してくれていたのだ。だから綾香の事を任せられたのだ。

「おじさんとおばさんが言うのなら、仕方がない」

「ありがとう、八幡お兄ちゃん！」

綾香は八幡にくつついた。

「全く、お前は昔から変わらないなく」

「変わったよ、ちゃんと成長したから」

「綾香、お兄ちゃんは、小町だつて大好きだよ！一人で取らないで！」

そんな光景を見て、両親は微笑ましく笑ってるだけだ。八幡も嫌ではないから、なすがままになっていた。

そして、母親と綾香が作った夜ご飯を食べた後、自室に戻った八幡は、雅史、緑子、七海のグループチャットでその事を話していた。

「そうか、おじさんとおばさんが、関西にな。俺のお袋も事前に知ってたみたいだ」

「ああ、俺の両親もそんな感じだった。本当は、春前に転勤の事はわかってたみたいだが、綾香が総武高校に受験するって、言い張ったみたい」

「綾香ちゃん、八幡の力になりたいって言ってたからな」

「それは、小町からも両親に聞いた。って緑子も七海も会話に入ってくれないな？」

「……綾香ちゃん、八幡の家に居候するってことだよな？」

「どうなのかな、八幡？」

八幡は、緑子と七海からの嫉妬染みた言葉に引きながらも

「あ、綾香は妹、小町と一緒に妹的存在だ！」

「綾音の妹であつて、八幡の妹じゃないでしょ？八幡は妹と思つていても、綾香ちゃんはそう思つてないから！私だつて！」

「緑子、お前：そんな積極的だったか？」

「緑子も私も綾音の手前、自分の気持ちを押しさえていたの。でも：綾香ちゃんが、その均衡を破った：だから」

「七海？雅史：なんとかしてくれ！」

「俺にはどうすることも。2人とも八幡を好きだからね。綾香ちゃんに取られたくないんだよ」

「だから、俺は誰とも付き合わないって！」

「はあく八幡、今年こそ歩み出してくれると思つてるぞ！」

八幡は雅史が今年を強調したのは、今年綾音が亡くなって2年、3回忌の年である。

だから12月の3回忌までに、彼女を作れという雅史なりの思いやりだ。八幡がいつまでも綾音の事を引きずっていれば、彼女も安らかに眠れないって言われたこともある。

【明日にも、総武高校前で待つてようかな?】

【緑子さん、やめて!総武高校が混乱しちゃうから】

【私も総武高校に突撃しちゃうかしら】

【七海さんもやめて!同じく総武高校が大変なことになるから!】

緑子は、海浜の水泳部のエース、七海は、テニス部のエース。千葉県内でも注目されている。もちろん雅史もサッカー部のエース。そんな2人が総武高校に来たら、大変なことになる。

八幡はこのあと、緑子と七海を宥めてグループチャットは終わった。小町から、お風呂に入つてよし、と号令が出たから

「さてと、風呂に入つて寝るか」

今日は色々あつて、風呂から上がってきたらそのまま寝落ちしそうと八幡は思った。

八幡は、着替え等を持って風呂場へ。

八幡は着替えたのを洗濯機で洗うために、自分のヤツを色物に分けていると、小町と綾香の洗濯物が別にされていて、なんか目に入るようなところに置かれている。

「はあく、小町の下着とか見てもなんにも思わんし、綾香のヤツも何も思わんだろ!」

綾香の下着が何故か、隠しもせず堂々と一番上にある。青とピンクの下着である。

「綾香のヤツ…恥じらいを持ってほしい…」

そして八幡は風呂に入った。そして湯船に浸かりながら

「ふう…緑子も七海もそして綾香も…綾音の手前…身を引いていた…でもその綾音はいない…だから…でも俺はどうする?彼女達の思いを受け入れる事ができるのか?」

わからない、彼女達の思いを受け入れる事が本当にできるのか、彼

にはわからない。

八幡の心から綾音に対する気持ちが消える訳がない。無くなるわけがない。

綾音の気持ちを抱いたまま、他の女の子を好きになって思うことが、できるのか。

その人を愛せるのか、わからない。

「…綾音、俺はどうしたらいい？」

その問いに誰も答えてくれるものはいない。

ただ静寂の時間だけが過ぎていく。

だが八幡の周りは、止まっていた時間が動き出す。

綾香が八幡の自宅に居候というイベントが、静寂だった時を動かすことに。

第1章―第16話―葉山グループ。

――

綾香が比企谷家に居候し始めて1週間が過ぎた。

最初は戸惑う事もあったが、徐々に慣れていった。それだけではなく、結衣がクツキーの件の翌日に、彼女は八幡にお礼を持ってきた。

学校でも陽介と完二が、休み時間に八幡のクラス、2―F組に来るようになった。

昼御飯も今までなら1人ボツチ飯を食べてたが、今では陽介と完二の3人で食べている。もちろん八幡のお気に入り場所。それは特別棟の非常階段の中間にある踊り場みたいな場所である。

最初、2―F組のクラスメイトは、八幡に親しく話す陽介、完二を不思議そうに見ていた。クラスメイトは、八幡とほとんど話したことがない。

陽介と完二は、葉山と戸部とは話している。サッカー部の部員同士つてのはあるが。葉山や戸部が陽介達に話を八幡の話をしているようには見えなかった。

ただ、葉山がたまに八幡を見ていることがあるが、八幡は気にも止めていないし、興味が無いからである。

実際に中学1年生の時、八幡や雅史達の総武中学と葉山が通っていた総武東と夏の大会で、決勝で戦っている。

スコアは、【総武中】 3―1 【総武東中】

得点↓八幡1、雅史2、

彼らは、1年生でレギュラーを張っていて、八幡も雅史も将来の総武のWエースと言われていた実力だったのだ。葉山も1年生として、途中から出場して八幡達と対戦している。

その時、葉山は八幡や雅史とはレベルが違うと痛感した。

八幡を中心に総武中学のサッカーはなっている。

いつしか総武中の指し手の八幡、雅史は、総武中の虎と呼ばれるようになる。

全国大会では、3位であった。

それから葉山は、打倒総武中学、打倒八幡、雅史を掲げてきた。だが中2年の夏の大会には、総武中学に八幡の名前は無かった。風の噂で、八幡はサッカー部を辞めたと流れてきた。

総武中学の人間の噂話も葉山は聞いた。八幡がサッカー部を辞めた理由もそれで聞いたのだ。

「八幡は、病魔に犯された大事な幼なじみの為に、大好きなサッカーを辞めて、看病に専任している」と。

葉山は真相を確かめたくて、一度総武中学の付近に行った事がある。

そして彼女を献身して支えてる八幡を見たのだ。

そして葉山は考えた。自分も大切な人間が病魔に犯されて、大事なサッカーが辞めれるのか？と。

あんな風に献身的に支えられるのか。

あんな風に笑顔でいられるのか。

葉山はわからなかった。

葉山は、八幡の事を頭の片隅に置いて、サッカーに情熱を注いだ。

中学時代には、結局雅史達には勝てなかった。

葉山は、総武高校に入学し、高校でもサッカー部に入った。1年からレギュラーを取り、次期エースの名乗りを上げた。

高1年の夏は、雅史率いる海浜と対戦する前に総武高校は敗北。千葉県代表として、海浜が出場している。

高校2年になると、同じクラスに比企谷八幡がいたのだ。だが中学時代の八幡の雰囲気ではなかったから、別人だと思ったが、本人だった。転入してきた花村陽介、1年の異完二が入った。

葉山は、本気で国立を目指す事を考えている。

「もし、サッカー部に比企谷が入ってくれば…」

葉山は、そんな風に八幡を見ていた。

そんな、雨のが降っている日の4時間目の後、昼休みの時間だったが、昼御飯を食べに例の場所には、行かない。

当たり前だろう、八幡も濡れながら食べる趣味はない。仕方ないの
で教室で食べることに。陽介は、クラスの連中と食べると連絡があつ
たし、完二は昼休み中に何かを完成させなければならぬようだ。

久しぶりの1人メシを楽しむことにする八幡。厳密に言えば、聞い
ただから1人メシではないが。

だが後ろの葉山グループがうるさい。前にも説明をしたが、結衣も
このグループ。

「いやー今日は無理そうかな。部活があるから」

「別に1日くらいよくない？今日ね、とある店が安いんだよ。あーし、
チョコとシヨコラのダブルが食べたい」

「それどっちもチョコじゃん」

「ええー。ぜんぜん違うし。超お腹減ったし」

今答えたのが、葉山の相方の三浦優美子。金髪縦ロールに肩まで見
える勢いで、着崩した制服。スカートも標準よりかなり短い。三浦
の顔立ちは綺麗で整っている。

八幡は、葉山と三浦は付き合ってるかと思っていたが、そうでもな
いようだ。三浦は葉山に好意があるようだが、葉山がその気がないよ
うに見える。

「悪いけど、今日はパスな。サッカー部の仲間達も必死に練習して
るんだ」

葉山が仕切り直しにそう言った。三浦はきよとんとしている。す
ると傍らの金髪こと、戸部が髪を掻き上げ、声高く宣言をした。

「俺ら、今年はマジで国立狙ってるから打倒、海浜って」

国立、八幡にとつても馴染みの単語である。彼も一度は、仲間と共
に目指した事もある。もちろん雅史達は、国立に立ってる。

八幡がサッカーの事を思い出していたら、三浦と結衣が何か言っ
ていた。

「それじゃあ、わかんないから。言いたい事があるならはつきり言
なさいよ。あーしら、友達じゃん。そういうさー、隠し事？とかよく
なくない？」

結衣はしゅんと俯いてしまう。三浦が言ってることは、字面こそ美

しいが、その実、仲間意識の強要でしかない。友達だから、仲間だから、だから何でも言ってもいいし、何もしてもいい。三浦はそう言っている。

そして、その言葉の裏には

【それが出来ないなら仲間ではない。したがって敵である】

という意図が隠然と込められている。こんなのは胸糞悪いだけ。

八幡は、昔、綾音がそうやってイジメられたことを思い出す。

異端審問、魔女裁判みたいなのは許せない、拳を静かに握る。結衣は、ただ謝るだけ。だか三浦は攻勢をかけてくる。

「だーかーらー、ごめんじゃなくて。何か言いたい事があるんでしょ？」

八幡は机をバシツと叩くと結衣の前に立った。

「はあく何なの、アンタ？」

「さつきから聞いているけど、由比ヶ浜が怯えているの分かんないのか！」

「ヒツキー……」

「アンタに関係ないしょ？あーしらの問題に口を出さないでくれない？」

「俺は、昔からお前みたいなの、クラスのボスザルみたいなのは、嫌いなんだよ！」

「ぼ、ボスザル……陰キヤのぼつちの分際で、あーしらに口を出すなし！」

八幡と三浦が言い合っていると葉山が中に入ってきた。

「優美子！それぐらいにしろ。お前の発言が酷いだろ！」

「隼人、でも……」

「比企谷、済まない」

「謝るなら、由比ヶ浜に謝りな」

八幡はそう言っただけで自分の机に座る。葉山は三浦を連れて、どこかに出る。葉山の取り巻きは、葉山と三浦について行った。結衣は八幡のところへ来る。

「ヒツキー……あ、あの……ありがとう」

「別にお前の為にやったわけじゃない。ああ言うのが嫌いなだけだ。

それにお前、どこかに行くのじゃないのか？」

「あ、うん、ゆきのんと待ち合わせてるんだった。それじゃあね、ヒツキー」

結衣は、そう言うと教室から出ていった。

クラスにやつと平穩が戻り、八幡も綾香が作った弁当を食べることにした。

第1章―第17話―綾香の決意と奉仕部に次なる依頼主。

―
―
あの後、結衣と三浦は和解した。葉山や周りの人間達が説得したようだ。

三浦は、結衣に本当の事を言って欲しかったようだ。こうして、昼休みは過ぎていった。

その日の奉仕部には、結衣の姿があつた。彼女は暇だからここにいると言った。

そしてこの日の奉仕部は、なぜだが千葉県クイズをして過ごした。

そして翌日、八幡は、綾香と昼休みに話していた。もちろん彼の好きな非常階段のとある場所で。

「で、話とはなんだ？家で言えば良いじゃないか？」

「家じゃ嫌。誰にも聞かれたくないから」

「聞かれたくないって……。話してみろ」

「あのね、八幡お兄ちゃん、私、2年の田中先輩に告白されたの」

「告白!?ふーん、まあ、お前人気があるからな」

八幡は別に驚きはない。いつかはそんな日が来るとは思っていたが、ついに来たかくらいな感じである。兄として妹を取られたくはない気持ちもあるが。2年の田中先輩こと、田中智春は、野球部の次期エースであり、クラスは2―D組である。女子にも人気がある。

「返事はどうした？」

「すぐに断ったの」

「即答…かよ…可哀想なヤツだな」

「だって、私は八幡お兄ちゃんを思ってるの…昔からずっと」

「綾香…」

綾香は苦笑いをしながら八幡を見ている。そんな表情を見ている

と、彼は胸が痛い。

「八幡お兄ちゃんの心の中には、綾音お姉ちゃんがいる。だけど私はもう綾音お姉ちゃんには負けない。八幡お兄ちゃんを絶対綾音お姉ちゃんから、私に振り向かせて見せるから！」

綾香はそう言い張った。姉綾音に対する宣戦布告である。綾香の表情には、昔の弱々しかった時の感じはない。1人の女性の表情である。

「綾香…お前…」

「綾音お姉ちゃんだけじゃない、緑子さん、七海さんにも負けない！」

そう言つて、綾香は八幡に背を向ける。そんな時、強風が吹き彼女のスカートが巻き上げられる。綾香は慌ててスカートを押さええる。そして

「八幡お兄ちゃん、見た？」

「う、うん…」

「今日の履いてるパンツは、安物だから見られなくなかったなく今度は八幡お兄ちゃんの好みのヤツを…」

「綾香、そう言うことはいいいから」

「楽しみにね〜」

綾香はそう言つと、非常階段から校舎の中に入って行つた。

「全く生意気な…。安物の白ね…」

しばらく海の方から吹く潮風を浴びていた。

午後の授業は、綾香の言葉が頭の中を駆け巡っていた。八幡は頭を振り、邪念を払い、授業に集中することした。

そして放課後になり、一息をついてから奉仕部のある教室に向かうと雪乃と結衣が、教室の扉の前で立ち尽くしている。

八幡は何をしているのかと思いつながらちよつと様子を見ながら近づく。すると教室の扉を少し開けて中を覗いている。

「雪ノ下、由比ヶ浜、何してんの？」

「ひゃうっ！」

可愛らしい悲鳴と同時にびくびくびくうっ！と2人の身体が跳ね

る。

「比企谷君……。びつくりした」

「悪い、びつくりさせるつもりじゃなかったんだがな……と言うか何で、部室に入らないんだ？」

「部室に不審人物がいんの！」

「不審人物……!？」

学校に不審人物がいることは、あり得ないことではない。八幡は、握り拳を作りながら、中に入ろうとする。

「俺が中の様子を見てくる。雪ノ下と由比ヶ浜はここで待ってろ」

八幡は、扉を慎重に開けてから中に入る。中に入った途端、吹き抜ける潮風。この海辺に立つ学校特有の風向きで教室内のプリントを撒き散らす。それはちようど手品でマジシャンが使うシルクハットから幾羽もの白い鳩が飛び交う様子に似ていた。その白い世界の中に1人、佇む男がいる。

「クククッ、まさかこんなところで、出会うとは驚きだぞ、総武中の伝説の色男、比企谷八幡よ！」

葉山隼人に次いで、再び過去の八幡を知る人物が現れたのだった。

第1章―第18話―材木座義輝。

―奉仕部

「お、お前は、材木座義輝！」

「私の事を覚えてくれたようだな。流石、色男だけの事はあるな」

八幡は、無言で材木座に近付き、窓際まで連れていく。そして

「材木座、あいつらの前で…いや総武高校内で色男とかで俺を呼ぶな！」

「何故だ？色男は貶し単語では無いぞ？」

「いいか、材木座、総武高校では、陰キヤのぼっち、キモイヤツで名が通っているんだ。だから色男とかで呼ぶなよ」

材木座は、腕を組みながら少し考える。

「貴様が陰キヤのぼっち？キモイヤツ？あんな彼女がいたのにな？笑わせるな、貴様がそれだったら、我はどうなる？道端の虫ケラか？生ゴミか？」

「別にそこまで、言っていないだろ。それと綾音の事は…言うなよ、絶対！」

八幡と材木座が押し問答をしていると、雪乃と結衣が変な物を見るような感じで、見てきた。

「随分と仲が良いのね？」

「まあ、体育ととかで一緒にコンビを組んでるけどな」

雪乃と結衣は、冷ややかな目で見てくる。

「八幡、貴様の一番星は輝いているか？今も輝いているか？」

「材木座、おまつ！」

「我だけではない。お主を思っている者達は、みんな心を痛めている。どうすれば、お前の心の闇を照らせるのか、とな」

雪乃と結衣の表情が、蔑んだ目となっている。そんな目で八幡と材木座を見ている。

「材木座、ちよつと黙ってる。雪ノ下、由比ヶ浜、こいつは材木座義輝、中学が同じ出身だ」

雪乃は、材木座を上から下まで見て、八幡を見てため息を吐いて

「類は友を呼ぶってやつね」

材木座は、八幡に小さな声で

「八幡よ、あの彼女…綾音嬢に似てるが、性格が違ってキツイな…」

「まあな。それは言ってるが……」

「貴方達、何か失礼な事を考えてるのかしら？」

「はあく考えてるわけねーだろ」

「何でもいいのだけど、そのお友達、貴方に用があるんじゃないの？」

「…で、用件は何なんだ？」

「時に八幡よ。奉仕部とはここで良いのか？」

「ええ、ここが奉仕部よ」

八幡の変わりに雪乃が話した。材木座は、一瞬雪乃の方を見てから、再び八幡を見てくる。

「そ、そうであったか。平塚教諭に助言頂いたとおりならば八幡、お主は私の願いを叶える義務があるわけだな？ふっ、八幡…お主は中学の時から変わっておらぬ」

不気味に笑う、材木座。彼がこういうのにもわけがある。中学時代に八幡と綾音によって救われたことがあるのだ。

材木座は、アニメや漫画が好きで、中学時代イジメられたことがある。それを八幡と綾音でイジメていた連中を片付けたことがあり、それからの付き合い。助けてもらった時、まだ2人は付き合い合っていなかった。

八幡と綾音は、それから材木座の書いた小説を読んでいた。まあ最初は、読んでいても楽しいものではなかった。だが書いてるうちに徐々に上手くはなっていた。

だが綾音が入院するようになってから、一度も材木座は書いた小説を持って来ることはなかった。

雅史や陽介の話だと、綾音と一緒にいる八幡の邪魔はしたくないと言ったそうだ。

気を使わなくてもいいと八幡は思ったし綾音も材木座の小説は読みたいって言っていたからだ。

「あ、剣豪將軍ってペンネームで小説を書いているのか？」

「モチのロンだ。剣豪將軍はお気に入りだからな」

剣豪將軍：これは、綾音から付けてもらった名前だ。材木座がペンネームで悩んでいた時に室町幕府の13代將軍足利義輝と材木座義輝をかけて生み出した名前だ。

材木座に合わせて、中二病的に付けたと後で八幡に話している。

「なるほど、まだ中二病って事か…」

「ちゅーに病？」

雪乃が首を傾げながら八幡を見る。

「知らないんだな、雪ノ下」

「中二病って病気なの？」

「病気じゃないんだが、男子のほとんどがそれを発病する。邪眼とか、俺の父親は魔族とかな…」

八幡は、アニメや漫画の主人公みたいな格好をして、中二病の説明を行う。雪乃は途中でわかったようだが、結衣はわからないみたいな表情をしている。八幡は昔に言っていた八幡菩薩の諸々を言っしまい、雪乃と結衣に気持ち悪いモノを見るような目で見られる。

「コホン、で、材木座、奉仕部にお前が来たって事は、いつぞやの小説でも読んで欲しいとかか？」

「我が友、八幡よ。よく分かってくれた。ああ、あんな事があつて小説を書くのを辞めようかとも思つたのだが、彼女の思いは書いて欲しいと言われたんでな、書いたと言うわけだ！」

材木座は、八幡の両手に原稿用紙を渡される。感慨深げに呟く材木座を完全に無視して結衣は八幡の手の中にある原稿用紙に視線をやる。

「これ、何？」

「小説の原稿だな…タイトルは幼なじみね…。中二病だらけの小説よ、ラブコメに変えたのか？」

「御明察痛み入る。如何にもそれはライトノベルの…ラブコメの原稿だ。とある新人賞に応募しようかと思つているが、生憎友達がいないので感想が聞けぬ、読んでくれ」

「…まあ、俺は良いが、雪ノ下や由比ヶ浜にも見せるのか？」

「ああ、女性の意見も聞きたいので、お願いする」

雪乃は、材木座の首根つこを掴む。

「人が話すときは、相手の目を見て話なさい。それが礼儀でしょ？」

「……そ、それは」

「雪ノ下、許してやれ。こいつは、女子との会話は慣れてない……。しかしこの原稿は……今から読むのはキツイな」

結局、材木座の小説の原稿は、各々が持つて帰って読むことになった。

だが八幡は、読み出して驚く。材木座が書いた小説は、八幡と綾音の物語だったのだ。名前こそ八幡が、一八になって、綾音が綾奈に変えてるだけで、ほぼ、八幡と綾音が生きてきた証が書かれていた。

八幡は、涙を浮かべながら材木座の小説を読んでいた。

「材木座のヤツ……何が幼なじみだよ、人の恋愛をラブコメにしやがって……」

休憩に入った八幡は、自分の部屋の窓を開け、空を眺める。

「……だが……雪ノ下と由比ヶ浜がなんて思うか……。まあ俺が題材ってことには気づかないだろうが……」

再び材木座の小説を読み始めた。そして夜も更けていく。

第1章―第19話―酷評と悲しみ。

――

八幡は、最後まで読んで寝ることにした。

「材木座、お前：俺が言ったことを：こと細かく覚えていやがって…。恥ずかしいじゃねーか！」

材木座がストーカーか盗聴でもしてない限りは分からないような台詞がたくさん出てくるのに驚きだ。

「飛躍したのもあるが、俺が綾音に言ったあんな台詞までを…」

身体中が真っ赤になりながらも読んだ。そして最後の辺り

「何で、俺があの時：卒業式の日の帰りに告白してきた女の子を振った時の台詞まであるんだよ…」

材木座が書いたこのラブコメを雪乃や結衣はどのように受け止めるのだろうか。

八幡は、忘れていた台詞を思い出され、恥ずかしくなりながら眠りにつくのであった。

――

八幡は、結局あまり眠れなかった。材木座の小説のおかげで眠れなかったのだ。

「ふうっ、一気に読みすぎたかな…」

少しずつ読むことも考えたが、雪乃辺りは全部読んで来そうな感じもしたので、全部読んだのだ。

「まあ、材木座の得意な中二病バトルを辞めてまで、綾音の事を書いてくれたのには感謝だな」

そんな感謝の気持ちで学校に向かった八幡であった。

だが今日の授業は眠さとの戦いを繰り広げた八幡は、奉仕部へ向かうとすると結衣に話しかけられる。

「ち、ちよっと待つ、待つ！」

「今日、ヒツキーって眠そうじゃない？」

「まあな、小説を遅くまで読んでたからな。お前も小説を読んでるわ

りには、元気いっぱいだな？」

「え？」

結衣は、目を合わせずに視線を反らす。

つまり小説を読んでいないことが確定してしまった。慌てて読んだ程で話すがバレバレである。

八幡と結衣は、そんな感じの会話をしながら奉仕部へ向かう。

奉仕部の扉を開けると、雪乃がうつらうつらと寝息を立てて寝ていた。

一瞬、ドキツとしてしまう八幡。人の気配に気づいた雪乃は目を覚ます。

「驚いた、貴方の顔を見ると一発で目が覚めるのね」

八幡は、一瞬でもドキツとしたことを後悔した。目の前の女は綾音と違って、冷たい冷酷なヤツだと、改めて思った。

雪乃は、くあつと子猫のような欠伸をすると、両手を上に上げて伸びをする。

雪乃の態度で、八幡は材木座の小説の評価がわかったのだ。

つまらないものだ。

結衣も読んでないのを推測しても、面白くないと分かる。

「雪ノ下は、最後まで読んだのか？」

「ええ、徹夜なんて久しぶりにしたわ。私、ライトノベルのラブコメとか全然読んだことないし、好きになれないわ。作者の妄想が酷いわね」

「あー、あたしも無理無理…」

結衣は、薄っぺらい鞆から、材木座の小説が書いてある原稿用紙を取り出して、嫌そうに見ている。

「…雪ノ下、由比ヶ浜には…この小説が合わなかったって事か？」

「比企谷君は、その内容が良かったのかしら？そんな妄想染みた小説が…」

妄想

雪ノ下や由比ヶ浜からすれば、八幡のような人間が活躍するのは妄想にしかないのかもしれない。

綾音のような女の子は、作者が生み出した存在：

雅史や葉山のようなイケメンが活躍するのが良しされる。

八幡は、綾音との思い出が貶されたようで、怒りが込み上げてくる。そんな時、材木座が扉を開けて入ってくる。

「私の小説をケチつけるのは、いくらでもつけるがいい！だが、モデルの2人を愚弄するのは、我は許さない！」

材木座のオーラに押された雪乃だったが、すぐに

「か、感想を聞きに来たのかしら？」

「そのつもりで参上した。だが：聞くまでもなく答えが出ていたようだな」

「そうね、つまらなかった、読むのも苦痛ですらあったわ。想像を絶するつまらなさ」

「やはり、一八や綾奈みたいな人間はいないと：そういうことか？」

「ええ、そうね。貴方の妄想で書いたものでしょう？ラブコメというより、貴方の妄想を垂れ流して書いたものとしか解釈するしかないわね」

八幡は怒りが込み上げてきているが、材木座が首を振った。

「最期にヒロインが死ぬ必要があったのかしら？ラブコメなら、ハッピーエンドにするべきじゃないかしら？」

綾音には生きてて欲しい。

綾音に生きてて欲しかった。彼女の笑顔をもっと見たかった。

神様、何故綾音の寿命はたったの15年だったのか。

なんで自分ではなく、綾音が死ななければならぬのか：。

頭の中、心の中が怒りよりも否定された悲しみの方が勝つてしまふ。なんか気持ちも悪くなってきた。

「わ、悪い、今日は帰らせてもらおうわ」

「八幡…」

「ヒツキー…？」

「比企谷君…」

八幡は、心のどこかで雪ノ下、由比ヶ浜がアレを否定してくることは、わかっていた。

だが面と向かって、否定されるとダメージがデカイ。わかっているけどダメージをもらってしまった。

八幡は、雨が振りだしていたが、そんな中を自転車でかける。そんな八幡を水泳部で練習する綾香が目撃する。

「八幡お兄ちゃん？…あの表情って…」

綾香は、八幡の表情を見てただ事ではないと思った。だから

「吹寄先輩、すいません、ちよつと体調が悪く…早退しても良いですか？」

「綾香さん…比企谷君ね…」

どうやらさっきの八幡を吹寄も目撃したようだ。

「吹寄先輩…」

「行きなさい、綾香さん。比企谷君を任せたわよ！」

「はい、ありがとうございます、先輩！」

綾香は急いで女子更衣室に駆け込んだ。

夕方の雨が強まる中、綾音の墓がある場所まで無意識に来ていた。目から熱いものが流れている。そんな事も気にせずに雨に濡れることも構わずに、綾音の墓の前に座り込んだ。

言葉は無い。言葉が発しようにも出てこない。

八幡は、ただ雨に打たれるながら綾音の墓を見ていた。そんな時誰かに話しかけられた。

「こんなところに傘もささずにはいちゃ風邪をひくよ」

「……え？」

八幡は、傘を差し出された方を見る。そこには、肩まであるミディアムヘアーは前髪がピンで留められ、つるりとした綺麗なおでこがないつもならきらりとしているが雨で今はそれがない。制服はあくまでも校則通りに着こなしているが、ワンポイントであしらわれた襟章や手首に嵌められたカラフルなヘアゴムが可愛らしさを感じさせる。その女子生徒は、八幡を優しげに細められた瞳で見ている。

八幡はこの女子生徒を知っている。

以前、天之河事件の時にユキノシタハルノと一緒にいたことを思い

出す。

名前は城廻めぐり。今は総武高校生徒会長でもあり、八幡が1年の時からちよくちよくと世話を焼いてくれた数少ない人間である。

「城廻先輩…!?先輩が何でここに？」

「生徒会室から青ざめた表情の貴方を見て、生徒会室を飛び出しちゃた」

「……なにやってるんですか？生徒会長としての……」

めぐりは、八幡をそっと抱き締めた。めぐりも濡れことを気にせず
に。

「八幡君、無理をしないでも良いんだよ。思いつきり泣いてもいいんだよ、わたしが胸を貸すからね？」

「城廻先輩……!!!」

八幡は、そう言われて我慢していたものが、一気に出てきて大声で泣いた。雨が八幡の声を打ち消すかのように降ってきた。

雨が八幡の心を映してるかのものだった。

後に綾香、綾香から連絡を受けた緑子、七海、雅史が駆けつけたのだった。

第1章―第20話―思い出。

綾香達が綾音のお墓の前に到着したときには、八幡はめぐりの胸の中で気を失っていた。

このあと、七海が自分のところの運転手を呼ぼうとした時、陽乃まで駆けつけてきた。

陽乃も八幡が青ざめた表情で自転車に乗っていたのをリムジンの中から見たようだ。

陽乃は、雨で濡れた八幡とめぐりを自分が乗って来たリムジンで送り届ける事を言う。

綾香達は自転車であっているし、八幡の自転車も持って帰らないと言いい、綾音のお墓がある霊園で別れた。

綾香達は、八幡の自転車を持って帰りながら帰宅するのであった。

綾香は、八幡が何故そうなったかを調べたいが、緑子達に止められたので、今日は引き返すことにしたのだ。

陽乃によって運ばれた八幡は、自室のベッドで眠っている。

陽乃は、八幡の両親には、綾音のお墓の前で、落ち込んで座り込んでいたと説明した。八幡の両親は、天乃河事件の時に顔を会わせているので、信じてくれたのだ。小町もそのことを聞いていた。

一方八幡は、夢を見ていた。

真つ暗な暗闇の中で、1人取り残されてた感じである。

「なんだ、ここは……？」

八幡は、キョロキョロして周りを見渡しても真つ暗なだけで何も無い。彼は座り込んで、ため息を吐く。

「こんな夢を見るとはな……。城廻先輩の胸で泣いて……そのまま眠ってたって事か」

雪乃や結衣に否定されてだけで、ここまで落ち込むとはなど、自分でも思ってしまった。

「俺のことは、何を言われようが我慢できる。だが綾音の事を否定し

たことは、どうしても許せなかった」

材木座が、あるとき制止してくれなければ、キレていたかもしれない。

「材木座や城廻先輩には悪いことしたな…」

明日、謝罪をしないといけないと考えた八幡は、雪乃や結衣はどうするかと思った。

「雪ノ下や由比ヶ浜にとっては、俺と綾音の物語は、作者の妄想としか思えないだろうな…正直言えば、俺自身も驚いているんだから。幼なじみやなければ、話すことすら無かつただろうし…」

雪柳綾音、総武中一の美少女と言われるほどの女の子であった。

小学、中学も自分の事を陰キャと思っていた八幡だった。

だから綾音の事を高嶺の花だから、自分は興味がないと思い込んでいた。

だが天之河事件で、綾音を守って、己の気持ちに気がついた。

気がついたが逆に怖くなった事もあった。

綾音が優しいのは、幼なじみのよしみで仲良くしてるだけだと、思い込んだ事もあった。

だが綾音が倒れ入院することになって、彼女に対する思いは、八幡の心の中いっぱいになっていった。

あの文化祭で、八幡は告白することを決めた。例えばフラれることになっても、後悔だけはしたくなかった。

だが八幡よりも先に、綾音が告白してきた。それも歌に乗せて八幡に思いを届けてきた。

八幡は、驚いた。綾音から告白してきたことに。

何故自分に？雅史や他のイケメン達ばかりだと思っていたからだ。八幡の心配は杞憂だったのだ。

綾音は、八幡が助けてくれたあの日から、八幡しか目に入っていなかったのだから。

すると一瞬眩い光に一面が覆われたかと思えたが、すぐに暗くなる。いや正式には、八幡の周りは輝きに満ちていた。そして、そこには綾音の姿があった。

「あ、綾音なのか？俺はまだ綾音の事を思ってるんだな。夢にまで見るとはな」

「八幡、元氣出して。あの2人に馬鹿にされようが、貶されようが、私は気にしないよ。貴方は、かけがえのない時間を私にくれた。それだけでも私は幸せだったから。だから私に気にせずに八幡が幸せになってね。それが私の幸せでもあるから。それに貴方を好きになってる女の子は側にいるんだから、気づいてあげなさいね」

「綾音、俺は…!!」

八幡は、ばあつと目を開けて飛び起きる。

すでに夜になっており、そんなに寝ていたのかと頷く八幡。だが側を見てみると、綾香と小町が寢息を立てて寝ていた。

「小町、綾香…。俺はまた2人に心配させたのか…。いや綾音にも心配かけてしまった…」

八幡は、自分の側にあつたスマホを見る。すると、雅史達だけではなく、陽介、完二や海浜に行った同級生からも心配なメールやチャットが届いていた。それだけじゃなく、陽乃さんや城廻先輩からもチャットが来ていた。

「俺を好きになってる女の子は、側にいるか…。綾音のやつ…」

八幡はそう言つて、小町と綾香の頭を撫でた。

しばらく撫でていた八幡のスマホに着信がなる。相手は材木座だった。

「もしもし、材木座、なんだ？こんな時間に？」

「八右衛門、元氣になったか？綾音嬢のお墓で倒れたって聞いたから心配していたんだぞ」

「倒れたって大げさだな、誰がそんなことを？」

「海浜高校の同級生経由で、我は知ったが？」

「そうか…。あ、あの、その、材木座、悪かったな、あのまま奉仕部の教室を出てよ。その、雪ノ下や由比ヶ浜はあの後どうだった？」

「雪ノ下嬢はいつも通りな感じで、帰って行った。由比ヶ浜嬢は、何か気にしていた感じがしたな…。まあ我にはわからないが…。八幡よ、本当に済まなかった。綾音嬢との物語を貶されてしまって、申し訳ない

と云うか…」

「材木座、気にすんな。それに夢で綾音からも励まされたからな」

【そうか…綾音嬢が…八幡よ、本当に愛されてるんだな…】

「アハハ、当たり前だろ、綾音は世界で一番の俺の妻だからな」

【八幡、全く妬けてくる話だ。で、明日はこれそうなのか？】

「当たり前だろ。陰キヤが欠席したら存在を忘れられる…だろ？」

【陰キヤは、存在を忘れられる。だが八幡、お前は違うだろ？】

「総武高校においては、陰キヤだぞ、俺は」

【陰キヤ、仮面を被った偽りの八幡…我にはそうしか見えないが】

「別にいいだろ、それと、小説のことは気にするなよ、また書いてあいつらに認めさせてやれ！」

【ああ、何度でも挑戦するさ、夢のためにな！】

八幡と材木座は、そう言つて会話を終えた。

「…ありがとな、みんな」

その後、八幡は、小町と綾香を起こして、自分の部屋へ戻させた。2人共、不満げで戻つて行つたが、これ以上入らせるわけにはいかなかった。

「風邪をひかせるわけには、いかないしな」

今日の事は忘れた方がいい、明日は何も無かつたようにした方がいい、と八幡は考え判断した。

第1章―第21話―彼女達の思い。

―比企谷家・綾香の部屋

綾香は、八幡から自分の部屋に戻るようになれられ自室へ戻って来た。

八幡から以前、平塚先生により、奉仕部に入れられたと聞いていた。「奉仕部…って一体何なの？」

綾香は、パソコンで総武高校の情報を調べる。入学時のパンフレットでも良かったのだが、今は手元にパンフレットが無いから、パソコンで見る。運動系、文化系の部活動を見たが、奉仕部はどこにも記載されていない。

「…何で記載されてないの？」

総武高校の部活動紹介を隅々まで見たが、何も載っていないのだ。

「八幡お兄ちゃん、まさかブラッくな部活に入れられたんじゃ…」

ブラッくな部活、そんなものが総武高校にあるのかにわかには信じがたいが、綾香は、調べなければという衝動にかられていた。

「明日、ちょっと調べてみよう」と

綾香は、そう決意してから眠ることにした。

翌日綾香と小町は、八幡にくっついていた。

「小町に綾香、あまりくっつかれると、朝飯も食えないんだが？」

「小町が食べさせてあげるね」

「小町、私が八幡お兄ちゃんに食べさせてあげるんだから」

「お、おう…ありがとう…って俺は食べさせてもらうほど、怪我也病気もしていないぞ」

八幡がそんなことを言えば、母親が

「八幡、無理はしなくて良いからね。だから、綾香ちゃんや小町に食べさせてもらいなさい」

「はあ？俺は病人じゃねーよ。母さんも何を言い出すんだよ…」

そんな会話をしながら、母親と小町、綾香との朝ご飯を食べた。

食べながら昔の事を思い出していた。

綾音が1人で食事が出来なくなった時に、八幡が食べさせていた。彼女は、八幡にそこまでしてもらうつもりは無かった。だが八幡は、【何を言ってるんだよ？彼氏…恋人として当然だろ。俺は、これからずっと綾音と寄り添うつもりなんだから。一生お前というし離れるつもりはない】

この台詞を聞いた綾音は、大粒の涙を流した。本当に八幡を好きになって良かったと。彼を愛せて幸せだと。

八幡は、雅史達とサッカーで国立に出るといふ夢があった。だが綾音のためにサッカー部を辞め、夢を諦めた。夢は雅史に託して。彼にとって、綾音とのあの時間は幸せな時間だったのは間違いはないのだ。それが、普通の恋人同士がやるデートとかほとんどやれなかったが、病院の近所や屋上、中庭を散歩して過ごした時間は、綾音にとってかけがえのない時間だったのだから。

思い出に浸っていたら、すでに登校時間になっていて、八幡は学校に行くことにした。すると綾香と小町がやってきて

「八幡お兄ちゃん、一緒に行こう」

「お兄ちゃん、昨日、雅史さん達が自転車持って来てくれたよ」

「ああ、雅史達には迷惑をかけたな」

綾音の墓がある霊園から、雅史達が八幡の自転車を持って来てくれた。その事は、雅史がチャットで教えてくれた。八幡は雅史にお礼を言い感謝したのだった。

小町は、八幡の自転車の後ろに股がる。そして彼にしがみつく。

「あ、あの小町さん？こっちはお兄さんの自転車ですよ？」

「いいの。こうしないと、お兄ちゃんがどっか行っちゃいそうで、小町、怖いんだ」

綾香も横からしがみついてきた。

「…八幡お兄ちゃん、いなくならないで」

「…小町、綾香…」

八幡は、そんな2人を見て、何をやってるんだと自分の中で、自分

にカツを入れた。綾音を失って悲しいのは、自分だけではない。小町や綾香も十分に悲しいのだ。悲しいのに、八幡を元気をつけるために、元気を振る舞ってる。

「小町、綾香、俺はいなくならない。それに、俺が不甲斐ないと、綾音が安心して眠れないだろ」

「お兄ちゃん…」

「八幡お兄ちゃん…」

八幡は、小町と綾香の温もりを感じて、己の気持ちを奮い立てさせた。

綾音にこれ以上、迷惑をかけるわけにはいかない。

これ以上、小町や綾香にも心配や迷惑をかけるわけにはいかない。

少しずつでもいい、一歩ずつ前に進もう、それが彼女達のためになるのだから。

いつまでもそうやっていた3人だったが、母親に怒られて、学校へ向かうことした。

怒られはしたが、そういうことさえも心地よく思えるようになった八幡であった。

小町と綾香は、八幡の背中を押した。

そんな姿を遠くで見ていた人物達がいた。雅史、緑子、七海である。

3人も八幡が心配で比企谷家の近くまで来ていたのだ。

「八幡、元気になったんだな」

「今回は、小町ちゃんと綾香ちゃんのおかげかな」

「そうだね、まあ綾香ちゃんには塩を送った形になったけどね」

仲良く登校する3人を見届けながら、雅史達も自分達の学校へ向かうことした。

雅史達だけではなく、比企谷家の近くに黒いリズムジンが止まっていた。

「八幡君、元気が無かったらお姉さんが抱き締めてあげたのに、妹さん達に一本取られたかな。それにしても、八幡君があんなになった原因が、雪乃ちゃんにあったとはね…」

陽乃は、自分の情報網を使い、情報収集をやった。そして材木座に行き着き、彼から話を聞いた。

八幡と綾音の物語の小説を否定されたことを聞いた。

「雪乃ちゃんが小説だと思って否定したかもしれないけど…でも本当なんだよ、八幡君と綾音ちゃんのととても甘く…切なくて悲しい物語…」

陽乃は、いずれ介入するつもりでいる。それがいつになるかはわからないが。

そしてしばらくして、リムジンは走り去った。

また違う場所から、めぐりも八幡の様子を見ていた。やはり昨日、めぐりの胸で泣きじやくった彼の様子を見に来たのだ。

「良かった、八幡君…元気になったみたい」

めぐりは、良かったと安心しつつ、また八幡が泣きたくなくなったら、胸を貸そうと思った。彼女にとって気になる男子になっていたのだった。

そしてもう1人、海浜総合高校の制服を着た女子高生がいた。制服を着崩し、パーマでくしゅくしゅとした黒髪を手櫛ですいている。

折本かおり、八幡達と同じ総武中出身であり、綾音、緑子、七海以外の女の子の親友である。彼女は、あの文化祭の際に八幡に告白して、フラれている。

一度は、綾音に敗北したが、彼女の死後、落ち込んだ八幡の事を心配している。彼の事が心配で、海浜総合高校受験を辞めて、総武高校へ行くと言ったこともある。

だが八幡は、「自分のために自身の将来を潰すな、かおりはかおりの決めた道を進め」

と言われたのだ。だから海浜総合高校を受験したのだ。

今回、海浜総合高校内の総武中ネットワークによって、八幡の件を知ったのだ。

「八幡、あなたの隣は、あたしじゃダメなのかな…」

かおりは、そんなことを思いながら、海浜総合高校へと歩いていく。

第1章―第22話―綾音の月命日と八幡の決意表明。

―

あれからしばらく経ち、4月28日の綾音の月命日を総武中のメンバーやめぐりや陽乃が、比企谷家に集まり、彼女の冥福を祈った。材木座は、家の都合で欠席。

海浜総合高校に行ったメンバー達の現状報告や世間話をやっていった。八幡はサッカー部（海浜、総武）のメンバーと話していた。

「八幡、大丈夫か？倒れたって聞いたから、俺、あの時サッカーの練習のところじゃなかったからな」

「済まないな、康」

「雅史に行かせたから良かっただろ？オレ達がそろそろ行くわけには行かないだ」

先に話したのが、一条康。黒髪のルックス、頭脳良しのイケメン。もう1人が長瀬大輔。スポーツ系イケメン。海浜総合高校のサッカー部の3英雄である。

「そっちは良いさ。俺達、総武組はあとから知ったからな」

「八幡センパイ、今は大丈夫っスか？」

「今は大丈夫だ。本当に心配してくれて、ありがとうな」

「陽介、完二、お前達も総武のサッカー部に入ったんだろ？」

「まあな、完二とここにはいないけど、葉山と戸部もいる。チームも打倒海浜ってやってる」

「総武のエース葉山隼人…」

雅史が葉山の名前を上げた。陽介も

「総武のエースだぞ、葉山は」

「それは俺も知っている。中学からずっと戦っているからな。と言うかお前達も戦ってたよな？」

ここにいるメンバーは、葉山隼人率いる総武東中と八幡も含めて戦っているのだが。

「俺は、あまり記憶に無いな…」

「八幡は1回しか対戦がないからね。その1回も僅かだったわけだし

ね」

雅史の話に陽介があることを話す。

「でもよ、今では八幡と葉山は、一緒のクラスじゃねーか」

陽介がそう言った途端に雅史達が驚き出す。

「八幡、マジかよ。葉山と話したのか？」

「いや、あまり無いな」

「葉山と陽介と完二、そして八幡が総武サッカー部にいてくれれば、オレ達と面白い戦いをやれると思うけどな」

「康、大輔：バカ言え：俺は中学レベルで止まっている。例えサッカー部に入ったとして、陽介達の足を引っ張るだけだ」

「そうか、俺や完二は、八幡が入ってくれるだけで嬉しいけどね」

「バカ言え。俺は奉仕部に入ってるから無理だな」

「奉仕部？」

みんなが口を揃えてそう言った。綾香は口をキリツとして、陽乃は、難しい表情をする。

すると緑子と七海、綾香、かおりも会話に入ってくる。

「八幡、奉仕部って何なの！」

「そうよ、教えてね、八幡？」

「八幡お兄ちゃん、教えて！奉仕部って何なの！」

「綾香ちゃん：気合い入ってるね」

「お前達：はあく奉仕部ってのは簡単に言ってしまうえば、魚の取り方を教えてやるみたいか。つまり：迷える羊をちゃんと導いて自立させるって事かな」

八幡がそう噛み砕いて説明した。雅史達はへえーって頷いていた。説明を聞いたかおりが

「それって、八幡が中学んときにやってたやつと同じじゃん？」

「かおり、俺がやったのとは違う。奉仕部は転んでも、起き方を教えるが、手は差しのべない。俺は、起き方と同時に手を差しのべるやり方だな」

雅史や康や大輔、陽介、完二が八幡の手を握る。そして感謝の言葉を述べる。

自分達は、そんな八幡に救われてきたと。世界中が八幡の敵になろうが、自分達は八幡の味方だと。

彼は、何だか材木座が言いそうなセリフだなと思った。

すると、緑子、七海、綾香、小町、かおりが八幡の背中に手を置く。自分達女子も八幡によつて救われた。だからいつまでも八幡の味方だと。

そしてめぐりと陽乃も八幡の味方だと言った。

「みんな、ありがとう。俺は果報者だ」

雪乃や結衣、総武高校の連中が否定しようが、こうやって八幡を友と言ってくれる人間がいる。それだけでも八幡にとっては、嬉しいのだから。

その後、雅史達に材木座が書いた小説を見せてほしいと言われたから、見せることにした。

みんな、真剣な眼差しで読んでいる。雪乃からはは苦痛と共に気持ち悪いと言われ、結衣に至っては、読んですらいなかった。でも緑子達は、真剣に読んでいる。めぐりと陽乃も読んでいる。

彼女達は、八幡と綾音の甘くて切なく悲しい物語だとわかっているから。読み終えたみんなに八幡は話しかける。

「どうだった？奉仕部のメンバーには、全否定されたけど？」

綾香と緑子がすぐに反論した。

「全否定って…その2人は頭は大丈夫なの！」

「夢物語みたいに見えるけど、実際に八幡と綾音が綴ってきた思い出をそこまで言うなんて…」

「八幡や綾音を気持ち悪いつて言われて、私も怒りがこみ上げてきたかな」

「綾香、緑子、七海…」

「そうだよ、親友を馬鹿にされて、怒らない親友なんていないでしょ！」

「かおり…」

「八幡と綾音ちゃん、総武中のみんなが認めたカップルだったからな」

「八幡センパイの幸せは、自分の幸せでもあったっス」

「俺も八幡と綾音の恋のキューピッドを買って出たかいたがあつたなど今でも思えるからね」

「まあ、あたしは八幡にフラれたけどね」

「まあ、折本、フラれても八幡の側にいるのは、大したもんだとオレは思うぜ」

「大輔、お前：それは言つてはダメだろ？」

大輔が言った言葉に康が止めに入る。止められた彼は

「康、何でだ？」

「大輔、デリカシーが無いだろ」

「一条君、長瀬君、それって中学の時だし、今は気にしていないよ。だって今はみんな、横一線って感じだし…。綾香ちゃんが、ちよつとリードしてるみたいだけど、それってまだセーフティリードでもないでしょ？ならあたしにもチャンスはあるわ！」

かおりが宣言すると綾香や緑子と七海が立ちあがり

「私は負けるつもりはありませんから。八幡お兄ちゃんは、私が振り向かせて見せます！」

「綾香ちゃん、私も負けないわよ！」

「綾音には八幡を取られちゃったけど、私は、緑子にも綾香ちゃんに負けないんだから！」

綾香、緑子、七海、かおりが名乗りをあげる中、みぐりと陽乃も

「これって、八幡君の彼女に立候補の宣言みたいなものなのよね？」

「はいはい、お姉さんも立候補しちゃおうかな？」

八幡は慌てて

「陽乃さん、からかわないで下さい。城廻先輩も：つてみんなに告白されても、今はその思いに答えることができない。でも、みんな、今年だけ時間をくれないか？」

八幡は頭を下げた。今年だけ、時間をくれと言ったのだ。

今年は綾音の3回忌であり、気持ちの整理と区切り、そして新たなスタートをきると八幡は決意したからである。

「これが、今の俺の精一杯の答えさ」

これで、八幡はもう逃げることや避けることは出来なくなった。

証人は、雅史、康、大輔、陽介、完二、の男衆と妹の小町と母親と
いう鉄壁布陣に八幡も退路は無いと覚悟と決意をしたのだった。

そして春先の4月も過ぎていく

第1章―第23話―葉山グループの亀裂。

―

5月に入ってから、4月よりも温度も上がり、暑くなってきた。4月28日に八幡と綾香達女子は、互いに決意表明をした。

海浜組の緑子と七海は、総武高校の水泳部、テニス部に練習試合とかを組むように部の監督や顧問に交渉中とか。

海浜組サッカー部の雅史達も総武高校のサッカー部に練習試合を交渉中。かおりは生徒会で、総武高校生徒会と交流を深めるために奮闘中。

総武組サッカー部の陽介と完二も葉山を説得している。

総武組の綾香とめぐりは、今まで以上に話してくるようになった。ただ奉仕部は、今までと変わらないが。

雪乃は相変わらずで、結衣も相変わらずではあるが、たまに八幡を見て、申し訳ないようにしている。

そんな中、体育の授業が行われていた。総武高校の体育は、月日が変わるとやる球技も変わる。

体育の授業は、3クラス合同であり、男子総合60名である。先月はバスケット、野球で、今月の球技は、サッカーとテニスである。八幡は、すぐにテニスを選んだ。何故かサッカーの方が選んだ人数が多かったから、すんなりと決まった。じゃんけんに負けた人間がテニスの方へくる。ちなみに材木座はサッカーに組み込まれているし、陽介もサッカーのようだ。

八幡は、サッカーにしても良かったのだが、葉山の活躍を邪魔したくはなかった。

だが葉山はサッカーではなくテニスにいたのだ。

「ったく、お前はサッカーをしてるよ」

そんなことを小声で言った。そんな時材木座が

「済まぬな、八幡。我はサッカーになってしまった。こっちには陽介がいてなんとかなるが、八幡は大丈夫なのか？」

「気にするな、材木座。テニスは最悪壁打ちで1人でプレイできるからな。それに七海の練習にずいぶんと付き合った経験もあるし」

「そうか…。本当に済まない」

そう材木座は言う。とサッカーの集まりの方へ行ってしまった。

テニスの方の集まりも授業が始まる。準備運動をきちんとしてやってから、体育教師の厚木から一通りのレクチャーを受けた。

「うし、じゃあ、お前ら打ってみろや。2人1組で端と端に散れ」

厚木がそう言う。と、テニスの集まりの男子達が、ペアを組んでコートと端と端へと移動した。

あつという間に八幡がポツンの残った。

「まあ、こうなるわな…」

その光景を見た陽介と材木座が手招きをしている。つまりどさくさに紛れてサッカーに組み込むつもりのようなのだ。

だが八幡は、手でジェスチャーを送る。

【俺は、テニスで構わないさ。壁打ちでもしてるからよ】

陽介と材木座は、それを見てため息を吐いてサッカーの集まりの方へ行った。

別にペアなんか組まなくても、この体育の時間を潰せれば良いのだから。それがもってこいが、壁打ちなんだと八幡は言う。

テニスなら、七海とペアを組んだり、ずっと練習してたのだから。

八幡は、ラケットとテニスボールを持って、壁打ちを始める。

体育教師の厚木は何か言いたそうな感じだが八幡は無視を決めているので、それ以上は言っただけだった。

1人でテニスの壁打ち練習をしていると、葉山グループ(6人【4+2】)が何やら騒いでいる。どうやら2人は他クラスの人間の間である。

「あいつら、全員がテニスかよ…。ずっと一緒にいたいのかよ…」

群れることに文句は無い八幡だが、いつも一緒って言うのもおかしいだろ、と思いつつ、壁打ちをスピードを上げて練習する。

練習をしていると、葉山の打球を打ち損ねた戸部が突然

「うおーっ！ やっべー葉山くんの今の球、マジやべーって。曲がった

「曲がつたくね？今の」

「いや！打球が偶然スライスしただけだよ。悪い、ミスった」

片手を挙げてそう謝る葉山の声を掻き消すように戸部はオーバークシヨンで返す。

「マジかよ！スライスとか【魔球】じゃん。マジはないわ。葉山くん超ばないわ」

「やっぱそうか」

調子を会わせるかのようにして楽しげに笑う葉山。すると葉山達の横で打っていた2人組が声をかけてきた。

「葉山くん、テニスも上手いじゃん。さっきのスライス？あれ俺にも教えてよ」

金髪の戸部と大体いる大和と大岡である。

「…うるさくなつたな…」

八幡は、葉山達から距離を取ろうと歩き出したら、戸部の打った打球が八幡に向かってくる。スライスどこの話ではない。

八幡は、とつさに左手にラケットを持っていたから、戸部が打ってきた打球をそのまま打ち返した。

戸部は動けずテニスボールはコートにバウンドして、そのまま金網のフェンスに辺り彼の足元まで転がってきた。八幡はイラツとしたが、笑顔で

「人に向けて打ってはいけないって教わらなかったのかな？」

戸部は、そこに八幡がいることに驚いている。大岡や大和、他クラスの山本と田中も驚いている。

「えっ?!ヒキタニ君、そんなどこにいたんだべ？」

「ああ、最初から居たんですが？」

すると他クラスの山本と田中がゲラゲラと笑いだして

「ヒキタニって存在感が無いからな。存在してます、生きてますか？」
「陰キャやネクラの分際で、隼人の邪魔するなよな！」

八幡は、イラツとはしてるが、己の事だから我慢ができる。すると戸部が

「山本くん、田中くん、それは違うしょ。ヒキタニ君は、俺の打った打

球が危なかったから、注意をただけっしょ」

「戸部、何、ヒキタニの方を持ってんだ？そんなヤツの方持ったって何の得にはならないだろ？」

「陰キヤのヒキタニ、隼人の邪魔をするって意味がわからないのか？陰キヤは日陰でも歩いてろ！」

すると葉山がやってきて喋り出す。

「比企谷、彼は陰キヤでもネクラでもないよ。田中、山本、君は彼の何を知ってるだい？」

葉山にそう言われ、田中と山本は、周りから孤立する形になる。葉山と戸部、大岡、大和、田中、山本の間に入り始めたのだった。

葉山が八幡に近づいてきて頭を下げた。

「比企谷、済まない。山本や田中がそのあんな事を言って」

「別に気にしていない。言われなれてるからな」

「反論しないのか？」

「反論？俺が反論したところで、あの2人の言う方を信用するだろう」

八幡は、そのまま壁打ちをするために戻る。葉山は何か言いたそうにしていたが、何も言わなかった。

こうして体育の時間は終わったのだった。

第1章―第24話―体育の後の話。

―
―
体育のいざごぎはあったものの、普通に時間は流れ、八幡は陽介と完二の3人でいつも昼飯を食べる場所とは違う2箇所目で今日は食べている。

特別棟の1階、保健室横、購買の斜め後ろつてところになる。位置関係で言えば、ちょうどテニスコートを眺める形になる。

いつものように、綾香が作った弁当を広げて食べ始める。陽介と完二は、購買で買ったパンとおにぎりを食べ始める。食べてる最中陽介が

「すまん、八幡、体育の時間に庇ってやれなくて」

「何で陽介が謝る？」

「山本と田中が『陰キヤの分際』とか『生きてて恥ずかしい』とか言ってたみたいだよな？」

「八幡センパイに陰キヤとか生きてて恥ずかしいとか…言った輩がいるんスカ…そいつらシメましようか？」

「完二、お前はお母さんに迷惑をかけないんだろ？こんなことで問題を起こしてどうするんだ？」

「しかし、八幡センパイ！」

「もし、何かあれば俺達に言えよな、すぐに駆けつけるからな。それにお前に何かあったら、綾香ちゃん達になんて言われるか…」

「何かあったらな」

「ああ、マジで言ってくれよ…綾香ちゃんや山岸（緑子）達にドヤされるから」

「わかってるよ」

八幡は、苦笑いをしながら弁当を食べる。

「それにしても、あの葉山の取り巻き…葉山自身や戸部はそんなやつじゃないんだか、どうも山本や田中が何か言ってる感じがするんだよな」

「陽介センパイ、その連中にお灸を…」

「完二、別にそんなことをしなくてもいい。奴等なんかほっとけばいいだけだ」

「しかしっ!」

「八幡、1つ言っとく事があったな」

陽介が真剣な眼差しで八幡を見てから話し出す。総武高校と海浜総合とのサッカーの強化試合、練習試合の交渉のために海浜総合高校を訪れて交渉しに行ったのだ。

「雅史のヤツ、葉山と友達になっただぜ」

「マジか。まあそうだよな、次期サッカー部のエース同士で次期部長だから話は合うか…いいじゃねーかよ」

そう言いながら八幡は、弁当のご飯をパクパクと食べる。

「まあ、聞けつて八幡。葉山の方から雅史に話しかけたんだよ」

「葉山から?」

「どうやら、葉山のヤツ、お前のことを雅史から聞き出したようだったしな」

「俺の事を?なんで葉山のヤツ…」

八幡も葉山が時々見て来ているのは、気づいている。だが面と向かって何で見てるんだとは、聞きづらい。

「陽介、完二、お前達も何か話したのか?」

「まあな。いつの間にか総武中OB、OGまで話に入ってきてな、盛り上がったわけだ」

「八幡センパイの事を、葉山センパイには、素直な気持ちで話したツス」

「そうか……。で葉山は、なんて返したんだ?」

「葉山は、何も言わずに真剣に聞いていた」

「葉山センパイ、一度八幡センパイと綾音センパイを見た事あると言ってたツスね。車椅子を押す八幡センパイとそれを幸せそうに見ていた綾音センパイだったと…」

「そうか」

八幡は、そう言うのと視線をテニスコートの方へ向ける。いつも昼休みの間は、女子テニス部の女子達が、自主練習をしてるようで、いつ

も壁に向かい、打っては返ってくる球をかがくしく追い、また打ち返してくる。

風がひゆうツと八幡の髪を揺らす。風向きが変わったのだ。

その日の天候にもよるが、臨海部に位置するこの学校はお昼を境に風の方向が変わる。朝方は海から吹き付ける潮風が、まるでもといった場所へ帰るように陸側へ吹く。

八幡は風を読むのは、得意である。サッカーの試合においても、風の流れは試合そのものに有利、不利に働く。全ての流れをコントロールし完全に味方の流れに変えてしまう。かつての総武中がそうだったように。指し手の八幡がコントロールしてるかのように。

指し手の八幡だけいても試合は勝てない。彼の意味を読み取り、行動できる人物が必要である。

それが雅史達総武中のメンバーであった。

八幡達は、昼御飯を食べ終えて、心地よい風に吹かれてウトウトしていたら、訪問者によって眠りを奪われる。

「あれっ？ヒツキーじゃん？」

「比企谷君、そこで食べてたんだ」

訪問者は、2ーF組の由比ヶ浜結衣と同じく同じクラスの学級委員長長の吹寄制理である。そんな2人がこんなところに来るんだという疑問がある。

「私は、雪ノ下さんと話していたわ。そこに結衣がやってきたわけ」

「うん、ゆきのんと話がしたくて、クラスに行ったら、せいりんとゆきののが話してたし…というか、ヒツキーが誰かというし！」

「花村君と巽君ね、私は結衣と比企谷君と同じクラスの吹寄制理ね」

「俺は、花村陽介、よろしく、吹寄さん、由比ヶ浜さん！」

「吹寄センパイ、由比ヶ浜センパイ、1年の巽完ニツス」

この邂逅が、2ーF内、はたまた総武高校内の八幡の立ち位置が変わり始めることになる。

第1章―第25話―戸塚彩加。

――

穏やかな風に吹かれた昼休みの時間、八幡達と吹寄と由比ヶ浜は話していた。

「俺達、普通に会話してたが、吹寄と由比ヶ浜は、雪ノ下と話して何かあったからここに来たんじゃないのか？」

すると、吹寄と結衣があつと思ひ出したように

「あ、ゆきのんとのゲームでジャン負けして、罰ゲームってやつ？それで負けた人がジュースを買ってくるって」

「…それ、吹寄さんもやったんですか？」

「私も雪ノ下さんに負けたわね」

「…：雪ノ下、えげつない女…」

八幡は、自分達クラスの委員長までパシりに使うとは、どんだけのヤツだと思つてしまった。ただ吹寄も気にしてはいないみたいだから、それ以上はなにも言わなかった。

「ゆきのん、最初は自分の糧は自分で手に入れるわ。【そんな行為でささやかな征服感を満たして何が嬉しいの?】とか言つて渋つてたんだけどね」

「まあ、あいつらしい答えじゃないか」

「そこに結衣が、雪ノ下さんを挑発するような事を言ったから、彼女のスイツチが入つたみたい」

雪乃は、クールな女子だが、勝負事は熱くなりやすい。つまり負けず嫌いな性格も含まれているようだ。陽介と完二は、ポカンと聞いている。

「でさ、ゆきのん勝つた瞬間、無言で小さくガッツポーズしてて、もうなんかすつごい可愛かった」

「あ、左様ですか…って前々からやってたんじゃないのか？」

「うん、前にちよつとね」

「私は初めてだからね」

でも吹寄の表情も結衣と同じく何だか嬉しそうだ。

「それじゃあ、比企谷君、花村君、巽君、私と結衣は行くね」
「ヒツキー、それに、また後でね。花村君、巽君、じゃあね」

吹寄と結衣は、雪乃から頼まれていたモノを買うために八幡達の場所から離れていく。

2人が行った後に陽介と完二が

「八幡、あの2人の胸：マスクメロンが4つじゃねーか」

「ま、マスクメロン!？」

「か、完二：お前、鼻血出すなよ……って陽介、お前もそんなことを言ってるじゃねーよ」

「八幡は、良いよ。綾香ちゃんや山岸達に頼んだら見せてくれるんじゃないねえ？」

「そんなわけないだろ！」

八幡はため息を吐く。八幡も男だから吹寄や結衣の胸に目が行くのは否定はしない。だが陽介のように堂々と言うのはどうなんだと思う。

すると、ジャージを着た誰かに話しかけられた。

「陽介君と完二君と、あれ、比企谷くん？」

「なんだ、戸塚じゃねーか。今から練習か？」

「戸塚センパイ、昼休みだけの練習ってキツイッスね」

「内の男子テニス部は弱小部だから。どうしても女子テニス部に優先度があるんだ」

総武高校のテニス部は、女子テニス部の方が好成績を残して、男子テニス部は、弱小部なので、練習時間も女子の方が好条件の恩恵を受けている。

「比企谷くん、テニスうまいよね」

「まあね、とある幼なじみの練習に付き合ったら上手くなってたんだよ」

「それって、海浜総合高校の高梨さん？」

戸塚はそう言いながら、八幡の顔を覗き込んできた。その表情が女の子のように見えたので、ある意味ドキッとした。

「……いと、戸塚、えっと七海を知ってるのか？」

「うん、知ってるよ。海浜総合高校に練習試合に女子テニス部合同で行ったことがあるんだ。その際に高梨さんと話をする機会があったんだ。そのときに比企谷くんの事を聞いたんだよ」

「そうなんだな」

「比企谷くん、総武中の色男って呼ばれてたんだね」

「そんなことまで、聞いたのか…」

「うん、そうだね」

「まあ、総武高校では、そんなこと聞かないけどな」

「比企谷くんは、十分に目立ってるよ」

「…：ぼっちの陰キヤの俺が？」

「本当にそうなら、陽介くんや完二くんとも高梨さんとも友達じゃないんじや？」

「全く、そうだよな」

「八幡センパイは、もっと自信を持って欲しいツス」

「自信…ね…」

八幡達はそんな話をしていると、学校内にチャイムが鳴り響く。最初のチャイムは、昼休みが後5分で終わるといふ予鈴である。

「さて、教室へ戻るか、戸塚？」

「うん、比企谷くん」

「陽介、完二、また後でな」

「おう！八幡、戸塚！」

「八幡センパイ、戸塚センパイ、それでは」

八幡達は、それぞれの教室へ戻って行く。

一方校舎裏では、不良とまではいえない生徒達が集まっていた。

「近頃、パンチラスポットが全て封じられていないか？」

先にこんな事を言い出したのは、このグループのリーダー的存在の沢田孝。3年生。容姿は、中の上でロン毛スタイル。モデルになるならば、最遊記の沙悟浄みたいな感じ。

「仕方がないですよ、それ内のクラスの吹寄が、生徒会長に申告したみたいですよ…」

こいつは、八幡や吹寄達と一緒にのクラスの松野安史。クラスでは、葉山グループの次のグループである相原グループにいる。一見は眼鏡をかけておりオタクっぽい。

「あゝあ、アイツ言いそうだよな。俺達の楽しみを奪うなって！」

こいつは、八幡達の隣のクラスの山形謙介。ザ、スポーツマンのような容姿で、水泳部に所属している。あと2人いるのだが、今回は来ていない。

何か閃いた沢田が松野に

「サッカー部のイケメン葉山なら、見せてもらえそうだよな？」

「いやいや、いくら葉山だからって、それを言ったらヤバいっしょ？」

「そうですね、沢田先輩、夢見すぎですよ……？」

「やはりダメか……」

そして予鈴のチャイムが鳴り

「さて、教室に戻るとするかな」

「かったり〜授業を受けるか」

「そうだな」

沢田、松野、山形は、それぞれの教室へ戻って行くのであった。

第1章―第26話―総武高校の闇。

―校舎裏

夕陽が西に傾きかけた頃、校舎裏では、昼休みに集まっていたメンバーが集まっていた。

校舎裏、ここには、普通の生徒達は来ないし、生徒会の人間、教師も来ないから、総武高校の掃溜めとも言われている。

不良グループの沢田達は、ここを根城としているのだ。

昼休みに来ていた沢田、松野、山形の他にあの時に来てなかった2人、森屋と南部がやって来て、もう1人を連れていた。

連れてきた人間は、森崎弥太郎。2年生である。クラスは、2―E組。彼は不良ではなく、影の薄い陰キャラであるが。森屋が森崎を前につきだして言う。

「こいつ、誰も来ない校舎裏のトイレで、自慰行為をしてたんだぜ」

「自慰行為ってマジでか?」

松野が呆れたようにしゃべった。リーダーの沢田が

「自慰行為をすることは、悪くはないが?」

「いやいや、学校で自慰行為ってどうなんだ?俺ならしないぞ」

「このハンカチの匂いを嗅いでやっていたな」

南部は、ハンカチを森崎の身体に投げつけた。

「……ほらっ、そのハンカチは誰のだ?」

「……ふ、吹寄のハンカチです……」

森崎は、弱々しい声でそう言った。南部は

「どこで、その吹寄のハンカチを拾ったんだ?」

「……2―F組のくつつ箱のところで、吹寄さんの制服から落ちたけど、彼女が落としたことに気がつかなかったから拾いました」

「それで……なるほど」

山形はそれを聞いてわかったようだ。森屋や南部は

「2―F組、吹寄制理。雪ノ下や三浦と並ぶ2年生の中の美少女……誰もが憧れる女の子達だな」

「あの……ぼ、僕は帰っても良いですか?」

「誰が帰っても良いと言ったか？お前が吹寄のハンカチで自慰行為をしていたと、学校内ではらすぞ？」

森崎の問いに森屋が反論した。すぐに森崎は黙りこんでしまう。南部も

「吹寄のせいで、俺達の楽しみスポットを失ったんだ。お前、俺達が何を言いたいかわかるよな？」

森屋と南部と山形に囲まれて、怯えている森崎。

「わ、わかりません」

「つまり、なんだ…吹寄のパンチラでも撮ってこい！」

「え？僕は同じクラスではないし、それって犯罪なんじゃ？」

「……ハンカチ窃盗だって、犯罪だろ？」

「くっ…!!」

「わかったのなら、俺達の言うことを聞け！言いな、森崎？」

「はい、わかりました……」

「松野、お前は吹寄と同じクラスなんだからさ、森崎としゃべって……こいつに仕事させる…それと例のヤツを渡せ」

「……盗撮をか？つたく…仕方がないな……」

松野は森崎に消ゴムのような小型カメラを渡す。

「それは消ゴム型のカメラだ。使い方はわかるよな？」

「はい、何とか……」

「そうかい……。沢田先輩よろしいですか？」

「ああ、構わない。森崎とか言ったか？」

「はい、森崎弥太郎です」

「お前の働き…期待しているぞ！」

その後、吹寄制理だけではなく、同じクラスの三浦優美子、由比ヶ浜結衣、相模南、同じく2年の雪ノ下雪乃、3年の城廻めぐり、1年の雪柳綾香、一色いろはと追加されたのだった。

第1章―第27話―戸塚とテニスと練習と。

――

それから何日か経った体育の時間、再びテニスで汗を流すべくいつものポジションに行く事にする。次の授業からは、試合形式になるので、1人で練習するのも今回で最後になる。だから念入りに練習をしよう、いつものポジションに移動しようとしたら、ちよんちよんと右肩をつつかれた。こんな事するヤツは、誰だと思いつながら振り向く。すると右頬にぷすつと指が刺さった。

「あはっ、ひっかかったー！」

「と、戸塚じゃないか…。練習しに行かなくて良いのか？」

「うん。今日さ、いつもペア組んでる子がお休みなんだ。だから…良かったらぼくと、やらない？」

「戸塚が良いなら、俺は構わないぞ」

八幡は、壁に今までありがとう、と、お礼を言って、戸塚とテニスの練習に入る。

八幡と戸塚は、ラリー練習に入り、たんとんと続く。

戸塚は仮にもテニス部。八幡は、七海の練習に付き合っただけで上手くなってしまう。

「本当に比企谷くん、テニス上手いよね？」

距離があるため、戸塚の声は間延びで八幡に聞こえる。

「まあ、七海とテニス練習してたから、自然と上手くなっただよ」

「高梨さん、比企谷くんが練習に付き合ってくれたおかげだって、言っただけから」

「と、戸塚、あまり大きな声で言わないでくれ。あまり聞かれたくないからさ」

「…あ、ごめん…比企谷くんは静かに過ごしたいんだよね？」

戸塚は、ラリーを続けながらそう言ってきた。

「それも七海から聞いたのか？」

「うん…」

八幡はラリーを一端止めて休憩に入る。戸塚が疲れだしたので止

めたという方が正しいだろう。

八幡は邪魔にならないところに座る。隣に戸塚も座る。

「お疲れ様、比企谷くん」

「そっちな」

「比企谷くん、ちよつと相談があるんだけど？」

「相談…か…話なら聞いてもいいが？」

「うん。うちの男子テニス部のことなんだけど、すつごく弱いでしょ？それに女子に比べて人数も少ないし、今度の大会で3年生が抜けたら、もつと弱くなると思う。1年生は、高校から始めた人が多いし、まだ慣れてないし。それにぼくらが弱いせいで、モチベーションが上がらないみたいなんだ。人が少ないと自然とレギュラーだし」

「まあ、そうだろうな。レギュラー争いとか関係ないだろうし」

八幡も中学のサッカー部で、先輩達とレギュラー争いを繰り広げた。そして練習試合や強化試合で、活躍し大会前にはレギュラーを掴んでいた。雅史やみんなと勝ち続けたいと八幡は思っていた。

強い部活は、人数も多くレギュラー争いも激しい。弱い部活は、人数が少なくレギュラー争いもほとんどない。だからチーム内の競争力も無くなっていく。

大した気持ちもなく大会で出場でき、負けたとしても大会に出れただけで満足してしまう。そうして負のサイクルがグルグル回る。

「それで、比企谷くんさえ良ければ、テニス部に入ってくれないかな？」

「俺がテニス部に？」

「駄目かな？」

「……………」

八幡はあくまでも平穏に暮らしたいと思っている。しかしあの決意表明の日から平穏な時間は確実に無くなっていくことがわかっていく。

部活勧誘は、戸塚のテニス部が初めてではない。サッカー部の陽介達も一度勧誘したことがある。だが断った。

あとバスケット部からも勧誘があった。バスケット部部长は、総武

中バスケット部の部長でもあった人だ。八幡は、バスケットも出来る方だ。

綾音と一緒に練習に付き合っていたこともあり、上出来になっていたのだ。

「俺は元サッカー部だぞ。テニスはマジで素人程度でしかないぞ?」

「比企谷くん、そんなことない。教え方上手いって、高梨さん言ってたし、比企谷くんと一緒ならぼくもっと頑張れると思うし、あの…変な意味じゃなくて、もっとぼく、テニスが強くなりたいから」

「……戸塚…お前…。入ってやりたいのは、山々なんだが、今はもう奉仕部に入ってるから無理なんだわ」

「奉仕部?」

「迷える子羊を自立を促す…部活か」

「迷える子羊を自立を促す部活?…うん…わかった」

戸塚は、そう言うとかかを決意した表情をしていた。八幡は声をかけようとも思ったがやめた。これからは戸塚自身の問題である。

放課後、八幡は奉仕部の部室にいた。そこで雪乃に相談をしたのだが、拒否の連続だった。

奉仕部で男子テニス部の練習を手伝うって名目で、依頼にしようと考えたのだが、雪乃によって拒否。

八幡は自らをカンフル剤の役目を担うつもりで言ったのが、雪乃には

「貴方に集団行動が出来ると思っているの? 貴方みたいな生き物、受け入れてもらえるはずがないでしょう?」

八幡は心の中で、雅史や陽介達、バスケット部の部長の顔が浮かび、謝ってしまった。

雪乃いわく、自分のような生き物は、受け入れてもらえるはずがない、と言われたのだった。

「お前…俺をなめてんのか?」

「貴方を舐める? おぞましいことを言わないでくれるかしら? 鳥肌が出てくるわ」

「……お前、まだそんなことを言うのか」

「もつとも貴方という共通の敵を得て一致団結することもあるかもしれないわね。けれど排除するために努力するだけで、それが自身の向上に向けられることは無いの。だから解決にはならないわ。ソースは、私」

「なるほど、お前の過去話ってことか」

「ええ。私、中学の時海外からこっちへ戻って来たの。当然転入という形になるのだけど、そのクラスの女子、いえ学校中の女子は、私を排除しようと躍起になったわ。誰一人として私に負けないように努力をした人間はいなかった。……あの低能ども……」

八幡は、何故か雪乃の背後からどす黒い炎みたいのが見えている。地雷源を踏んだんじゃないかと思えるようなものだった。

「まあ、お前の容姿ならそうなるんじゃないか。排除したがるクラスのボスザルがよ……」

「……確かにいたわね、そういうボスザルの存在が……。そのボスザルとその子分達と比較して私の顔立ちはやはりずば抜けていたといつていいし、そこで卑屈になるほど精神はやわてでないから、ある意味当然の帰結といってもいいでしょう。とはいえ、山下さんや島村さんもかわいいほうではあったのよ?」

「そ、そうなんだ……」

「彼女達は男子からの人気もそれなりにあったようだし。けれど顔だけの話であって、学力、スポーツ、芸術、さらに礼儀作法や精神性においてやはり私の足元にも及ばないレベルにいたことは間違いがわからないわ。逆立ちしたって勝てないのなら、相手の足を引っ張って引きずり倒す方へ注力するのは仕方がない事よね」

八幡は、雪乃の自画自賛の言葉をずっと聞いていた。いやここまで自分を自画自賛で褒めれる事の偉大さに驚いているのだから。

綾音がそうだった事を思い出していた。彼女も八幡や雅史、緑子や七海がいなかったら、雪乃のようになってしまったのだろうか?。

綾音をとことん慕っていた妹の綾香がいなかったら、彼女はどんなだっただろうか?。

そんなことを考えていた八幡に雪乃は

「何を黙ってるのかしら？まさか嫌らしいことでも考えてるのかしら？穢らわしい」

「何で俺がお前なんかで…ってか戸塚をどうにか強くしてやりたいんだよー」

「貴方が誰かを心配するなんてね、珍しいこともあるのね」

「珍しい？バカを言え。これでも中学の時は、悩み相談なら八幡に聞けって言われてた事もあるぞ」

「へえー…貴方がね。妄想か何か？まあ、私は、恋愛相談をされたけどね」

「ふーん」

「つといても、女子の恋愛相談って基本的には牽制のために行われるものよね」

「ああ、そうみたいだな、男子と違っな」

「何で貴方が知ってるのかしら？」

綾音は、八幡に告白する前に、親友である緑子、七海に相談する前に雅史や康に相談している。雅史や康にアドバイスをもらったとか後から知った八幡だった。

綾音は、緑子も七海も八幡が好きなことを知っていたからこそ、そうしたんだろうと八幡は考えている。

小町からも聞いたことがあるのだ。

「女子の友情は、簡単に壊れるって知ってる？例えば、同じ男子を好きになったりしたら…」

あの時の小町の表情は忘れない。あどけない表情の彼女だが、それを言った後の小町は、怖い女の表情をしていたのだから。

世の中の男子が抱いているような女子の幻想は、八幡にはとっくに無い、幻殺されているのだ。

「要するに何でもかんでも聞いて上げて、力を貸すばかりが良いとは限らないという事ね。昔から言うでしょう？「獅子は我が子を千尋の谷に突き落として殺す」って」

「殺すな！意味を変えるな！正しくは「獅子は我が子を狩るのにも全

力を尽くす」っての」

雪乃は、フンと向こうを向いた。八幡はため息を吐いてから「なら、雪ノ下が監督だしよう。選手達にどんな練習を課す？」

雪乃は不意にそんなことを言われ、目をはちばちと大きく瞬かせながら、そうね、と思案顔になる。

「全員死ぬまで走らせてから死ぬまで素振り、死ぬまで練習、かな」

雪乃は、微笑み混じりでそう言った。八幡は背筋に寒気を覚えたのは、言うまでもなかった。

雪ノ下雪乃監督：いや雪の女王の方が似合うだろうか。

八幡と雪乃のこんな会話が行われた時、奉仕部の扉が勢いよく開けられた。

「やつはろー」

雪乃とは対象的に結衣は、お気楽そうな挨拶をしてきた。その背後には力なく深刻そうな顔をした人物とちよつと怒った表情で胸の下で腕を組んでいる人物がいる。

1人は戸塚彩加、もう1人は吹寄制理である。

第1章―第28話―それぞれの依頼。

1―2―F組

森崎は、松野に呼び出されて2―F組に来ていた。松野の教室の廊下側の窓際の席である。

「来たな、森崎」

「な、何でしょうか、松野さん？」

松野は、森崎を自分の席の隣に座らせると、耳もとで呟いた。

「吹寄はわかるな？」

「はい、わかります」

「あれが、ピンク髪が由比ヶ浜、金髪が三浦、ボブヘア―が相模だ。分かるか？」

「はい、わかりました」

松野からそう言われ返事を繰り返した。

「あの件はお前が撮ることだな。俺からは、手助けしかできないからな」

松野が森崎と話していると、葉山グループの大岡と大和が話かけてきた。

「あれ？松野君何を話してるん？」

「うん？なんだ大岡か。普通にコイツと世間話をしてるだけだよ」

「ふーん」

「それよりか、なあ、松野…竿はあるか？」

大和は、松野に竿はあるかと尋ねた。すると松野は、大和に茶封筒を渡す。彼は森崎がいるのを気にしている。

「森崎の事を気にしているのかい？安心して、彼は味方だから」

「そうか…」

大和が懐にしまった茶封筒に興味があるようで

「大和、その茶封筒は何？」

「何でも良いだろう」

「例の樽の？」

「大岡、君にも特別に…茶封筒を…但し、ここで開けるな、いいな？」

「わかった」

大岡も懐に茶封筒をしまった。大和は、松野に5000円を払っている。大和は松野達グループから、隠し撮り、つまり盗撮写真を購入している。葉山グループにいるのも、葉山狙いで集まってくる女子を狙ってる付しもある。

大岡もそんな考えで、近づいてる付しもあり、野球をしながら虎視眈々と狙っている。

大岡と大和がいなくなった後に松野は森崎に

「いいか、大和は、うちのお得意さんだ。あいつは必ず買ってくれる。

大岡は様子見だな」

「葉山にチクられるんじゃない？」

「それは無い。あの2人葉山のいないところでは、ろくなことをしてないからな」

「え？」

「まあ、ここでする話ではないな、忘れてくれ」

松野の話はそこで終わり、森崎は自分のクラスへ戻ったのだった。

これは、吹寄と戸塚が奉仕部に来る前の何日か前の話だった。

――奉仕部

「比企谷くん、ここが奉仕部なんだね」

「戸塚、やっぱり来たんだな」

「比企谷君、私もいるんだけど？」

「吹寄、何でお前もいるのか？」

「私は、いちやいけないのかしら？」

「ほらほら、せいりんもさいちゃんも依頼人さんだからね」

結衣は、何故だが自慢気に言った。

「やー、ほらっなんてーの？あたしも奉仕部の一員じゃん？だからちよつとは働こうと思ってたわけ。そしたらせいりとさいちゃんが悩んでる風だったから連れて来たの」

「由比ヶ浜さん、貴女」

「ゆきのん、お礼とかそういうのは全然良いから。部員として当たり

前のことをしただけだから」

「由比ヶ浜さん、別に貴女は部員ではないのだけど」

「ち、違うんだっ!？」

結衣はすでに奉仕部に入ってるかのような会話だったが、まだ入部もしていなかった。

「ええ、正式に入部届けをもらってないし、顧問の承認もないから部員では無いわ」

雪乃は無駄にルールに幻格だった。

「書くよ、入部届けくらい何枚でも書くよっ!仲間に入れてよっ!」

ほとんど涙目になりながら結衣はルールリーフに丸っこい字でニューブトドケと書いていた。

「で、戸塚彩加君、吹寄制理さん、何かご用かしら?」

かりかりと入部届けを書いている結衣をよそに、雪乃は、戸塚と吹寄に目を向けた。吹寄は、戸塚に最初に言っつていいと促した。促された戸塚は、緊張しながらも答える。

「あ、あの……、テニスを強く、してくれる、んだよ、ね?」

最初こそ雪乃の方を見ながら言っつていたが、語尾に向かうにつれて戸塚の視線は、八幡に向いていた。

「……戸塚、俺はなんとかしてあげたいが……」

「由比ヶ浜さんがどんな説明をしたのか知らないけれど、奉仕部は便利屋じゃないわ。貴方の手伝いをし自立を促すだけ。強くなるものならないも貴方次第よ」

「そ、そうなんだね。最初に比企谷くんが言っつたとおりなんだね」

「まあな、それで吹寄はまさか水泳部を強くしてとかじゃないよな?」
今まで黙っつていた吹寄が、八幡に問われてしゃべり始める。

「違うわよ、私からの依頼は、生徒会と平塚先生からの依頼でもあるわ」

吹寄にそう言われ、正面へ向き直し

「生徒会と平塚先生から?それほどのようなご用件でしょうか?」

「以前話していた、ハンカチもそうだけれども、特定の女子の持ち物が無くなってるのよ。結衣もお気に入りのハンカチが無くなっつたつて

言つてたでしよ?」

「あつ…! そうだった!」

「特定の女子の持ち物が無くなる? あつ!」

雪乃がそう言つて八幡を見る。それも蔑んだ目で

「雪ノ下、そんな目で俺を見るなよ。何で俺が犯人? 何で俺が吹寄や由比ヶ浜のハンカチを盗まなきゃならないんだ?」

「だつて貴方…」

八幡が雪乃に腹を立てていると、吹寄が助け船を出してきた。

「比企谷君は、そんなことしないわよ」

「吹寄さん、何故言い切れるのかしら?」

「ぼ、僕も比企谷くんがそんなことをするなんて思えない!」

「戸塚、吹寄…お前ら…」

「ゆきのん、あたしもヒツキーはそんなことしないと思う」

結衣まで八幡がそんなことしないと云われたため雪乃は

「まあ、良いでしょう。吹寄さん、持ち物紛失以外にもあるのでしよう? これだけなら、生徒会や平塚先生がこちらに回す事もないでしょうし」

「ええ、こちらが本題よ」

吹寄は、本題を話し始めた。以前から女子生徒のパンチラを見て楽しむ連中がいて、楽しんでいた男子生徒達がいたようだ。それを彼女が生徒会に報告して、生徒会がその当事者達を捕まえて、説教をしたらしいのだが、またそういう連中がいるらしいのだ。

生徒会の見回りや教職員が見回りをしているが、連中も悪賢く、そういう時にはいないようだ。だから顔を知られていない奉仕部に依頼がやってきたようだ。

「なるほど、吹寄さんの依頼はわかったわ」

「女子のパンチラを見ようとか、最低なことだし!」

「まあ、そうだよな」

八幡は、ごく普通の事を言っただけだが、雪乃が軽蔑そうな目で見てくる。

「貴方も階段の下とかで見てるのかしら?」

「は？なんで俺がそんなことをしないといけないんだ？」

「ヒツキー！そんなことをしてるの？」

「由比ヶ浜、俺がなんでそんなことをしないといけないんだ？」

「貴方って…見てそうなもの」

「……………」

八幡は、頼まれてもお金を積まれても雪乃のパンチラとか見たくないと思ってしまうた。彼が困った表情をしていたら吹寄が助け船を出してくれた。

「城廻生徒会長も今回の事を重く見て、校長や教頭に掛け合って、教職員会議で先生の見回り強化と、次回からそういう生徒は、停学処分を下すと決まったみたい。平塚先生と城廻会長には、奉仕部には学校の見回りをしてくれれば、言いと言われたわね」

「……吹寄さんの依頼は、生徒会と平塚先生からの依頼でもあるわ。お引き受けするしかないわね」

「戸塚の件は？」

「貴方が、昼休みに戸塚君を鍛えてあげれば、良いでしょう？」

「雪ノ下、それは戸塚の件も引き受けたんだな？」

「ええ、私は見回りして不埒な輩を片付けるわ」

雪乃、結衣、吹寄が見回りの件で話をしている。

八幡と戸塚は、昼休みに行う練習について話を進める。

「明日の昼休みから練習をスタートさせるが、良いか？」

「はい、お願いします、比企谷くん」

こうして奉仕部は、戸塚のテニス強化と見回りの依頼を遂行していくことになった。

第1章―第29話―テニス勝負、八幡・綾香対葉山・三浦①

―
奉仕部でみんなと分かれた後、八幡は雪乃を追っかけて見回りの件の話をした。

「待て、雪ノ下、見回りの件、俺も手伝うぞ」

「貴方は、戸塚君の件をやれば良いのよ。見回りの件は、私がやるわ！」

「あのな、こういうことって、女子に見回りされると逆に連中に警戒される。だから俺も手伝うって」

「気持ちはあるがたく受け取っておくわ、だけど私がやらなければならぬ案件なのよ！」

雪乃は、鋭い目つきで八幡を睨む。睨まれた八幡も一瞬怯んでしまった。

「私だけではなく、吹寄さんと由比ヶ浜さんも時間が許す限り協力してくれるそうだから」

そう言っつて雪乃は、八幡の前から去って行った。

「雪ノ下……お前は……」

八幡はそう呟いた後、見回りの件も彼なりにやることを決意をしたのだった。

―昼休み↓テニスコート。

翌日の昼休みから、戸塚のテニス強化週間として練習を励むことにした。昼休みの時間だけ、コートを使わせてほしいと女子テニス部に頭を下げて許可をもらった。女子テニス部の部員達は、八幡に対して不満や嫌々さを出していたが、副部長と部長が現れた。

総武高校の部長、副部長は、総武中のOGであり、七海の先輩でもあり、テニスの大会で好成績を残した実績がある。

昼休みだけと言う条件と暇な時に女子テニス部に指導してくれな

いかと言われ、承諾してしまった。

さっそく、体操服に着替えた八幡と戸塚は、準備運動を念入りにやり、軽くテニスコート内を走ることから始めた。何でも最初はランニングから始める。

身体を暖めた後、2人並んで腕立て伏せを始める。

腕立て伏せをしながら戸塚は、八幡を見て笑っている。

「戸塚、何で笑ってるんだ？」

「こっちの比企谷くんが本当の姿なんだなって見てたんだ」

「そうか…」

クラスの中には、そう言うことは適当に流していた。別に真剣にやるわけじゃないのだから、適当にやって適当に終わるようにしていただけだ。

八幡は、一度受けたものは必ずやり遂げると決めているから、戸塚を上手くさせるために真剣になったのだ。

「まだまだ、比企谷くんの足を引つ張るかも知れないけど、僕、頑張るから！」

「戸塚、テニスを上手になりたいんだろ！なら足を引つ張るとか弱音を出すな！絶対に強くなるんだという気持ちが大切なんだから！」

「はい！比企谷コーチ！」

八幡と戸塚は、こうして二人三脚で頑張って行くことに。

日が経つにつれ、戸塚はテニスの技術力が良くなってるのがわかるくらい上達していた。途中に材木座、陽介、完二が練習を手伝ってくれるようになり、練習効率を上がり、ラリー方式の練習もできるようになったのも大きかった。

材木座は、戸塚が女子だと思ってたように男と知るとショックを受けていた。

今は戸塚と3人は、仲良くなって連絡先を教える仲までなっている。

今では、昼食ですらテニスコートの隅で4人で食べている。少しでもテニスの練習をする時間を増やしたいためでもある。

昼食を食べた後、テニスコートの隅で寝転んでも気持ち良いのだ。そこに心地よい風が吹いたらもつと良いのだが。

八幡達には、寝ているような時間は無い。戸塚を早く強くしなければ、ならないのだから。

だから厳しくいく八幡。

「それじゃあ、ダメだ。脇が甘い！」

八幡が返したボールを打ち返そうとした戸塚がずさつと転んだ。

「戸塚、大丈夫か？」

「いえ、大丈夫だよ、比企谷コーチ！」

戸塚は擦りむいた足を撫でながら、濡れたそばつた瞳でにこりと笑い、無事をアピールしてきた。八幡は完二に救急箱をとアピールする。

完二がすぐに救急箱を持って来て治療する。

「戸塚センパイ、ちよつと無茶なことばかりしてるツスよね？」

「ううん、完二くん、無茶とかしてないよ、テニスが上手になりたいんだ。だから！」

戸塚が、完二にそう言っただけで前へ出る。しかし、何だかテニスコートの外が騒がしくなる。

その原因は葉山グループとその集団であった。八幡は、葉山グループの登場に舌打ちをした。戸塚は、陽介や完二の後ろに隠れた。材木座も八幡の方へやって来る。八幡が先手を切る。

「何のようだ？そんなにぞろぞろと」

すると三浦が話し出す。しかし

「ね、戸塚、あーしらもここで遊んでも良い？」

「三浦さん、ぼくは別に別に遊んでるわけじゃ、なくて…練習を」

「え、えっ何、聞こえないんだけど？」

戸塚の小さすぎる抗弁が聞き取れなかったのか、三浦の言葉で戸塚は黙ってしまう。

「あのな、戸塚はテニス部の練習をしてるんだよ、分かれよ、三浦！」

陽介が大声で三浦に叫ぶ。だが三浦は

「あーしは、花村には聞いてないしー戸塚に聞いてるんだけど！」

戸塚はそう言われて、なけなしの勇気を振り絞って

「れ、練習を…練習をしてるんです」

「ふーん、でもさ、部外者が混じってるじゃん。ってことは別に男子テニスだけで、コートを使ってるわけじゃ無いんでしょ？」

「そ、それは、そう、だけど」

「じゃあ、別にあたしら使っても良くない？ねえ、どうなの？」

「だけど、……」

戸塚が八幡に助け船を求めてきた。彼もイライラは沸点に近づきつつあった。

「お前らいい加減にしろよ！今の時間は俺達が戸塚の練習に使っている。遊びじゃないんだよ！」

八幡のドスの聞いた声で言ったため、三浦は少し押され気味になった。

「な…!?」

「陰キヤの分際で、いい気になるなよ！」

「三浦が使わせてほしいと言ってるんだから、お前らはとつとどけよ！」

威圧的に言ってきた、葉山グループの田中と山本が八幡の前に現れた。

「俺達は、ちゃんと許可をもらって使わせてもらっている！お前達もやりたかったら、女子テニス部に許可をもらえ！」

「許可…?!三浦や葉山がいるし、必要ないんだよ！」

「ああー！」

無茶苦茶な事を言ってきた田中と山本。八幡の怒りが臨界点を突破も時間の問題かと思えたが、

すると葉山がやって来て

「ケンカは良くない、そうだ比企谷君、陽介や完二もいるし、ちようど良いかな。部外者同士で勝負。勝った方が、今後の昼休みにテニスコートを使えるってことで。もちろん戸塚の練習にも付き合う。強

「イヤツと練習した方が戸塚のためにもなるし。みんな楽しめる」

「葉山、お前…」

「葉山センパイ…」

陽介と完二が葉山に何かジエスチャーで言っている。三浦も

「テニス勝負？……なにそれ、超楽しそう！」

三浦が炎の女王特有の獰猛な笑みを浮かべている。その瞬間、わつと取り巻きの連中が沸き立った。

比企谷、材木座、陽介、完二対葉山グループの構図になっていた。

そして今や校庭の端に位置するテニスコートには、人がひしめき合っていた。

200人は有に超している人数が集まって来ている。葉山グループはもちろんのこと、どこから話を聞き付けて来たのかそれ以外の連中も多く押し寄せていた。

その大半が葉山の友人、及びファンである。2年生が主であるが、中には1年生も交じっており、ちらほらと3年生の姿も見える。

「H A・Y A・T O！フウー！H A・Y A・T O！フウー！」

ギャラリーの葉山コールの後は、ウェーブが始まった。まるつきりアイドルのコンサートだ。

八幡達は完全にアウェイ状態だ。

「マジでスゲーな葉山コールにウェーブ！」

「陽介センパイ、のまれないようにしないと」

「マジですごいよな、葉山は…。あんだけも人間を連れてこれるんだからな…」

葉山は早くもコートの中央へ歩み出す。これだけのギャラリーに囲まれてもどこにも怯みはない。この注目には慣れているのだろう。葉山の周りには件の取り巻きだけではなく、他のクラスの女子やら男子やらも集まっている。陽介が不安そうに

「総武中O B・O Gはどうしたんだよ！」

「…表だつては俺を応援できないだろうな、なんと言つてもあの葉山だからな…」

「これが、海浜だつたら…」

「そんなこと言っても仕方がないだろう…」

「天国の綾音ちゃん！八幡が葉山と戦うんだが、何せアウェイ感半端ないから力を貸してくれ！」

天に祈るようなポーズを取る。完二も同じようにポーズを取る。材木座も中二的に天に祈るようなポーズする。

「ってこんなことで綾音に祈るんじゃない！」

するとスマホの着信がなる。番号は知らない番号だが出てみる。

「もしもし、比企谷君？テニスコートの方がうるさいようだけど、何かあったの？」

「雪ノ下、何で俺の番号を？」

「平塚先生から聞いたわ、でテニスコートで何があつてるの？」

「ああ、テニスコートをかけて葉山グループとテニス勝負だよ。それでギャラリーが集まって来たようだな」

雪乃の側には結衣もいるのだろう、何か言っているが聞きづらい。

「葉山君と……私達もそっちに行くわ」

雪乃は、そう言つて通話は切れた。再びコートの方を見ると葉山だけではなく三浦もスタンバイしていた。葉山は申し訳ないような表情をしていて、三浦は勝ち誇つたような表情をしている。

「あーしら、男女ペアでやるから、そっちも男女ペアにしてくんない？」

「な、何だと」

「つつつても、ヒキタニくんと組んでくれる子はいんの？とかマジウケる」

三浦がゲラゲラゲラと甲高い下品な声で笑うと、ギャラリーにもどつと笑いが巻き起こった。

これには、陽介と完二は怒りが沸いてきた。材木座も

「これを海浜の八幡を慕う連中が聞いたら…どうなることか」

「間違いなく戦争ツスね：オレはあの高飛車女が嫌いツスね」

「山岸、高梨…折本…綾香ちゃん、城廻先輩、陽乃さん、八幡のピンチだぜ…」

「マジでどうするツスカ？高梨先輩を呼ぶんスカ？」

「呼べるわけが無いだろ！あいつは海浜なんだからな」

三浦とギャラリーはまだゲラゲラと笑っていた。上からの目線で八幡に

「早くしてくんない？ヒキタニくんが土下座して、ペア組んで下さ
いって言ったたら、誰かが組んでくれるかもよ？」

「あまり八幡お兄ちゃんの悪口を言わないで欲しいのだけど？」

ギャラリーの中から、そう声が響いた。それはなんと、最愛の恋人
の綾音の妹の綾香だった。彼女が通るとギャラリーが2つに割れる。
そうしてギャラリーの中でもぎわつく。何で八幡にお兄ちゃんって
言ってるのか、とか兄妹なのか、とか。何で綾香が、あんな陰キヤと
仲良くしてるんだという妬み臭もしていた。

1年生の中でも綾香は人気がある。だが三浦はそんな綾香に

「何なん、アンタ、アンタがヒキタニとペアを組むって？」

「ええ、私が八幡お兄ちゃんとペアを組みます！」

「綾香、お前……」

「私は、八幡お兄ちゃんを侮辱したヤツは許せない！」

三浦と綾香のピリピリ感がその場の雰囲気を作り出している。陽
介達も一歩引いている感じがした。

「制服じゃあれだから、女子テニス部からユニフォーム借りるから、ア
ンタも来れば？」

「ええ、そうさせてもらいます」

三浦と綾香は、テニスコート脇にある女子テニス部の部室を顎で指
した。2人共に部室の方へ行った。葉山が八幡に近づいてきて

「済まない、優美子やギャラリーがあんなこと言って」

「別に気にはしていない」

「あの子、恋人さんの妹さんなんだね、雅史や陽介達に聞いてたんだ
が、予想以上だったよ」

「まあな。正直俺自身も驚いているさ。テニスのルールだが、普通に
単純に点取りで構わない？」

「そうしてもらえると、助かる。テニスは素人同然だからね」
「わかった」

八幡と葉山がそんな会話をしていたら、綾香と三浦がテニスのユニフォームに着替えて戻ってきた。

そして、八幡・綾香ペア対葉山・三浦ペアのテニスの戦いが始まる
うとしていた。

第1章―第30話―テニス勝負の裏側で。

―奉仕部

八幡達が戸塚にテニス練習をしてる頃、雪乃達は、奉仕部で見回りの件について話し合っていた。

雪乃達が聞き取り調査や現場検証（パンチラ被害があつた場所）を写真やメモの紙が机の上に置かれている。

「これ以上は出てこないのかしら？」

「うーん、難しいところよね。現行犯じゃないから」

「階段の下…結構な死角があるわね。由比ヶ浜さんは、スカートが短いから気を付けないと」

「うん、気を付けるよ」

「パンチラを見られるのも嫌だけど、それを写真に撮れたりしたら…」

「そうね、今はカメラ自体も小型化してるし、一見カメラとはわからないものもあるわね」

改めて雪乃達は、階段等で気を付けないといけないことを思い知らされた。

「生徒会や教職員の見回りで、改善されつつあるけど」

「見回りは続けた方がいいわね」

「そうだね」

「雪ノ下さん、犯人を見つけるまでやり続けるの？」

「ええ、犯人を捕まえない限り、不快な思いや盗みの数が減らないのよ」

吹寄と結衣が顔を合わせて、そして雪乃に言ってきた。

「雪ノ下さん、この案件って本来なら私達がやるのは見回りであつて犯人を捕まえるものじゃないと思うのよ。それは生徒会や教職員がやるべきであつて…」

「せいりんの言ってるとおりだと思う。ゆきのん、これ以上は……」

「確かにそうかもしれないわね、吹寄さん、由比ヶ浜さんは下りても良いのよ。これから先は私の……」

雪乃が真剣な表情で、吹寄と結衣にそう言ってきた。

そんな時、外から葉山コールが聞こえてきたのだ。

「ふえ〜!?隼人君コール?どこから?」

「校舎の端…テニスコートの方かしら?葉山君がまた何かやってんのかしらね」

「テニスコート…あつ!」

雪乃は、スマホを取り出して八幡にかけようとしたが、番号を知らない。結衣と吹寄に聞いたが彼女達も知らないようだ。仕方がないので、平塚先生に八幡の番号を教えてもらって、彼のスマホにかける。彼はコール2回で出た。

「もしもし、比企谷君?テニスコートの方がうるさいようだけど、何かあったの?」

「雪ノ下、何で俺の番号を?」

「平塚先生から聞いたわ、でテニスコートで何があってるの?」

「ああ、テニスコートをかけて葉山グループとテニス勝負だよ。それでギャラリーが集まって来たようだな」

八幡がしゃべっているが、テニスコートのギャラリーの声援がうるさく雪乃にとっては、耳障りほかならない。

「はあくヒツキー、隼人君達とテニス勝負?ヒツキーが勝てるわけないでしょ!」

結衣が何かまだ言いたそうだが、吹寄に押さえられる。

「葉山君と…私達もそっちに行くわ」

雪乃は、八幡と通話を終えると、テニスコートへ行こうとする。

「雪ノ下さん、私も行くわ」

「ゆきのん、あたしも行く!」

雪乃、吹寄、結衣は、八幡と葉山グループがいるテニスコートへ行くことになった。

11年C組教室にて。

綾香は、友達と弁当を仲良く食べていた。彼女は5月の中頃には、クラスの女子の中心になりつつあった。男子にも人気がうなぎ登りになっていた。

それで綾香の周りにいる女子生徒達は、総武中からの一緒に来た人間達だ。

「それで、比企谷先輩と関係は進んだの？」

「…!?!、美桜、いきなり聞くの?」

いきなり八幡との関係を聞いてきたのが、斎藤美桜。格好は不良のようにしているが、根は優しい女子。

「美桜さん、お下品ですわよ。聞くならもうちよつと…綾香さん、処女は比企谷先輩に捧げたのですか?」

「ぶつ…!!」

こんなことを聞いてきたのは、黒沢静香。容姿や格好からは、お嬢様のように見える。実際にお嬢様だが、発言がとてもお嬢様とは思えない下品発言をする。

「静香…お前の方がよっぽど下品じゃないか!」

「お下品ですつて?それは美桜さん、貴女の頭の中だけでしょ?」

「なんだと!」

「ハイハイ、美桜も静香もケンカはやめようか。昼食が不味くなるでしょ?…ねえ綾香!」

「そうね、瑠璃」

「う…」

「しゅん…」

美桜と静香を大人しくさせた女子は、綾香の小学時代からの親友である。名前は、新山瑠璃。容姿はボブヘアで、スポーツ少女って感じの女の子で、バスケット部所属。短い時間ではあったが、中学時代綾香の姉である綾音とも一瞬プレイをしていて、八幡からも教えてもらっている。

「八幡さん、まだお姉さんの事を思ってるんだよね?」

「うん…八幡お兄ちゃんの心は、綾音お姉ちゃんदैいつぱい…」

「でも…比企谷先輩は、今年1年待ってくれって言ったんでしょ?」

「それは…そうだけど…でも…」

「ライバルがいらつしやるみたいだから、やはり処女を…」

「静香、お前はうるさいわ!まあ有象無象のライバルなら良いけど、み

んなライバルはレベル高しみたいだし、不安になるのはわかるかも」
「問題は、そこなんだよね〜」

まずは、海浜総合高校組の女子達。

まずは、山岸緑子。綾音の親友にして、海浜の水泳部のエース。海浜の四大美少女の1人。八幡と並び立つために努力を惜しまない彼女。

2人目は、高梨七海。綾音の親友にして、海浜のテニス部のエース。彼女も八幡と並び立つために努力を惜しまない彼女。

3人目は、折本かおり。八幡の親友。綾音達以外の八幡の女の子の親友。気さくに八幡と話す中だったが、とある時に己の気持ちに気づいて、中学の文化祭で告白し、フラれる。フラれた後も親友関係は続いている。彼女も八幡の隣に進むために努力をしている。

総武高校組のライバルは、事実上、城廻めぐり生徒会長だけである。だが城廻めぐりは、小説の件の時、傷ついた八幡を年上の包容力で包み込んだ。

彼女は、後々の文化祭実行員や生徒会長選挙に彼に出てもらいたいと思っっている。

最後は雪ノ下陽乃。彼女は大学生ではあるが、地元とかに影響力がある女性。八幡も綾音を救ってくれた恩義があり、いつかは陽乃に恩義を返したいと思っっている。めぐりとは違う女性であるのは違いない。

全員綾香にとっては、ラスボス級の難敵ばかりである。

綾香の強みなのは、八幡と一緒に暮らしていることと、綾音の妹であることと、彼の妹の小町が、綾香に八幡のお嫁さんになって欲しいと思ってるくらいか。

美桜と瑠璃が厳しい戦いだという表情をしている。静香がまたもや

「やはり綾香さんが、比企谷先輩を押し倒すとか、全裸で押し倒すとか、夜這いをかけて押し倒すとか！」

そんな発言をした静香は、瑠璃に頭を叩かれる。

「静香、アンタさつきから押し倒すしかいってないじゃない?」

「押し倒すのが一番手っ取り早いでしょ? 綾香さんは、処女を捧げ、比企谷先輩から童貞をもらおう…私ながら完璧な計画ですわ」

「静香、アンタの口からは下品な言葉しか出ないわけ?」

「瑠璃さん、貴女も本当は好きなんでしょ、下ネタが?」

「静香、下ネタ発言はもうやめようよ、周りの男子も引いてるわよ」

美桜が困った表情で、静香と瑠璃を見ている。

一方の綾香は、何かを想像をしたようで、顔が赤くなっていた。そこに静香が

「おやおや、綾香さんは、比企谷先輩のナニ…を…フガ!」

静香は、何かを言おうとしたが、瑠璃に止められた。

「静香、それ以上、言うな!」

綾香達がこんなことをしていたら、突然テニスコートの方から、葉山コールが巻き起こり、クラスがざわつき始める。

そしてクラスの女子達が、葉山がテニス勝負をするみたいな会話が聞こえてくる。

「葉山先輩がテニスで勝負するって?」

「へえー葉山先輩が?で、対戦相手は?」

「さあ〜知らない人…」

「しかし、葉山先輩と対戦する相手も身の程しらずと言うか…この学校の生徒を敵に回す行為だよな」

「そうだよね〜」

慌てて教室へ入ってきた男子生徒が

「対戦相手は、確かヒキタニとか言うヤツだって!」

それを聞いた綾香は、慌てて立ち上がる。

「八幡お兄ちゃんが!」

美桜、静香、瑠璃の3人は顔を見合わせる。

「葉山先輩ってサッカー部の…」

「葉山隼人、サッカー部の次期部長のエースですわね」

「葉山先輩、総武高校では人気があるもんね」

綾香は、何かを決意した表情で教室を出てテニスコートを目指す。

「私達も行きませんか」

「そうですね、比企谷先輩を応援に行きますわよ」

「ええ、行きましょう！」

美桜、静香、瑠璃も綾香の後を追った。

第1章―第31話―テニス勝負の裏側。②

―奉仕部教室↓テニスコート付近。

雪乃、結衣、吹寄は、テニスコートの方に来てみたが、凄い人混みで中々近づけない。

学校中の生徒達が来てるのではないかというくらいの集まりがこのテニスコートの周りにいるのだ。

これは錯覚でもなんでもない、事実である。

「葉山君、比企谷君と遊びで勝負するってだけでこれだけの人間を集めるなんて」

「隼人君は、学校中に人気あるから…」

「それが葉山君の人望のあつさなんだろうけどね」

「……それに比べて何も無い谷君の声援は無いに等しいわね」

結衣と吹寄は顔を合わせながら互いに苦笑いをする。

「ゆきのん、何もない谷って、ヒツキーが可哀想だよ」

「比企谷君も人望はあるみたいよ」

葉山コールのウエーブの中に比企谷コールも上がっている。それも女子達の声援である。

「比企谷先輩！綾香！葉山先輩なんか倒せ！」

「八幡先輩！雪柳さんやっちゃって下さい！」

八幡に声援を送るのは、綾香の親友達だけではない。

彼女達は、総武中から彼を追ってやって来たのだ。

すると次々と比企谷八幡コールが起こり始める。結衣は以外に八幡のコールが多いのに驚いているが、いやそれ以上に雪柳綾香という固有名詞に大変に驚いている。

「ヒツキーのコールがこんなに？って雪柳綾香って誰？」

「やはり彼はすごいだよ。総武中の英雄みたいなものだからね。雪柳綾香は、私の水泳部の後輩であり、比企谷君の幼なじみかな」

吹寄は、八幡の恋人の妹とは言わなかった。それは自分が言うべきではないと分だからだ。

「ヒツキー、幼なじみがいるなんて、話してないし」

「ふうん、あの比企谷君に幼なじみがいるなんてね。驚きだわ」

戸塚の声で

「比企谷、雪柳ペア対 葉山、三浦ペアのテニス勝負を始めたいと思います…では始め！」

テニスコート周りの観衆の歓声上がる。雪乃と結衣が

「混合ダブルスってことね」

「隼人君に優美子…ヒツキー達大丈夫かな？」

「普通に考えたら勝てないでしょうね」

「優美子、中学んときにテニスの県選抜に選ばれているし」

吹寄はそれでも希望を捨ててはいなかった。

「綾香、中学の時は、バスケット部のキャプテンで、中学の千葉県選抜に選ばれたことあるわよ。それにテニスの腕もかなりのものだったから。それに比企谷君もテニスはかなりの腕だと聞いたことあるわ」

ギャラリーの声援が一段と大きくなる。葉山・三浦に先制点が入ったのだ。

「0ー15！」

「やっぱり、隼人、優美子ペアに勝てるわけないし」

「まだわからないわよ、勝負は最後までわからないし」

「どうかしらね」

雪乃、結衣、吹寄は、人垣をかき分け前の方へ移動した。

「……C↓テニスコート。」

綾香達は、テニスコートの場所までやって来たが、すでに葉山のファンの集まりでごちゃごちゃしていた。

「凄い人だかりね。これじゃ近づけないわね」

「うーん、人混みをかき分けるしかないんじゃない？」

美桜と瑠璃がそう言った。

「かき分ける…かき分ける…かき分ける…！」

静香がそう言ったが、瑠璃によって頭を叩かれる。

「静香、アンタは、ここまで来て下ネタか！」

「瑠璃さん、貴女、先ほどから私の頭を叩きものにしてませんか？」

「アンタが下ネタばかり言うからよ」

綾香達がそう言った時、声援って言うより罵声に近い声が聞こえてきた。

「あーしら、男女ペアでやるから、そっちも男女ペアにしてくんない？」

「な、何だと」

「つつつても、ヒキタニくんと組んでくれる子はいんの？とかマジウケる」

三浦がゲラゲラゲラと甲高い下品な声で笑うと、ギャラリーにもどつと笑いが巻き起こった。

それを聞いた綾香は、怒りが込み上げてきた。大好きな八幡を馬鹿にされた彼女は、怒りで燃え上がり始めた。親友の美桜、静香、瑠璃も怒っている。

「綾香、比企谷先輩の側に行つてあげなさい。今の先輩を助けられるのは、綾香だけだよ」

「綾香さん、ドーンとかまして下さいな！」

「綾香、八幡さんと頑張つてね！」

美桜、静香、瑠璃の3人は綾香の背中を押した。綾香も背中を押され、ギャラリーの中へ入つて行く。ギャラリーは、綾香達の気迫に押しされ、両サイドに割れる。そして綾香は、八幡のことを侮辱する相手に向かつてこう言い放つ。

「あまり八幡お兄ちゃんの悪口を言わないで欲しいのだけど？」

綾香は、堂々とした態度で、相手の土俵へ上がつて行く。

自分の姉が愛した八幡を馬鹿にしたこと。

自分が尊敬している兄、八幡を侮辱したこと。

そして何よりも自分が一番大切な八幡を、人前で傷つけた目の前の敵をぶちのめすために。

綾香の眼は、闘志が宿っている。その眼は三浦と葉山を見据えている。――

学校中がテニスコートに釘つけになっているとき、とある人物はテ

ニスコート脇にあるテニス部の女子更衣室のすぐそこにいる。

森崎弥太郎である。何故彼がこんなところにいるのかというと、学校中が比企谷対葉山に目を向けている最中に、どさくさに女子のパンチラ写真でも撮ってこいと言われたからだ。

「あの人達も人使いが荒いよ。こんな人がいる時にはリスクが高いのに」

森崎は、周りを警戒しながら機会を伺う。すると2人の足音が近づいてくる。まずいと思い森崎は影に隠れる。隠れながら様子を見る。

「あれは、2ーF組の三浦優美子と1ーC組の雪柳綾香か…」

2人は、テニス部の女子更衣室へ入っていく。森崎は一瞬どうするかと考えたが、女子更衣室へ近づく。真剣モードになり自分自身の気配を消す。

葉山コールとそれよりも弱い比企谷コールが常に上がっている。

「コールのおかげで、色々と助かってはいるが…」

森崎は中の様子を伺おうとしたが、中が見えるようなところは無い。中に2人の被写体がいるというのに何も出来ないことに腹を立てていた。

時間だけが過ぎていき、三浦と綾香は女子更衣室から出ていく。2人が遠ざかったのを確認すると、森崎は窓を確認する。どこか開いていないか確認する。すると1つだけ窓の鍵が壊れているのか、綺麗に閉まっていない。森崎はそれを無理やり鍵を外し、女子更衣室へ侵入する。

「これがテニス部女子更衣室か…」

森崎は中を物色するように見渡す。先ほどまで、三浦と綾香がいたのだ。

だが長居は出来ない。自分で購入して自分なりにアレンジして作った小型カメラをとある場所に設置してそそくさに退散する森崎。「三浦と雪柳のヤツが綺麗に撮れますように」

森崎は、そう言って祈った。彼が密かに女子テニス部の更衣室から脱出してちよつとしてから、学校の放送室から、BGMが流れる。

それはテニスコートの方へと。

テニスコートの方のギャラリーの一部、比企谷コールを言っていた人間達が歌い出していた。

とある女子生徒は、生徒会室で。

とある女性は、移動中のリムジンの中で。

とある女子生徒達は、離れた海浜総合高校の屋上で。

この歌は、綾音が八幡を送り出す時に対に歌ったものである。

この歌は彼を奮い立たせるには十分な歌だ。

八幡の眼には、いつものやる気無しの眼ではなく闘志の炎が宿っていた。

かつて指し手の八幡と言われていたあの頃の眼に。

第1章―第32話―テニス勝負。 八幡・綾香対葉山・三浦。②

―テニスコートにて。

「0―15」

戸塚の声がテニスコートに響く。葉山・三浦ペアに先取点が入る。八幡はわざとボールに触れなかった。目配りを事前に綾香と交わして、わざと触れなかった。

葉山・三浦コールが鳴り響く。

「H A・Y A・T O・トウー

H A・Y A・T O・トウー

Y U・

M I・K O・トウー Y U・M I・K O・トウー」

ウェーブ合戦と比企谷コールが鳴り響く中、八幡、綾香ペアと葉山、三浦のラリーが激しく続く。

八幡と綾香は、葉山と三浦の動きやクセ等を見るために、わざと向こうが有利にさせているのだ。葉山と三浦はそんなことに気がつくはずもなく、自分達が有利だと勘違いしていく。

八幡は綾香を見る。別状彼女のスタミナ切れを気にする必要もなく。ピンピンとしている。視線を感じたのか綾香は八幡に話しかける。

「八幡お兄ちゃん、何？」

「まだまだ大丈夫そうだなってな」

「私なら心配しないで。水泳部で鍛えてるから。それより八幡お兄ちゃんの方こそ大丈夫なの？」

「ふっ、大丈夫だ」

と八幡は答えたが、ここ最近身体を鍛えてなかったから、体力が落ちてることには違いない。持久戦に持ち込まれたら、自分達が負けると考えていた。そんな時放送室から、BGMが高々と鳴り始めた。葉山と三浦もいきなりBGMが鳴り始めたからびつくりしている。葉山コールのギャラリーも驚いている。

しかし比企谷コールを繰り返していた者達は、歌い出す。もちろん、綾香の親友達も歌い出す。

「これって…お姉ちゃんのみ！」

「……………あじな事を…ふつ、この歌を聞いたからには、負けられないな」

八幡は一瞬目を瞑り、そして眼を開く。そこには、いつものやる気無しの眼ではなく、炎が宿った眼になっている。そして八幡は、ラケットを2人に向ける。

「葉山、三浦、すぐに終わらせてやる」

「な、何なの！フン、アンタらが負けてるのがわからないわけ？」

「負けは貴女達だよ」

「ふざけるなし！」

「優美子、待て！」

葉山の制止を無視して、三浦はジャンピングサーブを打つ。ボールは八幡の方へ飛んでくる。だが簡単に打ち返す。打ち返されたボールは、葉山の場所へ飛んでいく。

葉山は返すのがやっとで綾香に簡単に決められる。

「15-15」

八幡と綾香は、ハイタッチをかわす。葉山は、あれが比企谷八幡という人物だと言うことをヒシヒシと感じていた。隣で、息を切らしながらイライラしている三浦。

それに比べて、八幡と綾香は、息を切らしていない。それどころか連携力は益々上がっている。八幡の指し手の能力が綾香の能力を引き上げている。

葉山コールを上げていた連中の中にも、何か思い出したように

「あれってもしかして、総武中の指し手の八幡…じゃないのか？」

「なんだ？指し手の八幡って？」

「知らないのか？総武中…海浜総合高校では、比企谷八幡の熱狂的なファンが存在すると聞いたことがある」

「熱狂的なファン？あの陰キャみたいなヤツが？それって葉山じゃないのか？」

「違う…あの眼で思い出した。あの眼は対戦相手を震え上がらせるって…対戦したヤツが言っていた」

ギャラリーが段々と騒がしくなる。葉山コールのウェーブが小さくなり、比企谷コールが勢いを増してきた。

「…何で、あーしらが陰キャのヒキタニに押されなきゃならないわけ！」

「やはり…比企谷は違うな…。流石、あの海浜の女子テニス部のエースを育てただけはある」

「海浜のエース？誰だし？」

「優美子も中学時代に対戦してるはずだよ。名前は高梨七海さん」

「え？えっ!?隼人、それってなんか関係があるわけ？」

「彼女を指南したのが比企谷と言われているんだ。つまり俺が言いたいのはわかるよね？」

「まさか、あのヒキタニが？」

すぐに八幡達からサーブがくる。だが葉山と三浦には反応ができなかった。早くてテニスボールが見えなかった。

「30-15」

八幡・綾香ペアにまた点数が入る。流れも完全に彼らに渡してしまつた葉山達。

「40-15」

次のサーブでもあっさりと決められてしまう。八幡・綾香ペアはすでにマッチポイントで次決めれば勝利である。

「八幡お兄ちゃん、サーブを打つてもいい？」

「うん？別に構わないが？」

「ありがとう、八幡お兄ちゃん」

綾香がニヤリと口元が緩んだ。八幡は何をするんだと思つたが、彼女のサーブは、三浦に向かって飛んでいく。だがただ三浦に向かって行くわけではない。ボールはワンバンドとして、あらぬ方向へ跳ねた。それはフェンスの方へ。

三浦はフェンス側へボールを見ながら走る。本人は気づいていない。このままではぶつかる。

「優美子、下がれ！」

葉山がラケットを捨てて、走り出す。

一瞬2人が見えなくなる。そして再び2人の姿を見た時には、フェンスに背中をぶつけて、三浦を庇うかのように抱き抱えていた。彼女は赤い顔をしながら控えめに彼の胸元をちんまりと握っている。

瞬間、葉山ギヤラリーから大歓声と割れんばかりの拍手が送られる。葉山ギヤラリー全員総立ちのスタンディングオベーション。

葉山は腕の中で縮こまる三浦をよしよしと撫でた。三浦の顔がいつそう赤く染まる。

試合は八幡・綾香ペアが勝利した。だが葉山・三浦ペアに完全にかぶを奪われた感じになっている。もちろん比企谷コールはあるものの、テニスコートのフェンスのところでイチャイチャされているからだ。

こうして、テニスの勝負は終わりを迎えたのだった。

第1章―第33話―テニス勝負の後。

―テニスコート。

こうしてテニス勝負は幕を閉じた。テニス勝負は、八幡と綾香が勝った。だが完全勝利とはいかなかった。葉山と三浦のイチヤイチャが全てを持っていった。

「HA・YA・TOO!フウーHA・YA・TOO!フウー」

祝福のファンファーレ代わりに昼休みの終了の前の余鈴が鳴り響く。このままキスして終わりって感じになる。

葉山ギャラリーは、娯楽大作映画を見たような、上質な青春ラブコメを読み終えた後のような、奇妙な達成感を一種の脱力感に包まれた。そのままわーしょいと胴上げしながら校舎の方へ消えていった。残ったのは八幡達を応援した者達だった。

八幡と綾香の勝利を祝福するための拍手が鳴り響く。先程の葉山ウエーブをかき消すかのように。

葉山は三浦の頭を撫でた。八幡も綾香の頭を撫でるつもりで、彼女に近づいた。

だが綾香は、撫でられる前に八幡に近づき、彼の唇に自分の唇を重ねた。八幡はその行動に驚き、八幡のファン、綾香の親友達、陽介と完二は、祝福のヒューヒューを送る。戸塚は顔を真っ赤に染め、材木座も祝福を送る。

雪乃、結衣はそんな光景をポカーンと見ているだけだった。吹寄は、苦笑いしやがらも祝福していた。

後々に雪乃と結衣は、八幡に綾香のことを問い詰めるのだがそれはまた別の話で。

葉山と三浦は、そんな光景を校舎の窓から見ていた。

綾香が八幡にキスをしたことは、総武中OB・OGネットワークを通じて、海浜総合高校にいる緑子達、個人的ネットワークを持つ陽乃、自分の目で見ていたためぐりに伝わっていった。

このテニス勝負を得て、八幡の評価が少しずつ上がり始めることになる。

そして八幡が部活の勧誘を受け始めていくのであった。

――

あのテニス勝負からしばらくしてから、森崎は女子テニス部に仕掛けたカメラを回収したのだった。

「さてと、撮れているのかな」

森崎は回収した小型カメラのデータを見る。そこには女子テニス部の部員の着替えが綺麗に撮れていた。

「撮れてる、撮れてる……」

森崎は、小型カメラの中のデータとUSBメモリーの中身のデータを自分のパソコンの中にコピーをする。

作業をしていくうちに、雪柳綾香と三浦優美子が綺麗に撮れている。

「これは、高値で売れるだろうな。まあ値段をつけるのは、自分ではないけど」

綾香の下着姿、同じく三浦の下着姿、テニス部のユニフォーム姿、その他諸々のやつなどをおさめたデータは、松野に渡すことに。

森崎は、綾香の写真を何枚か自分のものにした。これは報酬のつもりであろう。

そして彼女達の写真は、裏で買われるようになる。

――

八幡達のテニス勝負からしばらく経ったとある日、総武高校の夕日に照らされた屋上にて、1人の男と1人の女がいた。

「春雪、私、他に好きな人出来たから別れてほしい」

「え……？ どういうこと？」

「どういうこともないわよ。貴方が私なんかと釣り合うわけがないわよね。陰キヤの貴方と私が」

「そんな……。僕が陰キヤだからって……」

男は、屋上の床に崩れていく。

「大体、今まで付き合ってもらっただけでもありがたいがたく思いなさい。それと：貴方からもらったプレゼント返すわね」

女は男からもらったプレゼントを男に投げつける。

「……」

「そんな安物のプレゼントで私を満足させようと思ったのでしようが、お門違いだったわね。それじゃあね……」

女はそう言って去っていく。男は屋上に床に涙を流す。

「……プレゼントもちやんとバイトして買ったのに……そんな言い方はないだろうに……」

プレゼントが入っている袋が悲しげに太陽に照らされ、風に揺れている。

「もう、良いや……。僕は彼女のためにこれまで生きてきたけど……」

男は屋上のフェンスまで近づき下を見る。

「……ここから飛び降りれば死ぬるかな？」

男はそんなことを言い出した。彼にはもうこの世に未練はない。だから死にたいしても何の抵抗もないのだ。

「……葉山隼人……僕はお前のようなヤツは許さない……」

フェンスをよじ登ろうとしたら、誰かに押さえられる。

「こんなところで死んだら、一生負け犬なままだぞ！悔しくないのか、諦めるのか？」

男を取り押さええたのは、とある女性教師であった。

第1章―第34話―その後の奉仕部。

――

テニス勝負が終わった直後、雪乃と結衣が八幡に詰め寄った。

「比企谷君、この女：雪柳さんとどういう関係なのかしら？」

「ヒツキー、雪柳さんと：そのき、キスを：してたし：」

綾香は、雪乃と結衣を見て

「私は、雪柳綾香と言います。八幡お兄ちゃんの幼なじみです」

そう綾香は自己紹介をする。彼女は雪乃、結衣を見て何かを感じたのか、すばすばと言う。

「私が、八幡お兄ちゃんとキスをするのに、2人の許可を取る必要があるんですか？」

「なっ!？」

「はあく、なに言ってるし!幼なじみってだけで、キスなんかしないし!・ヒツキー、何か言ってるよ!」

「綾香さん、された俺もびっくりなんですけど：!」

綾香は小悪魔な表情を浮かべて

「八幡お兄ちゃんには、これぐらいしないと、私の優位性が無くなるもの。だからしたの」

雪乃は、氷のような表情で、結衣は、よくわからない表情をしている。吹寄は、そんな2人を見て苦笑いしていた。

陽介や完二、材木座、戸塚は、アハハと笑いながら関わろうとしない。

「そんなことより、さっさとクラスに戻ろうぜ。余鈴もなつたんだから、すぐに本鈴になる。それに俺達は制服に着替えなといけないだろうが!」

八幡の一言で、陽介達も綾香も自分達が今、置かれている立場を理解し、慌てて着替える羽目になった。

その日の放課後、男子テニス勝負の話を聞き付けてきたテニス部長が、2―F組から奉仕部へ向かう八幡のところへやって来た。

男子テニス部部长、澤部 彰。3年生。少しでも男子テニス部を強

くしようと日々奮闘中である。そんな中、八幡と綾香と葉山と三浦のテニス勝負を聞き付けてきたようだ。

「2―F組の比企谷八幡君だよね？」

「はい、そうですけど、何か？」

「俺は、男子テニス部の部長をやっている澤部と言うものなんだが、彩加からも話は聞いている。比企谷君、男子テニス部に入ってもらえないだろうか？」

なんと男子テニス部の勧誘である。男子テニス部は、ただでさえ弱小なのに自分達まで抜けたら彩加に迷惑がかかると言われた。

八幡はテニスは、七海と一緒に練習をただけである。それでも彼女の技術を上達させるために自らも同じ練習をしていただけだ。そんな自分が男子テニス部に入っても足手まといになると説明した。

だが男子テニス部部长は、引き下がらない。

「比企谷君、君には才能がある。だからその才能を……」

「すみません、澤部部长。いえ、その自分、奉仕部という部活に入ってます……勧誘はうれしいのですが……」

「まあ、知らなくても当然じゃないんでしょうか。部員も俺を含めて3名ですし」

「3名の奉仕部……うーん、わかった。君の意見を尊重させてもらうよ」
残念な表情をしながら澤部部长は八幡のもとから去っていく。彼もちよつと心が痛い、今は奉仕部に参加されている以上は、他の部活に入るわけにはいかない。

八幡は、去っていく澤部部长に一礼をしてから奉仕部の教室へ向かう。

奉仕部の部室にたどり着いた八幡は、扉を開いて入る。

「雪ノ下、由比ヶ浜はもう来てたのか」

雪乃がいつものように本を読んでいたが、八幡の方へ向いて

「……………キス谷君来たのね」

「キス谷君って……俺がキス魔みたいじゃねーか！」

「違うのかしら？」

「ヒツキー！あの綾香って子、なんで『八幡お兄ちゃん』って言うてるの？実の妹じゃないのに！」

「あのな、幼なじみの親友の妹が綾香なんだ。その親友と共に、小さい頃から一緒に育ってきたようなものだ」

綾音の部分をあえて親友にすり替えたのは、今、恋人の妹ですとは説明がしづらいのも事実であるから。

「親友…まあ貴方にあれだけの親友がいたのは、驚きの連続だったわね。嘘であそこまでの人数はあつまらないだろうし」

雪乃は、考え深い感じで言ってくる。結衣はそれでも

「それでも…異性の幼なじみであることには変わらないし」

結衣がまだ綾香の事を聞いてきそうな感じがした八幡は、話を強引に変えてきた。そう戸塚の依頼の他に見回りの件についてだ。

「見回りの件だが、あれはどうなった？」

「滞りなくやれているわ。比企谷君が心配しなくともね」

「あたしとゆきのんとせいりんの3人である程度は調べられたの。見回りはちゃんとやってるから」

「なるほど…」

「生徒会と教職員からは続けるように言われたわ」

「ふーん…で…何かはわかりそうなのか？」

「…そこまではまだ…至らないわ」

「そうか……」

八幡は腕を組ながら考える。そんな姿を見た雪乃はちよつと笑う。

「な、なんだ雪ノ下、なんで笑ってんだよ？」

「いえ、別に。ただ、貴方がいつもにまして真剣な表情で考えていたから、つい…」

「……真剣な表情って…まあ、いい。…雪ノ下、由比ヶ浜、俺も奉仕部の一員だ。受けた依頼は必ずこなすさ」

「ヒツキーがやる気出したし」

「貴方に言われるほどではないわ。私や由比ヶ浜さん、吹寄さんでこれまでやってきのよ」

「わかっている」

結衣が笑いながら八幡と雪乃に

「これで、なんだか奉仕部らしくなってきたね」

「別にこの男がいなくても奉仕部は奉仕部よ」

「……はあく、相変わらずの毒舌らしさですね」

何だかんだで、いつもの日常のように奉仕部の時間は過ぎて行ってしまう。

第2章―奉仕部への依頼編 第2章―35―第1話―平塚春雪。

―――屋上

男は、女性教師に押さえられる。自殺しようとしている生徒がいるのだから止めるのが当たり前だ。

「こんなところで死んだら、一生負け犬なままだぞ！悔しくないのか、諦めるのか？」

「もう疲れたよ……生きるのにも何か……どうでも良くなったし……」

「馬鹿を言うな春雪！お前が死んだら姉さんや義兄さんが悲しむぞ！」

「静さん、母さんや父さんは……僕なんか大事じゃないよ。優秀な姉さんや妹にしか目はないよ」

男の名前は、平塚春雪、高校2年生。総武高校では、陰キャラ側の人間である。容姿はオタクっぽい雰囲気である。オタクっぽい雰囲気ではあるが、過去に3回彼女がいたのだから驚きである。それは中学時代はテニス部に所属していて、好成绩を残しているのもあるだろうし、勉強もトップクラスなのだから。だが長続きはしなかった。サッカー部のイケメンこと葉山に取られたからだ。

直接葉山に取られたわけではない。サッカー部の活躍もあり、総武東中ではサッカー部が人気上昇していた。その中で葉山が活躍していたこともあり、葉山人気が上がっていったのだ。

総武東中では、サッカー部よりもテニス部が強かったはずだが、あまり見向きもされなくなった。

そして4番目の彼女は、高校で初めて出来た彼女だったが、結局は同じような理由で別れることに。春雪の中の何かが切れたのだ。そして音と共に崩れ去っていく。春雪は、高校に入ってイジメられている。それでも彼女のいる手前言わなかった。言って彼女に心配なんかさせたくなかったからだ。

間接的にまた葉山に彼女を取られた形になってしまった。

だから葉山憎しの憎悪がわき出てきている。しかし一方で諦めた感じもあり、生きる気力も失い自殺も選択肢に入れていた。

「スポーツも勉強もいくら頑張っても、父さんや母さんの目には止まらない。学校でも家庭でも居場所の無い僕は…：必要の無い人間なんだ。だから…：死なせてくれ、静叔母さん…」

春雪の叔母である平塚先生は、思い切り彼のほっぺたを叩いて、そして抱き締めた。

「この世に死んでいい人間はいない。無駄な命なんか無いんだ。お前が死んで悲しまない人間がいらないだ？姉の雪子はどうか？一番お前を可愛がっていたあいつを悲しませるつもりか！」

「…あ…っ…うっ…」

春雪は、姉雪子の事を思いだし、涙を流した。彼女は、家族の中でも春雪を可愛がって世話していた。中学時代、彼女にフラれた時も慰めていたのだ。

春雪も雪子が悲しむ姿は見たくないのだ。彼女にはずっと笑っていてもらいたいからだ。

「僕は…何て事を…うっ…！」

「春雪、我慢する必要は無いぞ。私のここで泣いて良いからな」

春雪は平塚先生の胸で大泣きした。今までは泣いてたまるかという気持ちが強かった。だが今日、彼女にフラれたことで、我慢する理由が失った。だから一時は死を選ぼうとした。だが姉雪子の顔が浮かび死ぬ事が怖くなった。しばらく泣いて落ち着きを取り戻した春雪は平塚先生に謝る。

「静さん、ごめんなさい」

「わかればいい。だがお前の障害となるものを除去しなくてはな。あいつらに頼むことにするか。それと姉貴達に関しては、雪子に言ってもらうとして…」

「あ、あいつら？雪子姉さんに言ってもらう？」

「なくに、お前のためになるところにだ」

春雪はそして平塚先生によってとある教室へ連れていかれる。

そこは何と奉仕部であった。平塚先生は、ノックをせずに教室の内

部に入る。

「平塚先生、入る時には、ノックをしてくださいと何度言えばわかりますか？」

「悪い、悪い。緊急の依頼が入ってな。それでついついな」

八幡と結衣は、自分達の事をしながら平塚先生の話を聞いている。

「入って来なさい、春雪」

「はい、静さん」

廊下にいた春雪が奉仕部へ入って来た。八幡と結衣もこちらを向く。

「雪ノ下、比企谷、由比ヶ浜、揃っているようだな」

「平塚先生、彼は依頼者なのですか？」

「ああ、私からの依頼だ。彼の名前は平塚春雪、私の甥でもある」

「平塚先生、それでその甥の依頼とは何ですか？」

「比企谷、先生は嬉しいぞ、やる気をだしてくれなことをな」

「やるかどうか、まだ判断をしませんか？」

「まあ、そう謙遜しなくてもいい。それでお前達に依頼したいのは、甥の春雪の自立と自信を取り戻してほしいのだ」

「自立と自信を回復させる事ですか」

雪乃は、春雪を見る。だが彼に睨まれる。

「平塚先生、彼は何故睨んでいるんですか？」

「アハハ、これには、色々わけがあつてな…」

平塚先生は、事の経緯を話す。それも春雪が許した範囲で。

「なるほど、先程…フラレたから自殺しようとしたと…」

「自殺するって、フラレただけで？」

「由比ヶ浜、お前な…男にも色々いるんだよ。すぐに乗るかえるヤツもいれば、引きずるタイプも。それに付き合ってたんだろ、それで振り方も…その女…最悪だな」

「とにかく、春雪の事は任せろ！」

そう言つて平塚先生は奉仕部の教室から去っていく。

「雪ノ下、どうするんだ、この依頼？」

「平塚先生から直に頼まれた依頼。やらないわけには、いかないで

しょう」

「ゆきのん、具体的にどうすれば良いのかな？」

雪乃と結衣は、八幡を見ている。つまり助け船を出せみたいな感じである。八幡は、ため息を吐いてから春雪に話しかける。

「俺は、2ーF組の比企谷八幡だ。なんだ、よろしくな」

「僕は先程叔母から紹介があった、平塚春雪、クラスは、2ーB組…」

「私は、雪ノ下雪乃…2ーJ組」

「あたしはヒツキーと同じクラスで由比ヶ浜結衣って言います」

自己紹介を終えた後、春雪は雪乃や結衣と話していたようだが、言葉に鋭さが混じっているのだ。彼の中に信用しないというのが感じ取れる八幡であった。

奉仕部の活動が終わり、春雪は1人で帰っていく。雪乃と結衣は先に出て、八幡は戸締まりをしてから出る。

「……あの平塚の目…あれは…女子を信用していない目…。雪ノ下や由比ヶ浜を見る目と俺を見る目が違う…。さて…どうしたものか…」

八幡は、誰もいない黄昏に染まる特別棟の廊下で真剣に考えていた。

考えながら歩いていると、めぐりと偶然出会った。

「あら？八幡君どうしたの、そんなに真剣な顔で？」

「あ、めぐり先輩…今帰りですか？」

「うん、生徒会のお仕事をさつき終えて帰るところだよ」

「そうだったんですね」

「八幡君、また1人で抱え込んで無いよね？」

「……めぐり先輩…にはわかってしまうかな…。今、ある男子生徒の依頼で悩んでいます」

「依頼…それって、奉仕部のお仕事なの？」

「まあ、そうですね…。平塚先生からの直の依頼だから、やらないわけにはいかないんですよ」

「平塚先生から…」

八幡とめぐりは、一緒に帰りながら今回の件を話す。

「その平塚君の自立と自信を取り戻すのが依頼なの？」

「ええ、4回フラレたつてのは、どうもあの葉山が関連してるみたいで
すし」

「葉山君が？」

「直接じゃないですよ、間接的ですが…。彼女がまあ葉山に夢中にな
ってふったんでしようが」

八幡は、過去に告白してきた女子達の事が頭に浮かんだ。形はどう
であれ、ふったのには違いないのだから。

「うくん、そればかりはどうしようもないわね」

「これは…ですね。本題はイジメの方ですね」

「イジメ!？」

めぐりの表情が曇り始めた。当たり前だろう。めぐりは生徒会長
であり、そういう問題は早急に対処しなければならぬ案件である。
なのに生徒会にそんな案件は上がって来ていない。八幡に聞くまで
わからなかった。人一倍頑張っているめぐりであつても全てをカ
バーはできない。だから八幡は

「めぐり先輩、1人で抱え込まないで下さい。少しは俺を頼って下さ
い。先輩には恩がありますから」

「八幡君…：そうね…綾香さんに差をつけられたままでは嫌だしね」

「…それは…まあ…」

めぐりは、綾香のキス事件を言ってるのだと八幡はすぐにわかっ
た。めぐりは身体を八幡に寄せてきた。

「ちよ、ちよつとこれはまずいですよ…誰かに見られたら大変なこと
になりますよー!」

「綾香さんは良くて私はダメなの？」

「それは…」

めぐりの上目遣いに、八幡はドキツとしてまうが、

「ふふっ、イジメの件は生徒会と教職員で何とかやってみせるから」

「めぐり先輩、無茶だけはダメですよ。奉仕部としても助力します」

「ありがとう、八幡君」

八幡とめぐりは、これからの事を話ながら帰っていく。

第2章―36―第2話―雅史のおめでた。

――総武高校↓ジュネス内のサイゼリヤ

「それじゃあ、また明日」

「ええ、八幡君、また明日ね」

とある交差点で八幡とめぐりは分かれる。彼は自転車の速度を少し上げてある場所に向かう。

ある場所とは、陽介の父親が支店長を勤めるショッピングモールへ行く。

ショッピングモールの名前は、ジュネス。今急速に業績を上げて全国展開を始めているのだ。そのジュネスの中に入っているサイゼリヤに向かう。

何故サイゼリヤに向かうのは、親友の雅史から呼び出されたからである。

「雅史、大事な話があるとか言ってたけど、なんだろうな」

そんなことを考えながら、ジュネスの自転車置き場に自分の自転車を置いて、サイゼリヤを目指す。

サイゼリヤジュネス支店に着き店の中に入る。そして雅史を探す。がすぐにわかった。正式には雅史と女子生徒が1人いるわけだが。その女子生徒は、氷川静江である。

海浜総合高校の四大美少女と呼ばれる1人である。

八幡や雅史、緑子達と同じ総武中出身である。

静江は中3までは、地味地味子と言われてイジメられていたが、八幡達がイジメつ子を退治した。その後八幡や雅史が、緑子達と共に彼女のイメチェンをやって、美少女に生まれ変わった。

総武中卒業式の日八幡に告白しフラレた1人でもある。

「雅史、それと氷川…待たせたか？」

「いや、俺達もさつき来たばかりだから、心配はしなくてもいいよ」

「八幡くん、お久しぶりだね。卒業式以来会ってなかったね」

「そうか雅史、ありがとな。氷川は久しぶりだな。そうだな…卒業式以来だな。で、それで俺に大事な話があるとか？」

「ああ」

その前にサイゼの店員が注文を取りにきたから、八幡達は飲み物を注文する。

「八幡、真面目に聞いてくれ。俺達付き合うことにしたんだ」

雅史の言葉に驚きはなかった。大方は、サイゼに入って来たときから予想はついていた。雅史が女子と2人だけという展開はなかったからだ。あったとしても緑子、七海、かおりとぐらいであったからだ。

でも今回は違う。雅史の真剣な表情と静江が恥ずかしそうにしているが、幸せオーラも出ているのが表情でわかるのだ。

「雅史と氷川が…2人ともおめでとう！お似合いだな」

「八幡が…お前がそんなんじゃないかと思えないとも考えたんだ」

「はあく別に俺なんか気にせず付き合っただけなのに…雅史、お前ってやつは…で、どちらから告白したんだ？」

「俺からだよ」

「そうか。お前からって初めてじゃねーか」

雅史達のサッカー部に静江がマネージャーとして入部してきたことが始まりだった。

静江は、高校からは本当に変わったからサッカー部のマネージャーとして入ったのだ。

雅史も静江に世話されていくうちに恋愛感情を持つようになった。静江も同じく恋愛感情を持つように。

そして雅史の告白により、自分達が両思いだっただけで、付き合うことになった。

「私ね、最初は八幡君に認めて欲しくて、海浜サッカー部のマネージャーになったの。でもマネージャーとして活動していくうちに雅史と話していると彼に惹かれていったの」

「俺もだ」

八幡は、雅史& a m p・静江の出来立てのカップルを見ていて、嬉しくもあり羨ましくもあった。

「雅史、静江…末長くお幸せにな」

「ああ、わかってる」

「ありがとう、八幡君もお幸せに」

「ああ、ありがとう」

八幡は、雅史、静江にとあることを聞いてみた。

「2人とも、海浜で女子生徒を狙ったパンチラ……盗撮事件とかあるか?」

「盗撮事件!?!」

「え!?!」

2人は驚いた表情でお互いを見ている。

「何で盗撮事件を知っているんだ?」

「そうだよ、海浜の事件はまだ表には出ていないよ」

「いや：海浜でまさか盗撮事件が起きてるとはな。そつちは解決したのか?」

「なんとかね。生徒会、教職員、PTAが協力して最終的には教育委員会、警察まで入って解決したかな。まあ後は七海のお父さんや俺のじつちゃんも介入してくれたしね」

「それでも被害を受けた女の子の心の傷は一生消えないもの」

静江のその言葉に八幡ははっとさせられる。

「さっきの八幡の態度からして、まさか総武高校でも起きているのか?」

「まあな。総武は事件というより、階段の下から覗いてるみたいな感じであって、俺は見回りを兼ねて調べているんだが、中々な」

「なるほどな」

「階段の下：海浜にもそんな男子はいるわね」

「そうだな、そういう輩はどこにもいるもんだな」

雅史と静江が苦笑いを浮かべながらそう言った。総武高校では、めぐりが生徒会と教職員を動かして、校長や教頭をも説得し動いているし、奉仕部も補佐としてやっているのだ。

ちなみに海浜の事件解決の立役者は、玉縄副生徒会長である。今回の事件解決で次期生徒会長も決まったようなものだ。

「八幡、危ない真似はするなよ。八幡に何かあったら綾音に申し訳な

いからな」

「わかつてる」

「八幡君、無茶だけはしないでね。みんなが心配するから」

「わかってるから、お前達こそ無茶するなよ」

八幡と雅史、静江の3人はしばらくそんな話をしていった。そして30分くらいしてから、サイゼから出てたのであった。

第2章―37―第3話―比企谷家の団欒。

――比企谷家

夜、八幡、小町、綾香でテレビを観ていた時だ。

夜のニュースの一面に海浜総合高校で盗撮事件の事が報道された。もちろん実名、顔写真が乗せられる訳がない。ただわかった事は

盗撮グループの人数は、15人。

主犯は3年生の3人。

2年生の9人。(主犯と同じ立場5人・パシリ4人)

1年生の3人。(全員パシリ)

主犯各の8人が逮捕させられ、退学させられる。

パシリのこと7人は停学処分となつてなつたようだ。パシリの4人は自主退学している。これは後々にわかることだが。

ニュースを見ていた綾香と小町が嫌な表情をしている。

「…盗撮…」

綾香は八幡の左手を握ってきた。当たり前だろう。彼女に限らず盗撮されるのは誰でも嫌なことだ。一度ネットに出回れば無くすのは不可能に近い。

「八幡お兄ちゃん、怖い…」

「綾香…ごめんな…俺が不甲斐ないばかりに」

「綾香、盗撮されたの？」

「小町…そういう訳じゃないけど……」

綾香は元氣なく頷いた。小町は綾香の頭を撫でた。

「俺は、総武ではそんなことさせないから。だから綾香…」

八幡はそう言うと、綾香の頭を撫でた。すると彼女は頬を赤らめた。そんな状況を見ている小町は

「お兄ちゃんと綾香は、どこまで進展したのかな？風の噂で、小町さ聞いたんだよね。2人がキスマスまでする仲まで進展したって！」

八幡は、小町の発言で吹き出そうになった。綾香の方はますます赤くなっていく。

「小町、そんなことどこで聞いたんだ？風の噂ってどこで？」

「総武中のネットワークだよ、お兄ちゃん」

小町に総武中ネットワークで知ったと言われ、あの子の誰かが話したのかと思うしかなかった。

「それにしてもお兄ちゃん、近頃なんかやる気を出したみたいで、妹としては鼻が高いよ。あ、今のはポイント高いよね？」

「何のポイントだよ」

八幡はそう言いながら、ソファアームに座りテレビのチャンネルを変える。

「嫌なニュースはあまり観たくないからな。だが観たい番組が無いな。小町、綾香、なんか観たいのがあれば観ていいぞ」

「うんじゃーね、アレを観ようつと。綾香も観るよね？」

「うん！」

小町と綾香は、何やらイケメンが多数登場する番組を見ている。なんだかんと言っても年頃だと感心しつつ、八幡はソファアームから窓際の椅子に座り、外を眺める。

外には星空が広がっている。それを眺めていると、母親が話しかけてくる。

「何、星空を見てポーツとしてるのよ？」

「別に、ちよつと考え事してるだけだよ……」

「考え事？学校で何かあったの？」

「うん……ちよつとね……」

「あんだ、また他人のために走り回ってるの？」

「な、なんでわかるんだ？」

「はあく、私はあんだと小町の母親よ。何年一緒にいると思ってるのよ！中学時代に綾音ちゃんのために走り回ってた頃の顔してるから……ちよつと心配になったのよ」

中学3年の時、綾音のためにかなり八幡は無理を押し通していた。何でもかんでも自分1人で抱えてしまって周りに頼らなかつた。

それで、倒れてしまった。

学校の帰り道、八幡は倒れた。それを発見したのは、陽乃とめぐりだつた。

そして2人によって病院に運ばれた。彼は綾音からも仲間達からも、周りをもっと頼ってくれ、仲間達を信用してくれと言われたのだ。八幡は、はっと気がついたのだ。綾音の件で何でも自分がしないといけないと考えていた自分に気がついたのだ。

かつての自分は、周りの仲間達と共にやってきたことに。

総武中の体育祭、文化祭を次々と成功させたのだ。体育祭では、体育祭実行委員会の委員長として。文化祭では、文化祭実行委員会の委員長として、仲間達とともに頑張った。八幡が努めたその年が総武中の最高の体育祭、文化祭と呼ばれるようになる。

八幡を動かした原動力は、〃全て綾音のために〃というものであった。

みんなも八幡の頑張りに感服しているので、彼を支えようと周りも頑張ったのだ。

だから八幡は、一人でやっていたのを悔い、みんなでやることを改めて誓ったのだ。

今でもその気持ちは忘れていない。

だから

「母さん、心配しなくてもいいよ。あの時のようなヘマはしない。他人に頼る時は頼るから。倒れるような事はしない」

「八幡、あんた…全く言うようになったんじゃない」

「…俺だって、もう止まってるわけにはいかないしな」

八幡は、外の星空を見ながらそう言った。綾香達は、もう歩みだしているのに、自分だけが止まっているわけにはいかないのだ。

この先に、彼女達に答えを出さないといけないのだから。

後悔することだけはしたくない。

ちゃんと答えを出すために。

前に進むしかないのだから。

第2章―38―第4話―将来の事。

――総武高校・屋上。

5月も中旬から下旬に入り、梅雨入り前のムシムシした暑さに覆われている。

今日は、陽介達と昼ごはんをすぐに食べたなら、屋上に来ていた。ちよつと考え事をしたかったためでもある。

それは、進路についてである。

八幡は、大学進学は規定路線である。だがその先はまだ決まっていらない。

今は、綾音の夢を継ぐ考えもあるが、本当にそれで良いのかって迷いもある。

綾音は八幡のやりたい事をやっていいと夢の中で言われたが、それでも迷いはあるのだ。八幡自身は、まだ何になりたいのか、まだ分からないのだ。

だから中学で将来を見据えていた綾音を凄いと思っていた。

だから綾音に相応しくなるために必死に頑張った八幡。彼女の隣に立つ男としておかしくないように頑張ったんだ。

「まだ…俺は…何をやりたいんだろ」

最悪大学に行つてからも将来を考えることはできるが、それで見つかるかどうかわからない。

八幡は、職場見学希望調査票を見ながら色々な事を考えていた。すると風が急に強く吹き、その職場見学希望調査票が飛ばされる。

「やばっ！」

その吹き飛ばされた調査票は、とある女子生徒が見事キャッチする。その女子生徒は、髪が長く背中まで垂れた青みがかった黒髪。リボンはしておらず開かれた胸元。余った裾の部分が緩く結びこまれたシャツ、蹴りが鋭そうな長くしなやかな脚。そして、印象的なのがぼんやりと遠くを見つめるような端気のない瞳。泣きぼくろが一層倦怠感を演出していた。同じクラスの川崎沙希である。

「これ、あんたの？」

「川崎か、ありがとう」

「何、ぼさつとしてんのさ」

川崎から調査票を受けとる。川崎が屋上のフェンスの方へ行く。彼女は、いつも1人である。誰かと一緒にいるのをほとんど見たことがない。好きで1人でいるように見える八幡であった。

「川崎っていつも屋上に来るのか？」

「別に、気分的に今日は屋上にいたい気分なんだよ。あんたには関係ないでしょ」

「まあ、そうだよな」

川崎は、1人にさせる的な感じで八幡を見ている。彼はすぐにそれを理解し屋上から出ることにする。その時、風が吹いて川崎のスクートを巻き上げる。その光景を八幡は見てしまう。

「黒のレース、だつて？」

川崎は、微動だにせずにこう答えた。

「バカじゃないの」

そう川崎に言われたが、彼女の黒のレースが頭に焼き付いて離れなかった。

再び八幡は、平塚先生に呼び出されることになる。呼び出されたこととはわかってる。5時間目に集めた職場見学希望調査票の事である。見学希望場所を書いていなかったからだ。迷って書く事が出来なかったのだ。

ため息を吐きながら職員室へ行こうと思つたら吹寄に呼び止められた。

「比企谷君、ちよつといいい？」

「吹寄？なんだ？」

「ちよつと話したいことがあるの」

「話したいこと？俺に？」

吹寄は何か頼みたい表情で見ている。八幡は平塚先生に呼ばれているので、急いでる事を伝える。

「わかったわ。また今度話すわ」

吹寄の寂しそうな表情が八幡は忘れなかった。悪いことをしたな
と思いつつ、平塚先生が待つ職員室へ向かう。

――職員室

職員室の一角には応接スペースが設けられている。革張りの黒い
ソファにガラス天板のテーブルが置かれ、パーテーションで区切られ
ていた。その側に窓があり、そこからは、図書館が見渡せた。

開け放たれた窓からうららかな初夏の風が入ってきて、一切れの紙
が踊る。

「もうすぐ、夏だな…」

「何が、もうすぐ夏だ!」

そこにパンツスタイルの平塚先生がやってくる。自分の机の椅子
に座ると、タバコの箱から一本取り出して口元に持っていていきそれを加
える。

「比企谷、私は何を言いたいのか、わかるな?」

「職場見学希望調査票のことですよね、あれではダメですよね?」

「わかっているのなら、何故書かない?」

「将来…何の職種につきたいとか、まだ正直わからないです」

「わからないか…漠然に何になりたいとかないのか?」

「…だから…良くわからないんですよ…あの日からずっと…」

「…あの日からずっと?」

「いえ、なんでもありません」

綾音が亡くなるまでは、彼女の病気を治すために医者という選択肢
も入っていた。彼女が元気な頃は、彼女と共に人々の役に立つ職種に
つきたいと思っていた。

だが、綾音が亡くなってから、そういう夢が無くなってしまった。
いや抱けなくなってしまうたのかもしれない。八幡の中の時間は少
しずつ動き出した。でもこういう事は、まだまだだと言ったこと
だった。

「まあ、比企谷、お前は少しは成長しているようだな」

「どうも…」

「だが、まだまだ成長する必要がある！」

「左様ですか」

「それと春雪の件も頼むぞ」

「……はい」

八幡は、そう返事して職員室から出るのであった。

第2章―39―第5話―久方ぶりの奉仕部。

――職員室↓特別棟・奉仕部の教室

八幡が職員室から出てすぐに、スマホの着信が鳴る。知らない番号だったが、彼はすぐに通話ボタンを押す。

「もしもし、どちら様？」

「ヒツキー？一体どこにいるわけ？」

「どこって、奉仕部へ向かっている。というか由比ヶ浜、なんでお前が俺の番号を知っている？」

「電話番号、ゆきのんから聞いたし！」

葉山、三浦とのテニス勝負の時、雪乃から電話があった。その時、彼女は平塚先生から聞いたと言っていた。その彼女から由比ヶ浜が番号を聞いてもおかしくはないだろう。

「で、なんか用なのか？」

「ヒツキー、近頃部活に来ないし…何かあったのかなって」

「別に何も無いが？」

八幡は歩きスマホをしながら喋っている。特別棟に入るとガラリと人がいなくなる。

「もう特別棟に入ったからもう切るぞ」

「うん、わかった」

八幡はスマホの通話を切る。そして歩くスピードをあげて、奉仕部の教室に向かう。

奉仕部の部室の扉を開けると、いつものように雪乃と結衣がそこにいた。

雪乃はいつものように本を読んでいて、結衣はスマホをいじっていた。

「よお、久しぶりだな」

「比企谷君、こんにちは」

「ヒツキー、久しぶり…」

「貴方、もう来ないと思ったわ」

雪乃は、再び毒のある言い方をしてきた。相変わらずの雪乃ぶり
で、ある意味安心した八幡であった。

彼はいつもの自分の椅子に座る。本を鞆から取り出して読み始め
る。しばらく本を読んでいると、スマホにメールが送られてくる。

どうやらスパムメールのようだった。八幡はすぐにスパムメール
を消して、顔を上げると、結衣がスマホ片手に曖昧な笑みを浮かべて、
うつすらと誰にも聞こえないような、けれども深い深いため息をつい
ていた。息を吐く音は聞こえないが、胸が大きく上下したので、その
深さに気づいてしまう。

「由比ヶ浜、どうかしたのか？」

「あ、うん……なんでもない、んだけど。ちよつと変なメールが来たか
ら、うわって思っただけ」

「比企谷君、裁判沙汰になりたくなくなかったから今後そういう卑猥な
メールを送るのはやめなさい」

内容がセクハラ前提で、しかも犯人にされる八幡。彼に送られて来
たのも、セクハラまがいのスパムメールだったからだ。だからと言っ
て犯人にされる覚えはないのだから。

「なんで、そんなことをしないといけないんだ？意味がわからない」

八幡がそう言うと、雪乃は勝ち誇った顔で肩にかかった髪をさらつ
と掻き上げた。

「犯人はみんなそう言うわね。【証拠はどこにあるんだ】【大した推理
だ、君は小説家にでもなった方がいいんじゃないか】【殺人鬼と同じ部
屋になんていられるか】」

「おい：最後のは被害者の台詞だろ？」

雪乃は自分で墓穴をほった。だがそれを認めようとせず、八幡に惚
けた態度を取る。それどころか本をパラパラとめくっている。どう
やら推理小説を読んでいたようだ。

「ヒツキーは違うと思うよ」

結衣が突然そんなことを言った。すると雪乃が本をめくっていた
のを止める。

「んーなんちゆうかさ、内容がうちのクラスのことなんだよね。だか

らヒツキーは無関係って言うか…」

「無関係って俺はお前と同じクラスなんですが」

「なるほど、では比企谷君は犯人じゃないわね」

「それは何か…俺がクラスでぼっちだからか？」

「まあ…それは言えてるかしらね」

同じクラスの戸塚とは話す間柄だか、親友と呼べるものではない。連絡先を知っている材木座、陽介は他クラスだから関係ないし、綾香や完二は1年生だから問題外。

八幡がそんなことを考えていると、結衣が

「……まあ、こういうの時々あるしき。あんまり気にしないようにする」

そう言つてスマホを制服のポケットに入れた。その様はまるで自分の心に蓋をするかのようなものであった。八幡は何だか重々しくもあつた。

彼に届いたのは、あくまでも宣伝用スパムメールであつたが、結衣のはクラスのことのようだ。

クラスからのメールが来ない八幡にとっては、結衣にきたメールがどんなものか知ることには出来ない。それを彼女から聞き出すことは、安易ではないだろう。

楽しいもの、嬉しいものであるならば、人は他人に教えたがるが、逆に不愉快な事が書かれていれば、他人に言いたくはないだろう。結衣はあれ以降、スマホを手取ることはなかった。

「……暇」

暇つぶしのアイテムであるスマホが封じられてたことにより、結衣はだらーっとだらしくなく椅子の背もたれに寄りかかる。そうしていると、胸が強調されていて、男子達は目のやり場に困るだろう。だが八幡は別に平常心は失われない。

緑子や綾香など巨乳の女の子をずっと見ていたこともあり、慣れているのだ。その点雪乃は、病気で痩せこけてしまった綾音よりもないので、目のやり場に困ることはない。

彼女は、本を閉じながら結衣を諭すように言う。

「することがないのなら勉強でもしたら？ 中間試験まであまり時間がないことだし」

八幡は、雪乃がそう言ったことで、もうすぐ中間試験があることを思い出した。だが慌てる必要は無いのだ。彼はちゃんと授業で大事な場所なんかは、頭に覚えているのだから。それは雪乃も同じようなものなんだろうと、彼は思った。なんせ1位を争うライバルだから。

「比企谷君、今度こそ…貴方を引きずり下ろすわ」

「ぬかせ！俺はお前に負けるつもりはない。今回も1位を取らせてもらおう！」

八幡と雪乃の台詞に結衣は、アハハと苦笑いをしている。どうやら彼女も試験の事を忘れていた表情をしているのだ。そして「勉強とか、意味なくない？ 社会に出たらつかわないし…」

【は……？】

結衣の言葉に八幡と雪乃は、互いにそんな声をあげてしまったのだった。

第2章―40―第6話―こうして由比ヶ浜結衣は、勉強することになった。

――
八幡と雪乃は、結衣が言った言葉が信じられない。

少なくとも先程の台詞は、とても高校生がいうものではない。驚いた表情で雪乃が

「由比ヶ浜さん、貴女、本当にそう思ってるのかしら?」

「雪ノ下、こればかりは同感だぜ」

結衣は、馬鹿にされたと思い、やっきになって反論してくる。

「勉強なんて意味ないってば! 高校生活短いし、そういうのにかけてる時間もつたいたいじゃない! 人生1度きりしかないんだよ?」

「あんな由比ヶ浜、将来のために勉強するんだろうが!」

「それじゃ、ヒツキー将来何になるのか決めているの?」

結衣は、八幡の反論できなさそうな事を聞いてきた。将来のことは、まだ何もわからない。まだ迷いの中にいるのだから。

「そ、それはだな…」

「ほらヒツキー、何も言えないじゃない。なりたいことがわからないなんて、勉強しても意味なくない?」

「意味ないってお前…!」

「本当に、意味がないと思うし…」

「金子みすゞが聞いたら怒るでしょうね」

雪乃は、ため息を吐きながら額に手を当てた。

「由比ヶ浜さん、貴女ね、さつきから勉強は意味はないって言ってたけど、そんなことないわ。むしろ自分で見いだすものが勉強というものよ。それこそ人それぞれ勉強する理由はちがうでしょうけど、だからと言ってそれが勉強すべてを否定することにならないわ」

雪乃の言っていることは、正論である。人それぞれ勉強する意味は違う。何になりたいのか、それだけで勉強する意味になってくる。

八幡の場合は、綾音と一緒に歩みたい、一緒に並んでおかしくない

ように、勉強もスポーツも頑張っていたのだ。その努力が今も身に付いているのだから。

「ゆきのんは、頭いいからいいけどさ……。あたし、勉強に向いていないし、周り、誰もやってないし……」

その小さな声に雪乃は、目が細くなる。一気に温度が低くなるような感じになっているのだ。おまけに静まりかえるような感じになり、結衣ははっとなって口をつぐむ。以前、彼女にきついことを言われたことを思い出したのだろう。そして全力で自身のフォローに入る。

「や、ちゃ、ちゃんとやるけどー……。そ、そう言えば！ヒツキーは勉強しているの!？」

結衣は、雪乃の雷を交わすために、八幡に話を振ってきた。

「……俺はやっている。毎日コツコツな」

「裏切られたっ！ヒツキーはバカ仲間だと思ってたのに!」

「……ぷっ……クスクス……」

結衣が言った台詞に雪乃に笑われてしまった八幡。結衣の中では、彼は馬鹿としか認識されていなかったってことになるが。

「お前、さっきの俺と雪ノ下とのやり取りを聞いてなかったのか?」

「え……。何の事?」

やはり聞いてなかったようだった……。一体何を聞いていたのだろうか。

ちなみに総武高校では、テスト結果を貼り出したりはしない。本人にひっそりと点数と順位が返ってくるだけである。従って、人づてに誰かの順位を知ることになる。

八幡は、クラスで順位など知られる事はないので、1位を取ってるなど誰も思わない。

雪乃も八幡が1位という事を言わなければ、知らなかったかもしれない。まあ平塚先生がしゃべる可能性はあったかもしれないが。

「もしかして、ヒツキーって頭良いの?」

「ええ、頭の方は憎らしいけど、良いのには違いないわね」

「何故、お前が答える?」

八幡と雪乃は、1位を争っている。つまりこの中で、結衣はダントツのお馬鹿さんってことになる。

「うう……。あたしだけバカキャラだなんて」

「そんなことないわ、由比ヶ浜さん」

冷静ながらも雪乃の表情には温もりがあり、その瞳にはハッキリとした確信の色がある。それを聞き、結衣はパツと明るくなる。

「ゆ、ゆきのん!」

「貴女は、キャラじゃなくて真性のバカよ」

「うわーん!」

ぽかぽかと雪乃の胸元を叩く結衣。それを面倒くさそうに受け止めながら雪乃は短いため息をついた。

「試験の点数や順位程度で人の価値を測るのがバカだと言っているのよ。試験の成績は良くても人間として著しく劣る人もいるわ」

「おい!なんで俺を見る?つまり俺は人として劣っているというのかよ?」

雪乃はまだ八幡を見つめたままだ。

「あのな、俺は目標に向かって勉強しているんだ。ぼっちだから勉強しかないとかじゃないからな」

「へえー」

「素直になりなさい、勉強しかなかったのでしょう?」

「違うっての!……俺は、あいつに……並び立つために……」

小さな声で八幡はぶつぶつと言った。幸い雪乃や結衣は聞いていなかった。

「私はまあ……友達がいなかったから勉強しかなかったわ」

「あ、そう……寂しかったんだな」

「別に寂しいとか思ったことないわ」

結衣は、そんなことを言った雪乃を抱き締める。

「由比ヶ浜さん、暑苦しいわよ」

雪乃がそう言ったが、結衣はやめない。八幡は別にそんな光景は見慣れている。よく、綾音や緑子、七海が抱きついてたのを見てたから。だから雪乃と結衣の抱きつきも普通に見えるのだ。

結衣は、雪乃の頭を撫でながらふと口を開く。

「でもさあ、ヒツキーが勉強頑張ってるのってなんか意外よね」
「意外ってなんだよ。俺は真面目にやってきただけだ。大学にも行くつもりでいるからな。まあ夏休みになれば、夏期講習を受けるつもりでいるし」

前にも説明したが、総武高校は進学校である。従って大学進学率もかなり高い。意識が高い人間なら、2年生の夏から勝負をかけてくる。

良い予備校は、すぐにそういう人間で満員となってしまう。

八幡もとあることを考えているのだ。それは予備校のスカラシッ
プを考えているのだ。

大学進学は、元からの規定路線だったから、行くのは当然としてい
る。八幡が迷ってるのは、あくまでも大学後の進路、就職かさらに専
門の知識を学ぶのか、そんなところである。

「俺は、予備校のスカラシッ
プを狙ってる」

「すくらつぷ?」

「それなら狙わなくても今現在で充分よ。生ける産業廃棄物みたいな
ものじゃない、貴方…」

「誰が産業廃棄物か! つかスクラップにされてたまるかよ!」

「ねえねえ、すくらつぷって何?」

スカラシッ
プ、スクラップも知らない結衣。八幡と雪乃の話につい
ていけないようである。

「スカラシッ
プというのは、奨学金のことよ」

「最近の予備校は、成績がいい生徒の学費を免除してるんだよ。スカ
ラシッ
プ取って、少しでも親を楽にしたいと思ってる」

雪乃と結衣が、驚いた表情をしている。八幡は、そんな姿を見て

「うん?なんだよ、2人とも俺、変なこと言ったか?」

「貴方がそんなことまで考えていたなんて、予想外だったわ」

「ヒツキーは、そこまで考えてるんだ…あたしの進路って…:どうなん
だろう」

そう呟いた結衣は、八幡を見る。そして雪乃の袖をきゅつと掴む。

その勢いに驚いたのか、雪乃が心配そうに結衣の顔を覗き込んだ。

「何かしら？」

「あ、ううん、何でもない、ことはないか……。2人とも頭がいいからさ、卒業したら、会うことかなさそうだな、って考えちゃって……」

そう言つてたははーって誤魔化すように笑う結衣。

「そうね、比企谷君なんて絶好に会わないわね」

「ああ、そうだな、俺も会いたくないな、雪ノ下」

ずっと一緒にいることが全てではない。幼稚園から一緒だった雅史とは、高校から進む道は分かれた。緑子と七海、かおりとも高校から分かれた。

最愛の恋人、綾音とはこの現世で二度と会うことが出来ない別れをしてしまった。

生きていれば、別れと出会いは必ずくるものだから。

人はそうやって成長していくものなのだから。

八幡がそんなことを考えていた時に、雪乃と結衣は、互いのチャットのやり取りの話をしている。彼は夕陽に染まる外を見る。

しばらくすると、お菓子の話などしていた結衣があることを言い出す。

「あたし……ちゃんと勉強しようかな」

小さな声でそう言つて目線を落とす結衣。

「ゆきのんって大学とか決めているの？」

「いえ、具体的には。志望としては国公立理系だけど」

「頭いい単語が出てきた！じゃ……じゃあヒ、ヒッキーは？つ、ついでに聞くけど……」

「俺はついでか、まあいいが。俺は、東京の方の国公立だろうな」

「……東京大学!？」

「まあ……東京大学も選択肢の1つかもな」

「……うう……ヒッキーって……そんなに頭が良かったんだ」

「……比企谷君がああ東大に……くっ……私も負けるわけには……」

「うう……これは、あたしも頑張らないと……」

結衣は、雪乃から離れると、大声で宣言した。

「と、いうわけで今週から勉強会をやります！」

「どういうわけ？」

「明日からテスト1週間前は部活もないし、午後から暇だよね？」

ちなみに明日は、教育研究会があるからさらに帰るのが早くなるお約束でもある。

「じゃあ、ジュネスのサイズでもいい？」

「私は別に構わないけれど…」

「ゆきのんと2人で出掛けるの初めてだね」

「そうかしら」

「さてと…2人で勉強会、頑張れよ…じゃーな」

八幡はすつと立ち上がると、スタスタと歩き出した。そして扉を開けて奉仕部の教室から出た。

第2章―4―1―第7話―八幡は、緑子と七海と勉強会を開くことになった。

――奉仕部の教室↓自宅へ。

八幡は、薄暗くなった廊下を歩いてくつ箱に向かう。

校舎内は静寂が支配し始めていて、ひんやりさも伝わってくる。くつ箱のところまで

「さてと、中間試験のものもあるし、勉強でもするかな」

そう考えて、次はどこで勉強できるかという問題がある。自宅では、綾香や小町がいるから集中できるかが鍵である。くつ箱で靴に履き替えて、自転車置き場に向かいながら考える。

「集中できるところなら、市立図書館か…それとも…ファミレスで…どうしたものか…」

そんなことを考えていると、スマホの着信が鳴る。八幡はスマホを見ると、メールの着信がきてるのが分かる。

送り主は、緑子からだった。すぐにメールの内容を確認する。

「やつほー八幡、元気？私達はもうすぐ中間テストで部活も休みになったんだ。八幡はどう？貴方なら大丈夫なんだろうな。どうせ1位ばかり取ってるでしょうし。あ、八幡、勉強教えてほしいな〜」

八幡はすぐに返信する。

【緑子、俺達も来週中間試験だよ。そのあたりは一緒だな。1位ばかりって、こっちは、強敵がいるからな。油断すれば、抜かれかねないわ。で、勉強教えろって、海浜と総武って…習うとこ一緒だっけか？】

すぐに返ってくる。

【一緒だよ。同じ進学校だからね。だから教えてください、八幡様。教えてくれたら、お礼に良いこととしてあげるよ？】

八幡もすぐに返す。

【お礼について…何をやる気だ？話の続きは、家に帰ってからチャットで話すから、また後で】

【わかったわ】

緑子とのメールのやり取りを終えると、そそくさに家へ帰ることにした。

夜ご飯、風呂等を全て終えた八幡は、自室で緑子との会話の続きをやる。今度はチャットで。

【緑子、今、話せるか?】

【ヤッホー、八幡、こんばんは】

【こんばんは、緑子。で、勉強を教えてほしいって】

【そうだよ、教えてほしい!赤点とか取って、大会に出場出来なくなるなんて嫌だからさ】

緑子は、海浜総合高校の水泳部のエース、そのエースが赤点で出場できないとかなれば、海浜にとって相当の痛手となる。八幡もそういう結果になってほしくはない。

【わかったよ、勉強を教えれば良いんだろ?】

【ありがとう、八幡!】

すると、七海がチャットに入ってきて

【緑子、八幡に教えてもらうんだね?】

【そうよ、赤点取るわけにはいかないし、七海はどうなの?】

【私も赤点なんか取ったら、テニスの大会出られないよ…。テニスばっかりしてたからね…。八幡、教えてください】

【はあく…。お前達の近くに雅史や静江がいるだろ…。2人に教えてもらえば】

雅史と静江も海浜のトップ争いをしているぐらい成績もいい。学校の違う八幡よりか雅史達に教えてもらうのが口実がいいはず。

【雅史と静江の邪魔をするわけにはいかないからね】

【そうよね、やっとなカップル…。付き合い出したのだから、邪魔者にはなりたくないもの】

2人は、雅史達の邪魔はしたくはないようだ。まあ古くからの付き合いだから、そう言うのも分かる。

その雅史と静江は、一緒にテスト勉強をしているようだ。

【まあ…。そうだな…。雅史には幸せになってほしいからな】

【それじゃあ、八幡、教えてくれるんだよね】

【仕方がない、教えてやるよ】

【ありがとう！八幡】

【ありがとうございます】

八幡は、緑子と七海に勉強（テスト勉強）を教えることが決まった。

【で、いつ、どこで勉強を教えればいい？】

八幡はふと思う。自宅なら間違いなく綾香も参戦しかねないと思った。ならば外のどこかでやればいいと考えた。しかし選択肢を向こうに与えている。緑子と七海がどう答えるか待つしかない。

【そうだね、そうしたら、ジュネスのサイズでやろっか？】

【そうだね、なんか飲みながらも出来そうだし】

【ああ、俺は構わないぞ】

【なら、決まりね。明日からやりましょ？】

【明日？ああ、明日は教職員達の教育研究会があつたな】

【そのおかげで午前授業だけだね】

【どうせなら休みにしてくれてもいいのにね】

【七海、そう言うわけにもいかんだろ。明日、学校が終わったらすぐにジュネスのサイズに行くからな】

【、また明日】

【了解しました。明日、サイズでね】

緑子と七海の了承が取れた。やり取りを終えると、スマホを机に置く。そして机の上に置いている綾音の写真を見る。

「緑子と七海と勉強会を開くことになったよ。昔は綾音と雅史を含めたメンバーでやってたよな」

昔の思い出に浸る八幡。だが昔の思い出ばかりに浸っているだけではない。前に進む決心をしたのだから。

「さて、俺は俺で予習と復習をやるかとするか」

八幡は机に向かって勉強をすることにしたのだった。

第2章―42―第8話―勉強会。緑子達と雪乃達の遭遇。

――総武高校↓ジュネス内のサイゼ

翌日の授業は午前中だけ。午後からは、教職員達の市内の教育研究会があるためだ。

来週中間テストがあるため、浮かれて帰る人間は、よほどテストに自身があるのか、はたまた諦めているのかはわからないが。

雪乃と結衣は、どこかで勉強会を開くらしいが、八幡には別状関係がなかった。

彼には、彼と約束した緑子と七海と勉強会を開くことになっているからだ。学校にいても何もないので、そそくさにジュネス内のサイゼに向かうことにした。

ジュネス内のサイゼに到着すると、一番奥のテーブルに座ることに。ここなら勉強会をやっても店側には迷惑はかからないと判断したためだ。

まだ緑子や七海は来ていない。店員さんにコーヒを注文しゆつくりとしながら待つことに。

八幡がコーヒを飲み干す前に緑子と七海とかおりが来たのだ。

「八幡、待った?」

「いや、大して待ってない。ってかおりも来たのか?」

「いや、あたしの場合、マジで赤点になりそうなんだわ。だから八幡に教えてもらおって思ったわけ」

「赤点って…」

「そう言うことだから、教えてね、八幡」

八幡の隣に緑子が座って、対面に七海とかおりが座った。3人もそれぞれ別の飲み物を頼んで、一息してから勉強会を始める。

八幡はまず緑子から教えていく。隣にいるから教えやすいというのはあるが。七海は、かおりにわかる範囲で教えているようだ。

約1時間が過ぎた時、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「ゆきのん、サイゼでなんか食べようよ」

「別にどこでも構わないわ。やることは変わらないから」

八幡は、雪乃と結衣を無視して緑子に教え続ける。向こうも無視してくれ、祈った彼だったが

「あ、ヒッキー!？」

「あら…?」

「ちっ…」

「うん?どうしたの八幡?知り合い?」

「誰?あの2人?」

「どうしたん?七海?って誰?」

結衣が驚いた表情でずっと八幡を見ている。おそらく彼が3人の女子を連れていることに驚いているのだろう。緑子、七海、かおりが八幡と雪乃、結衣の顔を見ている。

「ほ、本当にあのヒッキー?」

「あのヒッキーってなんだよ。俺は正真正銘の比企谷八幡だ!」

「貴方が女子3人と一緒にいるなんて珍しいこともあるものね」

「わ、悪いかよ。俺達は勉強しているだけだよ」

八幡は当たり前の事を言っただけだ。だが女子陣は互いに探るような事を言い出し始め、かおりがいきなり

「2人って…八幡のなんなのかな?」

「なにつて…同級生だよ、まあ部活が一緒ってのもあるが」

「同級生…部活が一緒ねえ…」

「あ、なるほど」

「なんなのかしら?というより比企谷君、海浜の生徒達と仲良くしているのかしら?」

「そうだよ、何でヒッキーが海浜の生徒と仲良くしてるわけ!」

「はあくあのな…3人とは中学時代からの親友だよ。お前達よりも付き合いは長いんだよ」

「そうなの…。貴方がね」

この後、緑子達と雪乃達が自己紹介をしあった。何故ここで自己紹

介をするのかって思った。要するに腹の探り合いのようなものだ。結衣が見ればわかることを言ってきた。

「ヒツキー達も勉強会を開いてるの?」

「そうだよ、お前達もだろ?」

「うん、まあ…そうだけど」

「由比ヶ浜さん、勉強会を始めるわよ」

「うん、ゆきのん…」

雪乃と結衣は、八幡達の通路挟んで横の席に座る。2人は飲み物を注文し、それを飲みながら勉強を始めた。

だがいきなり結衣は、雪乃に教えてもらうことに。

八幡も同じく3人に勉強を教えながら自身の勉強をしなくてはならなかったのだった。

第2章―43―第9話―八幡達の勉強会と春雪の
逢い。

―ジユネス内・サイゼリア

八幡達と雪乃達は、サイゼ内で中間テストのために勉強をしてい
る。

八幡は、緑子や七海、かおりと変わりばんこに教えていく。雪乃は、
結衣に勉強を教えながら自分の方もやっていく。

サイゼ内は、他のお客様の声などが響くなか、ここだけはシーンと
したようなものだ。シーンというよりピリピリした空気になってい
る。なぜこうなってしまったのは、緑子の一言だった。

【以前、八幡を泣かせたヤツって貴女達よね？】

【比企谷君を泣かした？何のことかしら？その前になぜ、比企谷君を
泣かさないといけないのかしら？意味がわからないのだけど？】

緑子の言ったことに雪乃がそう言っつて反撃をしてきた。七海やか
おりもカチンときたよう

「雪ノ下さんでしたっけ？貴女、自分のしたことをわからないって言
うのですか？」

「七海の言うとおりだよ。雪ノ下さんどういうつもりなの？」

「お前達…あの問題はもう俺は別に気にしていない。それにこんなと
ころでするような話じゃないだろ？」

八幡は、緑子達や雪乃達に言った。だが彼女達は聞く耳を持たない
ほど、熱くなっている。

「わけのわからないことを言われて、とても不愉快よ！」

「不愉快なのは、私達よ！」

「そうだよ」

「雪ノ下さん、まだわからないんですか？」

「ええ、わからないわね。一体何のことかしら！」

雪乃と緑子達が言い合っつて、ヒートアップする。結衣はあたふたし
て、八幡は頭を抱えてため息をはく。

すると、サイゼの店員がやって来て

「すいませんが、もう少し静かにしてください。他のお客様にご迷惑がかかりますので」

「て、店員さん、騒がしてすいません」

八幡は、店員に頭を下げる。緑子達は申し訳なさそうにして、雪乃は不愉快な表情をしていて、結衣は申し訳ない表情をしている。

「わかってももらえれば、良いですよ」

「本当にすいません」

そう言うと、店員は元の位置に戻っていく。何だか微妙な空気が流れる。

「中間テストの勉強の続きをやろう」

八幡がそう言うが、女子達の雰囲気は最悪な感じである。こんな感じの中で、八幡は、中間テストのために勉強を教えなければならなかった。

この日は一日中ブルーな気持ちで終わりを迎えた八幡であった。

ただ、八幡は気になることがあったのだ。妹の小町が知らない男子と歩いているのを勉強を教えているときに目撃してしまったのだ。内心では驚いていたが、緑子達に悟られまいと必死にごまかしていた。

【小町に彼氏ができるのは、複雑な気持ちだが、俺も綾音や綾香の父親から見れば一緒の気持ちだよな】

そんなことを考えながら、勉強会からの帰り道で考えていた。

――

平塚春雪 side 1

八幡達がジユネスのサイゼリアで勉強会を開いている同時刻、春雪は街の中を歩いていた。家に帰っても良いことがないので、ブラブラと街を歩いていると、中学時代までの嫌な連中に出くわしてしまう。

「うん？平塚じゃねーか、会いたかったぞ」

「…会いたくはなかったけど」

連中のリーダーの増山大喜。春雪とは小学生時代から一緒でずっと彼をいじめてきた中心的人物であり、高校は違う学校に行ってい

る。

「高校行ってもボツチか？本当に可哀想なヤツだな」

「可哀想…別にいいだろ。1人で何が悪い？」

「強がんなよ！」

増山の3人の仲間が春雪を囲む。春雪はため息をはく。

「お前、変わらないな。群れなきやなんもできないのか？」

「春雪のクセに生意気な！再びボコして逆らえないようにしてやる！」

「結局、力でしか解決できないバカじゃないか。そんなヤツに負けてたまるかよ！」

春雪は、構える。増山はニヤリと笑いながら

「やるのか？春雪のクセに！」

増山は、春雪に殴りかかる。しかし彼は増山のパンチを簡単に避ける。仲間の3人も春雪に対して殴りにかかる。しかしみんなの攻撃はすべて避けられる。

「…お前達、全然進歩してないな…。高校生にもなってもガキのまんまか？」

春雪がため息をはいて、立ち去ろうとすると、3人の内の1人が春雪を後ろから羽交い締めをする。

「離せ！離せよ！」

「よくやった、山田。春雪…久しぶりのサンドバッグ大会だ！」

「くそっ…離せ！」

春雪は、あの手この手で引き剥がそうとするが、山田という男は力が強い。彼は殴られる事を覚悟したが、パンチは顔に届くことはなかった。彼が恐る恐る目を開けると、そこには1人の金髪の女子高生が増山の顔面にパンチを食らわせていた。その増山は、そのまま崩れ落ちた。

「え…？」

「増山さん！」

3人の手下達は増山の元へかける。その女子高生は増山達に向かって

「お前達、大の男が1人の男によつてたかつてやるなんて、最低だな」
「なんだ、てめえ！横からしゃしゃり出てくんなよ！」

「私は、あんた達みたいなのが、一番許せないのよ…」

「相手は女だ！すぐにやれる！」

「彼女だけじゃない、僕もいるからな！」

「ふーん、あんたオタクのヘタレじゃないみたいだね」

「別にヘタレじゃない。僕は…ただ我慢してただけ。周りに気を
使っただけ。そんなこと…もう気にしない！」

春雪は、増山の部下の1人を殴り倒した。もう2人は、女子高生に
倒されていた。春雪は女子高生の制服を見て、総武高校の制服だとす
ぐにわかる。

そして春雪と女子高生は、人がいるエリアまで逃げてきた。

「あの、さつきはありがとうございます」

「うん？別に礼はいいよ。当たり前な事をしたただけだから」

「でも…」

春雪がそう言うと、その女子高生のスマホが鳴り、なにやら操作を
している。おそらくチャットか何かをしているのだろう。そしてス
マホをしようと

「それじゃあ、またね、春雪君！」

彼女は走って行ってしまった。だがすぐにあることに気が付く。

彼女は、春雪の名前を知っていたことに。

「彼女に自己紹介なんかしてない。制服からすれば、総武高校…。な
んで彼女は僕の名前を知っているんだ？」

増山達に襲われたことよりも、助けてくれた彼女が気になる春雪で
あった。

第2章―44―第10話―勉強会の後にて。

―比企谷家・リビング

八幡は、お風呂に入る前に軽く勉強をしていた。もちろん勉強会で勉強をしたのだが、緑子達に教えていた時間が長かったから、自分の勉強は捗らなかつた。

緑茶を軽く飲んだ後、再び勉強をやり始めた。

どれくらい時間が経っただろうが、綾香が八幡に話しかけてくる。

「八幡お兄ちゃん、お風呂空いたよ」

「うん、わかった」

八幡はそう言って、きりがいいところまでやるつもりでいる。そんな彼に対して、綾香は近づいてきて

「八幡お兄ちゃんは、真面目だね」

「真面目ってもうすぐ中間テストがあるからな…ってお前はなんちゆう格好してるんだよ！」

「うん？お風呂上がりだし良いでしょ」

綾香の今の格好は、下着姿にタオルを下げてるようなものだ。八幡は綾香に対して

「風呂上がりって…大の男がいる場所でする格好じゃないだろ！」

「ふーん、八幡お兄ちゃんは、私の下着姿に欲情するのかな？」

「はあ!？」

内心、八幡は綾香の下着姿にちよつと欲情な気持ちがあったのは確かだ。でも理性の兄としての気持ちが強かった。

「八幡お兄ちゃん、私、色気無いか？」

「そ、そんなことないぞ！綾香は、十分に色っぽい」

「ホント？」

綾香が本当か聞いてきたので、八幡はちゃんと答える。

「本当だ。中学の時よりも色っぽく女性らしくなったな。ずっと見守ってきた俺が言うのは、何かなとは思うが」

「八幡お兄ちゃん、ありがとう！」

綾香は下着姿のまま抱きついてきた。八幡は慌てて、綾香を引き離

す。

「ば、バカ、そんな格好で抱きつかない！」

「八幡お兄ちゃん、照れてる？」

「兄をからかうでない！」

八幡と綾香は、そんなたあいもない会話をしていたのだった。

ジュネス・サイゼリアの遭遇事件からしばらく経ったある日の学校の
ことである。

今の2ーF組は、ざわざわと浮わっている。

それは何故か。

職場見学のグループ分けについて話しているからである。実際に
班を決めるのは、明後日である。だが気の早いことに今から決めてい
るのだ。

「全く気の早いことで…」

そう八幡はボソツと呟いたのだ。すると戸塚に話しかけてきた。

「おはよ」

「おはよう、戸塚、で何か用か？」

「特に用はないんだけど、比企谷君がいるなあって思ったから。ダメ
だったかな？」

「いや、ダメではないぞ」

「ねえ、比企谷君は、もう職場見学の場所は決めたの？」

「まだ決めてない。というか考えてなかった」

ジュネス・サイゼリア遭遇事件のことで、頭がいっぱいだった。

緑子達は、絶対に謝らないって言ってるし、雪乃も当然謝るつもり
もない。

その事で頭がいっぱいいっぱいだったのだ。だから職場見学をど
こにするかとか全く考えてなかったのだ。

「そ、そうなんだ。じゃあ、誰と行くか、もう決めたの？」

場所も決めてないのに、誰と行くとかそんなもの決まってるわけが
ない。その以前に八幡と行こうという人間が、このクラスにいるのか
も疑問だが。他クラスの陽介がいたのなら彼と一緒に行く選択肢が

あるが。

「まだ決まってる。というか戸塚は決まったのか？」

「ぼ、僕？僕はもう決めてる、よ」

戸塚は、頬を赤らめた。少し目を伏せ、八幡の反応を窺うようにちらつと見ている。

なぜ、頬を赤らめるのか気になったが、戸塚は、テニス部に入っているから、顔は広いだろうと八幡は思った。かつての自分も自慢ではないが、顔は広がった。

そんなことを考えていたら、葉山グループから聞こえてくる会話であつた。

「隼人君、どこに行くことにしたん？」

「俺はマスコミ関係か外資系企業見て回りたくないかな」

「やつべ、隼人マジ将来見据えてるわ。超隼人ばないわ。いや、でも俺らもそういう年頃だし、最近、親とかガチリスペクトだわ」

「これからは真面目系だよな」

「うーわー。でも少年の心を忘れたらヤバイでしょー」

葉山グループの男子達の会話を見ていて、つつい昔を思い出す。八幡のところに、雅史や陽介、康や大輔達が集まって来ていて、バカな話をよく話したり、世間話をしたり、下ネタも話した。もちろんサッカーの話でもある。

総武高校に来て、誰かをファーストネームで呼んだことはない。綾香やめぐり、陽乃や雅史達、緑子達を除けば、皆無である。八幡は戸塚の名前を呼んだ。

「彩加」

「……」

八幡が名前を呼ぶと戸塚は固まった。大きな瞳を2、3回瞬かせて口をぽけつと開けている。そして戸塚は、八幡に対して話し出す。

「…嬉しい、な。初めて名前で呼んでくれたね」

「嬉しいのか？」

「うん、やつとお友達になれたんだね。僕も八幡って呼んでも良いかな？」

「ああ、呼んでくれ、彩加」

「ありがとう、八幡」

とても男とは思えない表情で名前を言われた八幡。あの表情は反則級だと思いながらも戸塚改め彩加と話していたのだった。

第2章―45―第1話―葉山隼人、奉仕部訪れる。

そしてその日の放課後、雪乃も結衣も普段通りに奉仕部の教室にいる。八幡も気にすることなく教室にいたのだが、嵐の材木座がやって来て騒いでいた。

だがある訪問者によりおとなしくなる。

それは葉山隼人である。材木座は、葉山のことをイケメンだと言って嫌っている。すぐに用事があるとか言って逃げたした。八幡は、雅史とは一緒にいるくせにと思いなながらも葉山を見る。

「こんな時間に悪い。ちょっとお願いがあつてさ」

アンブローのエナメルバックを床に置くと、葉山はごく自然に軽く断りを入れて雪乃の正面の椅子を引いた。

「いやー中々部活から抜けさせてもらえなくてさ。他の部活は休みに入ってるけど、サッカー部は特別に今日までにしてもらってるんだ。まあ今日のうちにメニューをこなしておきたかったかい」

「なるほど」

「その男の言葉はともかく、能書きはいいわ。何か用があるからここに来たんでしよう？葉山隼人君？」

冷たい響きを滲ました雪乃の声にも葉山は笑顔を絶やさない。

「ああ、そうだった。奉仕部つてのはここでいいんだよね？平塚先生に、悩み相談するならここだって言われて来たんだけど」

葉山が喋ると何故か窓から爽やかな風が吹き込んでくる。

「遅い時間に悪い。結衣もみんなもこのあと予定とかあつたからまた改めるけど？」

そう言われて、結衣はいつだかも見たうすっぺらい笑顔で笑う。どうやら上位カーストの人間に接する時のくせが抜けないようだ。

「や、いや。そんな全然気にする必要はないよ。隼人くん、サッカー部の次期部長だもんね。遅くなっても仕方がないよ」

だがそう思っているのは、結衣だけだ。雪乃はなにやらピリッているし、八幡は複雑な気持ちで見ている。

「いやー比企谷にも悪いな」

「何故、俺に謝る？」

「いや：君の前でサッカーの話はと思つて……」

「別にサッカーの話をしてもいいが？葉山が気にするものでもないだろう？」

「それは、そうだが……」

葉山は少し不満げな表情になったが、すぐに本題の方の話をし始めた。

彼がこの奉仕部に来た理由は、とあるチェインメールのことである。近頃2年生界限で問題になっている問題の1つである。

葉山は、おもむろにスマホを取り出した。結衣は、あつと声を出すと、自身のスマホを取り出して、さっきのチェインメールを見せてくる。結衣と葉山のチェインメールの内容は同じである。

内容は、怪文書と呼ぶに相応しいものであつた。結衣の指先がスクロールしていくと憎悪の塊な文章である。どうみても捨てアカウントであり、いくつものアドレスから個人を誹謗中傷するメールばかりである。

【戸部は、稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしていた】だとか。

【大和は、三股かけている屑野郎】だとか。

【大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーした】だとか。

要約するとそんな感じの、ことの真為は定めでは無いメールがいくつもある。そして大本の使い捨てアド以外の、クラスメイトらしき人物から転送されているのもわかる。

「これは、チェインメールじゃねえか」

八幡の問いに結衣が頷く。

「昨日、言つたでしょ？うちのクラスで回つてるやつ」

「チェインメール、ね」

チェインメールとは、その名前のとおり鎖のように回り回つていく類いのメールだ。大体語尾に【10人、20人に回りして下さい】とかあるのがそうだ。

ちよつと前にあつた【不幸の手紙】に似ている。

「3日以内に5人に同じ手紙を送らないと貴方が不幸になります」つて文章である。

そのメールを見ながら葉山は苦笑いを浮かべている。

「これが出回つてから、なんかクラスの雰囲気が悪くてさ。それに友達のこと悪く書かれてば腹も立つし」

「確かにお前の言うとおりでな。友達の悪口を書かれれば、俺でも腹は立つな」

「止めたいんだよね。こういうのつてやつぱりあんまり気持ちがいいもんじゃないからさ」

葉山がそう言うのと八幡は彼の目を見て言った。

「つまり、葉山、お前は犯人を特定させてほしいつて事か？」

「犯人を捜してほしいわけじゃないんだ。丸く収める方法を知りたい。頼めるかな？」

「丸く収めてほしい……つてマジか？」

「そうだね」

葉山の言い分は、波風を起こさずに事を収めたいのが願いだ。だがこのような案件で、丸く収めるのは無理に近い。雪乃は葉山に

「つまり、事態の收拾を図ること。…では犯人を捜す必要があるわね」
「…えっ!? 犯人捜し!?!」

葉山は驚いたようにそう言った。丸く収めてほしいと依頼したのに雪乃が犯人捜しをやると言われたからである。そして彼女はどす黒いオーラを出しながら自身の体験談を話し出した。

「チェーンメール、あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ。自分の名前や顔も出さない。ただ傷つけたいだけに誹謗中傷の限りを尽くす」

「確かに、雪ノ下の言うとおりでな。過去に俺の親友にそんなチェーンメールを送り付けて傷つけていたヤツがいた。まあ犯人を問い詰めて、二度としないようにお灸を据えたことがあつたな」

八幡がそんなことを話したのだから、結衣は驚き葉山は妙に納得していた。雪乃は自分の話を遮つたため不満げにしている。

「貴方の過去話は別に良いとして、悪意が内から余計に性質が悪い。好奇心や時には善意で。悪意は周囲に拡大し続ける。比企谷君のようには大本を根絶やしにしないと効果は無いわ」

「おい！雪ノ下、俺は根絶やしにはしてねえ！お灸を据えただけだ」
「違ったかしら？」

「……全く、人を貶める内容が何が楽しいのかしら。それで佐川さんや下田さんになんのメリットがあったとは思わないのだけど」

「犯人は特定済みなんだ…」

結衣が若干ひきつった感じで笑う。八幡も若干引きながらも

「まあ、その2人が雪ノ下にそういうことをしたのかはわかるな。理由は1つしかない」

「理由なんて知りたくもないわね。とにかく、そんな最低なことをする人間は確実に滅ぼすべきだわ。目には目を、歯には歯を。敵意には敵意を持って返すのが私の流儀」

「お前はハムラビ法典かよ…」

「ハムラビ法典？ハムラビ法典ってなに？」

「由比ヶ浜、今日の世界史ってやっただろ？」

「そ、そうだっけ……」

習ったかどうか忘れている結衣を尻目に雪乃は葉山に

「私は犯人を捜すわ。一言言うだけで、ぱったりと止むと思う。その後はどうするかは貴方の裁量に任せるわ。それで構わないかしら？」
「……ああ、それでいいよ」

葉山は雪乃に観念したように返事をした。

八幡も雪乃と同意見だった。メアドをわざわざ変えて送りつける行為は、自身の正体をバレたくないからであり、バレた時点で止めるだろうという考えである。

要は犯人を見つければ一番早い訳である。雪乃は結衣が机の上に置いてあるスマホを見つめている。3そこに顎に手をやり、考える仕事をした。

「メールが送られてきたのはいつからかしら？」

「先週末からだよ。な、結衣？」

葉山が答えると結衣も頷く。

「先週末から突然始まったわけね。由比ヶ浜さん、葉山君、先週末クラスで何かあったの？」

「特に、なかったと思うけどな」

「うん……いつも通り、だったね」

葉山と結衣は互いに顔を見合わせる。

「一応、比企谷君にも聞くけど、何かあったの？」

「先週末と言えば、確か職場体験の班決めがあったと思うが」

「うわっ、それだ。グループ分けのせいだ」

「え？そんなことか？」

葉山がそう言うが、あり得ない話ではないのだ。人数が偶数の場合はハブれることはないが、奇数の場合は、誰かが漏れる可能性があるのだ。漏れた人間がナイーブならその後の関係性がヤバイことになりかねない。

「葉山君、書かれているのは貴方の友達、と言ったわね。貴方のグループは？」

「あ、ああ、そう言えば決めてなかったな。まあ、その3人の誰かに行くことになると思うけど」

「犯人わかつちやったかも……」

結衣が幾分げんなりした表情で言った。

第2章―46―第12話―葉山の依頼とは。

―奉仕部。

結衣の突然の犯人わかつちやつた発言。雪乃はそのまま彼女に聞く。

「由比ヶ浜さん、説明してもらえるかしら?」

「うん、それってさ、つまりいつも一緒にいるひと達から1人ハブになるってことだよな? 4人の中から1人だけ仲間外れができちゃうじゃん。それで外れた人、かなりきついよ」

「ごもつとも意見だよな」

犯人を特定するにはまず、動機から考えるのが一番手っ取り早い。その行為をすることで、メリツトが生まれる人間を見つければおのずと特定ができるってことである。

この場合は、ハブれないことに意味がある。葉山達男達は、4人グループで構成されている。従って3人組を作るためには、誰かが外れないといけない。そうなりたくなかったら、誰かかを蹴落とすしか無いのだ。犯人はそう考えたに違いない。

「……では、その3人の中に犯人がいると見て間違いないわね」

「まあ…そう考えるのが妥当だろうな」

「ち、ちよつと待ってくれ!俺はあいつらの中に犯人がいるなんて思いたくはない。それに3人それぞれ悪く言うメールなんだぜ? あいつらは違うんじゃないのか?」

「葉山、お前の友達を信用したい気持ちもわからないわけではない。ただかな、あえて犯人自身を書き込んでいる可能性もある。疑われないようにな」

葉山は八幡の発言に反論できずに唇を噛み締めていた。こんなことは考えてもいなかったのだろう。自分の側に悪意があるなんて、思いもしなかったのだろう。仲良くやっている表で、しかし裏では憎悪が渦巻いていることを。

「とりあえず、その人達のことを教えてくれないかしら?」

雪乃が葉山に情報提供を求める。すると彼は意を決めたのか顔を

上げる。その瞳には信念がこもっている。それは己の親友の疑いを晴らさんがための意思がある。

「戸部は、俺や陽介達と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリで良いムードメーカーだな。文化祭や体育祭とかでも積極的に動いてくれる。良いヤツだよ。比企谷君もわかるだろう?」

「まあな。戸部に関しては、陽介達の話とも一致するしな」

「騒ぐだけのお調子者、というところね」

「……………」

「騒ぐだけのお調子者って、戸部みたいなムードメーカーは大事なキャラだぞ」

「比企谷君、貴方に説明を求めているわ」

八幡と葉山は思わず絶句してしまう。

「……………どうしたの? 続けて」

「……………ああ、次は大和。大和はラグビー部。冷静に人の話を良く聞いてくれる。ゆったりしたマイペースとその静けさが人を安心できるって言うのかな。寡黙で慎重な性格なんだ。良いヤツだよ」

「反応が鈍い上に優柔不断…と」

「……………」

「…おい、雪ノ下…」

「……………大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる気の良い性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、良いヤツだよ」

「人の顔色窺う風見鶏、ね」

「……………」

「……………」

いつの間にか葉山と雪乃だけがしゃべっていた。結衣はぽかんと口を開けたままだ。

「どの人が犯人でもおかしくはないわね」

「で、雪ノ下、ここまで言ったのだから、犯人がわかるんだろうな?」
「ええ、わかったわ。あの3人のうちの1人が犯人ね」

「3人のうちの1人って…わかって無いじゃないか！」

八幡がそう言うと、雪乃は彼を睨めつけながら

「まだ推理は組み立て中なの。……ところで比企谷君と由比ヶ浜さん、貴方達はあの3人を見て彼らのことはどう思ってるのかしら？」
「え、ど、どう思うって言われても…」

「大和と大岡はあまり知らんが、戸部ならわかる。陽介や完二からよく話が出るからな。練習で上手く行かないときに、ちよくちよく相談に乗ってくれてるみたいだし。俺から見てもあいつは悪い男には見えないな」

「比企谷君…」

「素直に戸部の評価をしたまでだ」

「それじゃ、比企谷君、後の2人を調べてもらっても構わないかしら？正式にグループを決めるのは、明後日よね？それまで1日猶予があるわ」

「……わかったよ、由比ヶ浜、お前もな」

「……ん、うん」

八幡に言われて、戸惑いながらも返事をする。誰とでも仲良くなれる由比ヶ浜からすれば、誰かの粗捜しなんかやりたくはないのだろう。人の粗捜しは、自分自身の粗をさらす行為にもなってしまうからだ。コミュニケーション内ではわりとリスキーな行為だ。それは雪乃も理解しているようで、申し訳なさそうに目を伏せている。八幡は、やはり結衣にはさせられないと思ひ

「やっぱ由比ヶ浜、お前はいい。俺1人でやるわ。憎まれ役は俺が買う」

「……あまり期待しないで待ってるわ」

「任せとけ。昔から人を見る目はあるつもりだからよ」

「ち、ちよつと！あたしもやるよ！そ、その、ヒツキーに任せてなんておけないし！」

結衣は顔を赤くして語尾をもによらせながらも、次の瞬間には拳をぎゅつと握った。

「そ、それに、それにつ！ゆきのんのお願いなら聞かないわけにはいか

ないしね！」

「…そう…」

答えたきり、雪乃はそっぽを向く。夕映えのせいか、それとも照れているのかその頬には朱が差している。

そんな2人の様子を見ていた葉山は爽やかな素敵スマイルで笑う。

「仲良いんだな」

「まあな」

「比企谷君もだよ」

「そうか…」

「君は、陽介や完二が言っていたとおりだったよ…僕ではかなわないな」

八幡には聞こえない小さな声で葉山がそう呟いた。

「葉山、何か言ったか？」

「いや、何でもないよ」

こうして、八幡と結衣による2人を調べることになった。

第2章―47―第13話―3人の様子は……。

翌日から、戸部、大和、大岡の3人の様子を見ることに。戸部は置いといて、大和と大岡の様子を見ないと、心で呟く八幡であった。

小町、綾香よりも早く起き、学校へ出かける準備をする。なぜそんなことをするのかは、野球部である大岡とラグビー部の大和の様子を見るためでもある。

野球部もラグビー部も朝練をしている。放課後は主にサッカー部が練習にするので、早めに練習をやっておきたいからだ。

だがすぐに肝心なことに気がつく。

中間テストだ。中間試験で部活動は全て休みに入っている。つまりどこの部活動も放課後の練習ももちろん朝練などやるわけがない。やる気が半分失いかけた八幡だが、教室で調べるしかないと思っただけだった。

昼休み、いつもの場所には行かず、大人しく弁当を食べていると結衣が話しかけてくる。

「とりあえず、あたしが色々聞いてみる。…だ、だから、ヒツキーは全然無理とかしなくていいから。むしろなんもしなくていいから」

「……そりゃあ、その方がいいが……かと言ってお前に全部出来るのか?」

「や、やれるよ!ゆきのんのお願いだもの。やらなきや」

「…雪ノ下にお願いされたねーか…」

結衣のやる気はみなぎっているようだが、このやる気は逆に空回りしそうなやる気だと八幡はため息を吐きながら結衣に言う。

「やる気は認めるけど、具体的に何をするつもりだ?」

「んー女子から聞いてみる。クラスの人間関係とかなら女子の方が詳しいし。それに、共通の嫌なヤツの話とかすると、結構盛り上がりつつ色々話してくれるし」

「相変わらず、ガールズトークが怖いな……」

そんな会話は、綾音達で経験済みである。その内容がえげつない事もわかってきているのだ。

「そんな黒い話じゃないってば！その愚痴、というか情報交換……？」
「ものは言い様だからな……ガールズトークがえげつない事は知ってるから」

八幡がそう言うと、結衣が鋭い視線で見ってくる。

「……あの時の海浜の3人ね」

「…海浜の3人って…名前ぐらい覚えてやれつての。それとも覚えてないのか？」

「……山岸緑子、高梨七海、折本かおり……」

結衣はいやいやながらも彼女達の名前を挙げた。

「覚えてるじゃないか」

「彼女達の事は、今はどうでもいいから！とにかく、ヒッキーは何もしなくていいから」

そう言うと結衣は、葉山グループ内の女子グループである三浦グループに行ってしまう。

「お待たせ！」

「あ、ユイー。おっそいから！」

三浦をはじめとするグループの女子達は、気だるそうに返す。

「てかさー、とべっちとか大岡君とか大和君とか最近微妙だよー。なんかこうアレな感じ？って言うか……」

八幡は、結衣の直球の言葉に操作していたスマホを落としそうになった。

「え……ユイってそういうこと言う子だっけ？」

そう言って一歩引いたのは、海老名であった。そして三浦がきらつと目を輝かせて、ここぞとばかりに攻勢に出る。

「あんさー、ユイ。そういうのってあんまりよくない？トモダチのことそう言うのやっぱまずいでしょー」

「ち、ちがつ、ちがくてっ！その、気になる、というか」

「なに、あいつらの誰か好きなん？」

「全っ然違う！気になる人はいるけど……それはアレな人だし……はっ！」

しまった！という表情の結衣とそれを三浦がニヤリと笑うのが同

時であった。

「え、ユイ……誰か好きな人できたん？言ってみ？ほれほれ。協力するから！」

「だ、だから！そうじゃなくてっ！気になるのはあの3人の関係性？っていうの？なんか最近妙だなーって思うの！」

「んだ、それか。つまんね！」

あからさまに興味を失う三浦。スマホをチャカチャカと操作を始める。だが、違う女子が食い付いてきた。それはメガネ女子の海老名である。

「わかる。ユイも気になっていたんだ……。実はあたしも……」

「そうそう！なんだかギクシヤクしてるってさ！」

「わたし、思うんだけど」

海老名は深刻そうな表情でため息を1つつく。

「わたしの絶対とべっち受けだと思うの。で大和君の強き攻め。大岡君は誘い受けね。あの三角関係絶対何かあるよ！」

「あ、わかるわか……うえ？」

「でもね、でもね、絶対3人とも隼人君狙いなんだよ！くうく友達のためみんな一歩引いている感じ。キマしたわあ〜」

海老名はずっとBLの話をして、テンションが上がりっぱなしになっでいて、鼻血まで出している。結衣は、海老名の勢いに押されて困っていると三浦が

「はあく出たよ、海老名の病気。おめ、黙ってれば可愛いんだからちやんと凝態しろ鼻血拭けし」

そんな状態を見ていた八幡は、自分の机に視線落として、ため息を吐いた。結衣は、そんな彼を見てごめんと謝った。

全然何も得るものはなかった。海老名のBL好きな情熱がすごいとわかっただけ。

休み時間は、予鈴、本鈴を含めて3分もない。八幡は、戸部、大和、大岡に視線を移す。

3人は、葉山を含めて窓際に陣を取っている。葉山が窓際に寄りかかり、それを囲むようにして戸部、大和、大岡がいる。ここからわか

ることは、葉山がリーダーであり、キングということだ。そしてその3人にも役割があるようだ。

「で、さ。うちのコーチがラグビー部の方にノックを打ち始めて！やばかったわー！。硬球なのによ」

「……あれはうちの顧問もキレてた」

「マツジウケンだけど、つつーか、ラグ部とかまだいいわ。俺らサツカー部やベーから。いいーややばいでしょ、外野フライ飛んでくるとかヤバいでしょ！そういうや…陽介が外野フライ取ったわ！けどサツカーボールを蹴り損ねたあれ…ある意味激アツだったわ」

大岡が話を振り、大和がそれを受ける。そして、戸部が盛り上げる。よくできた演劇のようだ。

人生は舞台

シエイクスピアの言葉である。

まさしく人は与えられた役をこなしているようだ。

そしてこの舞台の監督と観客は葉山隼人だ。葉山は時には笑い時には話題を提供し、時に一緒になつてはしゃぐ。

八幡はずつと葉山と3人を観察してとある事に気がついた。

1人が今、見えないように舌打ちをする。

また1人は、隣のやつが会話を始めると急に黙り込む。

またある1人は、つまらなさそうにスマホをいじる。あまりこの話題に割り込んでこない。

八幡はこれ以上の収穫も無さそうだなと思つておるとき、葉山が席を立つて

「悪いちよつとごめん」

葉山はそのまま八幡の方へやってくる。

「どうした、葉山？」

「いや、なんかわかつたのかなつて思つてさ」

「まだ大した情報は無い」

そう言つて八幡は、葉山の抜けたグループを見てみると、意外な光景が広がっていた。3人ともスマホをいじつていた。そして時々葉山の方を見ている。八幡は、頭の中に閃きが輝く。

「どうかしたか？」

「謎はすでに解けたぜ」

八幡はそう言って、葉山にニヤリとスマイルを見せるのだった。

第2章―48―第14話―葉山グループの行方。①

八幡は、葉山にニヤリと笑った。彼はなぜ八幡が笑っているのかわからなかった。だか彼は葉山に別の事を聞き始める。

「そう言えば、戸部達以外の…田中や山本とは、近頃しゃべってないのか？」

「まあね。最近、山本と田中は、俺達よりというよりか、松野達と一緒にいるみたいだな」

「何かあったのか？」

「別に何もないさ。あの2人は、俺達と話すより、松野達という方が楽しくなったんだろうな」

「…あの時、あの体育の時に俺を庇ったりしたからか？」

「それは違う。元々は大岡の友達って感じで、そういうことで友達の友達って感じでやってたのかな」

田中と山本は、大岡と同じ野球部である。その繋がりで葉山とも仲良くなったようだ。

「そうだったのか…。友達の友達ってやつか」

「そうだな…」

「疎遠になったことに後悔しているのか？」

「…確かにそう思っている自分もいる。だけど君を馬鹿にするのも許せなかったんだ」

「…なんでお前が許せないんだ？」

八幡がそう言った後、葉山が彼の方へ真剣な表情で

「君は…俺なんかより凄い。彼女のことともそうだが、サッカーもだ」

「葉山…お前は俺を買いかぶりすぎだ。お前の方が凄いつて」

「違わない。比企谷、君は凄いと思う。これは俺の素直な気持ちさ」

「…葉山…お前…」

八幡が葉山に言いかけた時にチャイムがなり、葉山は八幡が何を言おうとしたのか気になったが、聞かないことにしたのだった。

―2―F組↓奉仕部

そして放課後になり、メンバーは奉仕部へ集められる。開口一番に

雪乃が八幡と結衣に

「どうだったかしら？」

と調査報告を求めてきた。結衣は、ははーと笑ってから
「ごめん！一応女子に聞いてみたけど全然わかんなかった」

素直に謝った。結衣としては、海老名のBLに付いていけてなかったし三浦はその手の話に話さなかった。結衣は頭を下げながら雪乃の顔を見ている。しかし雪乃は別状怒ってるわけではない。

「そう、それならそれで構わないわ」

「いいの？」

「逆に言えば、女子達は今回のことにさして興味は持っていない、関わっていない、ってことでしょう。そうなると葉山君のグループの男子の問題ってことになるわ。由比ヶ浜さん、ご苦労様」

結衣が感動でうるつと瞳を滲ませていた。抱きつこうとしたところを雪乃がするつとかわす。彼女はごちつと壁におでこをぶつけていた。雪乃は呆れた様子で、半ベそかいている結衣のおでこを撫でながら八幡を見る。

「で、貴方の方は？」

「犯人は分からなかったが、1つわかったことはある」

「何がわかったのかしら？」

「それってさつき話の中で言ってた…」

「ああ、そうだ」

八幡は、雪乃、結衣、葉山を見据えながら話し出す。

「あのグループは、葉山のグループってことだ」

「はあく今さら何を言ってるの？」

結衣が思いつきり八幡を馬鹿にしたように言った。

「……比企谷君、君がさつき話していたやつだよな」

「友達の友達ってやつだな。お前のグループは、お前が中心なんだ。お前がいないと成り立たない。お前がいるときといないときにハッキリと違いが出た…」

「……。それはなんとなく気がついてたさ。自分のグループと君の比企谷グループの違いが…」

葉山は、窓の外を見ながらそう言った。

「君のグループは、友達の友達って様子ではない。君を中心にした本物のグループって事が、サッカーの試合で思い知らされたからね」

「あいつらは、俺がいなくても親友同士だからな」

結衣は何の話をしてるのか、ポカーンとしていて、雪乃は何かを考えている。

「話は戻すとして、由比ヶ浜、お前会話の中心人物がいなくなったらどうする?」

「あ、あたし!? うーん、気まづくなるかも。何話していいかわかんないし、スマホをいじっちゃうし」

「そういうものなの?」

由比ヶ浜の問いに雪乃は、不思議がっている。葉山はずっと黙ったままだ。葉山にとって戸部、大和、大岡は友達だが、それ以外は、葉山を通しての関係でしかない。こればかりは、葉山自身でもどうすることもできないのだから。雪乃が八幡に

「比企谷君、仮に貴方が言うことが正しいとしても3人の犯行動機の補強にしかないわね。そのうちの誰かやっているかを突き止める方法はないかしら? その犯人を消さない限り事態は収束はしないわ。いつそう3人とも」

雪乃は顎に手をやり考え込む仕草をする。

八幡は、実力行使は最後の手段としか考えていない。天ノ河事件では、実力行使を使わざる負えない事件になってしまったが、今回のチエーンメールの問題の犯人は、襲撃なんて危険な考えは持っていない。

「雪ノ下、実力行使は最後の最後の手段だ。葉山、お前が望めば、解決するが、犯人を捜す必要もなく、これ以上揉めることもなく、……。そして、あいつらが、仲良くなれる可能性があるかもしれない方法が」「どんな方法かな?」

「葉山、お前が俺と組めば、良いだけのことだよ」

八幡はそう葉山に言ったのだった。

第2章―49―第15話―葉山グループの行方。②

「葉山、お前が俺と組めば、良いだけのことだよ」

八幡はそう葉山に言ったのだった。葉山は少し驚きながらも

「なるほど、俺が外れれば、あいつらは、3人でグループも組めるとい
うわけか」

「そうだ。お前としては不本意だろうが、あいつらの為を思うなら我
慢してくれ」

「いや、俺としては、君をもっと知る機会だと思っている。だからよろ
しく、比企谷君」

「ああ、まあよろしくな」

こうしてチエーンメールの問題は片付いていく。雪乃と結衣は、ポ
カインとして成り行きを見ていたのだった。

そして翌日のグループ分けの時間がやってきた。

教室の黒板には、クラスメイトの名前が羅列されている。それぞれ
3名1グループずつに。職場体験ごとに分けられている。

前から言い交わっていたであろう隣の席の女子3人がきやつ
きやつと微笑み合って黒板の前まで行き、自分達の名前を書き始め
た。

八幡は、葉山と組むことを決めているため、あと1人を誰にするか
見ていた。ただ葉山は情勢を眺めているのか、戸部、大和、大岡に3
人とはグループは組まないと説明をしているようだ。一方の結衣は、
三浦、海老名とグループを組みどこに行くか決めているところだ。

八幡は、席から動かずスマホをいじっていた。そしてあるサイトを
開いてしまう。

それは、千葉県の中にある千葉村のサイトであった。それは懐かし
くもある八幡の思い出の場所でもある。

「千葉村…懐かしいな…綾音がまだ車椅子で外に行けた夏の終わりが
見え出した頃…」

中学3年の夏休みに八幡、綾音、雅史、緑子、七海の5人は、千葉
村を訪れている。

ここで何かあったかは、千葉村を訪れた時にされるだろう。

八幡は、スマホの中に保存されているみんなで写った写真を見る。

「この時は…こんなグループ決め何にも思わずに決めていたな…俺と雅史と陽介…綾音と緑子と七海って…」

彼が昔の思い出に浸っていた時、誰かに身体を揺すられる。

「八幡、聞いている？」

「うん？と、戸塚か。どうかしたか？」

「あ、あのグループ分け、の話だけど？」

「グループ分けか。もう戸塚も決まったんだろ？」

戸塚はもう誰かとグループを組んでいるだろうと八幡は思っていた。彼は黒板や回りを見渡す。すでにグループ成立し黒板に名前が3名ずつ書かれている。そしてあの3人の名前が書かれている。そして葉山グループからハブられた2人も。

【戸部、大和、大岡】

【松野、田中、山本】

松野達はともかく、戸部達は出来立ての親友みたいで、初々しくも見えるのだった。そんな様子を見ていたら、葉山に話しかけられる。

「比企谷君、約束とおりにグループを組もう」

「そうだな。約束だもんな」

「おかげで丸く収まった。サンキューな」

「俺はただアドバイスを言っただけだ。後は葉山、お前の才だよ」

「そんなことないって。ああ言ってくれなきや多分まだ揉めてただろうし…」

「…まあ、それはお前と一緒にいたいから」

揉める原因は、葉山と一緒にいたいからである。だから揉める原因を取り除けばいいだけである。

揉める原因↓葉山

だから葉山隼人を取り除けば、争うものが無くなる。

「俺、今までみんなが仲良くやれば良いと思ってたけどさ、俺のせいで揉めることもあるんだな」

「それは人気ものの宿命ってヤツだな。なあ、葉山」

「君ほどではないと思うよ。総武中の色男には敵わないよ」

「は、葉山…それは言わない！」

「……それにあいつらに、3人とは組まないって言ったら驚いていたけどな。これをきっかけにあいつらが本当の親友になれば、良いって思うよ」

「そうだな」

「改めてよろしく、比企谷」

「ああ、よろしくな、葉山」

葉山と八幡が仲良くしゃべっていると、頬を膨らました戸塚がいる。

「八幡、僕は？」

「戸塚は、誰かと行くの決めてんじや？」

「だからっ！」

そう勢い込んでから八幡のブレザーの袖口を掴んだ。

「……最初から八幡と行くなって決めてたの！」

「それじゃあ、3人グループの成立だな。黒板に名前を書きに行こうか。比企谷、場所はどこにする？」

「お前に任せるさ、葉山」

八幡が葉山にそう言うのと戸塚も頷いた。

葉山は、黒板に八幡達の名前を書き始めた。

【葉山、戸塚、比企谷】

そして行きたい職場の場所を書き込む。すると周りの連中が

「あ、あーし、隼人と同じ場所にするわ」

「うそ、葉山君そこに行くの？あ、うちも変える変える」

「あたしもそこにしようかなー」

「隼人ばないわ。超ばないわ」

クラスの連中が一齐に葉山の回りに集まる。そしてあれよあれよという間に皆が葉山と同じ職場を選び、黒板の名前の場所を書き換え出した。

書き加えられていく名前に埋もれて、いつの間にか八幡の名前が消えている。八幡は黒板の有様をスマホのカメラで撮った。

「このクラスでの存在はこんなものだよな…」

八幡は、スマホの中の写真を見ながら総武中の時の姿と今の姿を見比べていたのだった。

こうして職場体験のグループ分けによるチェーンメールの件は解決したのだった。

第2章―50―第16話―小町とのひととき。

チーンメール、葉山グループの問題が解決した。正式には解決した訳ではない。だが依頼者の葉山が良しとしたのだからよしとするしかないだろう。

中間テストの日は刻々と近づいてきているのだ。

夜遅くまで勉強していた八幡は、台所までやって来て、お茶を飲み干す。

「本来なら勉強してるのだから、糖分たっぷりMAXコーヒーを飲めばいいのだけどな」

綾音の死から飲めなくなったMAXコーヒー。いまだにMAXコーヒーの缶を持つだけで、震えや嫌な汗が出てくるのだ。

ふとりビングに視線を移した八幡は、リビングのソファで、妹の小町が寝ていることに気がつく。

「…小町、お前も中間テストが近いんじゃないやなかったか？ずいぶんと余裕があるみたいだな」

ソファで大胆に寝ている小町は、腹を出して寝ている。白い肌は、すうすうという寝息に合わせて規則正しく波打ち、その度に可愛いへそが動く。彼女が身動きすると、勝手にきたのであるう、だるだるに伸びきった八幡のTシャツからブラジャーが覗いて見えた。小町が丸まってるせいで気づかなかったがパンツ姿で寝ている。

「小町、そんな格好で寝たら風邪引くぞ」

八幡は手元にあつたバスタオルをかけてやる。

「まあ、小町も元気に育ってくれたよな」

八幡は過去を思い出していた。小町も綾音の事を本当の姉のようになついていたことを思い出す。

「小町も綾音になついていたよな…綾音お姉ちゃんって」

八幡が独り言を言っていると、バサツと小町が跳ね起きた。

まず八幡を見つめて2秒静止。次にシャツとカーテンを開けて3秒静止。そしてくわつと目を見開き時計を見て5秒静止。都合10秒かけて現状を理解する。それからすうつと大きく息を吸うと、馬鹿

でかい叫び声を上げた。

「しまった！寝すぎたあつ！1時間だけ寝るつもりが、5時間寝たあつ！」

「まあ、確かにあるわな」

「うーん、綾香と一緒に勉強していた気が…」

「綾香なら自分の部屋で勉強してたぞ」

「ぐぬぬ、綾香…薄情な…」

「綾香は関係ないだろ、というか小町、なんで俺のTシャツを着てるんだよ…」

「ん、ああ、これ。寝巻にちょうど良いんだよ。ちょうどワンピースっぽくない？」

そう言いながら小町は、ビローンとTシャツの襟元を引っ張る。

「…はあくわかったからやるよ、それ」

「おお、サンクス。じゃあ、小町も何か下着をあげるよ」

「いらんわ」

「そ、即答！」

「あのな、妹の下着を何故欲しがらねばならないんだよ」

「じゃあ、綾香の下着で」

「……！馬鹿を言っていないで、寝るか何か飲んでから寝ろ」

「あ、なるほど。やはり小町の下着には興味なくても綾香の下着には興味はあるんだね」

そう言って小町は、キッチンへ向かい牛乳を温め始めた。

「話は変わるけど、お兄ちゃん、まだ勉強してたの？」

「まあな。中間テストも目の前に迫ってるし、お前や綾香の勉強を教えてたからな。自分の時間が取れてなかったから」

「なんか、悪いね…勉強見てもらって…」

「別に構わないさ。お前や綾香を教えることで、俺自身の復習にもなるからな」

「ありがとう、お兄ちゃん。それじゃあ、お言葉に甘えて、今から勉強を見てもらうかな」

「今からか？」

「うん、そだよ」

「……仕方ないな。わかった、あと少しだけだぞ」

「わかってるよ」

ミルクを飲み干した小町は、自分の勉強道具を持ってきて、勉強を教えてもらうことにした。

小町に日本史を教えつつ、自分の勉強も続ける。そしてとあることを聞いてくる。

「綾音お姉ちゃんも真面目だったけど、お兄ちゃんも真面目だよね」

「真面目が悪いのか？」

「ううん、そうは言っていないよ。世の中には色々な姉や兄がいるんだなくって。小町が通う塾の友達はね、お姉さんが最近不良化したんだって。夜とか全然帰って来ないらしいよ」

「夜に全然帰ってこないのは、問題だよな」

「でもね、でもね、お姉さんは、総武高に通ってて超真面目さんだったんだって。何があったんだらうねー」

「総武高校に通う超真面目のお姉さんね……」

八幡は、日本史を教えているのだが、当の小町は、塾でのことをずっと話している。

「まあ、その子のお家のことだから何とも言えないけれど。最近仲良くなつて相談されたんだけどさー。あ、その子、川崎大志君つていてね、4月から塾に通い始めたんだけど」

八幡は、小町にそう言われて、あのとときの勉強会を思い出す。緑子、七海、かおりに勉強を教えていたあの時、小町は男を連れていたことを思い出した。

「大志君つて…彼氏か？」

「彼氏…？違うよ、お兄ちゃん。塾のお友達だよ」

「隠さなくてもいいぞ。お兄ちゃんは、小町に彼氏が出来ようが、味方だぞ」

「だから、男友達つてあって彼氏じゃないから、お兄ちゃん！」

そんな会話をしながら、八幡と小町は勉強するのであった。

第2章―51―第17話―夢と遅刻と川崎沙希。

八幡は、夢を見ていた。その夢とは、もちろん綾音との思い出のこまである。

そんな夢を見ながら、ニヤニヤした。

「……綾音…俺はお前が一番…好きだ!…むにやむにや…」

そんな台詞を寝言のように言った直後、彼はベッドから転げ落ちる。その衝撃で目が覚める。まだ覚醒まで時間がかかり、約10秒間で、自身が今置かれている状況を理解する。

「…昨日、小町に勉強を教え終わって、自室に戻ってきてそのまま眠ってしまった…時間も9時30分…完全に遅刻だな…」

ため息を吐きながら学校へ行く準備を始める。

「急いだところで、遅刻なのは変わらない。なら焦らずに行くべきだな」

支度を整えると、キッチンまでやってくる。するとそこには、綾香の作った朝ご飯がテーブルに置かれている。トーストとハムエッグとコーンスープが置かれていて、

「八幡お兄ちゃんへ。私は小町と先に行きます。私は遅刻しても構わないと思っただけど、小町がそれはダメだつて。私達のせいで八幡お兄ちゃんが疲れてるのなら、ごめんなさい。朝ごはん、ちゃんと食べて下さいね」

綾香が書いたであろう置き手紙である。

「綾香、別に気にするな」

八幡は、そう言って綾香が作った朝ごはんを食べ始めたのだつた。

朝ごはんを食べ終わると、食器類を片付けてから学校へ登校する。

戸締まりを済ませた八幡は、自転車にまたがると、安全運転で学校へ向かう。

登校時間が遅いため、学生や社会人の姿は無い。見当てるのは、高齢の老夫婦や赤ちゃん連れの若夫婦である。

「…俺もあんな老後や結婚生活を夢を見てたな…」

綾音との未来を創造していたこともあった。綾音の闘病生活を支えながらも夢を見ていた。

2人で寄り添いながら縁側でお茶を飲んでいるような老後生活。

2人で悪戦苦闘しながらも子育てをしている未来。

綾音とはもう叶わない未来だが、告白された誰かとそんな未来を築くことは出来るのか。

「まあ…今考えても仕方がないか…」

まだ答えが出るわけではない。答えを急いで彼女達を傷つけるわけにはいかないと八幡は考えている。

自らが決めた1年という区切りを。

校門を潜ると学校内の静けさだけが目と耳に入る。今は授業中であり、誰も教室外には出ていないのだから。

八幡は自転車をクラスの駐輪場に止めると、昇降口へ向かう。校舎に入りくつ箱にて、上履きに履き替え、2/F組を目指す。シーンとした廊下を歩きながら深呼吸をする。

何故八幡が深呼吸をしたのは、今の時間が誰かなのかをわかっているからである。

今授業が行われているのは現国。

つまり平塚先生である。

八幡は、教室の扉を開ける。そして、物言わぬ視線が一斉に向けられる。彼はクラスメイトの視線が嫌ではない。黒板側にいるただ1人の恐怖のオーラを含んだ視線を向けてくるのを除けば。

だが八幡の事を知らないクラスメイトもいるようで、ヒソヒソしている。そんなことを気にせずには彼は自分の席へ座る。

平塚先生は、教卓をコツコツと叩きながらしかし表情は笑顔だ。だから余計に恐ろしいのだが。

「比企谷、授業が終わったら私の元へ来るように」

「はい、わかりました」

八幡は、そう言うと、黒板に書かれている授業の内容を書き写す。

授業の前半部分は、戸塚か葉山、もしくは吹寄に見せてもらおうかと考えていた。

残りの授業時間はあつという間に過ぎチャイムが鳴る。

「では、本日はここまで。比企谷はこちらに来たまえ」

そう言つて平塚先生は、ちよいちよいと八幡を招く。彼も教卓へ向かう。

教卓の前に平塚先生と対峙する。先生は八幡をギロつと睨んだ。

「さて、殴る前に一応、私の授業に遅刻した理由を聞いてやろう」

「言い訳はしません。殴るなら殴つて下さい。遅刻した俺が悪いのですから」

八幡は、言い訳をしなかった。夜遅くまで、自身の勉強や綾香、小町に教えていたことにより、寝坊してしまったのだが。綾香や小町を何よりも悪者にはしたくはなかったのだ。

「比企谷、なんだ潔いじゃないか？覚悟は出来るようだな。なら今回は君の正直さに免じて許してやろう」

「はっ。」

殴られることを覚悟していた八幡からすれば、拍子抜けである。あの平塚先生が正直さで殴ることをやめるのかと。そして平塚先生から殴ることをやめた理由を聞かされる。

「実はな、比企谷の妹と1年の雪柳から連絡を受けてたのさ」

「はあ!?!あの2人からですか?」

「そうだ。比企谷の妹は電話で、雪柳は、職員室でな。兄に遅くまで勉強を教えてもらっていたから、とな。それに理由があるのに言い訳をしなかった。だから、殴るのはやめたわけだ」

平塚先生は、事の真相を話してくれた。

「……ただ、ここでする内容では無いですか」

「すまない、比企谷。ここでする話ではなかったな。それともう1人の遅刻者が今頃来たか、川崎沙希、君は重役出勤かね?」

川崎は、一瞬の間を置いて、黙ってペコリと頭を下げてただけだった。無言で自分の席へ向かう。

「川崎沙希……」

八幡は、クラスメイトの名前を小声へ言った。いつぞやの屋上で、職場体験の紙を拾ってくれた事を思い出していたのだった。そしてスカートの中身も思い出していた。

第2章―52―第18話―川崎大志の依頼。

この日八幡は、途中出席だったため、気分的には楽であった。ただ遅刻という汚点がついたことには、不満はあったが。綾香と小町のおかけで、平塚先生の制裁をくらう事がなかった。だからあの2人に何か買っつていこうと思いつく。

「綾香と小町に何か買っつて行くか…」

ジュネスの方へ足を向ける。あそこには、2人の大好きなスイーツ屋がある。ただ総武高校と海浜総合高校の生徒達が、うじゃうじゃいるのは間違いないだろうが。

「まあ、平塚先生の一撃に比べれば、待つくらい何とでもない」

そう思った時、カフェの中から手招きしている人物がいた。どうやら戸塚である。どうやら戸塚は、手招きしながら八幡って呼んでるよ
うだ。

「…戸塚、カフェにいたのかよ」

そう言いながらカフェの中へ入る。戸塚が自分の席の方から

「八幡、ここだよ!」

「戸塚、なんだ」

戸塚の席まで来てみると、雪乃と結衣がいた。

「比企谷君、貴方は呼んでいないのだけど」

雪乃はそう言っつて、結衣は誘っつてない人来たみたい騒いでいた。

「呼ばれようが呼ばれないが別に俺は構わないけど。戸塚、お前は雪ノ下達と勉強しているか?」

「うん、あ、そうだ八幡もどうかかな?」

「俺は別に構わないけど、そっちの2人が拒否してるからな」

八幡は、雪乃と結衣を見ている。

「……」

「アハハ、あたしは別に構わないし。ヒツキーつて遅刻で授業のノート、書いてないでしょ?ならあたしがノートを…」

「あ、ああ、それは間に合っつてる。吹寄からノートを借りて何とか書き写せまし」

「そ、そんな…せいりんに」

結衣は、八幡がノートを吹寄から書き写してもらった事を聞いて落ち込む。八幡は、戸塚の隣に座る。

「俺としても遅刻からのリスクは避けたかったからな」

「比企谷君、貴方、今日遅刻したの？」

「まあな。妹達に勉強を教えてたしな。まあ、自分の勉強をやっていたけど」

「遅くまで勉強していて、それで寝坊して遅刻を？」

「結論から言えばそうなるな」

「八幡！なんかすごいね」

戸塚が褒めてきた。八幡としては当たり前の事をしているだけだが。雪乃はなんか余計にライバル視した目で見ている。結衣は

「そんな遅くまで勉強してやる意味あるのかな？」

「前にも言ったと思うが、人は将来に向けて勉強するんだよ。お前は将来なんになりたいわけ？」

「ヒツキーが真面目な事を聞いてきたし！」

「俺はいつも真面目だが？」

雪乃は結衣に助け船を出す。

「由比ヶ浜さんに聞くのなら、貴方はどうなの比企谷君？」

「俺か？俺はだな」

テーブルの上にあるメニュー表を見ながら八幡は黙り込む。雪乃も結衣も戸塚も八幡を見る。

「まあ、そういう俺もまだ決めてはいないが。それでも人々の役に立ちたい職業にはつきたいと思っている」

八幡は、真面目にそう答えた。

「貴方が人々の役に立ちたい職業にねえ」

「八幡が人々の役に立つ職業かあ。スゴいよ！僕もまだ決めてないよ」

雪乃と戸塚がそれぞれの感想を述べる。結衣はポケーとしている。

「というかお前達、テスト勉強していたんじゃないのか？」

「あ、そうだよ！あたし達勉強していたんだった！」

ポケーっとしていた結衣がそう言う。雪乃が八幡を試すかのよう
に問題を言ってくる

「地理より出題。千葉の名産を2つ答えよ」

「千葉県の名産は、なし、すいか、かぶ…農産物ばかりだが」

「正解よ」

雪乃はちよつと悔しそうにしている。

「ちなみに名産じゃないが、祭りと踊りとかな」

「比企谷君、千葉音頭の歌詞なんて誰も知らないわよ」

「千葉音頭を知ってるとは…」

そんな感じでテスト勉強をしていると、小町が声をかけてきた。

「あ、お兄ちゃんと知り合いの」

小町は中学の制服のまま嬉しそうに手を振った。そして彼女は軽
く雪乃達に自己紹介をやる。小町は結衣を見て何か思ったが、それ以
上は何も言わなかった。

「それで小町、お前もここでテスト勉強か？」

「ううん、大志君から相談を受けてて」

そう言って向かいの席に座る。そこには学ランの姿の中学生が
座っていた。彼は八幡に一礼をする。

「この人が川崎大志君。昨日話したでしょ？お姉さんが不良化した
人」

「ああ、聞いたな」

「で、どうしたら元のお姉さんに戻ってくれるか相談されたんだけど。

あ、そだ、お兄ちゃんも話だけでも聞いたあげてよ」

「ここまで聞いたから、拒否はできないな。大志君話してくれ」

「ええ、わかりました。姉ちゃん最近帰りが遅いし、親の言うこと全然
聞かないんすよ。俺がなんか言ってもあんたには関係ないってキレ
るし」

そう言って大志はうなだれる。彼は彼なりに思い詰めているよう
だ。

「……もうお兄さんしか頼れる人がいなくて」

「そう言ってくれるのは、有難いが…」

「自己紹介がまだでしたね。川崎大志つす。姉ちゃんは、総武高校の2年で名前は川崎沙希って言うんですけど。姉ちゃんが不良っていうか悪くなっちゃったっていうか…」

「川崎沙希ってあの同じクラスの川崎沙希か？」

「川崎沙希さん」

「ヒッキー、川崎さんでしょ？ちよつと不良っぽいついていうか少し怖い系っていうか」

「まあ、一匹狼系なのは間違いないな」

川崎沙希、いつもクラスにいるときは、外の風景を眺めている。何か冷めた感じがすると八幡は思っていた。彼女の下着が攻めの黒だというのは置いといて。雪乃が大志に

「お姉さんが不良化になり始めたのは、いつ頃かしら？」

「は、はい！姉ちゃん総武高校行くぐらいだから、中学のときとかは、すげえ真面目だったんです。高1んときも、そんな変わらなくて…。変わったのは最近なんすよ」

「高2になってからか」

「はい…」

「2年生になってから変わったことで何か思い当たるのは？」

「無難なところでクラス替えとかじゃやない？F組になってから」

「つまり、比企谷君と同じクラスになってからということね」

八幡はイラツとした感じで雪乃に言って返す。

「何で俺が原因みたいな発言をされるんですか、雪ノ下さん？」

小町も不機嫌な表情で雪乃に

「何でお兄ちゃんが原因みたいになってるんですかね？」

「ごめんなさいね、小町さん。言葉足らずな面があつて」

「……………」

小町の険悪モードに結衣が話を無理矢理変える。

「でもさ、帰りが遅いつて言つても何時くらいなん？あたしもわりと遅かったりするし。高校生ならおかしくはないんじゃない？」

「あ、は、はあ、そうなんすけど」

大志はしどろもどろになりながら結衣から視線を逸らす。結衣み

たいな女子高生は中学思春期には、エロくて凝視できない。

「でも、5時過ぎとかなんすよ」

「それって、もう朝帰りとかじゃん。そんな時間に帰ってきて、ご両親は何も言わないのかな？」

「……………」

「そつすね。うちは両親が共働きだし、下に弟や妹いるんで、あまり姉ちゃんにうるさく言わないんす。それに時間も時間なんで滅多に顔を会わせないし…。まあ、子供も多いんで、結構暮らしがいっぱいなんすよね」

「なるほど…」

八幡は、あることを考え始めた。だがまだ決めつけるのは早いとも考えた。

「たまに顔を合わせてもなんか喧嘩しちゃうし、俺がなんか言ってもあんたには関係ないの一点張りで…」

「家庭の事情、ね。どこの家にもあるものね」

そう言った雪乃の顔は、今まで見せたことのないほどに陰鬱なものだった。その顔は悩みを話にきた大志と同じように、それ以上に泣き出しそうになっている。

「雪ノ下…」

八幡が雪乃に声をかけた時、ちょうど雲が太陽を隠したのか、ふと影が指す。そのせいで俯いた雪乃の表情はよく見えない。ただ力なく落とされた肩だけが短いため息をついたことを教えてくれた。

「……………何かしら？」

顔をあげた雪乃の表情は、いつもと同じような冷たい表情である。「それに、それだけではないんす。なんか、変なところから姉ちゃん宛に電話がかかってきたりするんすよ」

大志の言葉に結衣が疑問符を浮かべる。

「変なところー？」

「そつす。エンジェルなんかかっていう、多分お店なんですけど、店長って奴から」

「そのの何が変なの？」

戸塚が問うと大志は机をバンツと叩いた。

「だ、だって、エンジェルっすよ!? もうヤバイ店っすよ!」

「え、全然そんな感じはしないけど…」

若干結衣が引きながらそう言った。八幡は、若干嫌な予感がしてくる。

「とにかくだ、まずは店の特定が先だろ。まだ危険か危険ではないかわからない。それに朝まではたらいっているとか、学生の範疇を超えている」

「んー…、ヒッキー…やめさせるだけだど、今度は違う店で働き始めるかもよ」

結衣がそう言うのと小町がうんうんと頷く。

「お兄ちゃん、それっていたちごっこにしかならないんじゃない」

「つまり、対症療法と根本治療、どちらも並行してやるしかないということね」

「まあ、それしかないかもな」

八幡は別の事も考えてはいたが、今のところは置いておくことにしたのだ。

雪乃は、大志の依頼を受託し奉仕部として活動することに。

八幡と結衣もそれを承諾したのだった。

川崎沙希更正プロジェクトが開始されることになった。

第2章―53―第19話―川崎沙希更正プロジェクト。

こうして、川崎沙希更正プロジェクトは開始されるのである。翌日の放課後から奉仕部にてすでに始まっているのだ。雪乃が難しそうな本を持って待っていたのだ。

「では、始めましょうか」

この言葉に八幡、結衣は頷く。そしてゲスト参戦の戸塚も頷いた。「済まないな、戸塚。お前まで巻き込んだ感じになったみたいだから」
「ううん、いいよ。僕も話を聞いちゃったし。それに八幡達がどんなことするか興味あるし。お邪魔じゃなかったから、付き合いたい、な」
「別に邪魔ではないから、付き合ってほしいものだよ」

八幡はそう言った。そしてみんなで校舎内の様子を見たが、やはり試験前ということもあり、その上部活動停止期間であるため、生徒が残っているのはごくわずか。残っている生徒がいるのは、図書室で勉強している生徒ぐらいか。

後は、少々問題を抱えてる生徒が教師に説教されてるくらいである。もちろん川崎沙希は、生活指導の教師に怒られている。

1ヶ月に5回遅刻以上すれば、もれなく生活指導行きになってしまうのだ。ちなみに2年生の生活指導は、平塚先生である。

「少し考えたのだけど、一番良いのは、川崎さん自身が自分の問題を解決することだと思うの。誰かが強制的に何かをするより、自分の力で立ち直った方がリスクも少ないし、リバウンドもほとんどないわ」

「確かに雪ノ下の言うとおりだろう。自分のことは自分で解決するのが一番だろうからな」

こういう問題に他人がおいそれと踏み込んでいいものかなとも思われる。下手すれば今以上にどうにもならないことにもなりうる。

「で、具体的にはどうする?」

「アニマルセラピーって知ってる?」

アニマルセラピーとは、簡潔に言えば動物と触れあうことで、その

人のストレスを軽減させたり、情緒面で好作用を引き出したりという一種の精神的治療法の1つである。雪乃が結衣に説明をしている。

このやり方は、正しい方法であろう。川崎沙希は、不真面目ではなく真面目な人間だったようだから。

「で、アニマルはどうから連れてくるんだ？」

「それなのだけど、誰か猫を飼ってないかしら？」

「猫なら飼ってるが？」

「あら、そうなの？」

「なんだよ、その意外そうな表情は？」

「別に…。貴方の家の猫でも構わないわ」

八幡は、スマホを取り出し小町に連絡する。もちろん自分達が飼っている猫、カマクラを連れてきてほしいと。すぐに小町は承諾した。

連絡して20分が経った頃、キャリアケースを片手にやってきた。

「わざわざ持ってきてくれて、ありがとうございます」

「いえいえ。お兄ちゃんの頼みですから」

「わー可愛いね」

そう言って戸塚は、カマクラを撫で回す。なすがままのカマクラを見るのも久しぶりである。

「で、カマクラをどうするんだ？」

「ダンボール箱に入れて、川崎さんの前に置いておくわ。川崎さんの心が動かされれば、きつと拾うはず」

「……強面の番長が、可愛い猫を撫でてる…ああいうヤツか」

八幡は、雪乃の頭の中は、一昔前の考えと思ってしまった。

こうして、川崎に対してのアニマルセラピー作戦が開始されることになった。

第2章―雪柳綾香（姉を超え隣に並び立つために）編
第2章―1―第1話―お気に入り入りの場所で八幡と一
緒に。

雪柳綾香編（姉を超え隣に並び立つために）

―比企谷家―綾香の部屋。

今日の昼間は、吹寄と八幡との勉強会を比企谷家で開いた。

八幡や吹寄に教えてもらったので、中間テストの不安要素が幾分と
無くなったのだ。

パジャマ姿で机に向かって座る綾香。

「チェーンメール…八幡お兄ちゃんのクラスでそんなものが回ってる
…」

彼女はスマホを取り、総武高校の学校サイトを見してみる。

学校の表のサイトに書かれているのは、総武高校の紹介などが書かれ
ている。

「学校紹介とかしかないわよね…」

後は、綾香達のクラスのチャットのやつと親友のチャットと水泳部
のチャットしかない。

「瑠璃達に聞いてみようかな」

「瑠璃、美桜、静香、今話せる？」

「綾香、何かあったの？」

一番最初に答えてくれたのは、一番に付き合いの古い親友の瑠璃で
ある。

「うん、ちょっとね…」

次に美桜がしゃべってくる。

「吹寄先輩と比企谷先輩と勉強会を開いたのよね？」

「勉強会はやったよ」

次に静香がまたまた下ネタを投下してくる。

「保健体育の実戦をして、失敗したとか！」

「中間テストに保健体育は無いっての！てか実戦ってなに！」

静香の下ネタに瑠璃が突っ込む。綾香もちやんと反論する。

【保健体育とか実戦とか、やってないから。ただ、普通に勉強会をしただけだから】

【私は、中間テストの勉強してるんだけど、綾香、話って何？】

美桜が冷静にそう聞いてくる。綾香は、チェーンメールのことをみんなに聞いてみる。だが

【チェーンメール？比企谷先輩のクラスではそんなのが回ってるの？】

【チェーンメールですか。私はエロのチェーンメールが入ってきますわ】

【それは、あんただけでしょ】

静香の下ネタにため息をつきながら瑠璃は綾香に

【2年の先輩達は、そんな話はしてなかったよ。まあ八幡さんのクラスの前輩じゃないけど】

【うん、制理先輩もそう言った。あくまでも2ーF内だけだつて】

【うーん、それって2ーF組内の問題つてことじゃないの？】

【そう言われれば、そうですね…】

【クラスの問題に私達が口出せるような感じはしないし…。八幡さんと吹寄先輩が何かするんでしょ？様子を見てから判断つてことで良いかな？】

【うん】

まずは様子を見てから、判断をすることを決めた綾香達。

【さてと、勉強の続きをしないと。じゃーね、また明日】

【綾香さん、また明日…今日は比企谷先輩のことを思つて、夜な夜なに…】

【やめんかい、静香！それじゃあまた明日ね】

【うん、また明日】

綾香はグループチャットを終えると、中間テストのために勉強の続きをすることにした。

比企谷家↓総武高校

翌日、綾香は朝早く行くと言う八幡と共に学校へ登校する。途中のコンビニで、昼御飯を2人共に購入。八幡は、おにぎり3つとお茶、綾香はサンドイッチを2つにお茶を購入。

購入してから再び学校を目指す。自転車をこぎながら

「全く、お前まで付き合う必要は無いぞ?」

「気にしないで。私が八幡お兄ちゃんに付き合いたいから」

「そうか」

「そ、そのチェーンメールって八幡お兄ちゃんが調べるの?」

「さあな。万が一奉仕部に依頼で来たらやるかもな…」

「危ない真似だけはしないでね」

「危ないことはしない」

八幡は、綾香が寂しがる、不安がる事をしないと決めているが、それが中々できないでいる。綾香が不安そうに

「私、八幡お兄ちゃんに何かあったら、お姉ちゃんに顔向けできないよ…」

「綾香…俺だつて綾香に何かあったら、綾音やお前の両親に顔向けできなくなるって」

そんな話をしながら総武高校に向かうのだった。

―総武高校・1ーC組

綾香がクラスに入つて来ると、すでに瑠璃は来ていた。彼女は早く登校するのが当たり前である。バスケットの朝練があるためではあるが。それがクセになつて朝練が無くても朝早く登校しているのだ。

「おはよう、綾香」

「おはよう、瑠璃」

「昨日はどうだったの?ちゃんと八幡さんや吹寄先輩と勉強できた?」

「うん、ちゃんと教えてもらったわ。そのおかげで苦手だったところも解けるようになったよ」

「それは良かったね。なら私にも教えてほしいんだ」

「うん、良いよ」

綾香は、瑠璃に勉強を教えることにした。彼女に教えているうちに、美桜と静香もやって来て、朝練ならぬ朝勉強をやるのだった。

時間が流れ昼休みになり、綾香はとある場所へ行く。その場所は前に来たことがある場所。それは八幡がよくいる場所。

それはあの非常階段の場所である。やはり綾香の思惑とおりにこの場所にいた。

「八幡お兄ちゃん、やはりここにいたんだ」

「綾香、お前もここに来たのか。友達と食べるんじゃないのか」

「私もたまには一人で食べたい時があるんだよ」

「そうか」

気持ちが良い風が吹いてる中、おにぎりとサンドイッチを食べている八幡と綾香。

「なんだか不思議な感じだな」

「不思議って何が？」

「こうやって昼休みにこんな場所で昼飯を食べてるのがって意味がだよ」

綾香は、クラスでも1年の中でも人気がある。もしかすると上級生からも人気があるかもしれない。

片や八幡は、クラスではぼっち。隠れファンがいるにしても、綾香の人気には届かないかもしれない。しかし彼女は

「別に不思議ではないと思うよ。八幡お兄ちゃんは、自分を卑下しすぎるの。もつと自信を出して生きて良いのに」

「自信って…俺は胸を張れるようには生きてきてない…。そういうのは、雅史や葉山みたいなヤツがするもんだよ」

そう言っすっぱい梅のおにぎりを食べる。

「ううん、私にとつて…お姉ちゃんだって八幡お兄ちゃんが一番カッコいいと思ってるから」

綾香は、真剣な眼差しで、言っている。冗談とかではない。

「綾香、お前……」

「だからもつと自信を持って！」

「……ふっ、お前ってやつは」

そんな他愛もないような世間話を2人で、おにぎりとサンドイッチを食べながら楽しんでいたのだった。

そんな楽しい昼休みの時間も過ぎていく。

第2章―2―第2話―親友達のひととき。

非常階段↓2―F組

昼休みが終わり、八幡は教室へ戻ると昼休み前よりも空気が重くなっている。女子達よりも男子達の空気がピリピリとしているのがわかるくらいになっている。

八幡は小声で

「今日あたりに当事者が代理人が奉仕部を訪ねてくるか…」
そう言つて5時間目の授業の準備に入るのであった。

非常階段↓1―C↓女子更衣室

一方の綾香は、5時間目が体育で更衣室で体操服に着替えている中である。着替えている最中に美桜が昼休みの事を聞いてくる。

「綾香、昼休みはどうだった？」

「どうだったつて…普通に昼食を食べたけど」

「進展は無しか」

「昼食を食べた後に、比企谷先輩のフ○ン○フ○トを」

静香が開口一番に下ネタを言ったため、瑠璃が頭を叩く。

「またあんたは、下ネタを！」

「アイタタ、瑠璃さん、わたくしの頭を叩きましたね」

「あんたが下ネタを言うからでしょ」

「否定している瑠璃さんも実は下ネタは好きなんですよ？」

瑠璃の顔が赤く変化していく。それを見かねた美桜が

「下ネタの話は置いとこうよ。5時間目の体育つて何やるの？」

「確か、バスケットじゃなかったかな」

綾香がそう答える。すると瑠璃達が

「バスケットなら任せなさい。静香、みっちり教えてあげるから」

「瑠璃さん、なんだかお顔が怖いですわよ」

「バスケットと言えば、綾香も中学までバスケット部だったわけだし、綾香に教えてもらおうかな」

「うーん、私よりも現役バスケット部の瑠璃の方がブランクが無くて良い

かも」

「フフっ、わかってるじゃない、綾香」

「私は、今はバスケ部じゃないしね」

瑠璃と綾香は、お互いに見合っつてそう言った。それを見た美桜が「下着姿で、カッコいいセリフ言っつてもね〜お二人さん」

すでに体操服に着替えている美桜と静香。それとは逆に下着姿の綾香と瑠璃。他のクラスメイトも着替えていたため、慌てて体操服に着替える綾香と瑠璃であった。

その後、美桜と静香は、瑠璃によってバスケでしごかれるのであった。

そして放課後になり、綾香達はクラスでしゃべっていた。

「あく、5時間目の体育：バスケのせいで、あちこちが痛いすわ」

「静香、それぐらいで痛いとか運動不足つてことね」

「ああ、明日筋肉痛になりそう…」

「美桜も運動不足が露呈したわね」

「綾香は、バスケから水泳部だから…運動部には変わらないでしょうが…」

「まあ、確かにそうだけど…」

「綾香さんは、今日はどうされるんですの？」

「いつも八幡お兄ちゃんに勉強を見てもらうわけにもいかないし、1人で勉強するわ」

「それじゃあさ、みんなで勉強していかない？」

美桜がそんなことを言っつてきた。普段ならそんなことを言わないが、余程中間テストの勉強がうまくいっつていないつてことだろう。

「私は構わないけど、瑠璃と静香はどうなの？」

「私は良いけど、静香はどうするのかしら？」

「私もご一緒させてもらいますわ」

「じゃあ、学校の図書館でやっつていこう」

綾香、瑠璃、美桜、静香の4人は図書館で勉強をすることになった。

第2章―3―第3話―親友達と勉強と家族団欒。

総武高校の図書室にて。

綾香、瑠璃、美桜、静香の4人は、中間テストの試験勉強のため図書室へ来ている。放課後だというのに、図書室にはかなりの生徒がいるようだ。

みんな考えることは一緒ってことだろう。家や他の場所では、勉強に集中できないということだろう。

「綾香のおかげでわかるようになってきた」

「そう？そう言ってもらおうと嬉しいけど、私も八幡お兄ちゃんに教えてもらったただけだから」

「愛しの八幡お兄ちゃん、私をどうして食べてくれないのかしら…」

静香は、静にそう言った。綾香は、顔を真っ赤にし瑠璃が静香の頭を叩く。美桜は無視して教科書とにらめっこしている。

「静香、あんたはまた下ネタを！」

「私は、綾香さんの心の内を代弁しただけですよ」

「静香、あんたって人間は！」

「瑠璃！静香、ちよつと静にしてよ！テスト勉強できないでしょ！」

美桜に怒られ静かになる瑠璃と静香。普段なら静香に便乗して言うてくることもあるが、余程中間テストがヤバイのか集中して教科書とノートとにらめっこしている。

「…美桜に怒られるとはね…」

「そうですわね」

美桜に怒られた2人は、静に教科書とノートを開いて勉強を始める。

「アハハ、美桜が正論言っておさめちゃった…」

「綾香、私が正論言ってるの变？」

「変じゃないけどさ…」

「ほら、みんな中間テストの勉強を真面目にしよう！」

美桜の奮起に綾香、瑠璃、静香も真面目にやり始めるのだった。

下校時刻ぎりぎりまで勉強をしてから帰ることにした綾香達。

「綾香、私達はバスで帰るから気をつけるんだよ」

「わかってるって、瑠璃」

「近頃、物騒な事件が続いてますしね。気をつけてくださいね、綾香さん」

「女性ばかり狙う事件よね。女ばかり狙いやがって許せん！」

「アハハ、気をつけて帰るから。みんなも気をつけてね」

瑠璃、美桜、静香は、総武高校の最寄りのバス停からバスに乗り込んで帰って行った。バス停に1人残された綾香は、自転車をこぎ始める。

夕方から夜に変わり始め、茜色の空が漆黒の闇に変わりつつある。

「八幡お兄ちゃん、チェーンメールの件はどうなったのだろう…」

そんなことを考えながら自宅へ帰る。

総武高校↓総武高校の最寄りのバス停↓比企谷家

比企谷家に帰りつくと、夕御飯の匂いが漂っている。

「八幡お兄ちゃん、帰って来てるの?」

綾香は八幡が奉仕部の活動をしていると、聞いていたため遅くなると思っていたが、どうやらそうではなかったようだ。急いで家に入ると玄関に八幡がやってくる。彼の姿は、制服にエプロンをつけている。八幡も帰ってくるなり、夕御飯を作り始めたのだろう。

「綾香、お帰り。学校で勉強でもしていたのか?」

「うん、友達とね。八幡お兄ちゃん、奉仕部の活動は?」

キッチンに戻り、夕御飯を作りながら

「奉仕部の活動はやった。そして葉山がチェーンメールの件の依頼を出してきた」

「あの葉山先輩が?」

「そうだな。アイツにとって今の現状が見るに耐えないんだろうな」

夕御飯を作りながらそう言った八幡。そんなこと言っていたら2階から小町がやってきた。

「お兄ちゃん、お腹空いた」

「へいへい、今作っているだろうが」

「綾香、お帰り」

「ただいま、小町」

2人は隣同士に座りテレビを付ける。夕方の今の時間ならドラマやバラエティーではなく夕方のニュースをやっている。彼女らはそのニュースを観ているようだ。

ニュースの話題は、政治問題そして経済問題、外交問題を取り上げ、次に事件のニュースを始めた。

ニュースキャスターが

「千葉県の〇〇市の〇〇で、女性を暴行する事件が起きました。被害者の女性は命には別状は無いようですが、全治3ヶ月の重症を負ったようです」

ニュースキャスターが読み上げたらコメンテーターが何かにつけて話している。綾香と小町は、2人で寄り添いながら

「怖いね、小町」

「そだね、綾香」

「物騒な世の中になったよな」

「八幡お兄ちゃんは、私や小町が襲われたら助けしてくれる？」

綾香が突然そんなことを聞いてきた。

「愚問だな。助けるに決まってるだろ、綾香、小町が襲われたら俺は命を掛けて誰であろうと戦うさ」

「お姉ちゃんの時のように？」

「ああー！」

天之河事件。綾音に一方的に気持ちを抱いて自宅まで襲撃してきた事件である。綾香や小町は、綾音から事の顛末を聞いてたのだ。

八幡が、自分の本当のヒーローに見えたこと。

己の中にあつた八幡への思いを確信したこと。

などなど話してくれていたのだ。

「綾音お姉ちゃんが言ってたとおりの発言だったね」

「お姉ちゃんがよく言ってたもの。八幡お兄ちゃんを好きになって幸せだったってね……」

八幡は、綾香や小町の話聞いていて、目の奥が熱くなっているの

がわかる。

「2人共…俺を泣かすような事を……」

八幡は、料理を途中で止め、ハンカチで涙を拭った。自分が思っている以上に2人は思ってくれていることに涙してしまったのだ。

そんな話をしながら、夜ご飯を作っていたのだった。

夜ご飯を食べ終えた3人は、それぞれのことをやり始める。八幡は、食べた後の炊事をして、小町はテレビを観ている、綾香はスマホを操作しているようだ。

「全く物騒な事件ばかりだな……」

ニユースから流れてくる話を聞いて八幡はそう言った。

千葉県内女性連続暴行事件。

柏市の殺人事件。

市原の放火事件。

「さつさと犯人、捕まれば良いのにな」

「そだね、こう物騒な事が起きると安心出来ないよ」

「でも…方が一私や小町に何かあれば…八幡お兄ちゃんは…」

「当たり前だろ、前にも言ったが俺は、綾香も小町も必ず守る。何があろうともな」

八幡がそう言い切った時、リビングのドアが開かれ父親が入ってくる。どうやら帰って来てたようだ。

「八幡だけじゃないぞ！このオレも2人はちゃんと守るからな！」

「親父…帰ってたのかよ！」

「当たり前だろう。半人前のお前に全てを任せられるとでも思ったか？」

「お父さん、お帰りなさい」

「おじ様、お帰りなさい」

「小町、綾香ちゃん、ただいま」

「親父、お帰り。疲れてんだろ、キッチンの方に晩ごはん作ってるからそれを食べてくれよ」

「八幡、ありがとな。オレや母さんがいない間、2人を良く守ってくれていることに感謝だな」

「当たり前だろ、俺は兄貴なんだからよ」

父親は、八幡と会話を終えると、キッチンに行き晩ごはんを食べる準備に入る。

その後、母親もパートから帰って来て、家族水入らずで久しぶりにみんなで過ごしたのだった。

第2章―4―第4話―様子。

―比企谷家

昨日の家族団欒からの翌日、八幡と小町と綾香は、仲良く朝ごはんを食べていた。父親はすでに出勤し母親はまだ睡眠中である。

「今日も頑張りますかね」

「お兄ちゃん、何だかジシクさい」

「ジシクさい？マジ…か…」

八幡はガクンと落ち込む。それを見た綾香が

「言葉がジシクさいであって、八幡お兄ちゃんがジシクさいってわけじゃないから、ねえ、小町？」

「お兄ちゃん、そこまで落ち込まないでよ」

「妹に言われるのは、グサツてくるからヤメテ…」

「ごめんなさい、八幡お兄ちゃん。全然おっさんじゃないからね」

「そうだよ、お兄ちゃん全然おっさんじゃないから」

「……………」

そんな感じで朝ごはんの時間は過ぎていく。

いつもとおりに、綾香と共に学校に登校した八幡は、教室へ行く。自分の席に座ると、戸部、大和、大岡の3人の様子を見ることに。

野球部もラグビー部も朝練をしている。放課後は主にサッカー部が練習にするので、早めに練習をやっておきたいからだ。

だが中間試験で部活動は全て休みに入っている。つまりどこの部活動も放課後の練習ももちろん朝練などやるわけがない。だから教室で様子を見ないといけないのだ。教室でアイツらは、個別で居ることが少ないため、ずっと気を引き締めないといけないのだ。

そんな感じで各休み時間も削ってまで見ていた八幡であった。

昼休み、いつもの場所には行かず、大人しく弁当を食べていると結衣が話しかけてくる。

「とりあえず、あたしが色々聞いてみる。…だ、だから、ヒツキーは全然無理とかしなくていいから。むしろなんもしなくていいから」

「……そりゃあ、その方がいいが……かと言ってお前に全部出来るのか?」

「や、やれるよ!ゆきのんのお願いだもの。やらなきや」

「…雪ノ下にお願いきれたねーか…」

結衣のやる気はみなぎっているようだが、このやる気は逆に空回ししそうなやる気だと八幡はため息を吐きながら結衣に言う。

「やる気は認めるけど、具体的に何をするつもりだ?」

「んー女子から聞いてみる。クラスの人間関係とかなら女子の方が詳しいし。それに、共通の嫌なヤツの話とかすると、結構盛り上がりつつ色々と話してくれるし」

「相変わらず、ガールズトークが怖いな……」

そんな会話は、綾音達で経験済みである。その内容がえげつない事もわかってているのだ。

「そんな黒い話じゃないってば!その愚痴、というか情報交換……?」

「ものは言い様だからな…ガールズトークがえげつない事は知ってるから」

八幡がそう言うと、結衣が鋭い視線で見ってくる。

「……あの時の海浜の3人ね」

「…海浜の3人って…名前ぐらい覚えてやれっつての。それとも覚えてないのか?」

「……山岸緑子、高梨七海、折本かおり…」

結衣はいやいやながらも彼女達の名前を挙げた。

「覚えてるじゃないか」

「彼女達の事は、今はどうでもいいから!とにかく、ヒツキーは何もしなくていいから」

そう言うと結衣は、葉山グループ内の女子グループである三浦グループに行ってしまう。

「お待たせ!」

「あ、ユイー。おっそいから!」

三浦をはじめとするグループの女子達は、気だるそうに返す。

「てかさー、とべつちとか大岡君とか大和君とか最近微妙だよねー」

なんかこうアレな感じ? って言うか…」

八幡は、結衣の直球の言葉に操作していたスマホを落としそうになった。

「え…ユイってそういうこと言う子だっけ?」

そう言っって一歩引いたのは、海老名であった。そして三浦がきらつと目を輝かせて、ここぞとばかりに攻勢に出る。

「あんさー、ユイ。そういうのってあんまりよくない? トモダチのことそう言うのやっぱまずいでしょー」

「ち、ちがつ、ちがくてっ! その、気になる、というか」

「なに、あいつらの誰か好きなん?」

「全っ然違う! 気になる人はいるけど…それはアレな人だし…はっ!」

しまった! という表情の結衣とそれを三浦がニヤリと笑うのが同時であった。

「え、ユイ…誰か好きな人できたん? 言ってみ? ほれほれ。協力するから!」

「だ、だから! そうじゃなくてっ! 気になるのはあの3人の関係性? っていうの? なんかも最近妙だなーって思うの!」

「んだ、それか。つまんね!」

あからさまに興味を失う三浦。スマホをチャカチャカと操作を始める。だが、違う女子が食い付いてきた。それはメガネ女子の海老名である。

「わかる。ユイも気になっていたんだ…。実はあたしも…」

「そうそう! なんだからギクシヤクしてるってさ!」

「わたし、思うんだけど」

海老名は深刻そうな表情でため息を1つつく。

「わたしの絶対とべっち受けだと思っうの。で大和君の強き攻め。大岡君は誘い受けね。あの三角関係絶対何かあるよ!」

「あ、わかるわか…うえ?」

「でもね、でもね、絶対3人とも隼人君狙いなんだよ! くうく友達の人

めにみんな一歩引いている感じ。キマしたわあ〜」

海老名はずっとBLの話をして、テンションが上がりっぱなしになっただけ、鼻血まで出している。結衣は、海老名の勢いに押されて困っていると三浦が

「はあ〜出たよ、海老名の病気。おめ、黙ってれば可愛いんだからちやんと凝態しろ鼻血拭けし」

そんな状態を見ていた八幡は、自分の机に視線落として、ため息を吐いた。結衣は、そんな彼を見てごめんと謝った。

全然何も得るものはなかった。海老名のBL好きな情熱がすごいとわかつただけ。

休み時間は、予鈴、本鈴を含めて3分もない。八幡は、戸部、大和、大岡に視線を移す。

3人は、葉山を含めて窓際に陣を取っている。葉山が窓際に寄りかかり、それを囲むようにして戸部、大和、大岡がいる。ここからわかることは、葉山がリーダーであり、キングということだ。そしてその3人にも役割があるようだ。

「で、さ。うちのコーチがラグビー部の方にノックを打ち始めて！やばかったわ！。硬球なのによ」

「……あれはうちの顧問もキレてた」

「マツジウケンだけど、つつーか、ラグ部とかまだいいわ。俺らサツカー部やベーから。いいーややばいでしょ、外野フライ飛んでくるとかヤバいでしょ！そーういや…陽介が外野フライ取ったわ！けどサツカーボールを蹴り損ねたあれ…ある意味激アツだったわ」

大岡が話を振り、大和がそれを受ける。そして、戸部が盛り上げる。よくできた演劇のようだ。

人生は舞台

シエイクスピアの言葉である。

まさしく人は与えられた役をこなしているようだ。

そしてこの舞台の監督と観客は葉山隼人だ。葉山は時には笑い時には話題を提供し、時に一緒になっただけはしゃぐ。

八幡はずっと葉山と3人を観察してとある事に気がついた。

1人が今、見えないように舌打ちをする。

また1人は、隣のやつが会話を始めると急に黙り込む。

またある1人は、つまらなさそうにスマホをいじる。あまりこの話題に割り込んでこない。

八幡はこれ以上の収穫も無さそうだなと思っているとき、葉山が席を立て

「悪いちよつとごめん」

葉山はそのまま八幡の方へやってくる。

「どうした、葉山？」

「いや、なんかわかったのかなって思ってたさ」

「まだ大した情報は無い」

そう言つて八幡は、葉山の抜けたグループを見てみると、意外な光景が広がっていた。3人ともスマホをいじっていた。そして時々葉山の方を見ている。八幡は、頭の中に閃きが輝く。

「どうかしたか？」

「謎はすでに解けたぜ」

八幡はそう言つて、葉山にニヤリとスマイルを見せるのだった。

第2章―5―第5話―葉山グループの男達。

八幡は、葉山にニヤリと笑った。彼はなぜ八幡が笑っているのかわからなかった。だか彼は葉山に別の事を聞き始める。

「そう言えば、戸部達以外の…田中や山本とは、近頃しゃべってないのか？」

「まあね。最近、山本と田中は、俺達よりというよりか、松野達と一緒にいるみたいだな」

「何かあったのか？」

「別に何もないさ。あの2人は、俺達と話すより、松野達という方が楽しくなったんだろうな」

「…あの時、あの体育の時に俺を庇ったりしたからか？」

「それは違う。元々は大岡の友達って感じで、そういうことで友達友達って感じでやってたのかな」

田中と山本は、大岡と同じ野球部である。その繋がりで葉山とも仲良くなったようだ。

「そうだったのか…。友達友達ってやつか」

「そうだな…」

「疎遠になったことに後悔しているのか？」

「…確かにそう思っている自分もいる。だけど君を馬鹿にするのも許せなかったんだ」

「…なんでお前が許せないんだ？」

八幡がそう言った後、葉山が彼の方へ真剣な表情で

「君は…俺なんかより凄い。彼女のことともそうだが、サッカーもだ」

「葉山…お前は俺を買いかぶりすぎだ。お前の方が凄いつて」

「違わない。比企谷、君は凄いと思う。これは俺の素直な気持ちさ」

「…葉山…お前…」

八幡が葉山に言いかけた時にチャイムがなり、葉山は八幡が何を言おうとしたのか気になったが、聞かないことにしたのだった。

―2―F組↓奉仕部

そして放課後になり、メンバーは奉仕部へ集められる。開口一番に

雪乃が八幡と結衣に

「どうだったかしら？」

と調査報告を求めてきた。結衣は、ははーと笑ってから

「ごめん！一応女子に聞いてみたけど全然わかんなかった」

素直に謝った。結衣としては、海老名のBLに付いていけてなかったし三浦はその手の話に話さなかった。結衣は頭を下げながら雪乃の顔を見ている。しかし雪乃は別状怒ってるわけではない。

「そう、それならそれで構わないわ」

「いいの？」

「逆に言えば、女子達は今回のことにさして興味は持っていない、関わっていない、ってことでしよう。そうなると葉山君のグループの男子の問題ってことになるわ。由比ヶ浜さん、ご苦労様」

結衣が感動でうるつと瞳を滲ませていた。抱きつこうとしたところを雪乃がするつとかわす。彼女はごちつと壁におでこをぶつけていた。雪乃は呆れた様子で、半ベそかいている結衣のおでこを撫でながら八幡を見る。

「で、貴方の方は？」

「犯人は分からなかったが、1つわかったことはある」

「何がわかったのかしら？」

「それってさつき話の中で言ってた…」

「ああ、そうだ」

八幡は、雪乃、結衣、葉山を見据えながら話し出す。

「あのグループは、葉山のグループってことだ」

「はあく今さら何を言ってるの？」

結衣が思いつきり八幡を馬鹿にしたように言った。

「……比企谷君、君がさつき話していたやつだよな」

「友達の友達ってやつだな。お前のグループは、お前が中心なんだ。お前がいないと成り立たない。お前がいるときといないときにハッキリと違いが出た…」

「……。それはなんとなく気がついてたさ。自分のグループと君の比企谷グループの違いが…」

葉山は、窓の外を見ながらそう言った。

「君のグループは、友達の友達って様子ではない。君を中心にした本物のグループって事が、サッカーの試合で思い知らされたからね」

「あいつらは、俺がいなくても親友同士だからな」

結衣は何の話をしてるのか、ポカーンとしていて、雪乃は何かを考えている。

「話は戻すとして、由比ヶ浜、お前会話の中心人物がいなくなったらどうする?」

「あ、あたし!? うーん、気まづくなるかも。何話していいかわかんないし、スマホをいじっちゃうし」

「そういうものなの?」

由比ヶ浜の問いに雪乃は、不思議がっている。葉山はずっと黙ったままだ。葉山にとって戸部、大和、大岡は友達だが、それ以外は、葉山を通しての関係でしかない。こればかりは、葉山自身でもどうすることもできないのだから。雪乃が八幡に

「比企谷君、仮に貴方が言うことが正しいとしても3人の犯行動機の補強にしかならないわね。そのうちの誰かやっているかを突き止める方法はないかしら? その犯人を消さない限り事態は収束はしないわ。いつそう3人とも」

雪乃は顎に手をやり考え込む仕草をする。

八幡は、実力行使は最後の手段としか考えていない。天ノ河事件では、実力行使を使わざる負えない事件になってしまったが、今回のチエーンメールの問題の犯人は、襲撃なんて危険な考えは持っていない。

「雪ノ下、実力行使は最後の最後の手段だ。葉山、お前が望めば、解決するが、犯人を捜す必要もなく、これ以上揉めることもなく、……。そして、あいつらが、仲良くなれる可能性があるかもしれない方法が」「どんな方法かな?」

「葉山、お前が俺と組めば、良いだけのことだよ」

八幡はそう葉山に言ったのだった。

第2章―6―第6話―八幡、葉山とグループを組む。

「葉山、お前が俺と組めば、良いだけのことだよ」

八幡はそう葉山に言ったのだった。葉山は少し驚きながらも

「なるほど、俺が外れれば、あいつらは、3人でグループも組めるというわけか」

「そうだ。お前としては不本意だろうが、あいつらの為を思うなら我慢してくれ」

「いや、俺としては、君をもっと知る機会だと思っている。だからよろしく、比企谷君」

「ああ、まあよろしくな」

こうしてチエーンメールの問題は片付いていく。雪乃と結衣は、ポカンとして成り行きを見ていたのだった。

そして翌日のグループ分けの時間がやってきた。

教室の黒板には、クラスメイトの名前が羅列されている。それぞれ3名1グループずつに。職場体験ごとに分けられている。

前から言い交わっていたであろう隣の席の女子3人がきやつきやつと微笑み合って黒板の前まで行き、自分達の名前を書き始めた。

八幡は、葉山と組むことを決めているため、あと1人を誰にするか見ていた。ただ葉山は情勢を眺めているのか、戸部、大和、大岡に3人とはグループは組まないと説明をしているようだ。一方の結衣は、三浦、海老名とグループを組みどこに行くか決めているところだ。

八幡は、席から動かずスマホをいじっていた。そしてあるサイトを開いてしまう。

それは、千葉県の中にある千葉村のサイトであった。それは懐かしくもある八幡の思い出の場所でもある。

「千葉村…懐かしいな…綾音がまだ車椅子で外に行けた夏の終わりが見え出した頃…」

中学3年の夏休みに八幡、綾音、雅史、緑子、七海の5人は、千葉村を訪れている。

ここで何かあったかは、千葉村を訪れた時にされるだろう。

八幡は、スマホの中に保存されているみんなで写った写真を見る。

「この時は…こんなグループ決め何にも思わずに決めていたな…俺と雅史と陽介…綾音と緑子と七海って…」

彼が昔の思い出に浸っていた時、誰かに身体を揺すられる。

「八幡、聞いている？」

「うん？と、戸塚か。どうかしたか？」

「あ、あのグループ分け、の話だけど？」

「グループ分けか。もう戸塚も決まったんだろ？」

戸塚はもう誰かとグループを組んでいるだろうと八幡は思っていた。彼は黒板や回りを見渡す。すでにグループ成立し黒板に名前が3名ずつ書かれている。そしてあの3人の名前が書かれている。そして葉山グループからハブられた2人も。

【戸部、大和、大岡】

【松野、田中、山本】

松野達はともかく、戸部達は出来立ての親友みたいで、初々しくも見えるのだった。そんな様子を見ていたら、葉山に話しかけられる。

「比企谷君、約束とおりにグループを組もう」

「そうだな。約束だもんな」

「おかげで丸く収まった。サンキューな」

「俺はただアドバイスを言っただけだ。後は葉山、お前の才だよ」

「そんなことないって。ああ言ってくれなきや多分まだ揉めてただろうし…」

「…まあ、それはお前と一緒にいたいから」

揉める原因は、葉山と一緒にいたいからである。だから揉める原因を取り除けばいいだけである。

揉める原因↓葉山

だから葉山隼人を取り除けば、争うものが無くなる。

「俺、今までみんなが仲良くやれば良いと思ってたけどさ、俺のせいで揉めることもあるんだな」

「それは人気ものの宿命ってヤツだな。なあ、葉山」

「君ほどではないと思うよ。総武中の色男には敵わないよ」

「は、葉山…それは言わない！」

「……それにあいつらに、3人とは組まないって言ったら驚いていたけどな。これをきっかけにあいつらが本当の親友になれば、良いって思うよ」

「そうだな」

「改めてよろしく、比企谷」

「ああ、よろしくな、葉山」

葉山と八幡が仲良くしゃべっていると、頬を膨らました戸塚がいる。

「八幡、僕は？」

「戸塚は、誰かと行くの決めてんじや？」

「だからっ！」

そう勢い込んでから八幡のブレザーの袖口を掴んだ。

「……最初から八幡と行くなって決めてたの！」

「それじゃあ、3人グループの成立だな。黒板に名前を書きに行こうか。比企谷、場所はどこにする？」

「お前に任せるさ、葉山」

八幡が葉山にそう言うのと戸塚も頷いた。

葉山は、黒板に八幡達の名前を書き始めた。

【葉山、戸塚、比企谷】

そして行きたい職場の場所を書き込む。すると周りの連中が

「あ、あーし、隼人と同じ場所にするわ」

「うそ、葉山君そこに行くの？あ、うちも変える変える」

「あたしもそこにしようかなー」

「隼人ばないわ。超ばないわ」

クラスの連中が一齐に葉山の回りに集まる。そしてあれよあれよという間に皆が葉山と同じ職場を選び、黒板の名前の場所を書き換え出した。

書き加えられていく名前に埋もれて、いつの間にか八幡の名前が消えている。八幡は黒板の有様をスマホのカメラで撮った。

「このクラスでの存在はこんなものだよな…」

八幡は、スマホの中の写真を見ながら総武中の時の姿と今の姿を見比べていたのだった。

こうして職場体験のグループ分けによるチェーンメールの件は解決したのだった。

第2章―7―第7話―夜中の綾香との語り。

チーンメール、葉山グループの問題が解決した。正式には解決した訳ではない。だが依頼者の葉山が良しとしたのだからよしとするしかないだろう。

中間テストの日は刻々と近づいてきているのだ。

夜遅くまで勉強していた八幡は、台所までやって来て、お茶を飲み干す。

「本来なら勉強してるのだから、糖分たっぷりMAXコーヒーを飲めばいいのだけどな」

綾音の死から飲めなくなったMAXコーヒー。いまだにMAXコーヒーの缶を持つだけで、震えや嫌な汗が出てくるのだ。

ふとりビングに視線を移した八幡は、リビングのソファで、綾香が寝ていることに気がつく。

「…綾香、ここに寝てるのかよ」

ソファで大胆に寝ている綾香は、腹を出して寝ている。白い肌は、すうすうという寝息に合わせて規則正しく波打ち、その度に可愛いへそが動く。彼女が身動きすると、勝手にきたのであろう、だるだるに伸びきった八幡のTシャツから水色のブラジャーが覗いて見えた。綾香が丸まってるせいで気づかなかったがパンツ姿で寝ている。パンツの色はブラジャーと同じ色である。小町のパンツを見たくらいでは何も思わないが、綾香のパンツを見ると、身体の奥底から何か感じるのは間違いない。頭を振りながら八幡は

「綾香、そんな格好で寝てたら風邪引くぞ」

そう言いながら手元にあったバスタオルをかけてやる。

「まあ、綾香も小町同様に元気に育ってくれたよな」

八幡は過去を思い出していた。小町も綾音の事を本当の姉のようになついていたことを思い出す。

「小町も綾音になついていたよな…綾音お姉ちゃんって」

八幡が独り言を言っていると、バサツと綾香が跳ね起きた。

まず八幡を見つめて2秒静止。次にシャツとカーテンを開けて5

秒静止。そしてくわつと目を見開き時計を見て5秒静止。都合12秒かけて現状を理解する。それからすうつと大きく息を吸うと、馬鹿でかい叫び声を上げた。

「しまった！ヤバい寝すぎた！1時間だけ寝るつもりが、5時間寝てたあつ！」

「まあ、確かにあるわな」

「うーん、小町と一緒に勉強していた気が…」

「小町なら自分の部屋で勉強してたぞ」

「ぐぬぬ、小町…薄情な…」

「まあ、小町は関係ないだろ、というか綾香、なんで俺のTシャツを着てるんだよ?」

「ん、ああ、これ。小町からもらったんだ。寝巻にちようど良いって。ちようどワンピースっぽくない八幡お兄ちゃん?」

「そう言いながら綾香は、ビローンとTシャツの襟元を引っ張る。

「…ち、ちよ、やめなさい綾香。それやると色々ヤバいから」

「ヤバいって何がヤバいの八幡お兄ちゃん?」

「色々だよ」

「色々って?」

「色々なんだよ！見えてはいけないのが見えるでしょうが！」

「八幡お兄ちゃんは、綾香の全てを見ても良いんだよ?」

「…!!馬鹿を言っていないで、寝るか何か飲んでから寝ろ」

「あ、なるほど。やはり興味はあるんだね、私の身体に」

「そう言って綾香は、キッチンへ向かい牛乳を温め始めた。」

「コホン、話は変わるけど、八幡お兄ちゃんはまだ勉強してたの?」

「まあな。中間テストも目の前に迫ってるし、お前や小町の勉強を教えてたからな。自分の時間が取れてなかったから」

「なんか、八幡お兄ちゃんに悪いかな…勉強見てもらって…」

「別に構わないさ。お前や小町を教えることで、俺自身の復習にもなるからな」

「ありがとう、八幡お兄ちゃん。それじゃあ、お言葉に甘えて、今から勉強を見てもらうかな」

「今からか？」

「うん、そうだよ」

「……仕方ないな。わかった、あと少しだけだぞ」

「うん、わかってるから」

ミルクを飲み干した綾香は、自分の勉強道具を持ってきて、勉強を教えてもらうことにした。

綾香に日本史を教えつつ、自分の勉強も続ける。そしてとあることを聞いてくる。

「お姉ちゃんも真面目だったけど、八幡お兄ちゃんも真面目だよね」

「真面目が悪いのか？」

「ううん、そうは言っていないよ。世の中には色々な姉や兄がいるんだな。小町が言ってたけど、通ってる塾の友達が、お姉さんが最近不良化したんだって。夜とか全然帰って来ないらしいよ」

「小町の塾の友達のお姉さんがな。まあ夜に全然帰ってこないのは、問題だよな」

「それで、小町が言うには、お姉さんは、私達と同じ総武に通ってて超真面目さんだったんだって。何があったんだらうね」

「総武高校に通う超真面目のお姉さんね……」

八幡は、日本史を教えているのだが、当の綾香は、小町から聞いた塾でのことをずっと話している。

「まあ、その子のお家のことだから何とも言えないけれど。小町いわく最近仲良くなって相談されたって。あ、その子、川崎大志君っていうらしいんだけど、4月から塾に通い始めたみたいだよ」

八幡は、綾香にそう言われて、あのとときの勉強会を思い出す。緑子、七海、かおりに勉強を教えていたあの時、小町は男を連れていたことを思い出した。

「大志君って…小町の彼氏か？」

「彼氏…？違うよ、八幡お兄ちゃん。小町は、塾のお友達だって言っただし」

「別に隠さなくても良いんだが」

「八幡お兄ちゃんは、怒ると思ってたけど？」

「そうか。別に俺は怒らないさ」

「ふくん、そうなんだ」

そんな会話をしながら、八幡と綾香は勉強するのであった。

第2章―8―第8話―朝のハプニング。

八幡は、夢を見ていた。その夢とは、もちろん綾音との思い出のこまである。

そんな夢を見ながら、ニヤニヤした。

「……綾音…俺はお前が一番…好きだ…むにやむにや…」

そんな台詞を寝言のように言った直後、彼は何か柔らかいモノを揉んでいた。その感触で目が覚める。まだ覚醒まで時間がかかり、約10秒間で、自身が今置かれている状況を理解する。自分がとんでもないことをしていることに。

「…昨日、綾香に勉強を教え終わって、自室に戻ってきてそのまま眠ってしまった…で、何で綾香が俺のベッドに？そして俺は綾香の胸を揉んでいるんだ？」

大声で叫んでいると、綾香も目が覚めたようで

「八幡お兄ちゃん、おはよう」

そして綾香も自分の胸に感触があるのが分かり視線を下げると、八幡が自身の胸を鷲掴みされてるのが入る。

「私、八幡お兄ちゃんと…いたしたっけ？」

八幡は、慌てて綾香の胸か両手を離す。

「やってない！やってない！」

「保健体育の実戦授業……？」

「そんなわけあるか！やった感触とか無いだろ？俺もお前もパンツはいてるだろ！」

八幡は、パンツどころかズボンも脱いでいない。綾香も水色のパンツをはいている。

「……はいてる……」

「それに俺は……そういうことするときには、もっとロマンにだな……」

「そうなんだ…。お姉ちゃんが言ってたとおりなんだね」

綾香は八幡にくっついた。彼は

「こらっ、綾香、お前がくっついたら色々ヤバいから離れろ！」

そんな感じでじゃれながら学校へ行く準備を整える。

支度を整えると、キッチンまでやってくる。するとそこには、小町の作った朝ご飯がテーブルに置かれている。トーストとハムエッグとコーンスープが置かれていて、

「八幡お兄ちゃんと綾香へ。小町は先に行きます。2人の仲を引き裂く事は小町には出来ません。だって2人とも幸せそうな表情をしているし。八幡お兄ちゃん、綾香、遅刻しても構わなけど、欠席するのはダメだよ。それと朝ごはん、ちゃんと食べちゃってねー」

小町が書いたであろう置き手紙である。

「小町、いらんことに、気を回すな」

「アハハ、朝の惨状…小町に見られてたんだ…」

八幡と綾香は、そう言っつて小町が作った朝ごはんを食べ始めたのだ。た。

朝ごはんを食べ終わると、2人で食器類を片付けてから学校へ登校する。

戸締まりを済ませた八幡と綾香は、自転車にまたがると、安全運転で学校へ向かう。

登校時間が遅いため、学生や社会人の姿は無い。見当たるのは、高齢の老夫婦や赤ちゃん連れの若夫婦である。

「…俺もあんな老後や結婚生活を夢を見てたな…」

綾音との未来を創造していたこともあった。綾音の闘病生活を支えながらも夢を見ていた。

2人で寄り添いながら縁側でお茶を飲んでいるような老後生活。

2人で悪戦苦闘しながらも子育てをしている未来。

綾音とはもう叶わない未来だが、告白された誰かとそんな未来を築くことは出来るのか。

「まあ…今考えても仕方がないか…」

まだ答えが出るわけではない。答えを急いで彼女達を傷つけるわけにはいかないと八幡は考えている。

自らが決めた1年という区切りを。そんなことを考えていると綾

香が

「答えは焦らなくても良いよ。焦って出しても…それが幸せな選択かわからないし」

「綾香…お前…」

「私は待つよ、八幡お兄ちゃんがどんな選択をしても…」

「綾香……」

そんな話をしながら校門を潜ると学校内の静けさだけが目と耳に入る。今は授業中であり、誰も教室外には出ていないのだから。

ここで綾香と分かれ、自分のクラスの駐輪場を目指す。

八幡は自転車をクラスの駐輪場に止めると、昇降口へ向かう。校舎に入りくつ箱にて、上履きに履き替え、2ーF組を目指す。シーンとした廊下を歩きながら深呼吸をする。

何故八幡が深呼吸をしたのは、今の時間が誰かなのかをわかっているからである。

今授業が行われているのは現国。

つまり平塚先生である。

八幡は、教室の扉を開ける。そして、物言わぬ視線が一齐に向けられる。彼はクラスメイトの視線が嫌ではない。黒板側にいるただ一人の恐怖のオーラを含んだ視線を向けてくるのを除けば。

だが八幡の事を知らないクラスメイトもいるようで、ヒソヒソしている。そんなことを気にせずには彼は自分の席へ座る。

平塚先生は、教卓をコツコツと叩きながらしかし表情は笑顔だ。だから余計に恐ろしいのだが。

「比企谷、授業が終わったら私の元へ来るように」

「はい、わかりました」

八幡は、そう言うのと、黒板に書かれている授業の内容を書き写す。授業の前半部分は、戸塚か葉山、もしくは吹寄に見せてもらうかと考えていた。

残りの授業時間はあつという間に過ぎチャイムが鳴る。

「では、本日はここまで。比企谷はこちらに来たまえ」

そう言って平塚先生は、ちよいちよいと八幡を招く。彼も教卓へ向

かう。

教卓の前に平塚先生と対峙する。先生は八幡をギロつと睨んだ。「さて、殴る前に一応、私の授業に遅刻した理由を聞いてやろう」「言い訳はしません。殴るなら殴って下さい。遅刻した俺が悪いのですから」

八幡は、言い訳をしなかった。夜遅くまで、自身の勉強や綾香、小町に教えていたことにより、寝坊してしまったのだが。朝の出来事は置いていて、綾香や小町を何よりも悪者にはしたくはなかったのだ。「比企谷、なんだ潔いじゃないか？覚悟は出来るようだな。なら今回は君の正直さに免じて許してやろう」「は？」

殴られることを覚悟していた八幡からすれば、拍子抜けである。あの平塚先生が正直さで殴ることをやめるのかと。そして平塚先生から殴ることをやめた理由を聞かされる。

「実はな、比企谷の妹から連絡を受けてたのさ」

「はあ!?妹…小町からですか?」

「そうだ。比企谷の妹は電話で、兄に遅くまで勉強を教えてもらっていたから、とな。それに理由があるのに言い訳をしなかった。だから、殴るのはやめたわけだ」

平塚先生は、事の真相を話してくれた。

「……ただ、ここでする内容では無いですか」

「すまない、比企谷。ここでする話ではなかったな。それともう一人の遅刻者が今頃来たか、川崎沙希、君は重役出勤かね?」

川崎は、一瞬の間を置いて、黙ってペコリと頭を下げただけだった。無言で自分の席へ向かう。

「川崎沙希…」

八幡は、クラスメイトの名前を小声へ言った。いつぞやの屋上で、職場体験の紙を拾ってくれた事を思い出していたのだった。そしてスカートの中身も思い出していた。

第2章―9―第9話―遭遇。

八幡にはそんな話があったが、一方の綾香は親友達にからかわれていた。からかっていると言ってもいつもの3人である。そして一番最初に口を開いたのは、静香だった。

「綾香さん、今日はどうして遅刻をされたんですか？」

「うん、ちよつと前日に勉強してたんだ」

「八幡さんと？」

綾香の顔が赤く変化していくのを静香は見逃さなかった。

「綾香さんが、八幡さんと…ついに…」

「あんたは、黙ってなさい。綾香、あんたは八幡先輩と勉強してたの？」

瑠璃は、そう言って静香の頭を叩いた。

「うん、八幡お兄ちゃんが熱心に教えてくれたから…ついつい」

「なるほど、綾香らしいけど」

「私もそんな熱心に教えてくれる兄が欲しいなく」

美桜がそう言った。美桜には歳の離れた姉がいるが、姉が社会人になってから何も話していない。

「姉貴は仕事ばかりしてるからさ…姉妹でそんなことしたことが無いんだよね」

「私は1人ですので、兄弟、姉妹つてのがわかりませんが」

「私は下に弟いるし上には兄貴がいるけど、八幡さんみたいじゃないし」

瑠璃の家族は、綾香は知っている。彼女とは、小学生時代からの付き合いがあり、何度も遊びにいつてる。だから兄や弟とは面識があるのだ。

「お兄さんや弟さんにも昔によくしてもらったよ」

「小学生の時のやつね。兄貴も弟も綾香を気につてたからね」

そんな話をしながら盛り上がっていた。

この日八幡は、途中出席だったため、気分的には楽であった。ただ遅刻という汚点がついたことには、不満はあったが。小町のおかけ

で、平塚先生の制裁をくらう事がなかった。だから小町に何か買つていこうと思ひ付く。

「小町だけだとあれだからな。綾香にも何か買つて行くか…」

ジュネスの方へ足を向ける。あそこには、2人の大好きなスイーツ屋がある。ただ総武高校と海浜総合高校の生徒達が、うじゃうじゃいるのは間違いないだろうが。

「まあ、平塚先生の一撃に比べれば、待つくらい何とでもない」

そう思つて歩みを進めていると、綾香と遭遇する。

「綾香か、今帰りか？」

「うん、八幡お兄ちゃんも帰りだよね？」

「そうだな、ちよつと小町や綾香にお菓子でも買つて行こうかと考えてた時に綾香が話しかけてきたんだ」

「そうだったんだ」

綾香と話していたら、カフェの中から手招きしている人物がいた。どうやら戸塚である。どうやら戸塚は、手招きしながら八幡つて呼んでるようだ。

「…戸塚、カフェにいたのかよ」

「あ、戸塚先輩だ」

そう言いながらカフェの中へ入る。戸塚が自分の席の方から

「八幡、綾香ちゃん、ここだよ！」

「戸塚、なんだ」

「戸塚先輩、こんにちは」

戸塚の席まで綾香と来てみると、雪乃と結衣がいた。

「比企谷君、貴方は呼んでいないのだけど」

「八幡お兄ちゃんは、仲間外れですか…」

「雪柳さん…」

雪乃と綾香は。ピリピリモードで、結衣は誘つてない人来たみたい騒いでいた。

「呼ばれようが呼ばれないが別に俺は構わないけど。戸塚、お前は雪ノ下達と勉強しているか？」

「うん、あ、そうだ八幡と綾香ちゃんもどうかかな？」

「俺は別に構わないけど、そっちの2人が拒否してるからな」

「戸塚先輩には悪いんですけど、私はその2人とは一緒に居たくないの」

八幡と綾香は、雪乃と結衣を見ている。

「……」

「アハハ、あたし達なんか綾香ちゃんに嫌われてる？あたしは別に構わないし。ヒツキーって遅刻で授業のノート、書いてないでしょ？ならあたしがノートを……」

「あ、ああ、それは間に合ってる。吹寄からノートを借りて何とか書き写せたし」

「そ、そんな…せいらんに」

結衣は、八幡がノートを吹寄から書き写してもらった事を聞いて落ち込む。八幡は、戸塚の隣に座る。綾香も八幡の隣に座る。

「俺としても遅刻からのリスクは避けたかったからな」

「……………」

「比企谷君、貴方、今日遅刻したの？」

「まあな。綾香や小町に勉強を教えたしな。まあ、自分の勉強をやっていたけど」

「遅くまで勉強していて、それで寝坊して遅刻を？」

「結論から言えばそうなるな」

「八幡！なんかすごいね」

戸塚が褒めてきた。八幡としては当たり前の事をしていただけだ。雪乃はなんか余計にライバル視した目で見ている。結衣は

「そんな遅くまで勉強つてやる意味あるのかな？」

「前にも言ったと思うが、人は将来に向けて勉強するんだよ。お前は将来なんになりたいわけ？」

「ヒツキーが真面目な事を聞いてきたし！」

「俺はいつも真面目だが？」

雪乃は結衣に助け船を出す。

「由比ヶ浜さんに聞くのなら、貴方はどうなの比企谷君？」

「俺か？俺はだな」

テーブルの上にあるメニュー表を見ながら八幡は黙り込む。雪乃も結衣も戸塚も八幡を見る。

「まあ、そういう俺もまだ決めてはいないが。それでも人々の役に立ちたい職業にはつきたいと思ってる」

八幡は、真面目にそう答えた。

「貴方が人々の役に立ちたい職業にねえ」

「八幡が人々の役に立つ職業かあ。スゴいよ！僕もまだ決めてないよ」

雪乃と戸塚がそれぞれの感想を述べる。結衣はポケーとしている。

「どうかお前達、テスト勉強していたんじゃないのか？」

「あ、そうだよ！あたし達勉強していたんだった！」

ポケーつとしていた結衣がそう言う。雪乃が八幡を試すかのように問題を言ってくる

「地理より出題。千葉の名産を2つ答えよ」

「千葉県の名産は、なし、すいか、かぶ…農産物ばかりだが」

「正解よ」

雪乃はちよつと悔しそうにしている。

「ちなみに名産じゃないが、祭りと踊りとかな」

「比企谷君、千葉音頭の歌詞なんて誰も知らないわよ」

「千葉音頭を知ってるとは…」

そんな感じでテスト勉強をしていると、小町が声をかけてきた。

「あ、お兄ちゃんと綾香の知り合いの」

小町は中学の制服のまま嬉しそうに手を振った。そして彼女は軽く雪乃達に自己紹介をやる。小町は結衣を見て何か思ったが、それ以上は何も言わなかった。

「それで小町、お前もここでテスト勉強か？」

「ううん、大志君から相談を受けてて」

そう言って向かいの席に座る。そこには学ランの姿の中学生が座っていた。彼は八幡と綾香に一礼をする。

「この人が川崎大志君。ちよつと前に話したでしょ？お姉さんが不良化した人」

「ああ、ちょっと前に聞いたな」

「で、どうしたら元のお姉さんに戻ってくれるか相談されたんだけど。あ、そだ、お兄ちゃんも綾香も話だけでも聞いたあげてよ」

「ここまで聞いたから、拒否はできないな。大志君話してくれ」

「小町、わかったわ」

「ええ、わかりました。姉ちゃん最近帰りが遅いし、親の言うこと全然聞かないんすよ。俺がなんか言ってもあんたには関係ないってキレるし」

そう言つて大志はうなだれる。彼は彼なりに思い詰めているようだ。

「……もうお兄さんしか頼れる人がいなくて」

「そう言つてくれるのは、有難いが……」

「自己紹介がまだでしたね。川崎大志つす。姉ちゃんは、総武高校の2年で名前は川崎沙希つて言うんですけど。姉ちゃんが不良つていうか悪くなつたつていうか……」

「川崎沙希つてあの同じクラスの川崎沙希か？」

「川崎沙希さん」

「ヒツキー、川崎さんでしょ？ちょっと不良っぽいつていうか少し怖い系つていうか」

「まあ、一匹狼系なのは間違いないな」

川崎沙希、いつもクラスにいるときは、外の風景を眺めている。何か冷めた感じがすると八幡は思つていた。彼女の下着が攻めの黒だつていうのは置いて。雪乃が大志に

「お姉さんが不良化になり始めたのは、いつ頃かしら？」

「は、はい！姉ちゃん総武高校行くくらいだから、中学のときとかは、すげえ真面目だつたんです。高1んときも、そんな変わらなくて……。変わったのは最近なんすよ」

「高2になつてからか」

「はい……」

「2年生になつてから変わったことで何か思い当たるのは？」

「無難なところでクラス替えとかじゃない？F組になつてから」

「つまり、比企谷君と同じクラスになってからということね」

八幡はイラツとした感じで雪乃に言って返し綾香も反論する。

「何で俺が原因みたいな発言をされるんですか、雪ノ下さん？」

「雪ノ下先輩、八幡お兄ちゃんに対しての侮辱ですよ！」

小町も不機嫌な表情で雪乃に

「何でお兄ちゃんが原因みたいになってるんですかね？」

「ごめんなさいね、小町さん、雪柳さん。言葉足らずな面があつて」

「……………」

「……………」

小町や綾香の険悪モードに結衣が話を無理矢理変える。

「でもさ、帰りが遅いつて言っても何時くらいなん？あたしもわりと

遅かったりするし。高校生ならおかしくはないんじゃない？」

「あ、は、はあ、そうなんすけど」

大志はしどろもどろになりながら結衣から視線を逸らす。結衣み

たいな女子高生は中学思春期には、エロくて凝視できない。

「でも、5時過ぎとかなんすよ」

「それって、もう朝帰りとかじゃん。そんな時間に帰ってきて、ご両親

は何も言わないのかな？」

「……………」

「そつすね。うちは両親が共働きだし、下に弟や妹いるんで、あまり姉

ちゃんにうるさく言わないす。それに時間も時間なんで滅多に顔

を会わせないし…。まあ、子供も多いんで、結構暮らしがいっぱいな

んすよね」

「なるほど…」

八幡は、あることを考え始めた。だがまだ決めつけるのは早いとも

考えた。

「たまに顔を合わせてもなんか喧嘩しちゃうし、俺がなんか言っても

あんたには関係ないの一点張りで…」

「家庭の事情、ね。どこの家にもあるものね」

そう言った雪乃の顔は、今まで見せたことのないほどに陰鬱なもの
だった。その顔は悩みを話にきた大志と同じように、それ以上に泣き

出しそうになっている。

「雪ノ下…」

八幡が雪乃に声をかけた時、ちょうど雲が太陽を隠したのか、ふと影が指す。そのせいで俯いた雪乃の表情はよく見えない。ただ力なく落とされた肩だけが短いため息をついたことを教えてくれた。

「……何かしら？」

顔をあげた雪乃の表情は、いつもと同じような冷たい表情である。

「それに、それだけではないんです。なんか、変なところから姉ちゃん宛に電話がかかってきたりするんすよ」

大志の言葉に結衣が疑問符を浮かべる。

「変なところー？」

「そつす。エンジェルなんかかっていう、多分お店なんですけど、店長って奴から」

「そのの何が変なの？」

戸塚が問うと大志は机をバンツと叩いた。

「だ、だって、エンジェルつすよ!? もうヤバイ店つすよ!」

「え、全然そんな感じはしないけど…」

若干結衣が引きながらそう言った。八幡は、若干嫌な予感がしてくる。

「とにかくだ、まずは店の特定が先だろ。まだ危険か危険ではないかわからない。それに朝まではたらいしているとか、学生の範疇を超えている」

「んー…、ヒツキー…やめさせるだけだど、今度は違う店で働き始めるかもよ」

結衣がそう言う和小町や綾香がうんうんと頷く。

「お兄ちゃん、それっていたちごっこにしかないんじゃないじゃ」

「八幡お兄ちゃん、小町の言うとおりでよ」

「つまり、対症療法と根本治療、どちらも並行してやるしかないということね」

「まあ、それしかないかもな」

八幡は別の事も考えてはいたが、今のところは置いておくことにし

ただ。

雪乃は、大志の依頼を受託し奉仕部として活動することに。

八幡と結衣もそれを承諾したのだった。

川崎沙希更正プロジェクトが開始されることになった。

第2章―吹寄制理（栄冠は誰かのために）編 第2章―1―第1話―将来の夢と吹寄の頼み。

――総武高校・屋上。

5月も中旬から下旬に入り、梅雨入り前のムシムシした暑さに覆われている。

今日は、陽介達と昼ごはんをすぐに食べたなら、屋上に来ていた。ちよつと考え事をしたかつたためでもある。

それは、進路についてである。

八幡は、大学進学は規定路線である。だがその先はまだ決まってい
ない。

今は、綾音の夢を継ぐ考えもあるが、本当にそれで良いのかって迷
いもある。

綾音は八幡のやりたい事をやっていいと夢の中で言われたが、それ
でも迷いはあるのだ。八幡自身は、まだ何になりたいのか、まだ分
らないのだ。

だから中学で将来を見据えていた綾音を凄いと思っていた。

だから綾音に相応しくなるために必死に頑張った八幡。彼女の隣
に立つ男としておかしくないように頑張ったんだ。

「まだ…俺は…何をやりたいんだろ」

最悪大学に行つてからも将来を考えることはできるが、それで見つ
かるかどうかわからない。

八幡は、職場見学希望調査票を見ながら色々な事を考えていた。す
ると風が急に強く吹き、その職場見学希望調査票が飛ばされる。

「やばっ！」

その吹き飛ばされた調査票は、とある女子生徒が見事キャッチす
る。その女子生徒は、髪が長く背中まで垂れた青みがかった黒髪。リ
ボンはしておらず開かれた胸元。余った裾の部分が緩く結びこまれ
たシャツ、蹴りが鋭そうな長くしなやかな脚。そして、印象的なのが
ぼんやりと遠くを見つめるような端気のない瞳。泣きぼくろが一層

倦怠感を演出していた。同じクラスの川崎沙希である。

「これ、あんたの？」

「川崎か、ありがとう」

「何、ぼさつとしてんのさ」

川崎から調査票を受けとる。川崎が屋上のフェンスの方へ行く。彼女は、いつも1人である。誰かと一緒にいるのをほとんど見たことがない。好きで1人であるように見える八幡であった。

「川崎っていつも屋上に来るのか？」

「別に、気分的に今日は屋上にいたい気分なんだよ。あんたには関係ないでしょ」

「まあ、そうだよな」

川崎は、1人にさせる的な感じで八幡を見ている。彼はすぐにそれを理解し屋上から出ることにする。その時、風が吹いて川崎のスカートを巻き上げる。その光景を八幡は見てしまう。

「黒のレース、だって？」

川崎は、微動だにせずにこう答えた。

「バカじゃないの」

そう川崎に言われたが、彼女の黒のレースが頭に焼き付いて離れなかった。

再び八幡は、平塚先生に呼び出されることになる。呼び出されたこととはわかっていて、5時間目に集めた職場見学希望調査票の事である。見学希望場所を書いていなかったからだ。迷って書く事が出来なかったのだ。

ため息を吐きながら職員室へ行こうと思ったら吹寄に呼び止められた。

「比企谷君、ちよつといい？」

「吹寄？なんだ？」

「ちよつと比企谷君に頼みたいことがあるの」

「頼みたいこと？」

吹寄はとあることを頼みたいようだ。彼女は教室では、頼みにくい

ようだ。だから話しやすい場所へ変えるため、誰も来ない特別棟の空き教室へ入る。

1-21F組↓特別棟の空き教室。

「ここなら、誰も来やしないから話せるぞ」

「比企谷君、私達水泳部の練習を見てくれないかな？海浜の山岸さんを指導したのも貴方なんですよ？」

「吹寄、どこでそれを？」

「山岸さんから直接聞いたわ。練習試合で海浜に行った時に直接聞いたわ」

「なるほどな」

ゴールデンウィーク中に総武の水泳部が海浜の水泳部と練習試合を行っていた。

海浜総合高校水泳部から総武高校水泳部に練習試合の打診があり、総武側は承諾し海浜で練習試合をやったのだ。その際に吹寄は緑子に聞いたのだ。

何故、そんなに強いのか。

どんな練習方法があるのか。

どうしたら上手くなれるのか。

すると緑子はこう答えた。

「私は、八幡のおかげで強くなれたし、上手くなれた。彼の指導と彼の言葉で私は、上手くなれたんだ」

緑子のその嬉しそうな表情は、吹寄は忘れられない。恋する乙女の表情をしていたからだ。

緑子が八幡を好きなんだとそれでわかった。自分も恋をすれば、緑子のようになれるのかと思うようになったのだ。

吹寄はまだ誰かを好きになったことがない。だからまだわからない。親友やクラスメイトが恋バナを話しているが、彼女にはまだぐうっと来るものがないのだ。

もちろんエッチなことにも興味はある。自慰行為だったことはある。だけどそういう話は恥ずかしくて出来ない。恥ずかしさで顔や身体が熱くなってくる。その恥ずかしさを隠すために八幡に

「比企谷君、引き受けてくれるの？」

「そうだな、吹寄が良いのなら：俺は別に構わないが？ただ：戸塚のテニスの指導もあるし、放課後：遅くなっても構わないか？」

「ええ、構わないわ」

吹寄は、にっこり笑顔で答えた。だが心踊る自分自身がいることに彼女自身がまだ気づいていない。すでに恋をしはじめていることにも気づいていないのだから。

「それじゃね、比企谷君！」

「ああ、またな、吹寄！」

吹寄は、八幡に手を振ってから空き教室から出ていく。

「まあ、吹寄の依頼は奉仕部に言う必要は無いか……」

吹寄の水泳の指導は、戸塚のテニスの指導と同じだと言えはいいと八幡は考えた。

窓の外をちよつと見て、深呼吸をやってから、八幡も空き教室から、平塚先生が待つ職員室へ向かう事に。

第2章―2―第2話―吹寄との約束と奉仕部。

――職員室

職員室の一角には応接スペースが設けられている。革張りの黒いソファにガラス天板のテーブルが置かれ、パーテーションで区切られていた。その側に窓があり、そこからは、図書館が見渡せた。

開け放たれた窓からうららかな初夏の風が入ってきて、一切れの紙が踊る。

「もうすぐ、夏だな…」

「何が、もうすぐ夏だ!」

そこにパンツスタイルの平塚先生がやってくる。自分の机の椅子に座ると、タバコの箱から一本取り出して口元に持っていきそれを加える。

「比企谷、私は何を言いたいのか、わかるな?」

「職場見学希望調査票のことですよね、あれではダメですよね?」

「わかってるのなら、何故書かない?」

「将来…何の職種につきたいとか、まだ正直わからないです」

「わからないか…漠然に何になりたいとかないのか?」

「…だから…良くわからないんですよ…あの日からずっと…」

「…あの日からずっと?」

「いえ、なんでもありません」

綾音が亡くなるまでは、彼女の病気を治すために医者という選択肢も入れていた。彼女が元気な頃は、彼女と共に人々の役に立つ職種につきたいと思っていた。

だが、綾音が亡くなってから、そういう夢が無くなってしまった。いや抱けなくなってしまうたのかもしれない。八幡の中の時間は少しずつ動き出した。でもこういう事は、まだまだだったと言うことだった。

「まあ、比企谷、お前は少しは成長しているようだな」

「どうも…」

「だが、まだまだ成長する必要がある!」

「左様ですか」

「それと春雪の件も頼むぞ」

「……はい」

平塚先生の呼び出しの件が終わった八幡は、トボトボ歩きながら奉仕部の教室へ向かう。

「……まだ決断できるほどのものじゃねーし……」

――職員室↓特別棟・奉仕部の教室

本校舎の廊下を悩みながら歩いていると、メールの着信が入る。八幡はスマホを取り出して、見てみると、どうやら送り主は、吹寄からであった。何故、彼女が八幡のアドレスを知ってるのかは、平塚先生から聞いたのだろう。

【比企谷君、チャットでも会話しない?】

それは、SNS上でも吹寄と会話をしないかとの誘いであった。クラスで話しぶらいこともあるだろう。今回のように空き教室まで行って会話とか、逆に怪しまれたりする可能性がある。だからこっちで会話をしようって事だ。

【別に構わないが?】

【良かった。それでさっきの約束だけど、今日からでも構わないかな?】

【今日からか?……奉仕部の活動が終えてからでもいいか?】

【うん、ありがとうね、比企谷君!次回からチャットでね】

【わかった】

八幡は吹寄とのやり取りを終えると、スマホを制服のポケットに入れようとする、今度は着信が鳴る。

知らない番号だったが、彼はすぐに通話ボタンを押す。

「もしもし、どちら様?」

「ヒツキー?一体どこにいるわけ?」

「どこって、奉仕部へ向かっている。というか由比ヶ浜、なんでお前が

俺の番号を知っている?」

「電話番号、ゆきのんから聞いたし!」

さっきの吹寄と同じ事だ。あの時の雪乃は、平塚先生から聞いたと言っていた。その彼女から由比ヶ浜が番号を聞いてもおかしくはないだろう。

「で、なんか用なのか?」

「ヒツキー、近頃部活に来ないし…何かあったのかなって」

「別に何も無いが?」

八幡は歩きスマホをしながら喋っている。特別棟に入るとガラリと人がいなくなる。

「もう特別棟に入ったからもう切るぞ」

「うん、わかった」

八幡はスマホの通話を切る。そして歩くスピードをあげて、奉仕部の教室に向かう。

奉仕部の部室の扉を開けると、いつものように雪乃と結衣がそこにいた。

雪乃はいつものように本を読んでいて、結衣はスマホをいじっていた。

「よお、久しぶりだな」

「比企谷君、こんにちは」

「ヒツキー、久しぶり…」

「貴方、もう来ないと思ったわ」

雪乃は、再び毒のある言い方をしてきた。相変わらずの雪乃ぶりだ、ある意味安心した八幡であった。

彼はいつもの自分の椅子に座る。本を鞆から取り出して読み始める。しばらく本を読んでいると、スマホにメールが送られてくる。

どうやらスパムメールのようだった。八幡はすぐにスパムメールを消して、顔を上げると、結衣がスマホ片手に曖昧な笑みを浮かべて、うつすらと誰にも聞こえないような、けれども深い深いため息をついていた。息を吐く音は聞こえないが、胸が大きく上下したので、その

深さに気づいてしまう。

「由比ヶ浜、どうかしたのか？」

「あ、うん……なんでもない、んだけど。ちよつと変なメールが来たから、うわって思っただけ」

「比企谷君、裁判沙汰になりたくなかったから今後そういう卑猥なメールを送るのはやめなさい」

内容がセクハラ前提で、しかも犯人にされる八幡。彼に送られて来たのも、セクハラまがいのスパムメールだったからだ。だからと言って犯人にされる覚えはないのだから。

「なんで、そんなことをしないといけないんだ？意味がわからない」

八幡がそう言うのと、雪乃は勝ち誇った顔で肩にかかった髪をさらつと掻き上げた。

「犯人はみんなそう言うわね。【証拠はどこにあるんだ】【大した推理だ、君は小説家にでもなった方がいいんじゃないか】【殺人鬼と同じ部屋になんていられるか】」

「おい……最後のは被害者の台詞だろ？」

雪乃は自分で墓穴をほった。だがそれを認めようとせず、八幡に惚けた態度を取る。それどころか本をパラパラとめくっている。どうやら推理小説を読んでいたようだ。

「ヒツキーは違うと思うよ」

結衣が突然そんなことを言った。すると雪乃が本をめくっていたのを止める。

「んーなんちゆうかさ、内容がうちのクラスのことなんだよね。だからヒツキーは無関係って言うか……」

「無関係って俺はお前と同じクラスなんですが」

「なるほど、では比企谷君は犯人じゃないわね」

「それは何か……俺がクラスでぼつちだからか？」

「まあ……それは言ってるかしらね」

同じクラスの戸塚とは話す間柄だか、親友と呼べるものではない。連絡先を知っている材木座、陽介は他クラスだから関係ないし、綾香や完二は1年生だから問題外。吹寄とは、メールで先ほどやり取りを

やり始めたばかりだし関係ない。

八幡がそんなことを考えていると、結衣が

「……まあ、こういう時々あるしき。あんまり気にしないようにする」

そう言つてスマホを制服のポケットに入れた。その様はまるで自分の心に蓋をするかのようなものであった。八幡は何だか重々しくもあつた。

彼に届いたのは、あくまでも宣伝用スパムメールであつたが、結衣のはクラスのことのようだ。

クラスからのメールが来ない八幡にとっては、結衣にきたメールがどんなものか知ることは出来ない。それを彼女から聞き出すことは、安易ではないだろう。

楽しいもの、嬉しいものであるならば、人は他人に教えたがるが、逆に不愉快な事が書かれていれば、他人に言いたくはないだろう。結衣はあれ以降、スマホを手取ることはなかつた。

「……暇」

暇つぶしのアイテムであるスマホが封じられてたことにより、結衣はだらーっとだらしくなく椅子の背もたれに寄りかかる。そうしてしていると、胸が強調されていて、男子達は目のやり場に困るだろう。だが八幡は別に平常心は失われない。

緑子や綾香など巨乳の女の子をずっと見ていたこともあり、慣れているのだ。その点雪乃は、病気で痩せこけてしまった綾音よりもないので、目のやり場に困ることはない。

彼女は、本を閉じながら結衣を諭すように言う。

「することがないのなら勉強でもしたら？ 中間試験まであまり時間がないことだし」

八幡は、雪乃がそう言つたことで、もうすぐ中間試験があることを思い出した。だが慌てる必要は無いのだ。彼はちゃんと授業で大事な場所なんかは、頭に覚えているのだから。それは雪乃も同じようなものなんだろうと、彼は思った。なんせ1位を争うライバルだから。

「比企谷君、今度こそ…貴方を引きずり下ろすわ」

「ぬかせ！俺はお前に負けるつもりはない。今回も1位を取らせてもらおう！」

八幡と雪乃の台詞に結衣は、アハハと苦笑いをしている。どうやら彼女も試験の事を忘れていた表情をしているのだ。そして「勉強とか、意味なくない？社会に出たらつかわないし…」

【は……っ？】

結衣の言葉に八幡と雪乃は、互いにそんな声をあげてしまったのだった。

第2章―3―第3話―吹寄と綾香との練習。

――

八幡と雪乃は、結衣が言った言葉が信じられない。

少なくとも先程の台詞は、とても高校生がいうものではない。驚いた表情で雪乃が

「由比ヶ浜さん、貴女、本当にそう思ってるのかしら？」

「雪ノ下、こればかりは同感だぜ」

結衣は、馬鹿にされたと思い、やつきになって反論してくる。

「勉強なんて意味ないってば！高校生活短いし、そういうのにかけてる時間もつたいないじゃん！人生1度きりしかないんだよ？」

「あのな由比ヶ浜、将来のために勉強するんだろ？」

「それじゃ、ヒツキー将来何になるのか決めているの？」

結衣は、八幡の反論できなさそうな事を聞いてきた。将来のことは、まだ何もわからない。まだ迷いの中にいるのだから。

「そ、それはだな…」

「ほらヒツキー、何も言えないじゃない。なりたいたことがわからないなんて、勉強しても意味なくない？」

「意味ないってお前…！」

「本当に、意味がないと思うし…」

「金子みすゞが聞いたら怒るでしょうね」

雪乃は、ため息を吐きながら額に手を当てた。

「由比ヶ浜さん、貴女ね、さつきから勉強は意味はないって言ってたけど、そんなことないわ。むしろ自分で見いだすものが勉強というものよ。それこそ人それぞれ勉強する理由はちがうでしょうけど、だからと言ってそれが勉強すべてを否定することにならないわ」

雪乃の言っていることは、正論である。人それぞれ勉強する意味は違う。何になりたいのか、それだけで勉強する意味になってくる。

八幡の場合は、綾音と一緒に歩みたい、一緒に並んでおかしくないように、勉強もスポーツも頑張っていたのだ。その努力が今も身に付いているのだから。

「ゆきのんは、頭いいからいいけどさ……。あたし、勉強に向いていないし、周り、誰もやってないし……」

その小さな声に雪乃は、目が細くなる。一気に温度が低くなるような感じになってきているのだ。おまけに静まりかえるような感じになり、結衣ははつとなつて口をつぐむ。以前、彼女にきついことを言われたことを思い出したのだろう。そして全力で自身のフォローに入る。

「や、ちゃ、ちゃんとやるけど……そ、そう言えば！ヒツキーは勉強しているの!？」

結衣は、雪乃の雷を交わすために、八幡に話を振ってきた。

「……俺はやっている。毎日コツコツな」

「裏切られたっ！ヒツキーはバカ仲間だと思ってたのに！」

「……ぶっ……クスクス……」

結衣が言った台詞に雪乃に笑われてしまった八幡。結衣の中では、彼は馬鹿としか認識されていなかったってことになるが。

「お前、さっきの俺と雪ノ下とのやり取りを聞いてなかったのか？」

「え……何の事？」

やはり聞いてなかったようだった……。一体何を聞いていたのだろうか。

ちなみに総武高校では、テスト結果を貼り出したりはしない。本人にひっそりと点数と順位が返ってくるだけである。従って、人づてに誰かの順位を知ることになる。

八幡は、クラスで順位など知られる事はないので、1位を取ってるなど誰も思わない。

雪乃も八幡が1位という事を言わなければ、知らなかったかもしれない。まあ平塚先生がしゃべる可能性はあったかもしれないが。

「もしかして、ヒツキーって頭良いの？」

「ええ、頭の方は憎らしいけど、良いのには違いないわね」

「何故、お前が答える？」

八幡と雪乃は、1位を争っている。つまりこの中で、結衣はダントツのお馬鹿さんってことになる。

「うう…。あたしだけバカキャラだなんて」

「そんなことないわ、由比ヶ浜さん」

冷静ながらも雪乃の表情には温もりがあり、その瞳にはハッキリとした確信の色がある。それを聞き、結衣はパツと明るくなる。

「ゆ、ゆきのん！」

「貴女は、キャラじゃなくて真性のバカよ」

「うわーん！」

ぽかぽかと雪乃の胸元を叩く結衣。それを面倒くさそうに受け止めながら雪乃は短いため息をついた。

「試験の点数や順位程度で人の価値を測るのがバカだと言っているのよ。試験の成績は良くても人間として著しく劣る人もいるわ」

「おい！なんで俺を見る？つまり俺は人として劣っているというのかよ？」

雪乃はまだ八幡を見つめたままだ。

「あのな、俺は目標に向かって勉強しているんだ。ぼっちだから勉強しかないとかじゃないからな」

「へえー」

「素直になりなさい、勉強しかなかったのでしょう？」

「違うつての！……俺は、あいつに…並び立つために…」

小さな声で八幡はぶつぶつと言った。幸い雪乃や結衣は聞いていなかった。

「私はまあ…友達がいなかったから勉強しかなかったわ」

「あ、そう…寂しかったんだな」

「別に寂しいとか思ったことないわ」

結衣は、そんなことを言った雪乃を抱き締める。

「由比ヶ浜さん、暑苦しいわよ」

雪乃がそう言ったが、結衣はやめない。八幡は別にそんな光景は見慣れている。よく、綾音や緑子、七海が抱きついてたのを見てたから。だから雪乃と結衣の抱きつきも普通に見えるのだ。

結衣は、雪乃の頭を撫でながらふと口を開く。

「でもさあ、ヒッキーが勉強頑張ってるのってなんか意外よね」

「意外ってなんだよ。俺は真面目にやってきただけだ。大学にも行くつもりでいるからな。まあ夏休みになれば、夏期講習を受けるつもりでいるし」

前にも説明したが、総武高校は進学校である。従って大学進学率もかなり高い。意識が高い人間なら、2年生の夏から勝負をかけてくる。

良い予備校は、すぐにそういう人間で満員となってしまう。

八幡もとあることを考えているのだ。それは予備校のスカラシップを考えているのだ。

大学進学は、元からの規定路線だったから、行くのは当然としている。八幡が迷ってるのは、あくまでも大学後の進路、就職かさらに専門の知識を学ぶのか、そんなところである。

「俺は、予備校のスカラシップを狙ってる」

「すくらつぷ?」

「それなら狙わなくても今現在で充分よ。生ける産業廃棄物みたいなものじゃない、貴方…」

「誰が産業廃棄物か! つかスクラップにされてたまるかよ!」

「ねえねえ、すくらつぷって何?」

スカラシップ、スクラップも知らない結衣。八幡と雪乃の話についていけないようである。

「スカラシップというのは、奨学金のことよ」

「最近の予備校は、成績がいい生徒の学費を免除してるんだよ。スカラシップ取って、少しでも親を楽にしたいと思ってる」

雪乃と結衣が、驚いた表情をしている。八幡は、そんな姿を見て

「うん?なんだよ、2人とも俺、変なこと言ったか?」

「貴方がそんなことまで考えていたなんて、予想外だったわ」

「ヒッキーは、そこまで考えてるんだ…あたしの進路って…どうなんだろう」

そう呟いた結衣は、八幡を見る。そして雪乃の袖をきゅっと掴む。

その勢いに驚いたのか、雪乃が心配そうに結衣の顔を覗き込んだ。

「何かしら?」

「あ、ううん、何でもない、ことはないか……。2人とも頭がいいからさ、卒業したら、会うこととかなさそうだな、って考えちゃって……」
そう言っただけは……って誤魔化すように笑う結衣。

「そうね、比企谷君なんて絶好に会わないわね」

「ああ、そうだな、俺も会いたくないな、雪ノ下」

ずっと一緒にいることが全てではない。幼稚園から一緒だった雅史とは、高校から進む道は分かれた。緑子と七海、かおりとも高校から分かれた。

最愛の恋人、綾音とはこの現世で二度と会うことが出来ない別れをしてしまった。

生きていれば、別れと出会いは必ずくるものだから。

人はそうやって成長していくものなのだから。

八幡がそんなことを考えていた時に、雪乃と結衣は、互いのチャットのやり取りの話をしている。彼は夕陽に染まる外を見る。

しばらくすると、お菓子の話などしていた結衣があることを言い出す。

「あたし……ちゃんと勉強しようかな」

小さな声でそう言って視線を落とす結衣。

「ゆきのんって大学とか決めているの？」

「いえ、具体的には。志望としては国公立理系だけど」

「頭いい単語が出てきた！じゃ……じゃあヒ、ヒッキーは？つ、ついでに聞くけど？」

「俺はついでか、まあいいが。俺は、東京の方の国公立だろうな」

「……東京大学!？」

「まあ……東京大学も選択肢の1つかもな」

「……うう……ヒッキーって……そんなに頭が良かったんだ」

「……比企谷君があのお東大に……くっ……私も負けるわけには……」

「うう……これは、あたしも頑張らないと……」

結衣は、雪乃から離れると、大声で宣言した。

「と、いうわけで今週から勉強会をやります！」

「どういうわけ？」

「明日からテスト1週間前は部活もないし、午後から暇だよね？」
ちなみに明日は、教育研究会があるからさらに帰るのが早くなるお約束でもある。

「じゃあ、ジュネスのサイズでもいい？」

「私は別に構わないけれど…」

「ゆきのんと2人で出掛けるの初めてだね」

「そうかしら」

「さてと…2人で勉強会、頑張れよ…じゃーな」

八幡はすつと立ち上がると、スタスタと歩き出した。そして扉を開けて奉仕部の教室から出た。

――奉仕部の教室↓プールへ。

奉仕部の活動を終えた八幡は、雪乃や結衣と分かれた後、水泳部が練習しているプールへと向かう。

すでに夕陽は落ちて、暗くなり始めている。プールの方はライトが点灯している。おそらく水泳部部員が練習しているのだろう。誰かが泳いでいるのだろう。プールの方からバシャバシャと水の音が聞こえてくる。

「来週からテストだし、部活も今日までだったな」

テスト前の1週間は、部活動は中止になる。総武高校は、海浜と並んで進学校であるため、勉学に励んでほしい学校側の配慮でもある。

プールの脇を歩く八幡は、プールの敷地へ歩みを進める。

だが水泳部部員のほとんどいない。いるのは、2人だけ。

1人は、八幡に教えてくれと頼んできた吹寄。もう1人は、彼がよく知っている彼女、綾香である。

どうやら吹寄と綾香の2人だけで、練習をしている。そんな2人に彼は話しかける。

「吹寄、綾香、頑張ってるな」

「比企谷君、来てくれたんだ。本当にありがとう」

「制理先輩が言ってたけど、八幡お兄ちゃんが教えてくれるの？」

「まあ、そういうことになった」

2人とも紺を基調として、赤のラインが入った競泳水着を着ている。

吹寄も綾香も主張しているところは主張している4つの膨らみ、くびれている腰、きゅつとしたお尻がライトアップでよりよく見える。

流石な八幡でもちよつとくるものがある。

「比企谷君、どうかしたの？」

「いや、何でもない…」

「あ、八幡お兄ちゃん、制理先輩の競泳水着姿を見て…興奮したの？」

「は…はあー！そ、そんなわけないだろ！」

「全否定されるとそれはそれで女として傷つくかな」

「いや…そういうあれで言ったわけじゃ…」

「八幡お兄ちゃんは、私の競泳水着姿を見てどう思うの？」

綾香は、八幡の前に出て競泳水着姿を見せつけてくる。彼もその姿を見て、競泳水着って意外にエロい事がわかる。

「どうかな？私、成長したんだから。綾音お姉ちゃんより胸もあるんだよ」

「何、言ってるんだよ…」

綾香は、綾音よりも女性らしく成長している。それは否定できない。綾音は15歳で止まっているから、それ以上の成長した姿は見るこゝとができないのだから。

「八幡お兄ちゃん…正直に言っているんだよ？」

「あのな…中間試験前の最後の練習なんだろうが。さっさと練習をするぞ」

八幡は照れ隠しでそんなことを言った。意外に綾香の競泳水着姿に見とれてしまうところだったのだ。

「ええ、よろしくね、比企谷君」

「もう照れなくても良いのに…。頑張っていきましょうか、制理先輩」
このあと、30分間みっちり八幡に指導を受けた。吹寄も綾香も基本ができているから、飲み込み率も早い。

本来なら八幡もプールに入りたかったが、水着を持ってきてないから、入ることを止めた。プールサイドから指示を出すことに専任して

いた。
そんなかんで、楽しい時間は過ぎていく。

第2章―4―第4話―吹寄と綾香と勉強会をするこ
とになった。

―プール

下校時刻ギリギリまで練習をやった吹寄と綾香。

少しでも練習したい気持ちは、八幡にも分かる。かつてサッカーを
していた彼もそんな気分になったのだから。

「…水泳の指導をやったの、緑子に教えた以来だな」

あくまでも、緑子に水泳の指導をしたのは、中学時代であり恋人の
綾音の了承を得て、教えていた。

今では、千葉県選抜に選ばれる実力者である。夢の日本代表も夢で
はないのだろう。

「そうなる俺もハナが高いってか」

別に自慢するわけではない。あくまでも八幡は、緑子の努力とやる
気が結果に結び付いたと考えている。

「…吹寄や綾香も能力的に高い。伸び代がどこまで伸びるかだ
な…。もしかすると緑子を追い越す可能性も…」

そんなことを考えていると、吹寄と綾香が制服に着替えてやってき
た。

「お待たせ、比企谷君」

「八幡お兄ちゃん、お待たせ」

「まあ、待つほどではないがな。さて帰るとするか」

八幡、吹寄、綾香の3人は、プールの施設から出て、正門の方へ歩
き出す。すでに夕陽は沈み、暗闇に染まりつつあった。

八幡達は、自転車置き場に自分の自転車を取りに行く。自転車に乗
りながら、会話していく

「来週から中間テストか…頑張つてやらないと」

「中間テストか…なんだか嫌だな」

「うん？綾香はテストが嫌いか？」

「別に嫌いじゃないよ。中学まではがり勉強ちゃんだったわけだし！」

「確かに…中3の時は…言えてたな。みつあみ、グルグルメガネみたいな格好で…」

「八幡お兄ちゃん！」

「あ、悪い悪い…言わない約束だったな」

八幡が、綾音の事で落ち込んでいて、塞いでいた頃、綾香も傷ついて落ち込んでいた。元々勉強も得意だったが、スポーツの方がさらに得意だった。

姉の綾音と同じバスケット部に入っていたのだ。綾音が亡くなった後、バスケット部を退部し勉強一筋に変わった経緯がある。

前にも説明したが、彼女がそうしたのは八幡に追い付くためでもあったのだ。

高校でバスケット部に入らず水泳部に入ったのは、吹寄に熱心に勧誘されたのもあるが、ライバルの1人である緑子と勝負をしたいと思いますからだ。

「綾香ちゃんのがり勉スタイルか…見てみたかったかも」

「制理先輩、あんな姿人様には見せられません！」

綾香は、顔を赤くしながら見せられないと抗議する。吹寄は話題を変えるため

「そうだ、比企谷君、勉強を教えてくださいませんか？」

「吹寄に？吹寄ってクラスで2位だよな？なんで俺に？」

「比企谷君、クラスで1位、学年でも1位でしょ？」

「な、なんでそれを？」

「クラスでも都市伝説みたいになってるから。学年1位もね…。学年2位の雪ノ下さんは、知られてるから余計にね」

「都市伝説…って八幡お兄ちゃんを馬鹿にしすぎじゃない！」

「綾香、まあそんなもんさ。1年の時からそんな感じで言われてたしな」

綾香の心配に気にしていないという八幡。吹寄は話の続きをしてくれる。

「クラスで葉山君とか松野君、海老名さんあたりも一桁順位であるけれど、みんな1位ではない。それに比企谷君、授業で当てられてもす

らすらと解いていたから、もしかしてと思ったわけね」

八幡が、普段ぼけっーとしてるようになってるが、本質を見ている吹寄。それは人を見る目があるということである。だからクラスの学級委員長を勤めているのだろう。

「順位は別に置いといて、吹寄は本当に勉強を教えてほしいのか？」

「是非、お願いします」

「八幡お兄ちゃん、私にも教えて」

「わかったよ。なら勉強を教えるとするか」

こうして八幡は、吹寄と綾香に勉強を教えることになった。

「で、どこで勉強会をやるつもりだ？」

「私は自宅でしたいかな、制理先輩はどうですか？」

「自宅って…綾香ちゃんの家？」

吹寄がちよつと慌てた感じで聞いている。

「はい、そうですよ、今住んでるのは、比企谷家に居候中ですから、勉強会は比企谷家ですね」

「比企谷君と綾香ちゃんって…同じ屋根の下で…」

「吹寄、同じ屋根の下って言っても両親や妹、猫のかまくらもいる！2人だけのやましいわけじゃないからな！」

八幡はちよつとむきになって言ってしまった。綾香はそう言われて拗ねた感じになり、吹寄はクスクスと笑っている。

「まあ、吹寄が嫌じゃなければ、俺んちでも構わないよ」

「うん、わかった、私は比企谷君の家でも構わないわ」

「ほらっ、決まりだよ、八幡お兄ちゃん！」

「わかったよ、2人共」

「それじゃあ、明日からにしましょうか」

吹寄の提案により明日の午後からはじめることになった。

第2章―5―第5話―吹寄と綾香との勉強会。

――総武高校↓ジュネス↓比企谷家

翌日の授業は午前中だけ。午後からは、教職員達の市内の教育研究会があるためだ。

来週中間テストがあるため、浮かれて帰る人間は、よほどテストに自身があるのか、はたまた諦めているのかはわからないが。

雪乃と結衣は、どこかで勉強会を開くらしいが、八幡には別状関係がなかった。

彼には、彼と約束した吹寄と綾香と勉強会を開くことになっているからだ。学校にいても何もないので、そそくさにジュネスで軽く買物を済ませて家に帰ることにした。

なんせ幼なじみの女子達を除けば、初めての女子を家に招くことになる。ちよつと緊張気味の八幡は、深呼吸して呼吸を整える。

「別にテスト勉強をするだけだし、何を緊張する必要がある？吹寄だけならまだしも綾香もいるんだぞ…」

そんなことを考えながら自宅へ帰って来ると、テーブルの上にメモ帳の紙が置いてあった。

その紙にはこう書かれている。

「八幡、勉強会を家にするのならお昼御飯は、冷蔵庫に食材が入ってるから、それで食べてね。母より」

八幡は言われたとおりに冷蔵庫を開けて食材を確かめる。昨日無かった食材が増えている。

「母さん、パートに出る前に買い物してたのか」

食材を見ながら何を作るか迷っていたら

「ただいま。八幡お兄ちゃん帰ってきてるみたい」

「そうみたいだね」

「ささ、制理先輩、あがって下さい」

「お邪魔します」

綾香と吹寄が玄関からあがって、洗面所で手を洗ってリビングへやって来る。八幡もキッチンからリビングへ来る。当然学校帰りに

来たのだから、制服である。

「綾香、吹寄、昼飯はまだだろ？」

「八幡お兄ちゃん、何か作るの？」

「そうだが、吹寄も何か食べたいか？」

「比企谷君って家でも料理、するんだ」

「母さんが夕方にパートで出ることが多かったからな。だから俺が夕飯を作らなくてはならなかった。それからだな…料理が得意になったのは」

「そうだったのね。だから以前の家庭科の調理実習が上手かったわけね」

吹寄は以前の調理実習の事を言っている。あの時は、どこのグループにも入らずぼっちになっていて、彼女のグループに入った経緯がある。その時に料理の腕前を見せたのだ。

「八幡、お兄ちゃんは昔からやってたってお姉ちゃんに聞いていたし」「まあ、母さんに「これからは男も料理が出来ないといけないわ」って言われてからな。でも料理をやっていくうちに面白くなったしな」

八幡は、幼き頃からそういう風に育てられたので、男が料理をするのも当たり前だと考えている。将来結婚して、子供が生れた時にも育児休暇を取得することもちゃんと考えている。一番好きだった綾音との結婚生活は叶わなかったが、他に好きな女性が出来て結婚しその後子供が出来たとしてもちゃんとすることは決めている。

「比企谷君って本当に家庭的なんだ」

「家庭的かはわからないが、料理をするのは好きだな」

「私、八幡お兄ちゃんのチャーハンが食べたいな」

「綾香はチャーハンか、吹寄もチャーハンで構わないか？」

「ええ、構わないわ。むしろ比企谷君のチャーハンを食べたくなくなったわね」

「わかった。今から作るから、適当にしていってくれ」

八幡は、キッチンでチャーハン作りの準備を始め、綾香と吹寄は軽く勉強をするつもりだ。

「さて、やるとするか」

八幡はチャーハン作りを始めるのだった。
チャーハンは、冷蔵庫にある食材から作り上げ、良い匂いが吹寄と
綾香の鼻腔を刺激するのであった。

八幡が作ったチャーハンを食べ終えた後、しばらく休憩を挟み勉強
をやり始める。八幡は自分の勉強をしながら、綾香や吹寄に勉強を教
える。

「ごめんね、八幡お兄ちゃん、私の勉強まで見てもらって」

「別に構わないさ。復習のつもりで俺はやっているからな」

「比企谷君って、いつも綾香に教えているの？」

「綾香は姉に似て頭が良いからな。俺が教えなくても出来るさ」

八幡のその意見に綾香は反論する。

「ううん、八幡お兄ちゃんの教え方が上手いからであって：私だけの
力じゃないし。それにお姉ちゃんと比べてもまだまだだし」

俯きながら綾香は答えた。だが困った感じではなく照れ隠しな面
もある。

「それにしても、総武高校には比企谷君の隠れファンが多いわね。葉
山君達のテニス勝負の時にわかつちゃったけど」

葉山とのテニス勝負。正確には戸塚達とテニスの練習をしていた
時に葉山と三浦がテニスコートに乱入してきた事案。

成り行きでテニスコートを掛けた勝負になった。八幡&綾香と葉
山&三浦の混合ダブルスでの勝負となった。

応援合戦は、葉山コールの一色であったが、八幡のファン達もそれ
に応酬合戦となる。

意外にも総武高校にも隠れ八幡ファンがいることもわかった結果
にもなった。

結果は八幡&綾香ペアの勝利。しかし葉山ファン達は、葉山と三浦
の一部始終の方が上回ってしまったのだ。

「……………まあ、あれはイケメン葉山に全てを持っていかれた勝負だっ
た」

「八幡お兄ちゃん、私とのキスを忘れてるよ？」

「あ、あれは、お前が不意に…」

八幡はあの時の綾香とのキスを思い出し、表情が赤くなる。

「不意のキスと言ってもキスはキスだしね」

「……キスするのは、やっぱりそういう雰囲気でするものであって、ああいうのは…」

八幡はあたふたしながら言う。綾音ともそういう雰囲気でする回数キスをしたくらいか。

「と、とにかく中間テストの勉強をするぞ。キスなんかテストには出ないしな」

どきまぎしながら彼は、教科書やノートを開く。綾香も吹寄も冗談やからかいを止め、教科書やノートを開く。そんな時、吹寄のスマホのバイブがなったのだ。

第2章―6―第6話―チエーンメール。

―比企谷家・リビング

吹寄のスマホのバイブが鳴り、彼女はポケットからスマホを取り出す。だがその表情は険しくなる。

「どうしたんだ、吹寄？迷惑メールか？」

「ううん、迷惑メールと言うか…ねえ…」

吹寄は苦笑いをしながらスマホの画面を見ている。綾香は吹寄のスマホを覗きこんで見ている。

「制理先輩、それって迷惑メールじゃないですか！」

「うん、そうみたい。クラスの友達にもこんな内容が届いてるみたい」「どんな内容なものなんだ？」

八幡は、吹寄からスマホを借りて送られてきた迷惑メールの内容を見る。

【戸部は稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしていました】だとか。

【大和は3股かけている最低の屑野郎】だとか。

【大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーをしていた】だとか。

要約するとそんな感じの、ことの本質は定めでは無いメールがいくつもある。そして大本の使い捨てアド以外の、クラスメイトらしき人物から転送されているのもわかる。

「完全に悪質な迷惑メールじゃないか。それも葉山達のグループの男共だな…」

「どうやら、今日あたりから回りだしたみたいね」

「学校でか？」

「ううん、比企谷君、私達のクラス内だけよ」

「な、なんだと…」

八幡は、自分のスマホを取り出して、見てみるが迷惑メールは送られてきていない。クラス内で彼の連絡先を知っているのは、戸塚と吹寄くらいだろう。彼や彼女が八幡に迷惑メールを送るとは考えにく

い。

「八幡お兄ちゃん、そんな迷惑メール来なくてもいいじゃない」

「普通はそうなんだが…なんかクラスの中で自分だけこないとなると…なんだかな…」

本当なら迷惑メールなんか来ない方が良いのだろうが、クラスで自分だけが来てないとすると、クラスの人間だと認識されてないような気もする八幡であった。

「八幡お兄ちゃんは、そんな迷惑メール来なくてもいいの」

「そうは言ってもな…」

八幡が苦笑いをしていると、綾香がスマホを操作して、彼のスマホに何か送る。

「な、何を送ってくるんだ？」

「八幡お兄ちゃん、大好き、大好き」

「お、お前、何書いて送ってた。恥ずかしいだろうが!」

吹寄もスマホを取り出して何かを書き込んで八幡へ送る。

「吹寄も!」

「比企谷君、私も大好きって言ったらどうする？」

「大好きって…吹寄も綾香の真似をする必要があるのか？」

「別に良いじゃない？好きってライクの方もしれないよ？」

「高校生でライクするのも…どうなのかね…」

八幡はスマホを置き、教科書とノートを見ながら話している。

「悪かったわね」

「でもその迷惑メール、クラス内で回ってるなんて気持ち悪くないですか？」

「うん、気持ち良いものではないわよね。かと言って担任や平塚先生に言っただけ良いものか」

「第3者が告発するとなるとな…確実にイジメ調査みたいのが入る可能性はあるよな」

八幡と吹寄は迷惑メールの事で悩んでいた。

「俺達がどうこう出来る問題ではないな」

「問題が問題だし、デリケートな部分もあるしね」

「それにそこに書かれてる事が、本当なのか、違うのかもわからないんですよ？」

「まあな。どっちにしろ明日、あいつらを観察してみることにする。吹寄も頼む」

「ふっ、任せて。私は学級委員長だしそれとなく調べてみるわね」

そしてこの日の勉強会は、迷惑メールの話で終わったようなものになった。短い時間ではあったが、実のある時間であった。

第2章―7―第7話―弟とチエーンメールと。

吹寄家―吹寄制理の部屋。

吹寄は自室で、八幡の家で勉強したことの復習をしていた。吹寄も後輩の綾香がいるとはいえ男子の家に行くのは初めてである。

勉強の事よりもクラスの問題点が出てきた事。

チエーンメール。

それも実名で誹謗中傷するチエーンメール。これは学級委員長として無視することはできない案件。だが大事にはできないデリケートな問題である。

「でも…こんなチエーンメールが出回るの？このチエーンメールを送った人間になんのメリットが…？」

吹寄はクラスの男子の顔を浮かべながら考える。浮かべていくが何か出てくるわけでもない。彼女自身も男子達のことを何でもわかるわけではないのだ。

「何もわからないわね」

彼女は席を立ち自室の窓を開ける。するとひんやりした風が部屋を吹き抜ける。

「比企谷君は、明日クラスの様子を見るとか言ってたわね…。それで何かわかるのかな」

そんなことを言っていると、吹寄の部屋のドアがノックされる。

「姉貴、俺のダンベル知らない？」

「ま、政成…何？ダンベル…あ、借りたままだったわね」

ダンベルは、ベッドの近くの隅に置いてある。彼は、吹寄の弟である吹寄政成。海浜総合高校に通う1年生。サッカー部である。中学生2年生まで、姉ちゃん姉ちゃんとかくっついてしたが、高校に入る前からくっついて来なくなった。それは、本人が恥ずかしがったの行動だが。

「姉貴、入るよ」

「良いわよ」

政成は、姉の制理の部屋に入る。ダンベルの置き場所を特定すると

そこへ向かい歩き出す。

「姉貴、使い終わったのなら、返してくれよ…」

「ごめん、忘れてた」

「忘れてたって……。姉貴はそう言うけど、俺が借りたままだと怒るのに！」

政成は、ぶつぶつ言いながらダンベルが置かれている場所へ行き、ダンベルを持つ。すると彼は、ダンベルの近くに置かれている彼女の下着が目に入る。

「姉貴！下着ぐらい片付けられよ！」

「何？姉の私の下着を見て照れてるの？」

「そ、そんなわけあるか！」

そう言つて政成は、姉の制理の部屋を出ていった。

「ち、ちよつとからかいすぎたかしら」

吹寄は、ちよつと苦笑いしながら再び勉強をするのだった。

吹寄家↓2ーF組

翌日、吹寄はクラスの委員長の仕事をしながらチェーンメールの事を調べたが、何もわからなかった。自身の親友の山下真由に聞いても「真由もチェーンメールがきたのよね？」

「うん、きたよ。ただあれって本当なの？」

「真偽はわからないわね。こんなこと本人達に聞くわけにいかないし」

「だよね…それよりも中間テストの勉強教えて！」

「わかったわ」

吹寄は、真由に勉強を教えながらクラスの女子達の会話を聞いていたが、チェーンメールの話題は出てこなかった。

そして時間が過ぎ、15分の小休憩の時、お手洗いの帰りの廊下で八幡が吹寄に話しかける。

「どうだ、例の件は？」

「例の件？あ、ああチェーンメールの事ね。うーん、残念だけどクラスの女子はさほど興味がないみたいね」

「それだけ分かれれば、上出来だな。つまりあれはクラスの男子間の問題ってことだ」

「クラス男子の問題…」

「……まあ…今日あたりに奉仕部に依頼が来るかもな…本人か…代理人が…」

八幡は、そう言つて2ーF組の教室へ戻つて行く。

「それって、雪ノ下さんに依頼をつてこと…」

予鈴のチャイムが鳴つたので吹寄も教室へ戻ることにした。

そして昼休みの時間になり、吹寄と真由は、弁当を広げて食べる。ふと八幡の方を見ると、彼も弁当を広げて食べている。

クラスの雰囲気は、いつもの感じとは違う感じがするが、それでも何も問題なく過ぎていく。

そして放課後、

みんなが部活や帰り支度をやってる最中に吹寄は八幡に話しかけた。

「今日も奉仕部に行くの？」

「まあな。行かないと、平塚先生がうるさいしな」

「アハハ、中間テスト前で部活が休みなのにね」

「人を導く、奉仕部は休みはないそうだ…」

「それは大変よね」

「ああ、大変だな」

八幡と吹寄が話していると、彼女の親友の真由がやってきた。

「制理、お待たせ。あれ、比企谷君と会話中？」

「うん、世間話をね。じゃあ、また明日ね」

「ああ、またな」

「比企谷君、さよなら」

「さよなら」

吹寄と山下は、2人で喋りながら教室を去っていく。

「さてと、奉仕部に行くか…」

八幡が鞆を持って教室を出る。そしてすぐに

「ヒツキー、待つし」

「なんだ、由比ヶ浜か。で、なんで待たなきやならないんだよ？」

ちよつと怒った表情の結衣は、八幡に

「な、なんでつて…それは……つてせいりんと仲良く話してたし」

「仲良くつて…別に世間話をしていただけだぞ？」

「世間話つて…それにしては……」

八幡は結衣を置いたまま、スタスタと奉仕部の教室へ歩き出す。

「ヒツキー、置いて行かないですよ！」

結衣は、先に行つた八幡を追いかけるように走つて行つた。

奉仕部の教室のドアを開けて入る、八幡と結衣。

「あら、今日も来たのね、比企谷君と由比ヶ浜さん」

「来たくて、来てるわけじゃないがな」

「ゆきのん、聞いてよ…」

結衣は、教室に入るなり雪乃に話しかける。八幡は自分のベストス
ペースに來ると椅子を出して座る。

「何かしら、由比ヶ浜さん？」

「ヒツキーがね、せいりんと…」

結衣は雪乃に先程の事を話している。八幡はため息をはきながら
窓の外を見る。雪乃が八幡にとんでもないことを言い出す。

「貴方、吹寄さんを毒牙にかけたの？」

「は…？毒牙？何のことだ？つて吹寄を毒牙にかけなきやならない？
意味がわからないが？」

「ヒツキー…があんな…」

結衣は、何かを言おうとしたが、やめた。ヒツキーが女子とあんな
風に話すわけがない、女子がヒツキーと話すわけがないと思つている
自分がいるからだ。

だが、海浜総合高校の女子3人や綾香達のことを考えると、総武で
の八幡がおかしいと思ひ始めたのだ。

「由比ヶ浜さん、どうかしたのかしら？」

「ううん、なんでもない」

結衣はそう言って自分の取り分の椅子に座る。そしてチラッと八幡を見る。視線を感じた彼が

「なんだ、由比ヶ浜？」

「ううん、なんでもない」

「そうか…」

そんな感じの会話をしていたら、誰かが訪ねてくる。タンタンと小気味よくリズムミカムに扉を叩く。

「誰かな？」

「……………」

「どうぞ」

雪乃がそう言うと、扉が開く。

「お邪魔します」

来訪者は、八幡と結衣と同じクラスの葉山隼人であった。八幡は、葉山が来たのかと、という感じで見ていたのだった。

第2章―8―第8話―葉山の依頼。

「こんな時間に悪い。ちょっとお願いがあつてさ」

アンブロのエナメルバックを床に置くと、葉山はごく自然に軽く断りを入れて雪乃の正面の椅子を引いた。

「いやー中々部活から抜けさせてもらえなくてさ。他の部活は休みに入ってるけど、サッカー部は特別に今日までにしてもらってるんだ。まあ今日のうちにメニューをこなしておきたかったかい」

「なるほど」

「その男の言葉はともかく、能書きはいいわ。何か用があるからここに来たんでしよう？葉山隼人君？」

冷たい響きを滲ました雪乃の声にも葉山は笑顔を絶やささない。

「ああ、そうだった。奉仕部つてのはここでいいんだよね？平塚先生に、悩み相談するならここだって言われて来たんだけど」

葉山が喋ると何故か窓から爽やかな風が吹き込んでくる。

「遅い時間に悪い。結衣もみんなもこのあと予定とかあつたからまた改めるけど？」

そう言われて、結衣はいつだかも見たうすっぺらい笑顔で笑う。どうやら上位カーストの人間に接する時のくせが抜けないようだ。

「や、ーや。そんな全然気にする必要はないよ。隼人くん、サッカー部の次期部長だもんね。遅くなっても仕方がないよ」

だがそう思っているのは、結衣だけだ。雪乃はなにやらピリッついているし、八幡は複雑な気持ちで見ている。

「いやー比企谷にも悪いな」

「何故、俺に謝る？」

「いや…君の前でサッカーの話はと思つて……」

「別にサッカーの話をしてもいいが？葉山が気にするものでもないだろう？」

「それは、そうだが……」

葉山は少し不満げな表情になったが、すぐに本題の方の話をし始めた。

彼がこの奉仕部に来た理由は、とあるチエーンメールのことである。近頃2年生界限で問題になっている問題の1つである。やはりと八幡は確信する。

葉山は、おもむろにスマホを取り出した。結衣は、あつと声を出すと、自身のスマホを取り出して、さっきのチエーンメールを見せてくる。結衣と葉山のチエーンメールの内容は同じである。

内容は、怪文書と呼ぶに相応しいものであった。結衣の指先がスクロールしていくと憎悪の塊な文章である。どうみても捨てアカウントであり、いくつものアドレスから個人を誹謗中傷するメールばかりである。

「戸部は、稲毛のカラーギャングの仲間ゲーセンで西高狩りをしていた」だとか。

「大和は、三股かけている屑野郎」だとか。

「大岡は練習試合で相手校のエースを潰すためにラフプレーした」だとか。

要約するとそんな感じの、ことの本質は定めでは無いメールがいくつもある。そして大本の使い捨てアド以外の、クラスメイトらしき人物から転送されているのもわかる。やはり吹寄から見せてもらったチエーンメールと同じ内容である。

「やはり、そういうことか」

八幡の問いに結衣が頷く。

「昨日、言ったでしょ？うちのクラスで回ってるやつ」

「ああ、達の悪いチエーンメールだな」

チエーンメールとは、その名前のおりに鎖のように回り回っている類いのメールだ。大体語尾に「10人、20人に回りして下さい」とかあるのがそうだ。

ちよつと前にあつた【不幸の手紙】に似ている。

「3日以内に5人に同じ手紙を送らないと貴方が不幸になります」って文章である。

そのメールを見ながら葉山は苦笑いを浮かべている。

「これが出回ってから、なんかクラスの雰囲気が悪くてさ。それに友

達のこと悪く書かれてば腹も立つし」

「確かにお前の言うとおりでな。友達の悪口を書かれれば、俺でも腹は立つな」

「止めたいんだよね。こういうのってやっぱりあんまり気持ちがいいもんじゃないからさ」

葉山がそう言うのと八幡は彼の目を見て言った。

「つまり、葉山、お前は犯人を特定させてほしいって事か？」

「犯人を捜してほしいわけじゃないんだ。丸く収める方法を知りたい。頼めるかな？」

「丸く収めてほしい……ってマジか？」

「そうだね」

葉山の言い分は、波風を起さずに事を収めたいのが願いだ。だがこのような案件で、丸く収めるのは無理に近い。雪乃は葉山に

「つまり、事態の收拾を図ること。…では犯人を捜す必要があるわね」

「…えっ!? 犯人捜し!？」

葉山は驚いたようにそう言った。丸く収めてほしいと依頼したのに雪乃が犯人捜しをやると言われたからである。そして彼女はどす黒いオーラを出しながら自身の体験談を話し出した。

「チエーンメール、あれは人の尊厳を踏みにじる最低の行為よ。自分の名前や顔も出さない。ただ傷つきたいだけに誹謗中傷の限りを尽くす」

「確かに、雪ノ下の言うとおりでな。過去に俺の親友にそんなチエーンメールを送り付けて傷つけていたヤツがいた。まあ犯人を問い詰めて、二度としないようにお灸を据えたことがあったな」

八幡がそんなことを話したのだから、結衣は驚き葉山は妙に納得していた。雪乃は自分の話を遮ったため不満げにしている。

「貴方の過去話は別に良いとして、悪意が内から余計に性質が悪い。好奇心や時には善意で。悪意は周囲に拡大し続ける。比企谷君のように大本を根絶やしにしないと効果は無いわ」

「おい！雪ノ下、俺は根絶やしにはしてねえ！お灸を据えたただけだ」
「違ったかしら？」

「違うわ！」

「……全く、人を貶める内容が何が楽しいのかしら。それで佐川さんや下田さんになんのメリットがあつたとは思わないのだけど」

「犯人は特定済みなんだ……」

結衣が若干ひきつった感じで笑う。八幡も若干引きながらも

「まあ、その2人が雪ノ下にそういうことをしたのかはわかるな。理由は1つしかない」

「理由なんて知りたくもないわね。とにかく、そんな最低なことをする人間は確実に滅ぼすべきだわ。目には目を、歯には歯を。敵意には敵意を持って返すのが私の流儀」

「お前はハムラビ法典かよ……」

「ハムラビ法典？ハムラビ法典ってなに？」

「由比ヶ浜、今日の世界史ってやっただろ？」

「そ、そうだっけ……」

習ったかどうか忘れている結衣を尻目に雪乃は葉山に

「私は犯人を捜すわ。一言言うだけで、ぱったりと止むと思う。その後はどうするかは貴方の裁量に任せるわ。それで構わないかしら？」

「……ああ、それでいいよ」

葉山は雪乃に観念したように返事をした。

八幡も雪乃と同意見だった。メアドをわざわざ変えて送りつける行為は、自身の正体をバレたくないからであり、バレた時点で止めるだろうという考えである。

要は犯人を見つければ一番早い訳である。雪乃は結衣が机の上に置いているスマホを見つめている。3そこに顎に手をやり、考える仕事をした。

それを葉山や結衣は、真剣に見ている。

八幡は八幡で、自分なりに考えを見出だそうとしている。吹寄と協力し解決する方法やクラスの連中の様子を見るような事を考えていた。

第2章―9―第9話―葉山の依頼の受託と吹寄との下校。

少し考えて雪乃は、葉山に

「メールが送られてきたのはいつからかしら?」

「先週末からだよ。な、結衣?」

葉山が答えると結衣も頷く。

「先週末から突然始まったわけね。由比ヶ浜さん、葉山君、先週末クラスで何かあったの?」

「特に、なかったと思うけどな」

「うん……いつも通り、だったね」

葉山と結衣は互いに顔を見合わせる。

「一応、比企谷君にも聞くけど、何かあったの?」

「先週末と言えば、確か職場体験の班決めがあったと思うが」

「うわっ、それだ。グループ分けのせいだ」

「え?そんなことか?」

葉山がそう言うが、あり得ない話ではないのだ。人数が偶数の場合はハブれることはないが、奇数の場合は、誰かが漏れる可能性があるのだ。漏れた人間がナイーブならその後の関係性がヤバイことになりかねない。

「葉山君、書かれているのは貴方の友達、と言ったわね。貴方のグループは?」

「あ、ああ、そう言えば決めてなかったな。まあ、その3人の誰かに行くことになると思うけど」

「犯人わかつちやったかも……」

結衣が幾分げんなりした表情で言った。

彼女の突然の犯人わかつちやった発言。雪乃はそのまま彼女に聞く。

「由比ヶ浜さん、説明してもらえるかしら?」

「うん、それってさ、つまりいつも一緒にいるひと達から1人ハブにな

るってことだよな？4人の中から1人だけ仲間外れができちゃうじゃん。それで外れた人、かなりきついよ」

「ごもつとも意見だよな」

犯人を特定するにはまず、動機から考えるのが一番手っ取り早い。その行為をすることで、メリツトが生まれる人間を見つければおのずと特定ができるってことである。

この場合は、ハブレないことに意味がある。葉山達男達は、4人グループで構成されている。従って3人組を作るためには、誰かが外れないといけない。そうなりたくなかったら、誰かかを蹴落とすしか無いのだ。犯人はそう考えたに違いない。

「……では、その3人の中に犯人がいると見て間違いないわね」

「まあ…そう考えるのが妥当だろうな」

「ち、ちよつと待ってくれ！俺はあいつらの中に犯人がいるなんて思いたくはない。それに3人それぞれ悪く言うメールなんだぜ？あいつらは違うんじゃないのか？」

「葉山、お前の友達を信用したい気持ちもわからないわけではない。ただかな、あえて犯人自身を書き込んでいる可能性もある。疑われないようにな」

葉山は八幡の発言に反論できずに唇を噛み締めていた。こんなことは考えてもいなかったのだろう。自分の側に悪意があるなんて、思いもなかったのだろう。仲良くやっている表で、しかし裏では憎悪が渦巻いていることを。

「とりあえず、その人達のことを教えてくれないかしら？」

雪乃が葉山に情報提供を求める。すると彼は意を決めたのか顔を上げる。その瞳には信念がこもっている。それは己の親友の疑いを晴らさんがための意思がある。

「戸部は、俺や陽介達と同じサッカー部だ。金髪で見た目は悪そうに見えるけど、一番ノリで良いムードメーカーだな。文化祭や体育祭とかでも積極的に動いてくれる。良いヤツだよ。比企谷君もわかるだろ？」

「まあな。戸部に関しては、陽介達の話とも一致するしな」

「騒ぐだけのお調子者、というところね」

「……………」

「騒ぐだけのお調子者って、戸部みたいなムードメーカーは大事なキャラだぞ」

「比企谷君、貴方に説明を求めているわ」

八幡と葉山は思わず絶句してしまう。

「……………どうしたの？続けて」

「……………ああ、次は大和。大和はラグビー部。冷静に人の話を良く聞িয়েくれる。ゆったりしたマイペースとその静けさが人を安心できるって言うのかな。寡黙で慎重な性格なんだ。良いヤツだよ」

「反応が鈍い上に優柔不断…と」

「……………」

「…おい、雪ノ下…」

「……………大岡は野球部だ。人懐っこくていつも誰かの味方をしてくれる気の良い性格だ。上下関係にも気を配って礼儀正しいし、良いヤツだよ」

「人の顔色窺う風見鶏、ね」

「……………」

「……………」

いつの間にか葉山と雪乃だけがしゃべっていた。結衣はぼかんと口を開けたままだ。

「どの人が犯人でもおかしくはないわね」

「で、雪ノ下、ここまで言ったのだから、犯人がわかるんだろうな？」

「ええ、わかったわ。あの3人のうちの1人が犯人ね」

「3人のうちの1人って…わかって無いじゃないか！」

八幡がそう言うと、雪乃は彼を睨めつけながら

「まだ推理は組み立て中なの。……………ところで比企谷君と由比ヶ浜さん、貴方達はあの3人を見て彼らのことはどう思ってるのかしら？」
「え、ど、どう思うって言われても…」

「大和と大岡はあまり知らんが、戸部ならわかる。陽介や完二からよ

く話が出るからな。練習で上手く行かないときに、ちよくちよく相談に乗ってくれてるみたいだし。俺から見てもあいつは悪い男には見えないな」

「比企谷君……」

「素直に戸部の評価をしたまでだ」

「それじゃ、比企谷君、後の2人を調べてもらっても構わないかしら？正式にグループを決めるのは、明後日よね？それまで1日猶予があるわ」

「……わかったよ、由比ヶ浜、お前もな」

「……ん、うん」

八幡に言われて、戸惑いながらも返事をする。誰とでも仲良くなれる由比ヶ浜からすれば、誰かの粗捜しなんかやりたくはないのだろう。人の粗捜しは、自分自身の粗をさらす行為にもなってしまうからだ。コミュニティ内ではわりとリスクな行為だ。それは雪乃も理解しているようで、申し訳なさそうに目を伏せている。八幡は、やはり結衣にはさせられないと思う

「やっぱ由比ヶ浜、お前はいい。俺1人でやるわ。憎まれ役は俺が買う」

「……あまり期待しないで待ってるわ」

「任せとけ。昔から人を見る目はあるつもりだからよ」

「ち、ちよつと！あたしもやるよ！そ、その、ヒツキーに任せてなんておけないし！」

結衣は顔を赤くして語尾をもによらせながらも、次の瞬間には拳をぎゅつと握った。

「そ、それに、それにつ！ゆきのんのお願いなら聞かないわけにはいかないしね！」

「……そう……」

答えたきり、雪乃はそっぽを向く。夕映えのせいかな、それとも照れているのかその頬には朱が差している。

そんな2人の様子を見ていた葉山は爽やかな素敵スマイルで笑う。

「仲良いんだな」

「まあな」

「比企谷君もだよ」

「そうか…」

「君は、陽介や完二が言っていたとおりであったよ…僕ではかなわないな」

八幡には聞こえない小さな声で葉山がそう呟いた。

「葉山、何か言ったか?」

「いや、何でもないよ」

こうして、八幡と結衣による2人を調べることになった。

この日は、これで解散となりそれぞれが帰路についた。

だが八幡は、夕日から夜の闇に変わり始めた学校内にいた。

「さてと、葉山の依頼を受けちまったし…どうしたものか」

戸部は、葉山や陽介、完二から聞いているからわかる八幡だが、大和と大岡はあまりわからない。

「さすがにあの2人と仲の良い知り合いはいないしな…」

腕を組ながら真剣に考えてる八幡の耳にコツコツと近づいてくる音が聞こえてくる。

「まだ校舎に残ってた人間がいたのか」

そんなことを思いながら、葉山の依頼を考えると、その足音の主に話しかけられる。

「比企谷君、まだ残ってたの?」

「ふ、吹寄か…お前こそこんな遅くにまだいたのか」

「うん、図書室でテスト勉強してたら、こんな時間になってしまったわ」

「テスト勉強か」

「比企谷君は、奉仕部の活動だったわね…。こんな時間にまでって誰か依頼者が来たの?」

「ああ、チェーンメールの事で葉山が依頼にきた」

「葉山君が来たの。当事者の3人じゃなくて?」

「ああ、葉山がきた」

八幡は、奉仕部に来た葉山の依頼を簡単に説明した。

「なるほど。彼はそんなことを」

「葉山らしいと言ったら葉山らしいが、雪ノ下はそれを良しとはしなかった」

「それで、結衣と調べることに?」

「まあ、そういうことになったが…できれば、アイツに憎まれ役はやらせたくはない」

「……どうして?」

吹寄はそう聞いてきた。何故、グループに関係ない八幡が憎まれ役を買うのかと。

「由比ヶ浜はあのグループの人間だから、そんなこと聞いていたら、グループから浮くことになる。そうなるか……」

「結衣を孤立するのをさせないために、比企谷君が悪役を…買って出たんだね」

「別に由比ヶ浜のためにやってるわけじゃねえ。依頼をさっさと終わらせるためにやってるだけさ」

八幡は、腕時計を見て吹寄に

「近頃物騒な事件も起きてるみたいだし、途中まで一緒に帰るとするか」

物騒な事件、女性連続暴行事件が、起きている。総武高校区内も1件起きている。だから八幡が吹寄を途中まで送ることにしたのだ。

「女性連続暴行事件、この辺りでも起きてるんでしょう? なんだか怖いな」

「だから、一緒に帰るって言ってるんだが」

「あ、ありがとうね、比企谷君」

八幡と吹寄は、自転車置き場に向かい、学校から下校する。

夜に照らされた電灯の明かりが、八幡と吹寄を照らしている。

「比企谷君とこうして帰ることになるとは思わなかったけど」
「嫌か?」

「ううん、別に嫌じゃないんだから」

「そうか。俺も妹達や女友達(めぐり、陽乃も含む)以外の女子と帰る

のは初めてだな」

「それは光栄なのかな」

吹寄はそう言って笑った。八幡はその笑顔に一瞬ドキツとしてしまった。

そして結局八幡は、吹寄の家まで送り届ける。

「比企谷君、家まで来てくれてありがとう」

「別に構わない。それじゃまた明日」

八幡は、吹寄にそう言うのと来た道を引き返して帰って行く。吹寄はそんな彼を見送った。姿が見えなくなるまで見ていたのだった。

第2章―10―第10話―政成の葛藤。

総武高校↓吹寄家

吹寄は、自転車を自動車の車庫の邪魔にならないスペースに入れる。そして玄関を開けて家の中に入る。

その姿を弟の政成は自室から見ている。

「姉貴が男と一緒に帰ってきた…」

姉である制理が男と帰ってきたことに驚いている弟である政成。今までそんなことはなかったから驚きもデカイ。しかしそれだけではない。

「姉貴と一緒に帰ってきた男って、今思い出したけど、あの比企谷八幡先輩ではないか！」

海浜総合高校で、それもサッカー部なら必ず耳にする固有名詞である比企谷八幡。

サッカー部のエースの雅史の親友でライバルでも八幡。彼がサッカーを辞めたとあっても、誰もが彼を支持しているのである。

総武中の色男であると。

「姉貴があの色男である八幡先輩と？」

そう叫んで興奮したら椅子から転げ落ちた。

「うるさいわね、政成！」

「あ、姉貴…」

政成が見上げたら、制理のスカートの中が丸見えだった。綺麗に逆三角が見えたのだ。彼女も弟の視線がスカートの中に集中してることに気がつき

「へえー、昨日は興味が無いとか言ってたのに、やっぱり興味があるんだ、姉のパンツに？」

政成はすぐに起き上がり、言い訳を開始する。

「あ、あれは転んで、たまたま頭を上げたら姉貴のスカートの中に視線が…いったというかー」

「つまり、興味があるんでしょ？」

「無いわ…」

そう言うと政成は、自分の部屋を出て1階へ降りていく。

「……全く素直じゃないんだから」

制理もそう言うと自分の部屋へ入ったのだった。

しかし弟の政成の脳裏には、姉の制理のパンツがこびりついていてた。

夜ご飯を食べた政成は、自分の部屋へ戻る。総武高校はもうすぐ中間テストが始まるが、それは政成が通う海浜総合高校でも同じである。

部活動の休みも総合高校と同じで部活動が休止状態である。中間テストで、赤点を1つでも取れば、部活動どこではなくなってしまう。再テストのため、赤点を取ってない生徒達は、練習を再開するが、赤点を取った生徒は、再テストのための勉強会が開催されるのだ。

だから部活動どこでは無くなるので、政成は必死で勉強をしているのだ。

「1教科でも赤点取ったらヤバい。田代監督は、文武両道でなければならぬとか言ってる人だからな」

田代文哉サッカー部監督。海浜総合高校のサッカー部のOBであり、プロでもやっていた人物である。

引退後、サッカー指導の為に勉強しライセンスを取得後、海浜総合高校が田代にオファーを出し彼がそれを受託してくれたのだ。彼が就任してから10年が立ち、千葉県優勝が6回、準優勝が2回。全国大会ベスト4が2回、ベスト8が2回

そして今は千葉県2連覇中。

政成は、1年でありながら準レギュラーでもある。ポジションはFW。

紅白戦や練習試合でも得点を取るなど活躍をしているのだ。

「雅史先輩や康先輩には、まだまだ足元には及ばない。だからテストで赤点なんか取ってたら、レギュラーなんか取れないからな！」

政成は、声に出して言ってしまったため、お風呂が空いたことを教えにきた制理に聞かれてしまう。

「ふーん、そうなんだ」

「あ、姉貴…まさか聞いてた…?」

「ぼっちりね」

制理ににこやかな表情で言われたため、政成はかなり恥ずかしかった。穴があつたら入りたい気分である。

「ほらっ、恥ずかしがってないで、早くお風呂に行きなさいよ!」

「わ、わかってるって!」

順番どおりスムーズにしないと、母親が怒るので、政成はお風呂に入る支度をして向かうのだった。

そして身体を洗い終えた政成は、お風呂に浸かる。

「はあく、いい湯だな…」

つつい声がでてしまうものである。

「しかし、姉貴…八幡先輩と一緒に帰ってきたけど、どんな関係なんだろう」

お風呂のお湯に自分の顔が映り、ニヤニヤしているのがわかる。別にやましい気持ちでみているのではないし、興奮するようなものでもない。

「何故、姉貴で興奮しなきゃならない!」

政成は水面を両手で叩く。叩いた衝撃で、水しぶきを顔面に受けることになる。

「ごほっ、鼻や目にお湯が…」

むせながらもしばらくお湯の中に入っていたのだった。

お風呂から上がって脱衣場で着替えていると、制理の着替えが入っている洗濯かごが目に入る。

「あれって姉貴の着替えが入ってるかごか…」

いつもなら目に入っても興味も欠片もなかったからスルーしていた。だが制理の下着を目撃してから興味が湧いてしまったのだ。

恐る恐る制理の着替えが入っている洗濯かごに手を伸ばす。いけないこととわかっているのだが、好奇心の方が勝っている。

「見つかったらどうする…」

見つければ、どうしようもできない結末が待っていることだろう。

「す、少しだけ良いよな」

洗濯かごの中身をばれないように漁って見る。すると白いブラジャーとワンセットにシヨーツの方も綺麗に置かれてあった。それを手に取る政成。

「これが…さつきまで姉貴が……」

彼の頭の中で下着姿の制理が浮かび上がっている。ニヤニヤしている姿が鏡に映っているのだが、本人は気づいてはいない。

「い、いかん、これでは変態じゃないか……!」

そう言って政成は、元の場所に制理のモノを戻した。見つかったらタダでは済まないだろう。

「さつきと上がるとするか」

モンモンした気持ちを押さえながら風呂場から立ち去ることにした。

第2章―11―第11話―葉山グループの男達。

―吹寄家

朝の吹寄家の早い。父親は早くに出勤に出る。母親も父親に遅れて早いに出勤する。だから家には制理と政成だけになる。

弟の政成は、家の庭先で基礎練をしている。姉の制理も部活が休みの為、体力を落とさないように同じく基礎練をしている。

政成は、昨日あんなことしたので、まともに制理の顔を見れない。

「なに、何か用があるなら言いなさい」

「別に、用があるわけじゃ…」

政成は、制理の格好を見て驚いて見ていただけである。彼女は中学の時の体操着を着てやっている。胸の部分も色々ヤバイのに、下はブルマ姿なのである。

昨日の風呂場でのあれがあるから、余計に政成のアレに元気が走った。彼は思わずしゃがんでしまう。それを見た制理は

「政成、貴方向やってるの？」

「な、何もやってないさ…アハハ」

「…？なんなのよ、もう…」

制理は、そう言つて黙々と基礎練をやっている。そして政成の視線は、彼女のブルマ姿にある。それもブルマに浮き出ているパンツの線に興奮を覚えてしまった。

政成は、それとは別方向を見ながら黙々と忘れるかのように基礎練をやるのだった。

いつもとおりに八幡は、小町と綾香と共に行き、中学の方に行く小町を見送つて綾香と共に学校へ行く。すると登校途中の吹寄と出会う。

「比企谷君、綾香、おはよう」

「おはようさん」

「制理先輩、おはようございます」

「いつもながらだけど、2人とも仲良いわね」

「制理先輩、そう見えますか？」

「見えるわね」

吹寄にそう言われ綾香は喜んでいいる。八幡はというと

「兄と妹ってこんなものじゃないか？」

「どうかしらね。私にも弟がいるけど、近頃なんか余所余所しいのよね…」

「弟さん、余所余所しいんですか？」

「うん、余所余所しいのよ。私を見るたびに視線を外すし」

綾香と吹寄の会話を聞いていて、八幡は何となくわかってきた。弟の政成の行動が口には出さない。

「だから比企谷君と綾香が普通に会話してるのが、珍しくてね」

「私と八幡お兄ちゃんとは、普通に会話してますし」

そんな会話をしながら学校へ登校していくのであった。

八幡と吹寄は、3人の様子を休み時間になる度に見ていた。ずっと見るのは怪しまれるので、チラチラと見ていたのだった。

昼休み、いつもの場所には行かず、大人しく弁当を食べている八幡。自分の席で、昼ごはんを親友と食べている吹寄。そんなとき結衣が八幡に話しかけてくる。

「とりあえず、あたしが色々聞いてみる。…だ、だから、ヒツキーは全然無理とかしなくていいから。むしろなんもしなくていいから」

「……そりゃあ、その方がいいが……かと言ってお前に全部出来るのか？」

「や、やれるよ！ゆきのんのお願いだもの。やらなきや」

「…雪ノ下にお願いされたねーか…」

結衣のやる気はみなぎっているようだが、このやる気は逆に空回りしそうなやる気だと八幡はため息を吐きながら結衣に言う。

「やる気は認めるけど、具体的に何をするつもりだ？」

「んー女子から聞いてみる。クラスの人間関係とかなら女子の方が詳しいいし。それに、共通の嫌なヤツの話とかすると、結構盛り上がりた

色々と話してくれるし」

「相変わらず、ガールズトークが怖いな……」

そんな会話は、綾音達で経験済みである。その内容がえげつない事もわかってるのだ。

「そんな黒い話じゃないってば！その愚痴、というか情報交換……？」

「ものは言い様だからな……ガールズトークがえげつない事は知ってるから」

八幡がそう言うのと、結衣が鋭い視線で見ってくる。

「……あの時の海浜の3人ね」

「……海浜の3人って……名前ぐらい覚えてやれつての。それとも覚えてないのか？」

「……山岸緑子、高梨七海、折本かおり……」

結衣はいいやいやながらも彼女達の名前を挙げた。

「覚えてるじゃないか」

「彼女達の事は、今はどうでもいいから！とにかく、ヒツキーは何もしなくていいから」

そう言うのと結衣は、葉山グループ内の女子グループである三浦グループに行ってしまう。

「お待ちせー！」

「あ、ユイー。おっそいからー！」

三浦をはじめとするグループの女子達は、気だるそうに返す。

「てかさー、とべつちとか大岡君とか大和君とか最近微妙だよねー。なんかこうアレな感じ？って言うか……」

八幡は、結衣の直球の言葉に操作していたスマホを落としそうになった。

「え……ユイってそういうこと言う子だっけ？」

そう言って一歩引いたのは、海老名であった。そして三浦がきらっと目を輝かせて、ここぞとばかりに攻勢に出る。

「あんさー、ユイ。そういうのつてあんまりよくない？トモダチのことそう言うのやっぱまずいでしょー」

「ち、ちがつ、ちがくてっ！その、気になる、というか」

「なに、あいつらの誰か好きなん？」

「全っ然違う！気になる人はいるけど……それはアレな人だし……はっ！」

しまった！という表情の結衣とそれを三浦がニヤリと笑うのが同時であった。

「え、ユイ……誰か好きな人できたん？言ってみ？ほれほれ。協力するから！」

「だ、だから！そうじゃなくてっ！気になるのはあの3人の関係性？っていうの？なんか最近妙だなーって思うの！」

「んだ、それか。つまんね！」

あからさまに興味を失う三浦。スマホをチャカチャカと操作を始める。だが、違う女子が食い付いてきた。それはメガネ女子の海老名である。

「わかる。ユイも気になっていたんだ……。実はあたしも……」

「そうそう！なんだかギクシヤクしてるってさ！」

「わたし、思うんだけど」

海老名は深刻そうな表情でため息を1つつく。

「わたしの絶対にべつち受けだと思っの。で大和君の強き攻め。大岡君は誘い受けね。あの三角関係絶対何かあるよ！」

「あ、わかるわか……うえ？」

「でもね、でもね、絶対3人とも隼人君狙いなんだよ！くうく友達のためにみんな一歩引いている感じ。キマしたわあ」

海老名はずっとBLの話をして、テンションが上がりっぱなしになっいて、鼻血まで出している。結衣は、海老名の勢いに押されて困っていると三浦が

「はあく出たよ、海老名の病気。おめ、黙つてれば可愛いんだからちやんと凝態しろ鼻血拭けし」

そんな状態を見ていた八幡は、自分の机に視線落として、ため息を吐いた。結衣は、そんな彼を見てごめんと謝った。それを吹寄も確認していた。

全然何も得るものはなかった。海老名のBL好きな情熱がすごいとわかつただけ。

休み時間は、予鈴、本鈴を含めて3分もない。八幡は、戸部、大和、大岡に視線を移す。

3人は、葉山を含めて窓際に陣を取っている。葉山が窓際に寄りかかり、それを囲むようにして戸部、大和、大岡がいる。ここからわかることは、葉山がリーダーであり、キングということだ。そしてその3人にも役割があるようだ。

「で、さ。うちのコーチがラグビー部の方にノックを打ち始めて！やばかったわ！。硬球なのによ」

「……あれはうちの顧問もキレてた」

「マッジウケんだけど、つつーか、ラグ部とかまだいいわ。俺らサツカー部やベーから。いいーややばいでしょ、外野フライ飛んでくるとかヤバいでしょ！そーいうや……陽介が外野フライ取ったわ！けどサツカーボールを蹴り損ねたあれ……ある意味激アツだったわ」

大岡が話を振り、大和がそれを受ける。そして、戸部が盛り上げる。よくできた演劇のようだ。

人生は舞台

シエイクスピアの言葉である。

まさしく人は与えられた役をこなしているようだ。

そしてこの舞台の監督と観客は葉山隼人だ。葉山は時には笑い時には話題を提供し、時に一緒になってはしゃぐ。

八幡はずつと葉山と3人を観察してとある事に気がついた。

1人が今、見えないように舌打ちをする。

また1人は、隣のやつが会話を始めると急に黙り込む。

またある1人は、つまらなさそうにスマホをいじる。あまりこの話題に割り込んでこない。

八幡はこれ以上の収穫も無さそうだなと思っっているとき、葉山が席を立って

「悪いちよつとごめん」

葉山はそのまま八幡の方へやってくる。

「どうした、葉山？」

「いや、なんかわかったのかなって思ってたさ」

「まだ大した情報は無い」

そう言っつて八幡は、葉山の抜けたグループを見てみると、意外な光景が広がっていた。3人ともスマホをいじっていた。そして時々葉山の方を見ている。八幡は、頭の中に閃きが輝く。

「どうかしたか？」

「謎はすでに解けたぜ」

八幡はそう言っつて、葉山にニヤリとスマイルを見せるのだった。

第2章―12―第12話―チェーンメール問題の解決。

八幡は、葉山にニヤリと笑った。彼はなぜ八幡が笑っているのかわからなかった。だか彼は葉山に別の事を聞き始める。

「そう言えば、戸部達以外の：田中や山本とは、近頃しゃべってないのか？」

「まあね。最近、山本と田中は、俺達よりというよりか、松野達と一緒にいるみたいだな」

「何かあったのか？」

「別に何もないさ。あの2人は、俺達と話すより、松野達という方が楽しくなったんだろうな」

「……あの時、あの体育の時に俺を庇ったりしたからか？」

「それは違う。元々は大岡の友達って感じで、そういうことで友達の友達って感じでやってたのかな」

田中と山本は、大岡と同じ野球部である。その繋がりで葉山とも仲良くなったようだ。

「そうだったのか……。友達の友達ってやつか」

「そうだな……」

「疎遠になったことに後悔しているのか？」

「……確かにそう思っている自分もいる。だけど君を馬鹿にするのも許せなかったんだ」

「……なんでお前が許せないんだ？」

八幡がそう言った後、葉山が彼の方へ真剣な表情で

「君は…俺なんかより凄い。彼女のこともそうだが、サッカーもだ」

「葉山…お前は俺を買いかぶりすぎだ。お前の方が凄いつて」

「違わない。比企谷、君は凄いと思う。これは俺の素直な気持ちさ」

「……葉山……お前……」

八幡が葉山に言いかけた時にチャイムがなり、葉山は八幡が何を言おうとしたのか気になったが、聞かないことにしたのだった。

1-2-F組↓奉仕部

そして放課後になり、メンバーは奉仕部へ集められる。開口一番に雪乃が八幡と結衣に

「どうだったかしら?」

と調査報告を求めてきた。結衣は、ははーと笑ってから「ごめん!」一応女子に聞いてみたけど全然わかんなかった」

素直に謝った。結衣としては、海老名のBLに付いていけてなかったし三浦はその手の話に話さなかった。結衣は頭を下げながら雪乃の顔を見ている。しかし雪乃は別状怒ってるわけではない。

「そう、それならそれで構わないわ」

「いいの?」

「逆に言えば、女子達は今回のことにさして興味は持っていない、関わっていない、ってことでしよう。そうなると葉山君のグループの男子の問題ってことになるわ。由比ヶ浜さん、ご苦労様」

結衣が感動でうるつと瞳を滲ませていた。抱きつこうとしたところを雪乃がするつとかわす。彼女はごちつと壁におでこをぶつけていた。雪乃は呆れた様子で、半ベそかいている結衣のおでこを撫でながら八幡を見る。

「で、貴方の方は?」

「犯人は分からなかったが、1つわかったことはある」

「何がわかったのかしら?」

「それってさつき話の中で言ってた…」

「ああ、そうだ」

八幡は、雪乃、結衣、葉山を見据えながら話し出す。

「あのグループは、葉山のグループってことだ」

「はあく今さら何を言ってるの?」

結衣が思いつきり八幡を馬鹿にしたように言った。

「……比企谷君、君がさつき話していたやつだよな」

「友達の友達ってやつだな。お前のグループは、お前が中心なんだ。お前がいなくて成り立たない。お前がいるときといないときにハッキリと違いが出た…」

「……。それはなんとなく気がついてたさ。自分のグループと君の比企谷グループの違いが……」

葉山は、窓の外を見ながらそう言った。

「君のグループは、友達友達って様子ではない。君を中心にした本物のグループって事が、サッカーの試合で思い知らされたからね」

「あいつらは、俺がいなくても親友同士だからな」

結衣は何の話をしてるのか、ポカーンとしていて、雪乃は何かを考えている。

「話は戻すとして、由比ヶ浜、お前会話の中心人物がいなくなったらどうする?」

「あ、あたし!? うーん、気まずくなるかも。何話していいかわかんないし、スマホをいじっちゃうし」

「そういうものなの?」

由比ヶ浜の問いに雪乃は、不思議がっている。葉山はずっと黙ったままだ。葉山にとって戸部、大和、大岡は友達だが、それ以外は、葉山を通しての関係でしかない。こればかりは、葉山自身でもどうすることもできないのだから。雪乃が八幡に

「比企谷君、仮に貴方が言うことが正しいとしても3人の犯行動機の補強にしなければならないわね。そのうちの誰かやっていると突き止める方法はないかしら? その犯人を消さない限り事態は収束はしないわ。いつそう3人とも」

雪乃は顎に手をやり考え込む仕草をする。

八幡は、実力行使は最後の手段としか考えていない。天ノ河事件では、実力行使を使わざる負えない事件になってしまったが、今回のチェーンメールの問題の犯人は、襲撃なんて危険な考えは持っていない。

「雪ノ下、実力行使は最後の最後の手段だ。葉山、お前が望めば、解決するが、犯人を捜す必要もなく、これ以上揉めることもなく、……。そして、あいつらが、仲良くなれる可能性があるかもしれない方法が」「どんな方法かな?」

「葉山、お前が俺と組めば、良いだけのことだよ」

八幡はそう葉山に言ったのだった。言われた葉山は少し驚きながらも

「なるほど、俺が外れれば、あいつらは、3人でグループも組めるというわけか」

「そうだ。お前としては不本意だろうが、あいつらの為を思うなら我慢してくれ」

「いや、俺としては、君をもっと知る機会だと思っている。だからよろしく、比企谷君」

「ああ、まあよろしくな」

こうしてチエーンメールの問題は片付いていく。雪乃と結衣は、ポカーンとして成り行きを見ていたのだった。

そして翌日のグループ分けの時間がやってきた。

教室の黒板には、クラスメイトの名前が羅列されている。それぞれ3名1グループずつに。職場体験ごとに分けられている。

前から言い交わしていたであろう隣の席の女子3人がきやつきやつと微笑み合って黒板の前まで行き、自分達の名前を書き始めた。

八幡は、葉山と組むことを決めているため、あと1人を誰にするか見ていた。ただ葉山は情勢を眺めているのか、戸部、大和、大岡に3人とはグループは組まないと説明をしているようだ。一方の結衣は、三浦、海老名とグループを組みどこに行くか決めているところだ。

八幡は、席から動かずスマホをいじっていた。そしてあるサイトを開いてしまう。

それは、千葉県の中にある千葉村のサイトであった。それは懐かしくもある八幡の思い出の場所でもある。

「千葉村…懐かしいな…綾音がまだ車椅子で外に行けた夏の終わりが見え出した頃…」

中学3年の夏休みに八幡、綾音、雅史、緑子、七海の5人は、千葉村を訪れている。

ここで何かあったかは、千葉村を訪れた時にされるだろう。

八幡は、スマホの中に保存されているみんなの写真を見る。

「この時は…こんなグループ決め何にも思わずに決めていたな…俺と雅史と陽介…綾音と緑子と七海って…」

彼が昔の思い出に浸っていた時、誰かに身体を揺すられる。

「八幡、聞いている？」

「うん？と、戸塚か。どうかしたか？」

「あ、あのグループ分け、の話だけど？」

「グループ分けか。もう戸塚も決まったんだろ？」

戸塚はもう誰かとグループを組んでいるだろうと八幡は思っていた。彼は黒板や回りを見渡す。すでにグループ成立し黒板に名前が3名ずつ書かれている。そしてあの3人の名前が書かれている。そして葉山グループからハブれた2人も。

【戸部、大和、大岡】

【松野、田中、山本】

【吹寄、山下、立花】

松野達はともかく、戸部達は出来立ての親友みたいで、初々しくも見えるのだった。何気に吹寄の様子を見てみたら、既に黒板にも3人組で書かれている。そんな様子を見ていたら、葉山に話しかけられる。

「比企谷君、約束とおりにグループを組もう」

「そうだな。約束だもんな」

「おかけで丸く収まった。サンキューな」

「俺はただアドバイスを言っただけだ。後は葉山、お前の才だよ」

「そんなことないって。ああ言ってくれなきゃ多分まだ揉めてただろうし…」

「…まあ、それはお前と一緒にいたいから」

揉める原因は、葉山と一緒にいたいからである。だから揉める原因を取り除けばいいだけである。

揉める原因↓葉山

だから葉山隼人を取り除けば、争うものが無くなる。

「俺、今までみんなが仲良くやれば良いと思ってたけどさ、俺のせいで揉めることもあるんだな」

「それは人気ものの宿命ってヤツだな。なあ、葉山」

「君ほどではないと思うよ。総武中の色男には敵わないよ」

「は、葉山…それは言わない!」

「……それにあいつらに、3人とは組まないって言ったら驚いていたけどな。これをきっかけにあいつらが本当の親友になれば、良いって思うよ」

「そうだな」

「改めてよろしく、比企谷」

「ああ、よろしくな、葉山」

葉山と八幡が仲良くしゃべっていると、頬を膨らました戸塚がいる。

「八幡、僕は?」

「戸塚は、誰かと行くの決めてんじや?」

「だからっ!」

そう勢い込んでから八幡のブレザーの袖口を掴んだ。

「……最初から八幡と行くって決めてたの!」

「それじゃあ、3人グループの成立だな。黒板に名前を書きに行こうか。比企谷、場所はどこにする?」

「お前に任せるさ、葉山」

八幡が葉山にそう言うのと戸塚も頷いた。

葉山は、黒板に八幡達の名前を書き始めた。

【葉山、戸塚、比企谷】

そして行きたい職場の場所を書き込む。すると周りの連中が

「あ、あーし、隼人と同じ場所にするわ」

「うそ、葉山君そこに行くの?あ、うちも変える変える」

「あたしもそこにしようかなー」

「隼人ばないわ。超ばないわ」

クラスの連中が一斉に葉山の回りに集まる。そしてあれよあれよという間に皆が葉山と同じ職場を選び、黒板の名前の場所を書き換え出した。

書き加えられていく名前に埋もれて、いつの間にか八幡の名前が消

えている。八幡は黒板の有様をスマホのカメラで撮った。

「このクラスでの存在はこんなものだよな……」

八幡は、スマホの中の写真を見ながら総武中の時の姿と今の姿を見比べていたのだった。

こうして職場体験のグループ分けによるチェーンメールの件は解決したのだった。

第2章―13―第13話―雅史達の思い。

チーンメール問題、川崎沙希問題、中間テスト、職業体験という八幡にしては、中々濃いスケジュールを過ごしていた。季節は春先から梅雨に入り、制服も冬服から夏服に衣服も以降していた。

総武高校の各部活動からの声が響き渡っている。

各部活も夏のインターハイを目指して頑張っているのだから。八幡も前に約束していたテニスやバスケットの指導等をしていた。もちろん奉仕部に依頼が来て、八幡が受けたのだ。

もちろん水泳部の依頼、吹寄と綾香からの依頼は、八幡個人で受けた依頼なので、もちろん雪乃や結衣には言っていない。

そして今、八幡は水泳部にいる。もちろん依頼をこなしに来ている。

水泳部の目標は、高校総体で優勝を狙っている。ここ最近、海浜の高橋や緑子に優勝旗をさらわれている。

成績は、そんな感じである。

「しかし、俺が教えられることってたかが知れてるぞ」

「それでも構わないわ。女子も男子も海浜には勝ちたいから。それに山岸さんにも勝ちたいし」

「その気持ちは分かるが…」

八幡は別に専門のコーチではない。ただ、緑子や七海に対しての指導も基本通りに教えたただけだ。彼女達が、元々の才能があったからやれたと思っっている。

「比企谷君の指導は、山岸さんからも上手いって言われてるし、綾香ちゃんも褒めてるから！もっと自信を持ってー！」

八幡は、吹寄に背中をバシツと叩いてプールの方へ再び泳ぎに行った。

「……イテテ…自信か…。中々自信は湧いてこないけど…」

泳いでいる吹寄を見ながらそう言っていると、綾香がやって来て

「八幡お兄ちゃん、制理先輩をずっと見てる」

「み、見てるって、コーチとしてみてるだけだ。別にやましい気持ち

じゃないし」

「どうかな？」

綾香は、八幡の目をずっと見ている。その目は疑いのある目つきをしている。

「綾香、お前も練習がまだあるだろうが！」

「ふーんだ！」

そうやって綾香は練習に戻っていく。八幡はため息をはきながらコーチングを続けていくのであった。

——海浜総合高校・サッカー部専用グラウンド

海浜総合高校のサッカー部は、ちゃんと専用グラウンドが与えられている。その専用グラウンドでサッカー部は練習をしている。

レギュラー組、準レギュラー、補欠組、背番号を持たない組がそろって練習をしている。次期部長の雅史が号令をかける。

「みんな、今日も頑張って練習しよう！今年も優勝旗を取りに行くぞ！」

「はい！」

号令をかけた後、監督の指示や練習内容の変更等を伝えた後、再び練習の時間に。

そして練習が終わり、空も茜色に染まる中、サッカー部の面々は集まっていた。

「康、大輔、今日もお疲れさん」

「お疲れさん」

「お疲れ、雅史」

「雅史先輩、康先輩、大輔先輩、お疲れです！」

後半の政成がやって来て挨拶をする。そんな彼に大輔が練習の時の反省点をのべ始める。

「政成、あのときのあのシュートは、強引でもいった方が良かったな」

「はい、自分でもあそこは行くべきだったと反省してます！」

「おう！なら良いんだ。その事は忘れるなよ」

「はい！」

そんなやり取りをしていたら、マネージャーの静江ともう1人のマネージャーである雪ノ下雪奈が、飲み物を持ってやって来た。容姿は雪ノ下雪乃のようであり、性格は陽乃のような感じである。別に彼女のようには仮面をつけている感じではない。雪奈は、雪ノ下姉妹の従妹である。雪ノ下父の兄の娘である。

「みなさん、お飲み物を持って来ましたよ」

「は〜い、お茶は静江で、私はミネラルウォーター系ですよ〜」

サッカー部の部員達は、静江や雪奈からお茶やミネラルウォーターを受け取って飲んでいる。そんな中静江から受け取った雅史に康が話しかける。

「雅史、練習試合ってまた総武に申し込むのか？」

「そのつもりだよ。康は別の高校と対戦したいのか？」

「いや、俺は総武でも構わないけど、ほらここ最近総武ばかりだからさ」

「……総武を選んでは、俺達のライバルになりうるチームだからだ。葉山、陽介、戸部、完二の4人がいる。今はチームバランスが悪いが、バランスが整ったら……」

「ヤバイと思う」

「あとではできることなら、八幡をサッカーの世界に引きずり出したい。あいつと対戦したいんだ」

「確かに俺も八幡と戦いたいのはある。けどあいつは、サッカーから離れている。戻ってくる可能性は低いだろうな……」

雅史と康の会話に大輔が入る。

「なら、お前が説得してサッカー部に入ってもらえばいいだろ？」

「あのな、大輔、簡単に説得できるならもうとつくにして……。八幡だってサッカーを捨ててるわけじゃない。陽介や完二からもそれを聞いている。要はきっかけだろうな……」

「きっかけか……。それが一番難しいな……」

「だな……」

雅史、康、大輔が悩んでいると雪奈と政成がやってきた。

「雅史君達は、何を悩んでいるのかな？」

「雪ノ下先輩、それを聞くんですか？」

「雪奈か…。総武に行った友の話をしてるだけさ」

「総武に行った友…。サッカー部のみなさんが言っていた比企谷八幡…総武中の色男と言われた方だよね？」

「雪奈、それは陽乃さんから聞いたのか？」

雅史が雪奈に問い詰める。確かに総武中の人間や周りの人間なら知っていてもおかしくはない。だが雪奈は、東京から千葉に海浜総合高校を受けている。父親が高校受験時に千葉県に転勤が決まっていたようだ。

「陽乃姉に以前聞いたかな。みんなが比企谷八幡って言ってたから気になってね」

「雪奈、お前…」

「その比企谷八幡って人が女の事でサッカーを辞めたんなら、新しい女がサッカーをしてほしいって頼めばやってくれるんじゃない？」

「雪ノ下先輩、なんか言っちゃいけない事、言いませんでした？」

雅史や康、大輔が雪奈を睨んで反論しようとしたら静江がやってきて、雪奈の頬を叩いた。周りで休憩していたメンバーも驚いている。

「雪奈さん！貴女は、比企谷君の事を何もわかってない！彼がどんな思いで、サッカーを辞めたのか！サッカーの思いを雅史君達に託したのか！貴女は…」

「静江、もういいよ。彼女も悪気があったわけじゃないだろうし…」

「雅史君…」

「静江…私…」

雪奈は、そう言いながらサッカー専用グラウンドの外へ出て行った。

第2章―城廻めぐり（目指す背中の中へ）編
第2章―14―第14話―サッカーへの思い。

すべての練習を終えた水泳部は、みんな解散し帰宅の途についている。もちろん八幡と吹寄と綾香は、一緒に自転車で帰っていた。すでに茜色の空から漆黒の闇に変わろうとしていた。

「春先に比べたらずいぶん暑くなってきたよな」

「梅雨に入ってるからね。まあ私達はプールの中で気持ち良かったからね」

「そうですね」

「そりやそうだよな。プールサイドにいる俺は照り返しで暑かったからね」

プールサイド、特に夏のプールサイドは、やってられないぐらいに暑くなる。ずっと足の裏をプールサイドにつけることができない。下手したら火傷を負うぐらいに暑くなる。

「比企谷君には感謝してるわ」

「八幡お兄ちゃん、私も感謝してるんだよ」

「俺は別に感謝されるほどやってないから」

八幡達はそんな会話をしながら自転車をこいでいたら、目の前に海浜総合高校の女子生徒が現れた。とっさに八幡は自転車を女子生徒を避け土手の方へ。八幡は、土手の傾斜で体勢が崩れ、草むらに突撃してしまった。

「比企谷君！」

「八幡お兄ちゃん！」

「……！」

吹寄と綾香そして遅れて女子生徒は、八幡のところに駆け寄る。彼はすぐに起き上がり

「イテテ、って君は大丈夫なのか？…え!？」

「はい、私は大丈夫ですけど、貴方は大丈夫なんですか？」

「え…雪ノ下？いやいや雪ノ下は、総武高校だ。海浜の制服を着るわ

「けが…ないだろ…」

吹寄も綾香もびつくりしている。そんな3人を見て雪奈は

「……私が総武？……まさか私をいこの雪乃と間違つてませんか？」

そう言われて3人は、顔を見合せて見て改めて雪奈を見る。

「雪ノ下に似てるが、この子からは雪ノ下の持つ冷たいオーラが無い…」

「そうなの、比企谷君？」

「確かに。あの女の感じはしませんね…」

「綾香ちゃん…貴女まで…」

八幡、吹寄、綾香が話していると

「あの…私は雪ノ下ですが、私は貴方方を知りませんが、貴方方は総武高校の生徒さんですよね？」

「まあ、3人とも総武高校だが？」

八幡が代表してそう答えた。すると雪奈が

「なら、総武高校には比企谷八幡つて方がいらつしやるはず…知りませんか？」

3人ともに顔を見合わせる。そして吹寄と綾香が

「比企谷君を捜してるの？」

「はい」

「八幡お兄ちゃんなら、貴女の目の前にいるけど？」

「え…？」

雪奈は、驚いた表情で吹寄と綾香の話聞いていた。

「……まあ…俺が比企谷八幡だが…。つてそつちこそ誰なんだよ？」

「貴方が比企谷八幡君ね。改めて、私は海浜総合高校に通う雪ノ下雪奈。貴方達の学校に通つて雪ノ下雪乃は、いどこだから」

「なるほど、いどこから似ているのか」

「まあ雪乃は、私が海浜に通つてることも知らないでしょうけど」

雪奈は空を見上げながらそう言った。

「そうなのか？」

「ええ、雪乃は私に興味もないんだらうけど…」

「あの雪乃さんが？」

「そうよ…。貴方達も雪乃を知ってるならわかるでしょ。あの子、あまり社交性が無いから、周りから孤立することが多いのよ」

社交性が無い。回りと合わせて協調することも無い。いつも一人で入ることが多い。八幡は、いとこの雪奈が言ってることは、言い当てていると思った。

そして話題は、雪乃のことから八幡のサッカーのことに変わった。

「ところで比企谷君は、サッカーはやらないの？」

「サッカー…？」

「私は海浜総合高校のサッカー部のマネージャーをやっているの。雅史君達が貴方の事をよく話してるから、つついっ私は……」

土手に座っている雪奈は、八幡に頭を下げる。

「私、つついっ比企谷君の事情も知らないで…失言を…」

八幡に失礼な部分も言ってしまったことを謝罪した。そして静江からわけを聞いて自分が愚かなことをしたことを気がついたこと。

「いいよ。別に気にしてないから」

「それでも謝らせてください」

何度も頭を下げた雪奈。雪乃と違い低姿勢な彼女を見て申し訳ないような気持ちになった。

そうやって話していたら、海浜総合高校のサッカー部のメンバー達が雪奈を探していたようだ。

彼女は、静江に怒られたことや自身のやってしまったことが恥ずかしくなり、その場から立ち去ったようだ。雅史達や叩いた静江もかなり心配していたようで、八幡が彼女を見つけてくれたことに感謝されたのだ。

海浜総合高校のサッカー部の面々から

「サッカーを再開しないのか？」

「八幡と戦いたい」

そんなことを言われていた。八幡も彼らの思いにも答えてやりたいたとは思っている。

だが、動き出せるかのきつかけが必要なのだ。昔は純粹にサッカーが好きなのもあったが、綾音に格好いいところを見せたい気持ちも少しはあった。

でも今は…。そんな時吹寄が八幡に

「比企谷君、本当はサッカーがやりたいじゃないの？花村君達、海浜総合高校のサッカー部の人達に夢を託したって言ってたけど…。私は、比企谷君がサッカーをしているのを見てみたいかな」

「……俺がサッカー部に入れば、もう水泳部のコーチはできなくなるぞ?。」

「八幡お兄ちゃんがやりたいようにやってもいいの。お姉ちゃんの事を引きずらなくて良いから。お姉ちゃんだってそれを望んでいると思うから」

「……綾音が……。でもな俺、今奉仕部に所属してるからな…。部活動の掛け持ちとか出来るのか?。」

「さあ、私はわからないわね」

「私も……。平塚先生に聞いたらどうかな?。」

「平塚先生に……」

八幡は、ちよつと嫌な表情になる。色々と八幡と平塚先生は因縁があるから相談がしにくい。もとはと言えば、平塚先生が八幡を奉仕部に連れて行ったことから始まっているのだから。

「まあ、私や綾香ちゃんも手伝ってあげるから何とかなるでしょう」「なんとかなれば良いけどな」

そんな感じで、吹寄と綾香による八幡のサッカーへの復帰作戦が開始されることに。

もちろん吹寄&綾香だけではなく、雅史達も協力してくれることになったのだった。

第2章―1―第1話―昼休みの生徒会室で。

城廻めぐり編（目指す背中の方に）

翌日から、葉山の依頼の調査を始めることに。

だが、今は中間テスト前の期間であり部活動の類いは全て休みになっている。

ならやれることは、教室で調査するしか残っていない。休み時間や昼休みで様子を見ることしか出来ないだろう。

そして時間が過ぎ、久しぶりに弁当ではなく、購買部でパンとスポーツトップを買って教室へ戻る途中にめぐりとぶつかりそうになった。その反動で彼女は資料を落としてしまう。

「ちよつと考えことをしてて、ごめんなさい、めぐり先輩」

「八幡君、私もちよつとぼんやりしてて、ごめんね」

八幡は、そんなことを言いながらめぐりが落とした資料を丁寧に拾っていく。そして拾い終わると資料をめぐりに渡す。

「めぐり先輩がぼんやりしてるなんて珍しいこともあるんですね」

「あのね、八幡君、私だつてぼんやりしたい時もあるんだよ」

八幡はめぐりが生徒会長で忙しいのは知っている。そしてがんばり屋であることも。

「もうすぐ、体育祭の実行委員会の委員長も決めないといけないし、その先の文化祭の実行委員会の委員決めもすぐにきちやうし」

「まだ先じゃないですか、そんなに慌てなくても……」

「八幡君、先だと思ってやってたらすぐに本番が来ちゃいますよ。それに体育祭実行委員長や文化祭実行委員長をやった人の台詞とは思えないよ？」

中学3年の時八幡は、体育祭実行委員会の委員長と文化祭実行委員会の委員長を務めた事がある。両方とも成功させた功労者である。それも病気で倒れた綾音のために頑張ったのである。

その時の頑張ってる姿をめぐりは知っている。だからこそ彼女は聞いてみる。

「八幡君、体育祭の実行委員会の委員長やって見る気はないかな？」
「無いですね」

「そ、即答なの？」
「即答です」

八幡は即答でめぐりの意見を却下する。彼女はしょぼんとした感じで、とぼとぼと歩いていく。

「め、めぐり先輩…そんなにしょんぼりしないでください」

彼女は生徒会室へ向かっている。八幡もそのあとを追うのだった。

生徒会室に到着すると、彼女すぐに会長席に座る。

会長席、この総武高校には生徒会長専用の机がある。それが会長席である。八幡も噂では聞いてはいたが、実際に見るのは初めてである。

「噂では聞いてましたが、会長席、マジであつたんですね」

「本当にあつたんだよ。私もはるさんから聞くまでは知らなかったんだから」

「陽乃さんからね。あの人ここの生徒会長だったんだよな…。その時に……」

八幡は、生徒会室の窓から外を見ながら陽乃に助けられたことを思い出す。

「陽乃さんには、今でも感謝してる。綾音の事を…あのとき助けくれたことも含めて…」

胸に右の手のひらを置きながら陽乃に感謝の意を示している。めぐりはちよつと不満そうに八幡を見ている。

「はるさんだけではなく、私もいたんだけどなく」

「もちろんめぐり先輩の事も忘れてませんよ。あの時の雨の件についても……」

八幡は、照れながら外を向きながらそう言った。あの時の「泣いても良いんだよ」って言うってくれて抱きしめてくれたことが、何よりも嬉しかったのだから。

「あの時は、落ち込む貴方を元気つけようと必死だったわけだし…」

「あの時、めぐり先輩が抱きしめてくれたおかげで、今ここに居ることができてるんですよ」

彼の台詞でめぐりの顔を赤く染まっていく。

「八幡君、恥ずかしい台詞を言わないの!」

「ま、まあ我ながら恥ずかしい台詞を言ったなと思ってます。そんな台詞、葉山や雅史しか似合わないのに…」

八幡は苦笑いをしながらめぐりを見ていた。するとめぐりかわ八幡に

「八幡君は容姿が整ってる事がカッコいいと思ってるの?」

「それは……」

「…確かに容姿が整ってる方が良いと思ってる女の子もいるでしょう。八幡君の近くにいる女の子達はどうかの?」

「……」

八幡の近くにいる女の子達、それは綾香達の事を指す。彼女達は八幡に救われてきた子が多い。彼の背中を見て頑張ってきたのだから。「何度も言うようだけど、八幡君はあれだけの事をやってきたのだから、胸を張っても良いんだよ」

「……ありがとうございます、めぐり先輩……」

少しの沈黙の後、時計の秒針の音で我に戻る2人。すでに昼休みがあと15分を切っていた。

「あつ、後15分でお昼休みが終わっちゃうね」

「アハハ、俺も購買で買ったパンとスポーツトップをそのままに……」

生徒会室の入り口の近くの机の上に乗せたままになっている。しかし教室へ戻って食べるにしてもゆっくりは出来ない。

「どうせなら時間もないし、ここで食べて行ったらどうかかな?」

「生徒会室で?……時間もないし…仕方がないか。めぐり先輩、お世話になります」

「ふふっ、こちらこそ」

めぐりもコンビニで購入したであろうおにぎりを袋から2個取り出す。八幡もパンをかじりながらスポーツトップを飲む。

昼休みの短い時間ではあったが、楽しい時間になったのは間違いは

なかった八幡であった。

昼休みのギリギリの時間に戻ってきた八幡は、己の役目を思い出す。

戸部を除いた2人を調べること。

【大岡】

【大和】

この2人を調べることだ。自分の席に座る。そして得意な人間観察をしようとした八幡に

「……昼休み、ほとんど終わりがけだけど、とりあえずあたしが色々聞いてみる。…だ、だから、ヒツキーは全然無理とかしなくていいから。むしろなんもしなくていいから」

「……そりゃあ、その方がいいが……かと言ってお前に全部出来るのか?」

「や、やれるよ! ゆきのんのお願いだもの。やらなきゃ」

「…雪ノ下にお願いされたねーか…」

結衣のやる気はみなぎっているようだが、このやる気は逆に空回りしそうなやる気だと八幡はため息を吐きながら結衣に言う。

「やる気は認めるけど、具体的に何をするつもりだ?」

「んー女子から聞いてみる。クラスの人間関係とかなら女子の方が詳しいし。それに、共通の嫌なヤツの話とかすると、結構盛り上がりつつ色々話してくれるし」

「相変わらず、ガールズトークが怖いな……」

そんな会話は、綾音達で経験済みである。その内容がえげつない事もわかっていいるのだ。

「そんな黒い話じゃないってば! その愚痴、というか情報交換……?」

「ものは言い様だからな…ガールズトークがえげつない事は知ってるから」

八幡がそう言うと、結衣が鋭い視線で見ってくる。

「……あの時の海浜の3人ね」

「…海浜の3人って…名前ぐらい覚えてやれつての。それとも覚えて

ないのか？」

「……山岸緑子、高梨七海、折本かおり……」

結衣はいやいやながらも彼女達の名前を挙げた。

「覚えてるじゃないか」

「彼女達の事は、今はどうでもいいから！とにかく、ヒツキーは何もしなくていいから」

そう言うと結衣は、葉山グループ内の女子グループである三浦グループに行ってしまう。

第2章―山岸緑子（亡き友とアイツのために）編
第2章―2―第2話―由比ヶ浜に任せてはみたが…。

結衣はやるぞー！という気合いを入れて、グループに戻る。

「お待たせー！」

「あ、ユイー。おっそいからー！」

三浦をはじめとするグループの女子達は、気だるそうに返す。

「てかさー、とべつちとか大岡君とか大和君とか最近微妙だよねー。なんかこうアレな感じ？って言うか…」

八幡は、結衣の直球の言葉に操作していたスマホを落としそうになった。

「え…ユイってそういうこと言う子だっけ？」

そう言って一歩引いたのは、海老名であった。そして三浦がきらつと目を輝かせて、ここぞとばかりに攻勢に出る。

「あんさー、ユイ。そういうのってあんまりよくない？トモダチのことそう言うのやっぱまずいでしょー」

「ち、ちがつ、ちがくてっ！その、気になる、というか」

「なに、あいつらの誰か好きなん？」

「全っ然違う！気になる人はいるけど…それはアレな人だし…はっ！」

しまった！という表情の結衣とそれを三浦がニヤリと笑うのが同時であった。

「え、ユイ…誰か好きな人できたん？言ってみ？ほれほれ。協力するからー！」

「だ、だから！そうじゃなくてっ！気になるのはあの3人の関係性？っていろいろ？なんか最近妙だなーって思うの！」

「んだ、それか。つまんねー！」

あからさまに興味を失う三浦。スマホをチャカチャカと操作を始める。だが、違う女子が食い付いてきた。それはメガネ女子の海老名である。

「わかる。ユイも気になっていたんだ……。実はあたしも……」

「そうそう！なんだかギクシヤクしてるってさ！」

「わたし、思うんだけど」

海老名は深刻そうな表情でため息を一つつく。

「わたしの絶対に絶対とべつち受けだと思ふの。で大和君の強き攻め。大岡君は誘い受けね。あの三角関係絶対何かあるよ！」

「あ、わかるわか……。うえ？」

「でもね、でもね、絶対3人とも隼人君狙いなんだよ！くうく友達のためにみんな一歩引いている感じ。キマしたわあ」

海老名はずっとBLの話をして、テンションが上がりっぱなしになっていて、鼻血まで出している。結衣は、海老名の勢いに押されて困っていると三浦が

「はあく出たよ、海老名の病気。おめ、黙つてれば可愛いんだからちやんと凝態しろ鼻血拭けし」

そんな状態を見ていた八幡は、自分の机に視線落として、ため息を吐いた。結衣は、そんな彼を見てごめんと謝った。

全然何も得るものはなかった。海老名のBL好きな情熱がすごいとわかつただけ。

休み時間は、予鈴、本鈴を含めて3分もない。八幡は、戸部、大和、大岡に視線を移す。

3人は、葉山を含めて窓際に陣を取っている。葉山が窓際に寄りかかり、それを囲むようにして戸部、大和、大岡がいる。ここからわかることは、葉山がリーダーであり、キングということだ。そしてその3人にも役割があるようだ。

「で、さ。うちのコーチがラグビー部の方にノックを打ち始めて！やばかったわ！。硬球なのによ」

「……あれはうちの顧問もキレてた」

「マジウケんだけど、つつーか、ラグ部とかまだいいわ。俺らサッカー部やベーから。いいーややばいでしょ、外野フライ飛んでくるとかヤバいでしょ！そーいーや。陽介が外野フライ取ったわ！けどサッカーボールを蹴り損ねたあれ……ある意味激アツだったわ」

大岡が話を振り、大和がそれを受ける。そして、戸部が盛り上げる。よくできた演劇のようだ。

人生は舞台

シエイクスピアの言葉である。

まさしく人は与えられた役をこなしているようだ。

そしてこの舞台の監督と観客は葉山隼人だ。葉山は時には笑い時には話題を提供し、時に一緒になってはしゃぐ。

八幡はずつと葉山と3人を観察してとある事に気がついた。

1人が今、見えないように舌打ちをする。

また1人は、隣のやつが会話を始めると急に黙り込む。

またある1人は、つまらなさそうにスマホをいじる。あまりこの話題に割り込んでこない。

八幡はこれ以上の収穫も無さそうだなと思っているとき、葉山が席を立てて

「悪いちよつとごめん」

葉山はそのまま八幡の方へやってくる。

「どうした、葉山？」

「いや、なんかわかったのかなって思ってたさ」

「まだ大した情報は無い」

そう言つて八幡は、葉山の抜けたグループを見てみると、意外な光景が広がっていた。3人ともスマホをいじっていた。そして時々葉山の方を見ている。八幡は、頭の中に閃きが輝く。

「どうかしたか？」

「謎はすでに解けたぜ」

八幡はそう言つて、葉山にニヤリとスマイルを見せるのだった。

第2章―1―第1話―緑子の危機。

山岸緑子編（亡き友とアイツのために）

チエーンメール、葉山グループの問題を片付けて、中間テストが間に迫ったある日、八幡は遅くまで、サイゼリヤで勉強していたが、店員に帰宅命令を出されたので、渋々帰ることに。

「はあく流石に追い出されるよな」

久しぶりに1人で勉強をしていた八幡。自宅ではここ最近、綾香、小町に勉強を教えていた。

「1人でやりたい時もあるさ」

千葉の夜空を見上げながら星達を見る。

「あの中の星のどれかが綾音だったりするのかな」

そんなことを思いながら夜道を帰っていく。

もうすぐ梅雨が近づいてきている頃だが、夜になると軽く寒いくらいに冷え込んでいる。夕方に少しにわか雨が降ったせいで冷え込んでいるのだろう。

本来は、市立図書館で勉強をするつもりでいたのだが、突然の雨に降られて、ジュネス内のサイゼリヤに駆け込んだのが始まりだった。軽く食事をしてから、ずっと勉強に集中していて時間の経過に気がつかなかったのだ。

いつも見慣れた景色、通学路をトボトボと歩いて帰る八幡。

だがこの日は違った。

夜の闇に染まる通学路から、女性の悲鳴が聞こえてきた。

「ひ、悲鳴!?!誰か襲われているのか!」

八幡は、回りをキョロキョロしながら悲鳴がした方にかけていく。彼は考えるよりも先に身体が動いていた。

八幡が帰り出す少し前、緑子は七海とかおりと分かれて、自宅へ帰る途中である。なぜ彼女達がこんな遅くまでかかっているのは、中間テストの勉強会を市立図書館で開いていたからである。

「やばっ、今日も勉強会で遅くなった…。早いとこ帰らないとお父さんに怒られちゃうわね」

闇に染まる夜道をはや歩きで自宅まで帰るつもりだった。いつも見慣れた風景、通学路だから油断もあったかもしれない。

後ろから誰かにつけられていることを。怖くなった緑子は、はや歩きから走り出す。

しかしつけてきている人物も走り出してきている。

緑子は、もうすぐ自宅につくと思つた瞬間、左手を強く誰かに引つ張られ、裏路地へ連れ込まれる。その時に悲鳴を上げた。

緑子は、後ろからついてきていた人物は、囚で待ち伏せして左手を掴んできた人物との複数犯だと確信した。体勢を整えた彼女は、逃げようとしたが、3人目の刺客が足を絡ませて転倒させる。

「おっと逃がさないよ」

「イタタタ…なんなの貴方達は？」

そして後ろから2人の人物が現れる。それは緑子を後ろからつけた人物、彼女の左手を掴んで裏路地へ連れ込んだ人物である。

「今回の女は上玉だな」

「だろ、後ろからつけながら、連絡したの正解だったでしょ？」

ニヤニヤとしながら緑子を見ている。

「俺達は最近この辺りを騒がせているんだけどね」

「この当たりで騒がせている？」

「この女、ニュースとか観てないんじゃないの？」

緑子は、中間テストの勉強でほとんどニュースを観ていない。今朝方父親から、この界限で女性の連続暴行事件が起きてるから気を付けるように言われていたことを思い出す。

「貴方達だったの、その連続暴行事件の犯人って…」

「ご明察と言いたいが、お前は俺達の慰め物になるんだからよ！」

そう言った待ち伏せしていた男が、緑子の制服を脱がせようとする。

「来ないで、イヤ！誰か助けて！」

あとの2人が、暴れる緑子の両足と両手を押さえ込む。彼女の目か

ら涙が零れ落ちる。この連中に自分は陵辱されるのだと思ったからだ。

自分の大切なものは、八幡に捧げたかった。ニヤニヤしている男の1人がズボンのベルトをカチャカチャする音を聞いて、穢れるのだと思つたその時

「お前達、そこで何をしてるんだ？」

緑子は八幡の声を聞いて叫んだ。

「助けて！八幡！」

「緑子！お前達、よくも緑子を手を出そうとしたな」

3人が八幡の方を見てケラケラ笑っている。

「なんだ、陰キヤの分際でヒーロー気取りとか笑えるな」

「陰キヤは、この女の喘ぎ声で、自慰行為でもしてな」

八幡の頭の中の何かが音がした。彼の中の何かにスイッチが入つた。

八幡は奥歯を噛みしめ、拳を握りしめ、3人のうちの1人の顔面にストレートパンチを食らわせる。

「ぐはっ……！」

八幡のストレートパンチを顔面に受けた男は、2、3メートル吹き飛ばされ、そのまま気絶した。

「なんだ！こいつ！ただの陰キヤじゃねえ……！」

「なんだんだ、こいつ」

「……てめえら、許さねえ。俺の大事な女に手を出しやがって……絶対に許さねえ！」

八幡はそう言つて、再び拳を握る。そして手前にいた男の顔を力任せに殴り倒す。

「ぐはっ……！」

力任せに殴られた男は、塀に激突してそのまま気絶してしまう。八幡は、リーダーの男を睨み付ける。

「ひいー！」

「次はお前の番だ。顔面か股間が潰れるか、どっちか選べ」
「……！」

リーダーの男は、八幡の問いについては気絶しながら漏らしてしま
う。彼の周りには水溜まりが出来ている。

パトカーのサイレンの音が鳴り響いてくる。それもここに近づい
てくる。おそらくはこの騒ぎにこの辺りの住民の誰かが通報したの
だろう。

「み、緑子、大丈夫か…?」

「八幡!」

緑子が八幡に抱きつこうとしたが、彼はそのまま倒れてしまった。

「…は、八幡、どうしたの? ねえ、起きてつてば! 八幡!」

緑子の必死の声が聞こえていたが、八幡は答えることができなかった。
た。そのまま、彼は意識を失った。

第2章―2―第2話―災難の後で。

その後、警察やら救急車が到着し騒ぎにもなった。倒れた八幡は病院に運ばれ、緑子は、警察署に連れていかれることに。

もちろん事情聴取のためである。

緑子に暴行を加えようとしていた3人組は、ここ最近に女性を狙った連続暴行犯であることがわかり、逮捕された。そのことはニュースで取り上げられた。

だが誰が捕まえたとかは伏せられたままである。

警察署で事情聴取を終えた緑子は、婦警と共に両親の元へ帰された。両親の顔を見た瞬間に緑子は涙を流した。

「お父さん、お母さん！」

「緑子！無事だったんだな！」

「緑子！緑子！良かった！」

親子でしばらく抱き締めていた。当たり前であろう、娘が襲われたと聞いて、取り乱さない親なんかいないであろう。

しばらくして緑子は八幡の事を思い出す。

「ねえ！お父さん、お母さん、八幡はどうなったの？八幡は…」

両親は顔を見合せてから緑子に説明を始める。

「八幡君は、市立総合病院に運ばれた。別に命に別状は無いそうだ…」

「緑子、八幡君に守ってもらったんだね」

「うん…私もうダメだと思った時、八幡が来てくれたの」

「彼には助けてもらってばかりだな…」

緑子達家族は、過去に八幡に助けてもらっている。母親は、財布を引ったくらわれたのを八幡が犯人を捕まえて財布を取り戻した事。父親は、大切な指輪を紛失した時、八幡と一緒に探して見つけた事。緑子は、昔プールで溺れていたところに八幡に救われたことがあるのだ。そして水、プールが苦手になったが、八幡と一緒にそれを克服。そして中学では水泳部に入り、今に至る。

「そうだよ、私達は、八幡に救われてばかり…」

3人が八幡の事を心配していた時、七海とかおりがやって来た。

「緑子！」

「緑子、大丈夫？」

「七海、かおり！私は大丈夫。だけど八幡が…」

「八幡の方は、雅史と静江が向かってるわ」

「雅史と静江が…そう良かった…」

緑子は、すつと力尽きたように座り込む。七海達はそんな緑子を支える。

「緑子！本当に大丈夫なの？」

「緑子、顔色が悪いよ。今は何も考えずに休んだ方が良くって！」

「でも…！」

「かおりちゃんが、言ったとおりよ。緑子、八幡君には元気な姿をみせたいのではありません？」

「うん…」

緑子は両親と共に自宅へ戻る事にした。七海とかおりも夜が遅いので、自宅へ帰ることになった。

一方、雅史と静江は、市立総合病院へやって来ていて、すでに八幡は診察を終えて、病室へ運ばれていた。病室には、八幡の両親、妹の小町、綾香が来ていた。

雅史と静江は、両親に挨拶を済ませて、八幡の姿を見てから病室を出た。そして歩きながら雅史が静江に

「八幡がこんな倒れ方したのは、2度目なんだ」

「2度目…なんですか？」

「ああ、2度目なんだよ、過去にも倒れたんだ」

八幡が倒れたのは、2度目。過去にも倒れている。それは天之河が綾音を襲撃してきた時だ。彼を退けた八幡は、突然倒れたのだ。

その時も1週間目を覚めなかった経緯がある。

原因は、自身の能力を最大限に使ったため、身体が悲鳴をあげ、眠り続ける事で体力回復したのである。

今回も緑子を守るために、最大限の能力を使ったのではないかと、

雅史は考えている。

「綾音さんと時にも…」

「そうなんだ。八幡は誰かのためなら自分を犠牲にすることを厭わないんだよ…」

「……八幡君…」

「今日はもう帰ろうか。俺達がいてもどうすることも出来ない」

「そうだよね」

雅史と静江は、自宅へ帰ることに。その後からも陽介達や海浜総合の仲間達からも連絡が来て、対応に追われる雅史であった。

八幡が入院したことは、クラスにも知らされたが、真実は話されなかった。

翌日から緑子は、毎日来るように。八幡の様子をずっと見守るように。雅史や静江、七海やかおり、めぐりや陽乃、吹寄や綾香や陽介、完二、康、大輔、葉山も訪れていた。

再び八幡が目覚めるのは、1週間後であった。1週間眠っている間にいろんな人間がお見舞いに来ていたのだ。

「ここは……」

八幡の視線の先にあるのは病室の天井である。それも見覚えのある天井であるのだ。

「市立総合病院…の病室か…」

入学式早々の入院から1年が過ぎてそんなに経っていないが再び入院。綾音の時と同じくして倒れたんだなと自覚する。

「…自分でもわからないんだよな…怒りが込み上げてきて…それから…」

まだ痛みが残る右手を見る。治療された痕が痛々しく見える。

「右手で殴ったってことか」

病室の回りを見てみると、みんながお見舞いに来たことがわかる。それを見て、八幡はみんなのありがたさを噛み締めていた。そんな時、病室の扉が開いた。そこには緑子がいた。彼女も八幡が目覚ました事に気付き、彼に抱き付く。

「八幡、良かった…やつと目が覚めた…良かった…」

「み、緑子…良かった…お前が無事で良かった」

八幡は、緑子の頭を優しく撫でる。彼女は頬を赤らめながらされるがままでいる。

「八幡…」

「緑子」

2人が見つめ合っていると、七海達が

「八幡、緑子…なくにイチャついてるのよ」

「八幡、緑子…病室でイチャイチャとは感心しませんな」

「お、お前達！」

「七海、かおりに雅史に小町ちゃんに綾香ちゃん…」

「八幡お兄ちゃん…」

「お兄ちゃん！」

「八幡、緑子、元気になってなりよりだ」

「八幡さん、良かったです」

「みんな…すまなかつたし心配させてごめん」

八幡はみんなに頭を下げた。いや下げても下げても感謝しきれないほどであった。

「俺の傷よりか、緑子の傷の方が心配だ。傷だけじゃない、心の傷だつて…」

「両手、両足は押さえられたけど、犯されたわけじゃないし、大丈夫だよ」

緑子の元気そうな表情を見ると、上部だけならわからない。だが八幡は見逃さなかった。彼女が無理して笑っているのを。だからこそ八幡は緑子に言うのだ。

「緑子、我慢しなくてもいいんだぞ。怖かったって泣いてもな、俺がそれを受け止めてやるから」

「……!!は、八幡…」

彼女の鳴き声だけが八幡の病室の中に響いた。八幡は、緑子の頭を優しく撫で続ける。みんなはそれを温かく見守っていたのだった。